
Mercenary Angel

snake710

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mercenary Angel

【コード】

N00850

【作者名】

snake710

【あらすじ】

神様のミスにより、死んでしまった武藤、富田、溝口の平凡な高校生生活を送っているゲーマーな3人組。神は、武藤の妹を異世界に送ろうとして失敗してしまい、仕方がないので3人を異世界に派遣することになった。ゲームの能力を得た3人は現代兵器を使い「雇われ天使」として任務におもむくことになる。文明の違いでチートのような力（主に現代兵器を指す）を手に入れるが……。

その異世界とは、2030年北半球の地球に氷河期が訪れ北半球の

全生物が死滅し、転移門が現れて別の異世界の軍勢に侵略された20年後の世界だった。

初投稿なので間違いなどあります。ご指摘いただけましたら幸いです。ちなみに、主人公達は途中でチートではなくなります。

しかも、主人公達は天使らしからぬ行動します。

読むときは、十分注意を！

30%ゲーム、30%映画、10%小説、10%妄想、20%自己満足、この小説の主成分です。学生ゆえ、文章力など悪いところがあります。

ハチャメチャな小説です。マジでご注意を！

「第0章 0話 国連兵救出作戦」(前書き)

はじめまして。snake710と申します。

初投稿ですが、がんばって行きたいと思います。……

この話はプロローグの前に入れるはずだったのですがそこを製作時に省いてしまい、今回復活させました。

まだ異世界行きませんが4話、5話目から行きますゆえ、読むのやめないでー!!

あとプロローグは平凡な高校生の日常をしています。

ちなみに、主人公達は天使らしからぬ行動します。

読むときは、十分注意を!

30%ゲーム、30%映画、10%小説、10%妄想、20%自己満足、この小説の主成分です。学生ゆえ、文章力など悪いところがあります。

「第0章 0話 国連兵救出作戦」

深深と雪が降り、10メートル先が見えず、白い世界に包まれていた。

人工物が見えない真っ白な世界。その中でコンクリートが大半を占める小さな穴があった。

男がしゃがみながらやつのことで抜け出せるくらいの大きさだ。そしてそこには完全武装した二人の特殊部隊員の姿があった。

(「こちらEagle 2、ハインドDを発見したそっちでも見えるか？オーバー」)

(Eagle 2、こちらEagle Leader。こちらからでも良く見える。こんな吹雪だと言つのに良く飛ばすな。あんなもの)

テロリストが奪った衛星通信基地のヘリポートからは、ロシア製攻

撃へリ「ハインドD」が離陸していた。歩兵のにとって脅威になる。ミサイルを持っていても心細い。だがこういった環境の中では歩兵が有利だ。

「トンネルを抜けると、雪景色が広がっていた」と言った小説があった。今の状態だと、「トンネルを抜けると、敵の陣地が広がっていた」と言ってもいいだろう。

ガス管点検用トンネルから出てきた二人の兵士は、無線が使えるかどうか確認して、銃の動作確認も怠らなかった。

二人の兵士は少しずつ前進すると、殿を務めている兵士が立ち止まり「止まれ」の合図をすると、二人は遮蔽物に隠れた。遮蔽物の向こう側には、テロリストの防衛線があり土嚢が積みれ兵士が待機している。その奥のほうにはテクニカルと呼ばれる50口径の重機関銃を搭載したトラックが左側の川に吼えていた。

多分、テロリストはゴムボートから上陸すると予想していたのだろう。敵は点検用トンネルには、歩哨を立てず、地雷を仕掛けなかった。人数不足か。それとも指揮官が馬鹿なだけか。

殿の兵士は、遮蔽物にほど近いところに軍用テントが張られていた

のを見つけた。テロリスト二名が木箱を運び込んでいるのを見て、「面白ことを思いついた」と思ったのか後ろにいるバックアップの兵士を呼んだ。

「よし、溝口はここから援護しろ。ここで発見されるとやばいからな。頼むぞ。」と相棒の溝口という兵士に言い残し、遮蔽物を超えてからテント張り付いた。メインとして持っていたM4カービンを後ろに掛け、ホルスターからUSP拳銃を取り出し、サイレンサーを取り付ける。ナイフを左手に持ちながら銃を構えテントのなかへ入った。

テントのなかには、食料や調理器具などいろいろなものが置かれていた。ここは倉庫だった。

ポイントマン（殿）は、ここを仮設の弾薬保管庫だと勘違いしたらしく、小さく舌打ちをした。

（こちら溝口・・・じゃなかったEagle 2。そのテントに敵兵接近中、隠れる）

溝口の警告に応じ、急いでテントの入り口から死角になるようにダンボールの中に隠れる。

(こちらパトロール。水際防衛ライン倉庫異常なし)

パトロール兵の無線だろうか。冬季迷彩にフェイスマスクにヘルメット、武器はAK47レイルシステム搭載型でハンドグリップとAGOGサイトが付けられている。

そして兵士は外へ出ようとする。

「おい！ 大将！」と呼び、わざとこちらを向けさせる。M4カービンの銃床を使い、顔面を強打する。見事に敵兵はノックアウトし、気絶した。

7

(うーん……いいこと思いついた！)

無線を使い、溝口ことEagle 3に連絡する。

(おい、Eagle 2聞こえるか？敵は気絶した。こっちに來い)

(どうした。何か問題でも？)

(いいから、早く！)

彼は知らなかった。どんな運命を辿るかを……。

「敵さん来ないな。」

「そつだな」

テロリストや正規軍も同様、敵が来なければ子供の話とか彼女の話とか上司の悪口とかいろいろととりとめのない話をする。ほとんど

の会話は誰かがいじられるのだ。

「俺の妹が誕生日なんだ」と重機関銃の射手が対戦車ロケット「RPG-7」を持っている対戦車兵に向かって言った。

「へー、2次元のほうのかい？」

「違うわ！いくら俺がヲタク扱いされて、アニメを愛していようと
もお前に二次元の妹の話なんて刺し違えてもねーよ！」

対戦車兵はけらけら笑う。重機関銃の射手はいじられキャラであり、オタクである。

そして、機関銃手は、二人の人物が不意に近づいてきたのに気付いき、拳銃を向けた。

「動くな！何者だ！」

「撃つなよ！味方だ！捕虜を捕まえた。」

そうやってきたのは味方の服は着ているが聞きなれない声の兵士だ。そして手前には装備の違う敵兵士が手をあたまをつけ立っていた。見るからに敵兵だろう。

「捕虜を捕まえたって本部に言っておいてくれないか？」

「なんで自分でやらないんだ？無線機は動くはずだろ」

「……うーん、無線の奴あんま好きじゃなくてさ。頼むよ」

そうやってきた仲間は何人もいるがめんどくさい。自分でやってほしいものだ。いくらH.Qに親友がいるといっても困る。

機関銃手は、いつも伝言ゲームのようなことをするのはいやだった

。

「自分でやってくれよ」

「ここをどうか頼む！」

と日本人さながら拝むかのようにして頼む。たいていの日本人は手を合わせられてお願いするとOKしてくれることが多い。

「わかった。報告しておくから。臨時の拘置所に連れて行けば？」

「了解、じゃあ連れて行くわ。」とロープを引っ張りゆっくりと歩いている。

(……どう言おうかな?)

機関銃手は、何を言うか少しの間考えるのであった。通った二人組が敵の特殊部隊とは知らずに。

「あー……ひやひやしたぜ。」

「まったくだ。もうこんなことはしたくない。」

装備の違う、敵兵Aと捕まった兵士Bがこそこそ話している。

今の敵兵と捕われた救出部隊の隊員はEagle2こと溝口であり、敵兵の服を着ているのは、Eagle Leader こと武藤だ。

溝口は武藤に手渡されたロシア製のサブマシンガン「SR2M」の
コッキングレバーを引いて、セーフティーをオフにした。

二人は歩いていくと、駐車場をはさんで建物があり、屋上にパラボ
ラアンテナがあった。施設は元々民間施設で戦略的には考えていな
い。つまり、施設が広く防御やパトロールに兵士の手が回らないの
だ。

ここの施設は2つに分かれていて、パラボナアンテナがある通信棟。
受信した情報を整理して近くの会社に送ったり近くの会社から送信
された情報を整理して送信する管理棟。しかもここの屋上にはヘリ
ポートがあり、戦闘ヘリはここから離陸した。

ここを守っていた国連の3人の兵士は囚われ、どこかにいるはずだ。
手分けして探さないといけなかった。二人は、車を影にして隠れ、
無線のスイッチを点けた。

連絡するのは、高台から見ている狙撃手、富田だ。

(こちらEagle Leader。Eagle 3 応答せよ)

か)
(Eagle 3、どうした。周りには敵なしたが、何かあったのか)

(ああ、ちょっとした問題だ。すぐ来てくれ)

十分後ギリスーツと呼ばれる擬装用スーツを身にまとい、手には対物ライフルと呼ばれる、当たると三流ホラー映画のような感じになるものを装備していた富田が来た。

「なんだ。何かあったのか？」

「それがさ、国連の兵士がどこにいるかわかんないんだよね。手分けして探そうぜ」「二つある建物、「管理棟」と「通信棟」は中は意外と広い。」

溝口と武藤が探しても見つけないのに相当時間がかかる。

「だったらさー……………」富田が言おうとした瞬間だった。

第二駐車場方面からヒュルルルルと独特な音を上げて何かが飛んできた。

「迫撃砲だ！伏せる！」溝口が叫び、その場に伏せる。

砲手が間違えたのか、三人より10m離れた木に当たり、木が停めてあつた車に倒れ潰れた。迫撃砲は立っていたり体を出していたりすると、破片によって死んだり怪我する。だから、蛸壺や遮蔽物に身を隠せば大丈夫なのだ。

その場に伏せても怪我するときはするのだが・・・。

一発目が着弾するとパラボラアンテナのある通信棟の窓から敵兵による銃弾の洗礼が行われた。

「車を盾にしろ！」武藤はそう叫びAKを連射しながら走る。コンクリートが弾け、頬を掠める。誰が投げたのか火炎瓶が投げ込まれ手前で燃えるがそのまま飛んで走る。

武藤が持っていたAK74は車に着く頃には60発ほど撃っていた。残りは120発。

車に隠れていても敵は固定銃座を作りこちらを撃ち続けている。

「どうする？疾風？」武藤のファーストネームを叫んだ富田が対物ライフル、バレットM82A1を使わず、ホルスターにあるG18Cをフルオートにして連射している。

手元にあるのは、敵から奪った閃光手榴弾が一個。近くには管理棟があり、手榴弾が入る窓があった。武藤は持っていたAKを窓に向けて連射し、ピンを抜けて、閃光手榴弾を投げ込んだ。

800万カンデラの閃光と180デシベルの引き裂かれるような轟音が鳴り響き、中にいると思われる兵の耳と目を奪った。

「GO！GO！GO！」アメリカの特殊部隊や警察が突入する合図叫び、突入する。

窓から中に入るとよくあるオフィスでそのよこにあつた壁にはいくつかコートがかけてある。敵兵はいなく、正面玄関には鍵がかかっていた。ヘリポートの階段は中にあると思つていたが外にあつたらしい。

敵兵は一階にはいない。2階にもいると思つたがいなかった。この管理棟は2階しかないので、この建物は使わなかつたのだらう。

「疾風、2階の窓からヘリポートの階段にいけるぞ」そついつて指を刺した富田、刺した先には窓に階段がみえた。一人が通れる大きさだ。

銃床で窓を割つて、階段に這つてヘリポートにたどり着いた。敵に見つかつて迫撃砲の攻撃があるかもしれないからだ。

ヘリポートの上を匍匐前進して通信棟側にたどり着いた。

敵の数は一階の土嚢には敵が3人、二階のベランダには土嚢に置かれた軽機関銃と敵兵が3人、アンテナがある屋上にはRPG7と呼ばれる対戦車ロケットを持った兵士が一人とAKを持った兵士が2人。

「富田は機銃の兵士を。溝口はグレネードを使って上をやってくれ」

「おっ。」

|
|
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |

「腹減った・・・」さっき飯食ったのに腹が減った。手元にある炭酸飲料は多少の腹の減りを抑えられるがそれはもう切れたらしい。

敵はどこに行ったのだろう。と思いながらも炭酸を飲む。

「昼、何喰ったんだよ」隣にいる機銃を持つバンダナを付けたスネーク……じゃなくて誰だっけ。
まあいいや。

「カップラーメン」

「だったらさー……」言葉はそこで途切れた。隣は食生活について何か言おうとしたようだ。だが彼の言葉はそこで途切れてしまった。なぜなら頭がなくなっていたからだ。

「いたぞ！あそこだ」

――
――
武藤は奪ったAKを使い一階のところへ制圧射撃を加える。弾あまり無かったため3連射ずつにして撃っている。

一方富田は対物ライフルで一人ずつホラー映画の如く、ベランダを血みどろに変えていく。

溝口は、持っていたM4カービンのグレネードランチャーを使って敵兵を吹っ飛ばしていく。RPGをもっている敵兵と軽機関銃を持つっている敵兵を注意していればあとの敵はなんとかなる。

あらかた敵を片付け、周囲を見渡すが敵は見当たらない。増援は来てない。この棟には国連の兵士はいなかった。多分パラボナアンテナがある通信棟にいたのだろう。増援が来る前に急いで探さなければならぬ。

「ん？アレは？」溝口はそう言って指を刺した。指した方向には黒いシルエットがふぶきの中浮かび上がっていた。それはアフガニスタン侵攻でソ連が使用してアフガンの反政府組織に恐れられたハンドDだ。

無線で呼ばれてきたらしいな。しかし、吹雪の中よく飛ばすよ。

だがそう悠長なことは言っていられない。その黒いシルエットから何かが飛び出しこちらに接近してきた。

「ミサイルだ！降りろ！」匍匐の状態から立ち上がり階段へかける。だが間に合わない。溝口ら二人は間に合うだろうが俺は無理そうだ。

とっさにベルトにかけてあったフックを階段にかけ、ロープで降下する。間一髪、ヘリポートは跡形もなく壊れたがその前に下へ降りることができた。

ハインドDはこの吹雪と気温のためヘリポートより下の茂みにはミ
サイルは撃てない。だが、できるだけ逃げる必要があった。

全速力で走り、林に駆け込んだ。

「溝口、ステインガー！はやく撃墜しろ」溝口はあらかじめ敵が戦
闘へり出すと思ったので持って貰っていたのだ。だが、……

「忘れた……」「青ざめた表情で言ってきた。忘れたのか……」

「じゃあ、俺が狙撃で。」富田が対物ライフルの弾倉を交換する。

対物ライフルは威力が高く、装甲車ぐらいなら穴を開けられる。だ

が人間が当たると・・・。

戦闘ヘリは空飛ぶ戦車と呼ばれることもあり、ハインドDに関しては空飛ぶ戦闘車両とも呼ばれていたことがある。だが、ヘリは弱点があるのだ。それはハインドDにもあり、メインローターにダメージを与えればよい。または、直接操縦席を狙えばいいのだ。防弾ガラスと言えども12.7x99mm NATO弾は貫通するだろう。

至近距離で狙わなければならない。風が強く対物ライフルと言えども当たらないかもしれないからだ。

「風は強いけど、至近距離からなら問題ない。ここから狙い撃とう」
そう言って2脚を広げ、固定する。

まもなくして、ハインドDがやってきた。

富田は息を止め、ブレを抑え、引き金を引いた。機体はメインローターに当たっているのだろう。

煙を噴出し、大きく揺れていた。

「よし！やったぞ」溝口と俺はともにハイタッチを交わす。だが、

「俺、当ててないよ……………」
「じゃあ誰が墜とした？」

機体が大きく揺れ始め、高度を落としていく。その揺れと降下速度を考えると……………ここに落ちる。

「おい、やばいよ！逃げるぞ！」武器をその場に捨て、走るだが逃げられない。

その時目の前が真っ暗になった。

そして……………

「ゲームオーバー」

「あなたは戦死しました」

機械的な男性の音がヘッドホンから聞こえた。

「第0章 0話 国連兵救出作戦」(後書き)

誤字脱字等あればよろしくお願いします。

ちなみにハインドDはMGSからとりました。ゲームの出来事ですので、現実世界に関係ありません。

「プロローグ」(前書き)

はじめまして。snake710と申します。

初投稿ですが、がんばって行きたいと思います。・・・

この話はプロローグなのでまだ異世界行きませんが4話、5話目から行きますゆえ、

読むのやめないでー!!

あと4話辺りまでは平凡な高校生の日常をしています。

「プロローグ」

「うん……このミッションうまくいかないな」。
と言いながら、俺はHMD（ヘッドマウントディスプレイ。頭につける小型テレビのようなもの）外してテレビ本体からソケットを抜いた。すると、HMDに出ていた映像がテレビに映し出される。

「あともうちょいだったのにな」。

「どっするっ」。

と、テレビにはブリーフィングルームが映し出され、二人の戦友の
アバターが立っていた。

つまり、まあ、作戦失敗したのだ。

「まああそこでH I - 24 D（ハインドD）がでなければな」。
と我が戦友である富田が言った。

「俺がステインガーを持って来なかったのが原因なんだけども」。作戦中は対空特技兵なのに対空ミサイルを持ってこなかった忘れん坊の戦友、溝口が笑いながら言った。

今やっているゲームは「Assault company」という、自分のPMCを育成して業績TOPを目指し、最強のPMC（民間軍事会社。いわゆる傭兵を派遣する下請け会社）を編成するゲームである。

インターネットを通じ、仲間とPMC（TEAM）を作り、合同でPMCを運営していくことも可能。自分のキャラクターを作って、戦場で戦い、ヘッドハンティングすることもできる。このゲームのユーザー数は日本だけで1000万人。世界で1億人を超えてしまった傑作ゲームで、大手PMC同士が戦う大規模戦があり、自分で購入、作成、奪取した兵器が使い、中規模以上の戦場なら、戦車やヘリが使用可能になっている。

ちなみに、さっきの作戦では、国連の兵士（NPC）をテロリストから救出することだったが、

相手PMC（テロリスト役）が冬山のフィールドで戦闘ヘリHI-24Dを持ってきたことにより始まった。

某、蛇のゲームで液体と名乗る男やロシアの私兵部隊がアラスカでハインドDを飛ばしたが、敵は思い通りに操縦できず墜落し、落ちた場所が俺たちが隠れていた場所だったとは。

「もう一回やるか?」。と富田が聞いてきた。

「さっき戦ったteamはいないだろ。へり墜しちゃったし。今日は、これでお開きにしない?」。

ゲームをやめたい理由は、二つある。トイレに行きたいのと、宿題をやらなければならないからだ。そう、夏休みの宿題が終わってないのだ。

33

「わかった。現実逃避しないで宿題しないとな」。と言って、富田は通信をきった。

終わってないのか……。

「俺はフールアotnew vegasでもやってるよ」と溝口は言って、ログアウトした。

仮想空間のフリーフィングルームには、自分の分身である兵士がいない。

メニュー画面を開き、ログアウトする。

今日は8月31日。明日はとうとう9月1日。二学期だ。時間は2時過ぎ。

あと4、50分ぐらいで9月1日。宿題は、していない……

オワタ……

（まあ、どうにかなるだろう）
と思いつつ、トイレに向かう。
さて、どうなるのだろうか（笑）……

「プロローグ」(後書き)

まだプロローグです。

あと2、3話読めば、異世界行きますから読むのやめなさい！

誤字、脱字、言い回し等、おかしなところがあればご指摘ください。

よろしくお願いいたします。

「第1話 渋谷駅防衛戦？」（前書き）

後半に戦闘シーンをいれました。2話まで続きます。
戦闘シーン初めてなのでよろしく！

「第1話 渋谷駅防衛戦？」

「おはよう」

「おはよう」×2

教室に入ると、目の下に隈を作った2人がいた。一人は、ゲームして徹夜した奴。もう一人は宿題を徹夜で終わらせた奴。俺もだが・・・。

「ベガス楽しかったな。テロリストがねー・・・」。

「フールアオトじゃないの?」。と富田が聞く。

「つまなくてレインボオシックOベガスやってた」。

こんな感じでとりとめのない話がつづいていた。そして・・・

「そつだ。二人とも。宿題は全部終わったんだよな?」。と、溝口が唐突に聞いてきた。

「俺は終わってるよ。富田の方は？」。

「もちろん終わってる」。と目の下に隈がありながらも笑顔で答えた。ちいと怖い。

俺たち二人とも終わったと聞くと、溝口がニヤニヤしながら腕を組んでいった。

「今日、AC (Assault companyの略) でPMC超大規模戦、16時からあるんだけど、お前の家でやらない？」。と、俺のほうを見て言ってきた。俺の席の後ろにいる女子に言っている訳ではない。100%！俺に言っていた……。

「ちょっと困る。妹いるし、俺達が騒いでいたら、殺される……」。
妹に殺されるといふのは誇張しているわけではない。

訂正しよう。俺の妹は中二でそれなりにかわいいのはあるが、空手の達人でいろんな意味で人間兵器で、ツンデレなのだ。俺にはツンツン(男はすべて含まれる)、親にはデレデレ、てな感じだ。つまり、「殺される」と言っているのは本気マジでいっているのだ。

理解していただけただろうか？

例を挙げると、つい最近だが、不良に絡まれている妹を目撃した。兄なんで一応、救出しようと思ったんだ。しかし

「×中の子でしょ。いまからカ……ボカアアアアア……」

とそいつの顔面にグーパンチを入れ、近くにいた奴にも回し蹴りを食らわせた。

そして……

「何見てんの？」と言って、助けようとした俺までも返り討ち？にしてみました。恐ろしい……

「俺達の家には、受験生がいるだろ。だからちょっと……」

「俺の命よりも、お前らの兄弟の将来が大事なのか！」。

「当然」と答えた。必然だった。仕方ない。

「わかった。でも奴は、17時には、帰ってくる筈だから、それまでに脱出しないと」。

「ああ、わかっている」。溝口は自信が満ち溢れているような顔をしていった。

以前、同様のことが起きていて、自分の部屋にハリケーンが直撃した感じになっていた。

なにか、策があるのだろう。

「じゃあ、14時に行くよ。」と言って今日の授業は終了した。

16時30分頃

Assault company内、中規模戦、東京、渋谷市街

(こちらwar dog 1。渋谷駅前に到着した。井ノ頭通り入り口から来る敵を迎撃する。オーバー)

(こちらHQ。りょうかい。War dog 2は、道玄坂下の敵を迎撃。歩兵はHMV付近から来る敵を叩けブラボー1は、War dog 2に随伴せよオーバー)

(こちらブラボー6。道玄坂2丁目に続く道路に地雷を散布した。予定通り、地上部隊の支援を行うオーバー)

(了解した、支援要請あるまで臨時ヘリポートで補給を受ける)。

(ブラボー6了解アウト)

渋谷駅前では、敵の攻撃から渋谷駅を死守する任務についたPMCの「Red Antares」「Wolf Infantry」そして、自分たちが経営している「Battle Eagle」があつた。もつとも経営とかは、大雑把なことしかやっていないのだが・・・。

一応、自分の役割やほかのPMCの役割を覚えておこう。

「Battle Eagle」・・・ブラボー6、「UH-60」
「Wolf Infantry」・・・War dog1, war dog2、「M1A2エイブラムス」を使って敵装甲車・戦車を殲滅する。

「Red Antares」・・・ブラボー1、2、3、4歩兵として参加。ブラボー4は、LAV-25を所持。歩兵勢力を掃討する。

こんな感じだ。

ちなみに、HQ（指揮官）は溝口がやっている。

（井ノ頭通り入り口から敵発見！T-80が3両、迎撃する）

War dogに搭乗している。qw*7*1*8（ユーザー名）は、ヘッドセットに向かって言った。これはゲームなので4人で操縦することはなく、装填などは自動であった。しかも、彼が操縦しているのは、M1A2エイブラムス戦車。最強と謳われる、アメリカ軍が採用した戦車だ。短所は燃費の悪さである。

「奴らをブツ殺してやる……」。qw*7*1*8は、マイクのスイッチを押さず独り言で呟いた。

何事にもうまくいかず、大学受験に失敗し、親に頼り生活する日々。

そんな自堕落な生活の中であるものに出会った。

ゲームである。

それは、心の穴を埋め、ストレス発散に役立つていた。しかし、自堕落な生活が続き、悪循環の毎日が続いている。

彼は、戦車を西武百貨店の手前で停車して様子を伺った。敵は、神南1丁目から出てきて、戦車、装甲車の順に走ってくる。

装備されたペリスコープで、敵をロックオンする。ロックすると砲塔で追尾するため敵を撃破しやすいのだ。

そして、軽くボタンを押す。エイブラムス戦車のラインメタル 120 mm L44滑空戦車砲は、APFSDSと呼ばれる徹甲弾を発射して吸い込まれるようにT-80に当たった。弾は操縦席に貫通し、操縦手をバラバラにした。そして2発目を発射し、砲塔部分を破壊した。

敵のT-80は、ソ連が開発した主力戦車で125mm滑空砲を装備している。しかし、整備状況が悪く、初期装備となっている爆発反応装甲は使えなかった。

残るは、戦車2両。

敵の後続部隊は、西武百貨店ロフト館沿いの道路に避難する。そして装甲車から兵士を降ろす。敵の武器はAKやM16などまばらでまとまった勢力でないことは明らかだ。

(こちらWar dog1。歩兵を載せた装甲車が西武百貨店ロフト館沿いの道を通り逃走中。迎撃する。オーバー)

(こちらHQ。了解。アウト)

q*w*7*1*8は装甲車を攻撃すべく前進した。ガードレールを潰しながら、百貨店のB館の手前まで近づき砲塔を90度回し、敵が出るまで慎重に待つ。

「くらえ!!!」。そう叫び、ボタンを押す。戦車砲から対戦車榴弾(H.E.A.T)が飛び出し、装甲車に命中する。対戦車榴弾は、戦車用に作られているため装甲車にはチイと威力が強すぎた。

「よし!やったぞ!」。と喜びの声を上げた。いつもならすぐに死んでしまうのだが、最近購入した戦車によって戦果を上げることができた。

しかし、

（ビービー！敵にロックされました。）と警告音が流れた。ミサイルの対抗策としてミサイル錯乱剤チャフを散布する。そして後退しようとするが、

「撃て」と西武百貨店の窓から対戦車部隊の指揮官が声を上げ、ジャベリンの砲手がミサイルを発射した。ミサイルは、戦車のキャタピラあたりに命中し、行動不能にした。

（キャタピラがミサイルで吹っ飛んだ！行動不能！）

（了解。すぐに応援をよこす）とHQから返答が来た。

だがすでに遅く、戦車のHPは、少なく、もう一発来てしまえば破壊されてしまうのであった。そしてまた、ジャベリンのミサイルがエイブラムス戦車にやってきた。

エイブラムス戦車は大破し、鉄の塊になり、また、彼の拳によって現実でもキーボードが大破した。

(こちらHQ。War dogが行動不能に陥った。ブラボー6は工兵載せ、援護に当たれ。オーバー)と溝口の声がヘッドセットから聞こえる。まあ、隣にいるから、音もれしているが……。

(了解直ちに応援に向かうアウト)といって自分のアバターをUH-60に載せる。

操縦席に座ると自動的にNPC(非プレイヤー)副操縦手が現れる。

「俺を置いていくなよ」。と富田のアバターが乗り込み、続いてNPC工兵も乗り込む。

「ああ、悪い悪い……」。と言ってメインローターをオンにして回転を始める。

「えー、本日は、私、Battle Eagleが機長を務めます。法律により当ブラックホーク内では喫煙が禁止されております。

なお、このプログラムに参加される皆様には100クレジットずつで……」。

「ブラックホークダウンの機長か？」。と富田が聞いてくる。

「お客様シートベルト着用をお願いいたします。速めにミニガンの席に移動することをお勧めいたしますが……」。

「はいはい、わかったよ。でもさあ、だったらウルキューレの機甲も入れたら？」

「キルゴア中佐か？だったらさあ……」。

(こちらHQ。私語を慎め。アルヴィン・H・ダヴェンポート少尉、オーバー)

どうやら機内アナウンスが間違えて無線で流れたらしい。

(了解、サンダーヘッド。しかしなあ……)

(こちらWar dog2。エースコンバット関連のコードでもいいんだが僚機がやられた！ しかも腹立ってネット上からもベイルアウトした!!!歩兵部隊の掃討を要請する!!!)とWolf

Infantryの戦車兵が言った。少し苦笑を交えながら……

この人もやっただけ・・・。

(了解。War dog 2・今すぐ援護に向かうオーバー)

(War dog 2・了解 アウト)

確か、「ブラックホークダウン」ではヘリが落とされるがそれを知つてのことか？

そう思いつつも、機器の正常を確認して、メインローターを回転させる。

「ご搭乗のお客様。当機はこれより離陸します。シートベルトと銃の安全装置をご確認下さい」。ときめ台詞を残し大空へと飛び立った。

「第1話 渋谷駅防衛戦？」（後書き）

第2話はまで戦闘続きます。

ブラックホークで会話をするシーンは、映画、「ブラックホークダウン」の序盤。ヘリの機長が旅客機のアナウンスのようにするシーンがあります。ワルキューレの機構は映画「地獄の黙示録」の挿入曲としてでています。ちなみにゲーム、「エースコンバット5」をちょっと真似しました。

「第2話 渋谷防衛戦？」
(前書き)

後半戦です。

「第2話 渋谷防衛戦？」

ブラボー6、UH-60機内

機体を空に上げてからビルに当てないように細心の注意を払う。このゲームは細かく実際のヘリと同じようなことができ、その反面壊れやすい。

（こちらHQ。破壊された戦車の近くにRPG部隊がいるはずだ。ステインガーミサイルに細心の注意を払い行動せよ）と溝口が言うてくる。

30秒足らずで現場に着いた。T字路には、大破したエイブラムス戦車があったが、攻撃を受けた所を探しても敵は見つからなかった。

収穫なしで敵も見当たらずヘリポートに戻ろうとしたが

（MISSILE ALERT！ミサイル接近中！回避せよ！）とヘリからの警告音だ。急いでビルの影に隠れる。

間一髪のところ、ミサイルは当たらずビルにあたり、コンクリートの破片が飛び散った。ステインガーの攻撃だったのだろう。ビルのおかげで幸を奏した。

「機長！今のところに戻ってくれ！」。富田は、ミニガンにアイドリリングをかけているのだろう。キュウイキュウイ言っているのが聞こえた。奴が連絡橋の敵をやっつけたのは明らかだ。

深追いしすぎて「ブラックホークダウン」にならなければ良いが・・・。

連絡橋に戻ると、案の定、RPG7を抱えた敵がいた。だが、ステインガーやジャベリンを持っていなかった。

このゲームでは、RPG7は対戦車兵の標準装備だがジャベリンやステインガーはとても高価なのだ。

なので敵は、あまり購入することはできなかったのだろう。こちらにとっては、非常に幸運だった。

ジャベリンはその価格に値するような高性能を誇る。実際、短時間講習を受けた兵士ならば95%の確率で命中する。本当に持つていなくて幸運だった。

敵兵は、RPG7を撃ったが当たらず最後のチャンスを失いミニガンの餌食となった。

「後退しろ！こつた・・・」とこの部隊の指揮官は言いかけたが、言い終える前に蜂の巣となった。いや、肉片となった。

「くらえ！」と言って搭載されているロケット弾を発射する。百貨店の連絡橋は崩れ、道は塞がれた。

（こちらブラボー6・敵歩兵勢力の殲滅を確認。ヘリポートにて補給を受ける。オーバー）

（そうさせたいのは山々なんだが・・・）

（え！・・・）

（ブラボー1・航空支援を頼む。敵の主力はここに集中している。そこを叩いてくれ。現在位置は道玄坂下交差点だ！オーバー）

どうやら、敵の主力は道玄坂下に集まっているらしい。敵の主力は、T-80が2両。歩兵が1個分隊。装甲車二両。一方こちらは、M1A2が1両。歩兵が2個班。装甲車1両。ヘリ1機。以外と不利な状況に立たされている。

《ひとつの分隊につき8から12名程、ひとつの班につき4から6名ほどである》

(了解、援護に向かう。アウト)

と言いつつ、操縦桿を曲げつつ、進路を道玄坂下にとった。

道玄坂下防衛線、ブラボー1(第一分隊) 5分前。

スネーク「こちらスネーク。TARO、何か見つけたか？」

TARO「いや、こっちは何も。スリドック。そっちはどうだ？」

スリドック「いいや、ない。ブラボー6が百貨店の方へ行つたが・
・・」

スネーク「撃墜されなきゃいいんだがな。」

スネーク班長が不吉なことを言っていたら、スナイパーライフルのスコープには敵の兵士が写っていた。

敵の装備はヘルメットに防弾ベスト、AN-94にグレネード。

息を止め、手のブレを押さえて引き金を引く。

スリドックの放った弾はSR-25の銃口から放たれ、遠くにいた兵士の頭に直撃した。徹甲弾であったため、ヘルメットに穴が開き、頭を貫き、ヘルメットは当たり鈍い音を出しただろう。

「スナイパーだ！隠れ・・・」そう言った指揮官らしき奴は言い切れず、頭に風穴を開け、第二の犠牲者となった。

よし！ 次はドイツだ？

そうオヤジギャグを言ってしまったが（オヤジではない・・・）近く

から弾が来てコンクリートが跳ねた。
オヤジギャグを言ったせいかな？

見つかったからには、位置を変えなくては。

「こちらスネーク。スリッドッグ！援護してくれ！」班長から悲痛の叫びが来る。

ビルに渡してある板から板へ走った。防弾ベストを着ないでよかった。

少し後退して、スコープを覗き敵を確認する。T-80が1両と装甲車が1両、その他歩兵が大勢……。やばいな。定期テストで赤点取るぐらいヤバイ！

敵の戦車が気づいたらしくこちらに砲塔が向いた。もうだめだこりや（長さん声）

しかし、

突然、T-80が爆発し、随伴歩兵が吹っ飛んだ。最初は、地雷かと思ったが班長達が地雷を仕掛けたところは見ていない。

(こちらはブラボー6。遅くなった。援護する)

ブラックホークのロケット弾が戦車に当たったらしい。ヘリは旋回しながらミニガンで鉄の雨を降らせる。

(こちらHQ、敵勢力の掃討を完了。任務完了。帰還せよ)

あ、やっと終わった。さて夏休みの宿題の続きをするか・・・。

「第2話 渋谷防衛戦？」（後書き）

誤字脱字等ございましたら、ご指摘よろしく願います。

「第3話 転生？召還？いや召喚？」（前書き）

えっともう9月も終わりですが、作中で夏休みの宿題が終わらないと登場人物たちがほざいておりましたが、自分もそのうちの一人です。

「第3話 転生？召還？いや召喚？」

「うう・・・やっぱ、司令部勤務よりも現場勤務がいい」。と不平不満をほざいたのは溝口だ。今回はHQとしてやったが現場勤務よりも面白くないようだ。

「ミニガンよかったねえ・・・。」

「お前なあ・・・」。この富田はミニガンに心を奪われてしまったらしい。わからないでもないが・・・。

あれ？今何時だ？

時計は、とっくに17時は過ぎていて、18時になるつもりだった。

やばい・・・ここがブラッドバス（血風呂）になる。

ガチャン！

「タダイマー・・・」。

死亡フラグ確定。いや虐殺フラグかな？

「あれ？靴が多い・・・」。気づかれた！！！！

「まさか・・・！」見つかったか？

ドタドタドタ・・・

どたどたと走っていく音。こちらに来るのではなくバスルームに行っている。バスルームには、乾燥している服があるはずだが・・・。

「兄貴！！！！！！」。あゝあ、来ましたよ。ヤベーよ・・・。

次は何だよ。何があるんだよ。

「私の下着どじやったの？殺すよー」。

.....

.....

今なんて言いました？

言うておくが俺にはそんな趣味ない。妹萌えなんて、実際、不可能だからだ。

しかも、あんな妹は嫌だ。

まあ犯人はわかる。そこにいる、顔が青い奴に聞いてみよう。

「溝口ちいいい〜〜〜!!!」。総合格闘技選手もびっくりする
ような跳び蹴りを食らわせた。誰にだって？ 溝口だ。

なぜか俺のMY枕を持っていたため、胴体にヒットしなかったが、

「俺は何にもしてねえ!」。

説得力のないことをほざく。

「この前、妹の下着盗んだろ!!!」

「うっ!!!!!!」。

まあ彼には前科がある。しっかり更生せねばならんのだ。
そして妹のためにも……

というのは、建前。

俺のためなんだけどね。ぶっちゃけ言うと、前、俺に飛び火してとんでもない目にあつたからね……。
だから、この際、罪を償わせてやらないと。

しかし・・・・・・・・

「ああ、もう！二人とも窓から逃げるぞ！」と言いつつ、さびれた窓を開ける。そしてあらかじめベットに縛っておいたロープを出し窓から垂らしておく。以前、襲撃があった時逃げられなかったためだ。

「降下しろ！」。特殊部隊のロープ降下のように降りる。

「走れ！！」。いつ奇襲されるかわからないので自転車まで走る。しかし、・・・・・・・・

富田、溝口の両名が立ち止まる。顔を真っ青にして・・・。

コマンド

- ・ その先、の光景を見る
- ・ 2人を引つ張って別の道を探す
- ・ 妹を倒しに行く

最初のコマンドを実行し、2人が見ている光景を試してみる。するとそこには、・・妹がナタを片手に持ち、それはもうヒグラシように・・・・、こちらを睨んでいる。

彼女の隣には、我々の自転車だった鉄の塊が3つ程転がっていた。

コマンド

- ・ 逃げる
- ・ 逃げる
- ・ 攻撃

後者は選べねえ・・・。
無難に「逃げる」を選ばず。

手には、煙玉（改）市販で売っているものを大幅に改良したものがあ。目隠し程度にはできるだ。見えないところでライターで煙玉に火をつける。

「よし！走れ！」。と散開して逃げる。そして煙玉を投げつける。
案の定、当たる手前で爆発して周囲に煙をばら撒く。

煙に紛れ、突っ走る。

対岸のフェンスまで
10M、

8 M、

6 M
.
.
.
.
.
.

あともうチヨイだった。

あともうチヨイのところで我が妹に足を掴まれた。

「疾風！掴まれ！」。と富田が叫び手を差し伸べてくれた。後ろには富田を支える溝口。

こいつらが友達でよかった！！！！

しかし、後ろには妹が。そして、中学生とは思えないような力で引っ張る。

「負けてたまるかあ！！・・・あつ！」。溝口は元陸上部。富田は登山部。足には自信があり、力も女子には負けない筈だった。

「捕まえたあ～～～～・・・」殺意のこもる声。道路のど真ん中でボコされるのか。

そう考えているうちに鉄拳が目の前に来る。自分の血飛沫が飛び散りコンクリートに叩きつけられる。衝撃で呼吸が止まり、空を見上げた。

この地獄と正反対の澄んだ青い空。真上には飛行機が……。

あれ？

あの飛行機落ちてこない？

ちよつど家に落ちてくるなあ……。と悠長に構えている場合じゃない。

速く知らせないと……。

「おい我が妹よ上を……。ゴフ!!!」。言ったとたんに溝口が飛んできた。

「何？兄貴？」。血飛沫が顔に付いている。怖え……。。

「う、上……。ぎゃ!!」。言い終える前に富田が覆いかぶさる。内臓がつぶれてしまっ!!

「上……?」。と少し語尾を上げながら見上げた。

そこには戦闘機が煙を出しながら落ちてきた。

戦闘機はそのまま家に突っ込み、家を粉碎した……。しかし、周りを見渡すと妹がいない……。逃げた？

溝口、富田を起こし、家のあった場所へ近づく。家があった場所は粉碎され、瓦礫の山となっている。家の跡地の真ん中には穴が開いていて、そこに戦闘機が刺さっていた。

コックピットには、誰も乗っていないなかったので、脱出したのだろうか。いや、コックピットのところは跡形もなく潰れていた。

「ほれ、へふ22だない？」と溝口は言う。顔面を強打したのか、言っていることが良くわからない。

彼が言うにはF-22ラプター。アメリカ軍の最新鋭のステルス戦闘機だ。それゆえ、国家機密になっていて、日本も譲ってもらおうとしたが、だめだったらしいな。

F22のミサイルハッチが開いている。そこから黒い円柱の形をした物体がはみ出している。

戦略核弾頭！？とは思ったが、ミサイルには、「Joint Direct Attack Munition、GBU-39」と書かれているが、核弾頭には見えない。まあ、高校生が見てもわからないが、「Nuclear」とか核弾頭に関連した単語も見つからない。放射能標識も見つからなかった。

「なあ、速くここから離れようぜ」。目の近くを殴られたのが富田の目の周りは青く腫れていた。

「ああ、わかった」。富田の提案で離れようとした。

「ぼい、ちえとまて」。と溝口は止めた。

「はれは？」。と指差す先にはミサイルの制御装置のような液晶パネルがある。

それが赤く点滅し、今にも爆発しそうだった。

「指差してる場合じゃねえ！速く逃げる！」富田が叫び、戦闘機が落ちたクレーターから出ようとしますが、出られない。

「クソ！なんでこんなところに！」。そこには、なぜか冷蔵庫があり足場を塞いでいた。

「こんなところで！」。

「だへかはすけて!!」。

「わかった。助けてやろう」。

と聞き覚えのない声でした。

「!?!」
「x3」

溝口が「誰か助けて」といったのはわかるが誰だ?今の?

すると、俺達3人を光が包み込んだ。そして、
跡形もなく消え、戦
闘機の爆弾が爆発し、
家の瓦礫は跡形もなく吹っ飛んだ。

「第3話 転生？召還？いや召喚？」（後書き）

誤字脱字等ありましたらよろしくお願ひします。

「第4話 神様執務室」(前書き)

ホワイトハウスの執務室ってどんなのか見てみたい。

「第4話 神様執務室」

部屋にあるプラズマテレビが動きだし、ニュースが映し出される。

「今日起きた米軍戦闘機墜落のニュースです。今日、午後18時過ぎ。×県 市の住宅街で、アメリカ空軍のステルス戦闘機F-22が墜落し爆発しました。市の住宅街では、今も救出活動をしており難航している模様です」。

男性ニュースキャスターはそう言ってページをめくる。

「次のニュースをお伝えします。来月の日本オープンゴルフの・・・」。
「。」。
いすに座っている人は、リモコンでテレビを消した。

「君たちが死んだ事件についてはあまり報道しないなあ。この局は？」黒い皮の椅子に座った、スーツを着た男が答える。

その男は、黒いスーツをまとい、こちらを向く。部屋はまるで映画に出てくるようなアメリカの大統領執務室のようだ。

「俺達が死んだ?」。隣にいた富田が聞く。先ほど殴られた後もなく、制服をきちっとしている。

「その通り。君達は、その……戦闘機に搭載されていた誘導爆弾が爆発してしまったんだ。その前に助け出したがな。一応、偽の君達の死体を作っておいたよ」。

あっさりと重大な発言を言ってしまう。

「一度死んでしまうと、転生のために記憶を消す必要があるんだ。輪廻転生課の仕事だね。その前にヘッドハンティングするんだよ……はあ……」。

この自称神は、何かあったのか。

「聞いてもいいですか?」。溝口が神に質問しようとした。奴も傷

はなかったかのように消えている。

「なんだい？」

「なぜ、我々がここにいるのでしょうか。ヘッドハンティングなら他にも適任者がいるはずでは？」。

溝口は、俺達がもつとも疑問に思っていることをきいた。俺達以外にも他に適任者がいるはずなのだ。

例えば、最強で蛇の名を持つ兵士とか、なぜか特急列車のコックを
している元特殊部隊員とか。あとは、妹とか……………

まさかとは思いつけどまさか……………

「まさかとは思いつけど、妹を殺そうとして俺たちも、とぼっちりを受けたのでは?。」。

……………

……………

……………

……………

沈黙……………

……………

「うん。実は、君の妹は何度も殺そうとしたんだけど全然、チャンスがなくて……。
今回は、整備不良の戦闘機があったからそれを君の家に落としたんだよ」。

「何回殺そうとしたんだ？」

「うん。2000回位？」。この神に殴りたいが、妹の強さに啞然としてしまった。

2000回……

やっぱり人間兵器だ。某アニメの錬金術師なんか目じゃねえぞ。神の攻撃から2000回も回避してるんだから。

「戦闘機を落としても君達は死ぬことなかったんだけど、ミサイル

が爆発しちゃったし……。
君の妹に殺されかけるし……」。

ハイ？

今、なんて言いました？？

「あの、殺されかけたってのは？」

「ああ、今した話をして、仕事の話したら、怒ってしまってボコボコにされた」。

「あゝあ……。」「三人が同時に言っつてハモル。

まさか、神をボコすとはなあ……。 お咎めなしは、ないよなあ……。。

「それで、妹は？」。

「怒りを静めるため、ある世界に送った」。

あらかた検討はつくが……………

「どこです？」。

「鋼の錬金術師の世界だ」。

あらかた、説明しておこう。我が妹は、人間離れた人間だ。しかもアニメ好き……………
生前、好きだったのは「鋼の錬金術師」である。

「あの子なら、イズミ師匠とも互角だろう」。

そこまでか……。

しかし、「仕事の話」とはどういうことだ？

「我々はどうなるんです。このまま帰してくれるんですか？」

溝口は辛辣そうな顔をしながら言う。

「元の世界に帰れるわけないだろう。死体も作っただし、見つかったのでいまさら生き返らせるわけにはいかないんだよ。」

こういうと思った。やっぱりな。次、生まれてくるなら、妹がいない世界がいいな。

「まず、依頼したい仕事がある。」

「はあ〜？」×3

神様何考えているんだ？なんせ、妹にボコされる神だ。どんな仕事か考えたくない。

「頼む！君たちしかいないんだ！」出たよこついう言葉。こついう言葉聞いちゃうと、了承したくなるのが人間だ。

「どうせ、妹にやらせるつもりの仕事でしょ」

「まあそうなんだが……」。

「人間離れた仕事はできねえ！」富田が叫ぶ、

「どんな仕事なんだ？」と溝口がさめた口振りで言う。

「わかった、話そう。実は、君達がいる世界と違い、神が管理できない世界がある。その元凶を取り除いて貰いたい」。

「もちろん、給料貰えますよね？」溝口が言う。

「ああ、仕事のために特殊能力を与えよう。創作魔法とかね。あと君たち、ネットゲームで「Assault company」やっていたでしょ。その兵士の能力、君たちに付けとくから。報酬は、君たちが好きな世界に連れて行く」。

チート能力だ。創作魔法に兵士の能力。最高の組み合わせやあ！
！！

「元凶って何ですか？」。富田がいいのか悪いのか、そんな顔をしながら神を見る。

「うーん、ここからじゃ、見えないんだよなあ……。」

と神は窓を触って、目をつぶる。すると窓の外はワシントンDCの風景（本当にホワイトハウスのよう）にノイズが走り、風景が変わる。

窓にはテレビのノイズが走り何も見えない。

「こづいことだ」。といって、手で無理だということを示す。

。「どうだい？ 3人で元凶をなくしてほしい。やってくれるかい？」。

こづ神に聞かれてどうだろう。生きていた世界では、死んでしまい、仕事をする代わりに、好きな世界で転生させてくれると言っ。こない条件ないだろう。

「わかった。やりますよ」。溝口がいった。

「うーん。しょうがないけどやるしかないか」。頭をポリポリかきながら返事をする。

こうなってはコマンドはひとつしかないのだ。

「わかりました。やりましょう」。こう答えた。

「よし、早速準備するか」。神はそう言ってドアを開けた。

「第4話 神様執務室」(後書き)

誤字脱字等ありましたらよろしくお願ひします。

次から異世界です。

「第5話 雪景色」(前書き)

すみません。サブタイこんなものしか思いつきませんでした。

「第5話 雪景色」

異世界 どこかの上空・・・高度不明 C-130機内

「ヒックション！」と富田がクシャミをした。

「大丈夫か？」神が不安げな顔をする。

「ああ、大丈夫」。富田はそう答えトイレのほうへ歩いていく。

今、乗っているのは、軍用輸送機C-130。普通なら、兵隊10
く20人入る位でかく、なかには、神様の餞別でハンヴィーが乗っ
ている。今富田は、鼻をかんでいるし、溝口は寝ている。今のうち
に聞いてみよう。

「なあ、神様。なんでその場で飛ばしたりしなかったんだ？」。

普通ならその場で3人を転移することができたはずだ。なぜ、輸送機からパラシュート降下する必要があるんだろうか。神の力でやれば一発なのに。

「言っただろ。あの世界に転移させるためには力が必要で、君の妹に殴られて、転生するための書類作って秘書に渡し、君たちに能力与えたらもう異世界を往復する力しかないよ」。

と神は頭をかきながら答える。今の服装はさつきと同じ黒のスーツだが、ネクタイを緩めていてどこかやつれていた。この神、ビールを持って帰ってきたサラリーマンみたいだな。

「課長、目標地点に近づきました。三人に準備をさせて下さい」。

「はいよー」。と神はどっこいしょと言って腰を上げる。オヤジだなこの神。

でも、「課長」って何？

「あの、神様。課長ってのは？」。

「ああ、それか？」と言って答えてくれた。

「八百万の神様っているだろ。実際はもつといるんだが、人間が死ぬと天国なり地獄なり転生なりするわけだ。他にも、勝手に他の世界に行ったり、間違っって行っちゃったり、タイムスリップするわけだけだ。

それをなんとかするのが俺の仕事で、人間が勝手に異世界に行ったりするのを防いだり、壊れた世界を直しに行くんだが、それが人手不足でなあ……」。

神の話は、やっぱりよくわからん。愚痴を言ってるサラリーマンみたいだ。

まあ確かなことは、この神様は、破損世界修復課の責任者ということとで、世界管理局に勤めているらしい。この局を作ったのはわけがある。中世の中ごろ、魔法を使った不法転移が横行していたらしくそれが発端となり結成されたとか。

「課長、何してるんですか！速く準備させてください！」機内にいる副機長が怒鳴る。

しかも、この副機長がとんでもなく怖いのである。なぜかって？それは想像したらわかるだろう。

この副機長は鬼なのである。

「はい。わかりましたよ。ほら準備してくれ。」

と神様が催促する。

副機長が来て言う。

「降下二分钟前 たて」。と普通に言った。

俺たちが準備すると神がハッチをあける。すると、外は雲に包まれ降下地点が見えなかった。

「降下一分前。後部に移動せよ」。副機長が言い、ハッチの近くにあったランプが赤くなる。

「こんなところに降下するの？」富田が震えた声で言った。

富田は、高所恐怖症であった。

「ああ、そつだ！早く行け！」

神様がそついうが、あまりの高さにすくんでしまった。

「降下20秒前。スタンバイ」

「すべて正常。オールグリーン」副機長が言つとランプが赤から緑に変わる。

「カウント5」

「4」

「3」

「
2
」

「
1
」

「鳥になってこい！幸運を祈る」と蛇のゲームで出てきたセリフを
神は言つて、俺達を蹴った！

「
うわ~~~~~!!!!!!
」

「
死・・・死ぬ!!!!!!
」

「神様のバカ!!!」こういう時、言わなければなるまい。なぜか
って? 某蛇のゲームに出てくるセルフを言っ自分たちを蹴ったか
らだ。しかも高度ウン千フィート。神への冒瀆と言われても、妹が
やったのと比べたら、比べ物にならない。

そう絶叫を繰り返しているうち、日の出が見えてくる。そして地面
が見える。

はっきり言って地面に見とれてしまった。地面には水平線まで雪が
一面に広がっていた。それも、足跡もなく日の出で反射していた。

「お先に失礼!」と溝口はピンを抜き、パラシュートを開く。

そして富田は……

ありゃま、失神してるよ。

しょうがないので、富田のピンを抜いてパラシュートを開く。

そして俺の番。ピンを抜く。パラシュートが開き、衝撃が走る。

そしてゆっくり降下する。投下物資としてハンヴィーも投下されているので、上からでかいパラシュートが降下しているように見えた。

地面に降下すると雪にめり込む。

こうして、初のパラシュートをした。できれば、生前にしたかったなあと思いつつ、次の行動に移る。

パラシュートを回収して、袋に入れる。パラシュート用の装備を外し、それもお袋に入れる。

バックパックと銃の入った袋を取り出して銃の動作確認をする。

ここら辺はゲーム内の能力だろうか。銃の動作確認をして銃を眺めてみた。

銃の名前は、FN SCAR。アメリカ陸軍が採用したアサルトライフルである。

NATO正式採用5.56mm弾とNATO正式採用7.62mm弾の両方が使えるのだ。

ゲームではいつもこれを使っていたっけか。

今は5・56mm弾が撃てるようにしてあり、弾倉を叩き込む。

オプションパーツとして、ハンドグリップ、レーザーポインター、ACOGスコープと言う中距離、近距離戦で好んで使われる物で、アメリカ軍などの軍や警察が使っているものをつけている。

他には、冬用迷彩服にボディーアーマー、ヘルメット、フェイスマスク、無線機など……。

準備完了したがあいつらどこへいったんだ？

「第5話 雪景色」(後書き)

誤字脱字、ご感想よろしくお願いします。

次は、未成年がハンビィー乗ります。

米軍のハンビィーあこがれています。

「第6話 集合」(前書き)

またもサブタイこんなものしか思いつかない。

「第6話 集合」

「あいつらどこへいった?」。降下地点から2・3KMずれてしまった。あいつらどこに行ったのだろうか。

ブーン・ブーン・ブーン・ブーン……

携帯のマナーモード?

そんなもの入れてないぞ。とポケットを探った。

すると生前に使っていた s f t b n k の携帯がぶるぶると震えていた。

小窓から「神様」と出ていた。

「神様、あいつらの居場所教えて」。もう仕方ない。この方聞くないのだ

「早々だな。その小山に登りきるとあの二人とハンヴィーがいるぞ」。

「わかりました、では」。

「ちょっとまつ……」「言い終える前に切った。なんかお説教されそうだから。」

スノーシューと呼ばれる雪の上を楽に歩けるものを履き、歩いていき小山に登りきった。

「遅いぞ！疾風！待ちくたびれて、凍え死にそうだ」。と溝口の元気な声が聞こえた。

富田も無事で、手には、M14 DMRといったアメリカ製の狙撃銃があり、溝口はM240機関銃と呼ばれているアメリカ製の汎用機関銃を握っていた。

俺達全部アメリカ製の武器使ってるな。大丈夫か？

ハンヴィーも無事で冬季迷彩になっているがなんで雪に沈まないんだ。

「まったく勝手に携帯を切らないでほしいね」。
となぜかハンビーのボンネットの上にノートパソコンが置かれており、そこに神の顔が映っていた。このまま、某ホラー映画のように出てくるんじゃないか？

よく見ると、sk peって書いてある……。

S k p eもするのか……。ほんとに神なのか？

「神だったら、直接心とかに話すことできないのか？」富田は言う。溝口と俺はアクションもの一筋のゲーマーだが、富田が、ファンタジーなど幅広いジャンルをやっている。多分そのためだろう。

「めんどい」。

言いやがったよ。この神。

「ここから、北に10キロ行くと村がある。そこで休憩を取れ」。神はそういった。

しかし、このハンヴィーはなぜ沈まないんだ？

「神さん。このハンヴィー2トン位ある筈だよな？なんで雪に沈まないんだ？」。

普通ならここはハンヴィーでなく雪上車を使うはずだ。

「めんどくさかった。でも、俺が沈まないようにしたから何しても沈まないはずだ。」

「それと、君達は神に使われているもの。つまり天使だよ」。

天使とは、神に使えしものと言う意味である。肩甲骨付近に翼を着け、頭の上に輪がある。だが現代で使われている武器を持っている天使はいないだろう。

聞いてみようとしてみできなかった。途中で回線が切れたからだ。

「どつする・・・ヒックシュン！」とくしゃみをしながらも聞いてきた。

「北に村あるし、行ってみよう」「そういつていく準備をした。ハンヴィーの中には、3人で一週間は持つ戦闘糧食（様々な国のレーシ

ヨンがある）ものや各種弾薬と通信機器、テントなどの雑具。

なぜか、iPodと専用スピーカーがセットになっているものがあった。

「なんだこれ？」富田はそう呟き、指を射す。そこには、なぞの充電器があり、説明書が付けられていた。

「アメリカ陸軍国防省承認、X-45レーザーライフル弾創充電器取扱説明書、

この充電器は、LR-45レーザーライフル専用の充電器です。他の電池、弾創を充電しないように！

この充電器は、LP-40レーザーガンにも使用可能になっており、最大6個の弾創を充電可能。

空になった弾創をコードにつなぎ、ランプが青になるまで、はずさな

他にも色々なものが書いてあったのであろうか。この先は見事に破り捨てられている。しかも、翻訳魔法のおかげで書いてあったことが理解できた。これを生前の世界にあつたら便利であつただろうに。

しかも、荷物に紛れて、ガンケースがある。レーザーライフル3挺、レーザーピストル5丁あつた。あとで試してみよう。

持っている銃を試してみることにした。

まず、空き缶、雪を固めたものを30個ぐらい用意する。
5m、15m、25mに10個ずつ設置して準備完了した。

「最初は、グー！じゃんけん、ポン！」

1番手、溝口。 ブッシュマスターACR、G18

2番手、富田。 M14 DMR、M1911

3番手、俺。 SCAR（5.56m弾仕様）、M92FS

となった。

まず、溝口が25mのターゲットに銃を向け、1バーストで発射した。最初は反動などでターゲットなどに当たらないなど不安はあったものの、ゲームの能力なのか、溝口のセンスなのか不明だが、空き缶の真ん中、命中させた。

そのあと、マシンピストルである30発マガジン装備のG18を5m先のターゲットを撃った。

多少弾をばら撒いたものの、ターゲットに命中させた。

その後、富田も同じようなことをやって空き缶を全部に穴を開けた。

次は俺の番だ。

まず、25m先のターゲットに当てるため、匍匐の状態で銃を向け

た。ACOGスコープの十字を空き缶に合わせ、息を止め、引き金を引く。

空き缶は当たって跳ね上がって雪にたって着地した。

「疾風、この敵兵を撃て。」といつ作ったのか、雪だるまがこつちを向いていた。

4mチヨイであったのでサイドアームであるベレッタ社製、M92 FSを取り出し、引き金を引く。

5連射して、胴体を打ち、最後に接近戦用のナイフをすばやく取り出し脳天に刺した。

「お見事！」と溝口がコーラの缶を投げていった。しかし、実際、俺は人を殺せるのだろうか。よくゲーム内では敵を撃ってスコアを得て、報酬を貰う。それを楽しいと思っていた。ゲームだから。しかし、今もっているのは、本物のライフルだ。本当にこんなことができるのだろうか。

「なあ、疾風、お前やっぱり戸惑っているだろ？」

「え！」

富田がこんな風に聞いてくるとは思わなかった。

「まあ、実際、最初にこれを渡されたとき、やっぱりうれしかったさ。でも、これを本当に使ってしまうとどうかなるんじゃないかと思っているんじゃないか？」

富田は、俺のことをちゃんと見ていた。雪だるまを殺したとき、俺が暗い顔をしたのをしっかりと見ていたんだ。

「よく俺さ。授業中に漫画見ていたじゃん。それでこの前先生に見つかって怒られてさ、体育の磯山にこっぴどくやられたんだ。怒られる前に見ただけけど、漫画の主人公が兵士に、銃は人を殺す道具だ、って言うんだ。でも兵士はこういうんだ。自分を守るための道具だ、って。人を殺す道具でもあるけれど、人を守る道具でもあると思うんだ。家族とか、親友とかね」。

と富田は言っただけで笑いながら俺の肩を叩く。富田も不安だったのだろう。人間誰しも理由は必要だ。人を殺めるのに「なんとなく」は通じない。何かしら理由が必要だ。

「では、隊長。指示願います。」と笑いながら富田は敬礼した。

「じゃあ、富田、銃座について。俺は運転席。溝口は助手席に座ってくれ。」

運転席は当然のごとく、左側であり、少し違和感があった。

「疾風、運転できるのか？」と尋ねた。

「もちろん」

あらかじめ鍵が刺してあったのでそれを回す。

ガソリンのメーターはなぜか無限大（∞）のマークが付いていた。
神様製の自動車は全部こうか？

「ではさっそく・・・なんだこれ!？」と溝口が目が出るぐらい
の大きな目をした。それほど驚く様なことか？

奴は、i pod を持っていた。液晶画面を見ると製品詳細でメモリ
I がまたも無限大と書いている。

バグ？と一瞬思ったが、違う。そうじゃない。神は例外を除く不死
属性だ。だから、時間がたくさんある。こんな製品あってもおかし
くないのだ。

曲は、音楽という定義が作られた時代から今にかけてのすべての曲

が入っていた。これ人生全部で聞いたとしても、おわらねえな。

「何、聞く？」と溝口が聞いてくる。何聴こうか？

「じゃあ、The ffspring of All Wan
tで。」

「了解」溝口がボタンを押し再生する。

(yah yah yah yah yah yah!)

と大音量

(You gotta speak up and yell
out your piece)

(Cause I'm sick of not living
to stay alive)

(That's all I want!!!)

「どーらえもん!!!どーらえもん!!!」と言田が歌う。

「違う。 all I wantだ」と言い始める。まあ、ネットで
そんな動画あつたっけ。

異世界ドライブの始まりだ!

「第6話 集合」(後書き)

誤字脱字等よろしくお願いします。

次から戦闘シーンです。

「第7話 狙撃」(前書き)

やっぱり最近題名があっていないかと思ってしまいました。

「第7話 狙撃」

かつてこの村は、虐げられた人々の集まりだった。ある人は、新天地を目指し、ここまで来て立ち往生して住み着いた者。

ある者は、種族の違いから差別され逃げてきたもの。

ある者は、貧困の果てにたどり着いたこの土地で生きながらえるもの。

様々な理由をもった村で、農作物もあまりとれず、古代遺跡の機械で栽培しなんとか食いつないでいくことができたのだ。

「この地下には古代都市があつて雪に埋もれてしまっている。「オクジョウノウエン」といったか？」

比較的平和だった。奴らが来るまでは。

「お願いこの子を殺さないで！」。一人の女性が子供を抱きながら叫んだ。彼女は、村の大工の獣人と結婚した人間の女性でこの村では珍しくもない。生活環境をともししていれば、種族を超えて結ばれることもあるだろう。

彼女の子供はハーフであり、父親が虎人であったからか、既に毛並みが整っていた。しかし、父親は彼のそばで刺し殺されていた。

彼女が目の前にしているのは、ガリビィア帝国軍の騎士であった。

ガリビィア帝国は、1000年前に建国された国家で総人口300万人、軍備は世界ランクで3位だが、それなりの力を持っている。この世界には、アルダスターという大魔導師が実験により転移門を完成させ、世界各地に作ってここに渡ってきたのである。

ガリビィア帝国は服従ない土地は、植民地にし、奴隷にして略奪する。また、ガリビィア帝国は、ある宗教を信仰している。それは、多種族を絶滅に追いやり世界の頂点を人間が握ると言うような宗教だ。

つまりはエルフやドワーフ、ホビット、獣人を絶滅に追いやるいわゆるホロコーストである。

村は焼かれ、大半は逃げるか殺されていた。

「姫、速く逃げましょう！裏口から急いでください」。

そう叫んでいるのは護衛のジェイコフだ。この村にきている騎士の数は約50。この村にある家の数は約30。すぐこちらにもくるだろう。

「ここを開ける！ガリビニア軍だ！」裏口と表からもガリビニアの騎士が迫っている。

表と裏のドアを蹴破られ、なだれ込んできた6人ほどの騎士。

「この2人を拘束しろ！」。隊長らしき騎士が命令した。このまま捕まれば祖国は滅亡するだろう。ガリビニア帝国の手によって。

「ウオオオ！」とジェイコフが叫び剣で騎士に斬りかかった。彼は騎士団から選抜されてきた騎士だ。

しかし、彼にも限界がある。ガリビニア帝国の精鋭、ビルコラク騎士団にかなわなかった。

剣を握り、近くにいる騎士に斬りかかろうとしたが、頭に激痛が走る。

剣の柄で殴られたのだろう。血が流れ、視界が赤く染まる。

ジェイコフは斧で頭を割られ、死んだ。

「ジェイコフ！」

「何をしているんだ！2人を拘束しろと言っただろう！」男の怒鳴り声が頭に響く。

「無理ですよそんなこと」。と大柄の騎士が似合わない台詞を言った。

「ライアン！隊長のところへ行って報告して来い。そっちに連れて行くと。」

どうやら、この男は隊長ではないらしい。ライアンと呼ばれた男は、親子を殺そうとしている騎士のところへ走っていった。

「貴様！、獣人の子を産んだな！穢れた女め！！」と言って剣を振り上げ彼女を切り殺した。

「お前も穢れている！！」と言って剣を振り上げ切り殺そうとした。

「隊長！発見しました！」

「奴をみつけたか？」獣人の子供を斬りかかるのをやめ、報告を聞きに入った。

「はい、目標を確保しました。護衛と戦闘になりましたが殺しまし

た。つれて来ますか？」

「つれて来い。この場で殺す」。騎士隊長はニヤケテ言った。

隊長は周りを見たが、獣人の子供はいなかった。逃げたのだろう。逃げてほっとしてしまった。

「隊長、連れてきました」。そこには、鎧には返り血が付きにやけている騎士がいた。

さつき隊長だと思って勘違いしてしまった騎士がさつき殺された夫婦をみて叫んだ。

「隊長！我々の任務はコイツの確保です。ここは多民族制圧地域になっけていません！」

あまりの惨状に我慢できなかつたのであろう。上官とはいえ。

「うるさい！副隊長！神のご意思であるぞ。逆らうのか！？」神はこんなことするなんて思えない。するのは人間だけ。

「このエルフを殺すのですか。」副隊長と呼ばれた男は恐る恐る聞いている。

「ああ、殺すさ……」隊長は不気味な声で答えた。

「任務は、このエルフを無傷で城に連れ帰ることですよ。隊長」。任務は私を抹殺することではなかったのか。

「あとで、戦闘に巻き込まれ死んだと言えはいい」。この言葉を聞いて唾然としてしまった。こんな指揮官がいるとは思わなかった。

そうい言って剣を振り上げた。目は、狂気に満ちていた。

もうダメ…….と思ったがありえないことがおきた。

何か鋭いものが、この隊長の兜を貫通して隊長が崩れ落ちたからだ。

「撃て！」

レミントンM700狙撃ライフルはエルフを斬りかかろうとした騎士に神の鉄槌を下した。いや、神の代理人の鉄槌か？

この狙撃銃は軍や警察が使用するボルトアクションライフルで高性能を誇り、溝口が観測手をして、富田が狙撃手を担当した。

そして、俺は、ショットガンを肩に掛けて、サブマシンガンのP90を持ち、敵の側面に身を隠していた。

敵は、一瞬、隊長が倒れて何があったのかわからないようだった。

「敵襲だ！物陰に隠れる！」副隊長のような奴が周りに声を掛け、物陰に隠れた。

だがこの指揮官、妙に戦闘慣れしている。

一度や二度、こんな襲撃やられたことあるのか？

念のため、溝口にc a r r i eする。

(こちらE a g l e L e a d e r。E a g l e 2 応答せよ)

(こちらE a g l e 2。了解。あ、副隊長みたいなのを生かしておけばいいだな?)

(なんでわかった?)

(長い付き合いだ。さっさとやっつけてしまおう)と溝口はいつものように陽気な声で言ってくれた。

しかし、問題は、結構山積みだ。

目標

- ・ 敵部隊の完全制圧。副隊長の確保。
- ・ 要望救助者(銀髪長髪エルフ)の救出。
- ・ 村の確保。

で、一番問題なのがエルフだ。彼女(彼?)は、さっきまで殺されたかけたところで横たわっている。もしも、命にかかわる傷をおっていたら危険だった。

(溝口。いまずぐ富田に副隊長を負傷させる。エルフを救出するか
ら援護頼む。)

(了解。無茶するな)

富田は狙撃ライフルのスコープの十字をすねに合わせ引き金をひいた。

パン!

「クソ!すねをやられた!衛生兵!」

おいおい。いるのか衛生兵が。

見てみると黒いローブを被った杖を持った奴が向こうの建物から猛スピードで走っていた。

この世界では治癒魔法を専門とした魔法使いを衛生兵と呼ぶのだろうか。手から光のようなものを出していた。

流石に富田の奴は衛生兵を撃たないだろう。

では、俺の番。

P90のコッキングレバーを引き、初弾を装填する。

敵は飛び道具は持っていないようであるが、油断は禁物だ。

物陰から飛び出し、中腰の体制で3発ずつ発射する。

5.7mm弾と言う防弾チョッキをも貫通する弾は建物の影に隠れていた騎士の胴体と頭に当たる。

パパパン！

パパパン！

「奴に切りかけれ！」と大柄の騎士が叫ぶ。

「やめろ！」と副隊長が叫んでも、部下の無謀な賭けを止めたかった。しかし、負傷した副隊長は無理だと判断して部下は独断専行に走ったのだ。これは、自らの命を縮める事となった。

俺は、P90を地面に置き、肩に掛けていたショットガンのベネリM4を取り出す。このショットガンはフルオートで発射することが可能で米軍でも正式採用されている。

残り5m。敵は5人。まずは槍を持っている奴を。

槍を持っている奴の頭をサイトにとらえて引き金を引く。槍を持った騎士の顔は、なくなり骨らしいものが見えた。そして3連射して一気に4人倒す。

最後の一人は、剣ではなく、ナイフを持っていた。楽勝だ。ショットガンを構え、サイトに捕らえ引き金を引いた。

弾は発射しない。さつき敵を撃った時、鎧の破片が廃薬莖口に入っただろう。発射不良になってしまったんだ！

騎士は一瞬死を覚悟したが俺が動作不良を起こしたので隙を見て攻勢に出た。

「死ね！」と叫びながら突っ込んできた。ホルスターからM9を取り出したが間に合わない。

パン！ 一発の銃弾が一瞬見えた。

その銃弾は、兵士の頭に入って飛んでいった。血が飛び散り、顔に生暖かいものがかかる。

その血、死体を見ると唾然としてしまった。

人を殺してしまった。道に転がる死体、生前どんな顔だったかわからなくなった騎士。頭を撃ち抜かれた騎士はいい方だ。殺してしま

った騎士の中には内蔵をやられ、苦しみながら死んでいった者もいた。

自分が今日殺めてしまった人は7人。

神は悪人などは、転生などせず魂を消してしまうらしい。神の代理人だから悪人は神の元に送ったほうがいいらしい。

だがこれでいいのだろうか？

(疾風、早くエルフの美女を……)

この無線で我に返る。

ヤベー、忘れてた。でもエルフだが女とは限らない。

ロードオブザリングの弓使いの男でないことを祈る。

ふと副隊長がいなかった。しかも黒いフードを被った衛生兵もいな

かった。でもエルフがぶじならそれでいいか。

あの指揮官は頭良さそうだし。 エルフに近づき声をかけた。

「大丈夫ですか！しっかりしてください！」

神様ありがとう!!!

助けたエルフが女性でしかも美女！見た目は15・16歳ぐらい？

でも・20代ぐらいかと思ったエルフが160歳でしたなんてこともありうる。

比較的健康状態を保っていた。

神様ありがとう!!

でもあの課長の神様にはありがとうとはいいたくないな。

(こちらEagle Leader。要救助者を救助。容態は安定している。ハンヴィーに乗って来てくれ)

(了解！エルフは大丈夫なんだな。美人か？)

(ああ)

(ヒヤッホイ！) これまでに聞いたことのない声が聞こえた。余程うれしかったのだろう。通信は途中で切れてしまった。

さてと、エルフの子には、近くの建物(村の診療所もどき)につれていった。

ここの村は古い木材を材料にして家を作って生活している。しかもここ周辺には木が生えていない。コンクリート製の家やトタン屋根がある家などまばらで、診療所は、100%コンクリートだ。

この世界は、剣や魔法などのファンタジーの世界だと思ったが、生前の世界であったビルのコンクリートみたいだ。

診療所は、ビルの跡地を利用したようだ。

「急患です！先生いらっしやいませんか？」

診療所は、生前家の近くにある診療所跡に凄く似ている。もしかして、古代遺跡ってまさか・・・

何かがおかしかった。

似ている事はともかく、壁には、血の手が壁に着いていてバイオハザードの病院のようだ。

エルフの彼女を待合室に寝かせて、M9を構える。

20mmレイルが着いているのでライトを装着して光源を確保した。

足音を起てずドアから光が漏れている。

鍵穴から覗くと白衣の医者が手から光を出していた。あれが治癒魔法か？

しかし、重要なのは治癒してもらっているのは、

敵の副隊長であった。

「第7話 狙撃」(後書き)

誤字脱字とつゝ、よろしくお願いします。

「第8話 治療費7万5千円(仮)」(前書き)

格闘戦というのはどうかいて言いか良くわかりません。一応書いたものの、アドバイスもらえたら幸いです。

「第8話 治療費7万5千円(仮)」

あの医者は敵の副隊長を治癒しているようだった。だがあの黒いフードはどこ行った？

まあいい。

鍵は何かあると思いい閉めたらしい。

突入していくには色々あり、爆薬でドアを吹き飛ばしたり、ショットガンでドアの端を破壊したりする。

今回は後者をやってみることにする。

弾を抜いてスラッグ弾を2発装填した。

サイトを鍵に合わせ引き金を引く。

見事にドアノブまで吹き飛び、そのまま内部に入って制圧する。

「動くな！」ショットガンを医者と副隊長に向ける。当然撃つ気はない。

「ひいひい！！！！」「とつめき声上げてその場でうずくまった。

副隊長を見てみると顔に血の気は失せ、すねは大きな穴が出来ていた。

若干は直った跡があるが、対物狙撃ライフルを使っていたら足はスプラッターホラーの紛い物のようになっただろう。

しかし、このままだと出血多量で死ぬ可能性が出て来る。

「やばいな……あの先生？」

「はい！……！」小学1年生にのような声を上げる。入学式を思い出すなあ。

「このままだとこの人死んでしまうので、自分が引き継いでもいいですか？」

「えっ………わかった」渋々了承してくれた。

「待合室にいるエルフの子も助けてもらいたいんだが？」

「なんじゃと!？」と血相変えて部屋を見にいった。あの医者の子か？

いやあの医者はエルフではなく人間であった。エルフの特徴の長い耳はなかった。じゃあなぜあんなに慌てた。

まあいいや

さてやるか。

生前やっていたゲームの能力を引き継いでいたので、ゲームでスキルアップしたり特殊技能を得た物がそのままになっているのだ。

俺の特殊技能は衛生兵。

本来は味方の兵士の治療に従事するがこのさいしかたがない。

救急パックから輸血パックを取り出し、副隊長の輸血をする。

なんで血液型確認しないかって？

全血液型に適合する合成輸血パックなのだ。ついでにこれは、神様製だ。

最後に傷口の近くに注射する。

この注射は治療用のナノマシンで傷口を修復する優れ物だった。

逃げるのを防ぐため、強化プラスチックの手錠をはめて逃亡しないようにする。

処置を施して状態は安定している。

衛生兵のスキルは、最大（つまり0Lvから100）にあげたのだ。他にも能力があるが説明は今度にしよう。

「う、ここは・・・」気づいたらしい。声を掛けてみるか。

「診療所だ。」そう言って、輸血しているチューブにてを伸ばす。

「お前は！！！」大きな声ではあるものの、それなりの迫力がある。自分の腕に刺さっているチューブを見ている。何故抜こうとしない？

147

「この医者では埒があかないから俺がやった。単刀直入に言うがこれに見覚えがあるようだな？」

「・・・・・・・・」

だまってしまい沈黙が流れた。

しかし、この沈黙をとある乱入者によって打ち砕かれた。

ドアが突然開き、黒いフードを被ったやつがナイフで刺そうとしたのだ。

フードの中身は見えだが、フェイスマスクを付けていた。この室内では援護射撃は出来ない。

溝口であるうと無理だ

ホルスターからM9を取り出し、数発撃つ。

だが、全弾避けられ、間合いは縮まってしまった。

ナイフを取り出し構える。

向こうの武器はナイフではなくクナイで逆手で構えている。こちら
は、両刃のナイフで某蛇のゲームのナイフにそっくりだ。

敵は、そのままクナイで切り掛かる。手捌きはかなり鍛練を詰んだ

なのである。楽しんで手に入れた俺は謝りたくなかった。

だがレベルを最大にしてCQCを最大まで極めた俺の敵ではない。

切り掛かるのをやめ、回し蹴りが飛ぶ。

また切り掛かってくる。次は、勢いをつけてきた。だが、今の見切った。

奴は、前を見すぎていて腹のガードが弱いのだ。

左腕を右に流した瞬間だった。

一気に飛びだし、左腕を抑える、敵は、瞬時に下がるが頭を突き出し、敵と目を合わせた。

澄んだ青い目をしていた。なんでこんなところにいるんだ？お前の活躍するところをもっと別の所にあるはずだ、と直感で感じてしまった。

大抵の人間は至近距離で（人と人の唇が触れる位）相手の目を見てしまうと、やはり動けなくなってしまう。

そのすきに溝にパンチを食らわせた。

不意を喰らった敵はそのまま崩れるように倒れた。

落ちてあつた愛銃を拾い、敵に向ける。

「う〜〜〜・・・!!!」

と呻いていたが気にしない。殺されそうになったのだ。このくらいはな。

しかも、この世界の魔法について知りたいからだ。この格闘魔導師にきけば何かわかるのかもしれない。

すぐ手錠を掛けて柱につける。

「リザ！」副隊長が叫ぶ。

やっぱりな。そうきたよ。やっぱりこのリア充クロスか？

「恋人か？」殺意のこもった声で聴いてみた。

「いや、私の妹だ。」前言撤回殺さないでおう

それで説明がいった。普通ならあの鉄火場に近づかない。普通なら脇でまつか逃げるかどちらかだろう。

しかも診療所まで肩を借りてここまできて、兄を守るために俺に接近戦に望むとは。

フードを外し、マスクを取る。

そこには、金色の長髪、目は青。めちゃくちや美人でした。

なぜか、こちらを見ずそっぽを向いている。

と突然ドアが開く。

「疾風！！大丈夫か！」

と溝口は6連装グレネードランチャーをもち、
富田は軽機関銃を
持っていた。

ここを燃やす気か？

「第8話 治療費7万5千円(仮)」「(後書き)

誤字脱字よろしくお願ひします。

感想のほづも・・・

「第9話 和解?」 (前書き)

サブタイがまたこんなものになってしまった・・・

サブタイいいのが思いつきません・・・

努力はしてきるんですが・・・

「第9話 和解??」

あいつらは、無線を聞いた後、急いで撤収し、敵の残党をミニガンで蹴散らしながら、副隊長の血の跡を追い、ここまで来たらしい。

診療所に入ると医者がつづくまっついていて、話を聞きドアをあけて友人を助けようとした。どうみても俺を誤射してしまいそうなのはなぜなのか。

「容体は安定しておる。安静しておれば大丈夫じゃろ」

ここは病室。診療所には、3つの病室があつて、副隊長と魔導士は1号室。エルフは2号室。3号室は空いていた。

エルフは、頭に包帯を巻いている。普通なら治癒魔法を使うが、医者には力尽きてしまったようである。

処置が終わり、診療所をでる。目の前にはハンヴィーがとめている。

「村を探したが、敵の騎士や村の人間は逃げたようだ。明日あたり

に逃げないとまずいぞ」。敵の鎧は豪華で予想によると、多分貴族の私兵部隊か精鋭騎士団だろう。

逃げるには、足が必要だ。今所持しているハンヴィーは、荷物を積んでいるので4人しか乗れない。

連れて行きたいのは、エルフの女の子と治癒魔法ができる先生、途中で溝口達が保護した獣人の子供、拘束した騎士団の副隊長と衛生兵の魔導士。俺達も含めると8人で乗ることはできない。

仕方なく、村の馬を探しても、逃げた村人が持ち去ったり死んでいて見つからなかった。

「ここは、あの神様に助けをもとめるか？」と溝口が聞いてきた。

「ここは、隊長の判断だね。疾風に委ねるよ」。

隊長とは、部下を指揮して任務を成功させる中間管理職であり、部下の命を預かっている。一歩間違えれば、部下の命を危険に晒すことになる。

ここは、慎重に判断しなければならない。まあ、わかりきっていることだが……。

「よし、神に頼むか」。

ハンヴィーの後部ハッチからノートパソコンを取り出す。このパソコンは神様製で生前の世界と繋がっている。神様との通信も可能なのだ。

電源をいれて、Skypeを出して「神様」に発信する。

「よう。3人とも！久しぶりだな。どうしたんだ？」ちょっとまだ派遣されてから1日も経っていないぞ。

「課長。足りない……」。この仕事をする際、この神様は「課長」と呼ぶことにした。いろいろ混乱するからだ。

「状況はわかった。君達でその敵をやっつける事できないか？」

「俺達があと10人いればできるかもしれないけど、無理です。」
「そう言うと課長は念力を送るようになり声を上げた。」

「うーん……よし。そのパソコンのデスクトップをしてみる」
と課長は言った。

Sk peを最小化してみると、鏡の中から戦車が出てくる図が出てきて「兵器転送」と書かれている。

「そこには君達がゲームで集めた全ての兵器が入っている」。

「なんだって!!」そう言ったのは以前、兵器の在庫主任担当の溝口が声を上げた。

ゲームでは鹵獲したり、任務に成功した報酬などで兵器、武器弾薬を購入して、かなり貯めていた。多分その中の兵器を使っているのだろう。

「全部神製にしておいたからね。さらばじゃ我が息子達よ」。息子達！？」

反論しようと思ったが、訳のわからない迷言を残し通信を切ってしまった。

じゃあ出してみるか。

倉庫のファイルから、ストライカー装甲車を出し、転送を選び、すぐそばと出す。

すると、上からパラシュート降下で調度、すぐそばにストライカーが落ちてきた。

「おー……。」

ストライカー装甲車は、神仕様になっているが、外見はゲームとまったく同じで冬季迷彩が施されている。

最初は、攻撃ヘリを持ち出して、追っ手を壊滅させてやろうかと考えたが民間人がいる中で、戦闘をしたくなかった。

「これで、問題解決だな。」と溝口がいった。足の問題は解決したがまだするべきことが残っている。

「では、富田は、これらの車両をそこに隠しておいて」。と指差した。そこには半壊した大きな小屋があり、ストライカーとハンビィーをしまえそうだった。

「カモフラージュできたらこちらに合流してくれ。俺と溝口はあの二人を尋問するよ」。と言い、シャープペンシルと消しゴム、ノートとノートパソコンを用意した。

「さて溝口、驚くなよ」と言い、溝口は頭上にハテナマークが出るような顔をした。

診療所のドアを開け、中に入る。受け付けを通り過ぎ、1号室を指す。

さっきショットガンで壊したドアを開けると敵のテリトリーの中にいるのに寝てしまっている副隊長がいた。まあ、溝口が、すねを撃ち抜き、俺が治療していたんじゃ疲れるよなあ……。

「なあ疾風。どういうことだ？」

と指差していた。

そこには、無謀にも関わらず俺に接近戦を仕掛けた副隊長の妹がいた。

実際のところ、我々三人衆は、「妹」と言う単語に嫌悪感を抱く。

なぜなら、ここにいる原因が「妹」だからである。

「さて」

ナイフを出し、プラスチック製の手錠を斬り、柱から移動させた。

移動させた先は、ここの診療所にある空の病室。

そこでもう一度手錠をはめ、椅子に座らせた。

この病室は、ベッドがひとつと、椅子が3つ、机がひとつありそこを取調室兼拘置室として使わせてもらった。

「さてと、名前と所属。は？」
「と聞いてみた。」

「……………」
「やっぱり沈黙が続く。」

「なあ、疾風。マスクとヘルメットとってみたら。？」
「あゝ忘れてた。」

これじゃあ、教えてくれないか。

ヘルメットとフェイスマスクを脱ぐ。

こちらをチラッと見たがあんまり教えてくれない。

「顔を隠して見えなかっただろうが、俺、君に刺されそうになったんだけどね。」

身体が震えているが、喋ってくれない。

しょうがない。

一回、この部屋から出て外においてあった包みを持ってきて、彼女の前に置く。

包みを開けると、おにぎりが三つ程、入っていた。これも神様の選別である。

多分、米を食べる食文化はないのだろうか。不思議そうにこっちを見ている。

「祖国では、これをパンの代わりとして食べているんだ。なに、毒なんて入っていないよ。お米を握って三角形の形にするんだ。あっさり塩味だ。」

彼女は、恐る恐るおにぎりを手にする。そして、口に入れた。

ほんの30秒足らずだ。30秒足らずでおにぎり3個食べてしまった。のどに詰まるかもしれないのでコップに水を入れて差し出す。

彼女は一気に飲み干してしまう。すごい食欲だ。もしかしたら逃亡

のために、体力を蓄えているのか？

彼女の目を見ているといつの間にか大粒の水が……………

「……………」と声まで……………

いつもなら「なに疾風泣かしているんだよ……………」

「おれじゃないよ……………」と締りの悪いことをして
いるはずだった。

だが、今回は違っていた。

「……………時は思いっきり泣けばいい……………」。

「わあああああああああああああ……」

あとから本人から聞いた話だが今のうちに言っておいたほうがいいだろう。彼女は、あの副隊長の实の妹ではなかった。

あの副隊長は35歳で初陣に赴き他民族制圧作戦に参加した。つまり、虐殺の任務に赴いた。

その時に誤って、人間である夫婦を切り殺してしまったらしい。その夫婦と一緒にいたのが彼女。布にくるまれて、母親はわが身を犠牲にして彼女を守ったのだと言う。その時の騎士団の隊長は、反乱分子として、処刑したと報告した。

その時副隊長は、彼女を秘密裏に闇に葬り去る、つまり殺さなければならなかった。しかし、殺さず、隠れて、妹として育てたのだ。それは、罪滅ぼしだったのだろうか。

彼女が15歳の頃、ガリビニア帝国軍衛生兵として入隊した。入隊した理由は、兄、つまり副隊長と一緒にいたかったのだ。

その後、騎士団に入って副隊長と一緒にになった。

このときの騎士団は、普通の任務内容だった。敵軍と戦闘になり、そこに騎士団を投入し勝利を収める。簡単なことだった。

しかし、2ヶ月前騎士団の3隊、つまり、彼らのいる部隊の隊長が戦死した。後ろから槍で刺され出血多量で戦死した。このときまではこの隊を誇りに思っていた。どの隊よりも強く、どの隊よりも戦果を上げていた。

だが、そこに貴族が目をつけた。隊長が戦死してしまったため、副隊長である兄が隊長になるのが普通だった。騎士団の団長もそう考えていた。

その貴族には軍部のコネがあり、息子に戦果を上げさせたくて仕方がなかった。息子のためではなく家のためだろう。無理やり、その息子を騎士団の隊長にした。異例の人事だった。

この息子と言うのがあの隊長だった。獣人であった夫婦を殺し、この村を崩壊させた張本人である。

この隊長のおかげで部隊が悪くなったと言ってもいい。この隊長が赴任してきてからは他民族制圧作戦しかしていない。これまでに、30もの村を崩壊させていたのだ。

部隊は、次第にこの作戦を楽しむようになり、部隊全体が腐っていた。

「もう平気？」と言ってポケットからハンカチを取り出す。高校の制服に入れていたものでこの迷彩服にも入っていた。

何分、いや何時間経ったのだろうか。机には、大粒の涙のおかげで湖になっている。

彼女は、ハンカチを受け取りもをぬぐった。

「私の名前は、リザ・アンデション。ガリビニア帝国軍ビルコラ
ク騎士団3隊衛生魔導士」

調書に書きながら、

「では、リザって呼んでもいいかい？」

「ええ、いいわよ」とOKしてもらえた。

「じゃあ、リザ。今回どんな任務でここに来たんだけ？」

「私達は、クシヤナ王国の使者がオーストラリアに行くのを阻止し
たかったんです。」

「オーストラリア？」

生前の世界でのオーストラリアは、確か連邦立憲君主制国家で、世
界で6番目に面積が大きい。同じ名前の国か？

「ええ、確かガリビニア帝国や他の国々が転移する前からあったら
しいですよ。」

「転移？」

「ええ。．．．あなた方はオーストラリア軍ではないんですか？」
彼女は恐ろしそうな顔をしてこちらを見る。

「ああ、そうだ。オーストラリア軍じゃない」。そういうと顔色が悪くなった。もしかすると、オーストラリア軍の捕虜の扱いは優しいが、それ以外は、捕虜の扱いは悪いかもしれない。もしかしたら奴隷とか？

「なあ、疾風。あのこと話さないか？」あのことは、俺達が神の使い、つまり天使というわけだ。
それを話すのか。

「それしかない。課長がくれた名義で話すか」と言い、彼女に向き直る。顔は．．．ちよつと怖い。これから死に行きますって顔してるよ。

「正直に話そう」

「はい．．．」力が抜けたような声だ。

「俺達は、神軍第6特殊部隊の人間だ」。この名称は、とってもいい加減なものだ。あの課長が付けたのだ。俺達3人は生前、公立高校2年6組にいて、その6組は、第6に由来する。しかも、その隊員と言うのが俺達なので「特殊」なのだ。

雇われ天使。それが俺達だ。

「神軍………。神の軍隊？」不思議そうに聞いてくる。

「ああ、そうだ。いまは雇われ天使だが一応人間だ。」一応、人間をベースにゲームの戦闘能力を流し込んでいるだけだと思っので、多分人間と変わらない。羽も生えてこないし。

「天使？」

「まあ、天から使わされし者という意味だったら俺達だとおもうんだ。この意味はこの世界で通用するか。」

「じゃあ、なんで・・・」

声色が変わる。

「帝国の横暴を止めないんですか!？」

帝国は、人間以外の存在を認めていない。それゆえに帝国は多民族を抹殺しようとしていた。

だが、それを神が止めることは出来ない。

第一にこの世界に干渉できないから俺達を派遣している。

もし干渉出来たとしても、ただみているだけだ。

「帝国は、ドアーフやエルフ、獣人を滅亡させようとしているんですよ。」

神はなぜ止めないの?! 私は帝国で布教している宗教を崇めています

せん。私は無神論者でした。ですが、神がいることは確実です。あなたたちがいるから。

でもなぜ、ここに要るんですか。私達を助けてはくれないのですか！？」

何も言えなかった。俺達が来た目的は、神がこの世界に干渉させるためだ。彼等を助けるためではないのだ。

「第9話 和解?」(後書き)

誤字脱字等ございましたらご指摘お願いいたします。

このサブタイの話は一番考えたところなんですよね……。
変なところありましたら、何でもいいので指摘してください！

「第10話 和解?」 (前書き)

誤字脱字等ございましたらご指摘ください。

どこがおかしいのか書いてくれると助かります。

次から回想シーンです。

「第10話 和解?？」

「俺達が来た目的は、神がこの世界に干渉できなくなっているから、その原因を取り除くこと。つまり、今、帝国が悪魔と手を組んで世界を滅ぼそうとしても神に止めることは出来ない」

この静まり返った病室に響いた。これは、偽りのない事実であった。

「でっ……でも……」

と目から涙がこぼれでる。

「だけど、そのため任務達成には、いかなる邪魔物も排除しなければならぬ。それがたとえ国家だろうとね」

天使というのは、非現実的である。肩甲骨辺りに羽が生えて、頭に

輪浮いていたら変態だろう。

だが、天使を分解すると、天の使い。つまり神のつかいだ。

助けを求めている人に対して神が助けない訳がない。これは一般的な解釈だろう。

しかも、現時点では天使のようなものだろう。

「日の出前には、出発するから今のうち準備しておいて、」

と言って部屋を離れた。

待合室のテーブルには、富田がノートパソコンを見てにらんでいる。しかもその隣には富田達が助けた獣人の子供がいた。その子は子供の虎のようで、背からしてみると6、7歳ぐらいかな？

「富田、どうしたんだ？」富田の顔の前にあるパソコンを見た。

そこには、ゲームで集めた武器、兵器、弾薬、食料、医療機器がリスト化されている。しかも今見ているのは食料倉庫のところ。

そこには、戦闘糧食や野菜類、肉類、魚類、清涼飲料など……。

すると、そのリストからコ・コーラを選びすぐそばに転送する。すると、テーブルの上に真っ赤なアルミの缶が出てきた。

パシユッ！

フルタブをあけ、ゴクゴクと飲んでいる。

「おい！（怒）」奪い取りいつ気にも飲む。

「俺の大事な栄養補給を！」と怒鳴る。

「うるせえ、水でも飲んでろ」5分ほどの取っ組み合いが始まった。もちろん、喧嘩ではない。いつものことである。こんな風にじゃれあっているんだ。ふざけていれば、不安を忘れさせてくれる。

「はははははは、変なの……ははは！」と獣人の男の子が笑い出す。これが狙いだっただ。

二人の話だと、彼を見つけたとき震えていたらしく泣いていて口を開いてくれなかった。多分家族は殺されたか、逃げたのであろう。そのため、口が開けなくなるになるのではないだろうかとおもったのだ。

俺は、医者ではない。だが、こういったものも必要だと感じた。

「名前は何て言うんだい？」富田は小さな子供が好きだった。

「僕は、ダン・シューター。友達からは、ダンって呼ばれてる。」

「バスケの選手みたいだな。」

「ばすけ？」

「いいやなんでもない！」

ダンにクを付けたらバスケットのような感じだ。

「俺は富田 亘……いやここでは亘 富田っていうんだっけ。亘
って呼んで。」

「俺は、疾風 武藤。疾風って呼んでくれ」。

と自己紹介を済ませたあとだった。

いきなり、富田と俺の間に頭がねじこまれた。

「俺は、明夫 溝口。スネークと呼んでくれ」。彼のコードネーム
はスネーク。前から決まっている。

明夫はスネークだからだ。

「MGSネタか！いい加減にしろ！」富田はパンチを繰り出し溝に
入る。

「グホ！貴様！！まだ終わってない！」液体の蛇のせりふを吐き、
溝に入った痛みをかみ締めながら、股間を掴む。

プルプル……携帯のマナーモードだ。着信で「神様、最強!!」と出ている。名前を変更した記憶は無いんだが。

ダンに見られると困るので待合室から外へ移動する。

「神様何の用？しかも名前が変わっているんだが……」

「ああそれか。俺が変えました。これの方がカッコいいだろ。まあ、酔っ払いながらやったんだけどね」
神は酒を飲むのか……。しかも酔っ払ってか……。

どっかの王様が星を壊してしまい、王子が塊を転がしながら星空を直しに行くゲームがあったが、俺達がその王子役になりそうだ。

「えつとね、この世界の情勢わかったかな。2年6組 武藤疾風君
?」お前は学校の社会科教師か!? (作者談)

「わかりません。クシャナ王国とかガリビィア帝国は出てきたけど・
・・・オーストラリアとか出てきたけど同じ名前?」

「なあ疾風。フォールアウトって言うゲームやったことあるか?」

「もちろん」フォールアウトは、1950年代の文化がそのまま2
077年までできてしかも、アメリカと中国が冷戦。2077年に世
界中が核ミサイルによって世界が崩壊してしまう。主人公はボルト
と呼ばれる核シエルトから出てきて、荒廃した世界を目の辺りに
する。そこからゲームが始まるが・・・まさかそんな世界なのか。

「では、ローランド・エメリツヒ監督作、デイ・アフター・トゥモ
ローっていう映画知ってるか?」

「その映画は知ってるよ」。

その映画は、地球温暖化により南極大陸の氷が解け始め、現代に氷河期が訪れる話。この雪は、氷河期だからか？でもここはあんまり寒くない。

「この世界は、君達が生活してきた世界とまるっきり同じだ。、40年前までは。」
急に声が真面目になった。

「40年前、つまり西暦2020年だったかな。確か、ロシアのサンクトペテルブルグだった」。

「第11話 サンクトペテルブルグ（前書き）」

やっと回想シーンです。はあー

更新遅くなりますが、よろしく願います。

「第11話 サンクトペテルブルグ

さ、寒い……。速くアメリカに帰りたい。

ここブルコヴォ空港は、21カ国の国から飛行機が飛んでいる。この中にはアメリカはなく、CIAの支部があるロンドンからジェット機に乗ったが待ち合わせ時間がぎりぎりだ。

ジェット機のタラップを降り、グレーのジャケットの袖の中に手を入れる。日系人であったために局の平均身長より少し低い。夜であるため昼間より気温が低かった。

「タカサカ・ヒデキさんですか？」髪が金髪で目が青い女性、ロシア人のアーグニヤ・アブリコソフだったか、あまりうまくない英語で尋ねてきた。高坂 英樹という名前は偽名だ。

「ええ、そうです。あなたは、アーグニヤさんでよろしいですか？こちらもうまくない英語を使う。うまくない英語はフェイクだ。今は日本人と言うことにしてある。」

「ええ、改めて自己紹介を、ロシア連邦警護庁アーグニヤ・アブリコソフです」。

「日本警視庁組織犯罪対策部 高坂 英樹警部補です。よろしくお願ひします」。と言って握手した。

俺の身長は175cm。彼女は180cmとデカイ……。

俺のこの名義は偽ではあるが一応、高坂 英樹は存在していて、今はロンドンのホテルで局員と一緒に過ごしていることだろう。

では、向こうにある車に乗ってください」。と彼女が指刺した先には、真っ黒いBMWがそこにはあった。

車に乗ると隣にアーグニヤ、前の運転席にスーツ姿の男が一人いた。

「まず、状況説明を」。と言い、地図を広げる。と言っても、携帯端末の立体地図を利用したものだ。

高坂 英樹の任務は、東京で暴れているロシアンマフィアの首領、ニコライ・トフマノフの居所がここ、サンクトペテルブルグにいるとのことで派遣されたのだ。

だがなぜロシア連邦警護庁がかかわるのかと疑問に思った。ニコライ・トフマフノフはロシア連邦警護庁大統領連隊連隊長だったからである。つまり、上司だ。

「ニコライは明日ここ、国立ロシア美術館に下見と言う名の名画鑑賞しに来ます。そこを抑えます。あなたは、ヤロスラフ少佐とともに逮捕してください。後ろではロシア連邦保安庁の」
「
がバックアップに加わります。それと、あなたは、一緒にいるだけです。政治で同行を許可しただけですが、あなたがこの国では何もできません。ここはロシアなので我々のやり方でやります。いいです
ね警部補？」

彼女は美人だと思ったが中身はあまりよくないようだ。ハイスクール時代の彼女とそっくりだよ。

「ヤロスラフ少佐とは？」邪魔だと思つので聞いてみた。

「あなたの前にいますよ」

目の前には運転をしている男がバックミラーでこちらを見る。

「

（よろしく 警部

補）」とロシア語で挨拶してくれた。

「こちらこそ 少佐」。

普通はこういった階級の人間は運転はしない。ありえないとおもった。アメリカでは、無いぞそんなこと。普通なら一等兵ぐらいがやるもんだ。

「武器の携帯は？ニコライは護衛を連れているんだろ。撃ち合いにはならないよな？」

あまり考えたくないがこういうこと聞かなきゃならないだろう。

「いったでしょう警部補。あなたは、ただ見ているだけです。武器は携帯しないで下さい。国立美術館ですので撃ち合いはないですよ。」と言って嘲笑った。

こういったタイプは嫌いだ。海兵隊時代の古傷が痛み出した。

そう思っているうちに今日とまるホテルに着いた。

「では、0700時にここに集合します。はやく起きてくださいね。警部補。」と笑いながらチェックインしてエレベーターに乗って上上がった。男であったなら殴りたい。

「まあ、怒りなさんな。警護庁の中でも嫌われ者だ。あんま気にすんなよ」。

そう言ってきたのは運転していたヤロスラフ少佐だ。身長190cmで、資料によると第7親衛空挺師団で経験を積み、警護庁に転職してきたらしい。ロシア人はあんまり好きじゃないが、少佐なら好きになれそうだ。

「じゃ無茶すんなよ。サムライさん」笑いながら去っていった。

いつものことながら、外に行く出口を確認して、次のエレベーターに乗る。俺の本当の任務は、ニコライ・トフマフノフを暗殺することだ。彼はロシア超国家主義派で、今は、コネを使ってロシア政府転覆を狙っている男だ。CIAはこの男を脅威とみて俺を派遣した。多分彼等も知っているのではないだろうか。ただのロシアンマフィアではないことを。

だがヤロスラフ少佐は邪魔だ。必要とあらば日が昇る前に殺さなければならぬ。前の任務でもこういったことはあったが、うまくいかなかった。嫌な予感がする。

「第11話 サンクトペテルブルグ（後書き）」

「じい、だっじ等じぢいましてらよろしくお願いします。」

「第12話 サンクトペテルブルグ？」

サンクトペテルブルグは、ロシア西部に位置する。ロシア有数の港湾都市であるとともに、鉄道・国際航路の要衝でもありモスクワに次ぐロシア第2の都市である。また、運河が発達しており、「北のヴェネツィア」とも称されるほど、美しい都市であった。

だがこの都市にも血塗られた歴史はある。

かつて、この都市は当初「サンクト・ピーテルブルフ」と呼ばれ、のちにサンクトペテルブルグとなった。ここはかつてのロシア帝国の帝都でもあった。

だが、ロシア革命の中心地となり、武装蜂起によるボリシエヴィキの政権奪取やレーニンによる憲法制定会議の解散が起こった。町は混乱状態となり、多くの人が死んだ。革命は成功し、政権がモスクワに移動してからは、この町は政治の中心地から外れた。

その後ここは第二次大戦前辺りになると「ペトログラード」となり、

ドイツ軍とソ連軍との戦いで数多くの人間が死んだ。

戦争が終わり、ソビエト連邦の時代になるとロシア革命の中心人物、レーニンにちなんで「レーニングラード」となった。

ソビエト崩壊後、今のサンクトペテルブルグとなり平和となった。

だが、今日は荒れるだろう。

「警部補、時間です」アーグニヤはヘッドセットをつけ、ホルスタ
ーにあるマカロフ拳銃の動作確認をしながらいった。

ロシア美術館は19世紀初頭におけるロシア新古典主義建築の傑作らしく、正式名称はミハイロフスキー宮殿というらしかった。

イスケーストフ広場側からみると、美術についてはよく分からないがとても美しかった。

「ヒデキ警部補？聞いていますか？」

「は、はい！」思わず美術館の宮殿だけで見とれてしまった。中にはもっとすごい名画があるにもかかわらず・・・。

「まったく、ちゃんと聞いていてください。少佐と警部補は、正門

から歩いて、中に入ってください。
それから、大統領の周回ルートを歩き、貸し出されている「モナ・リザ」のところで逮捕します。護衛は3人から4人で拳銃程度ではありませんが武装してあります。注意してください」。

携帯端末から立体画像が出て、ロシアの国立美術館が映し出される。

「やっぱり護身用とかは……」

「拳銃はダメですが、スタンガン程度なら貸すことができます」

と懐からスタンガンを取り出した。

「私の私物ですが大丈夫でしょう。私にはこれがありますので。」

といい。拳銃のスライドを引いた。彼女ならチンピラを簡単にやっつけることができそうだ。

スタンガンを渡すと、次に携帯無線機を取り出して渡してくれた。

「緊急時はこちらの指揮車両に連絡してください。何かあった場合は　　を送り鎮圧します。よろしいですね？」

とこちらを見る。彼女は俺、つまり日本人を差別しているような目をしていた。だがアメリカのテキサスでも同じようなことあったな。

「じゃあサムライ君。よろしく頼むよ」。だから、アメリカ人なんだが・・・まあそれを言ったら大変なことになるので心の中で少佐に言った。

そう言って、歩いていった。美術館ドアまで来ると、

「ほらヒデキ。これもとけ」。そう言って差し出してきたのは紙の袋に入ったトカレフTT-33が入っていた。トカレフTT-33は、マカロフ拳銃の前に正式採用された自動拳銃だ。少佐の祖父のものだろうか？

「クビになっても知りませんよ」

「そうしたら、傭兵にでもなるよ。まあ、撃たないことを願うよ」と言いながらドアを開けた。

美術館の中は、豪華で美しかった。もつといい言葉があるだろうが、高校卒業してから大学に入らず海兵隊に入隊した俺には表現できない。

「うわー、何べんきても、やっぱすげーや」と漏らす少佐。確かここから、廊下を歩き、ホールにモナリザがある。赤外線トラップ、

防弾ガラスなど各種の警報装置が備え付けてあるところでニコライを確保する。確保すると見せかけて、人為的に心臓発作するようにできるナノマシンが入った注射器を打ち込み、任務は完了となる。

だが、昨日と同じように嫌な予感がするのは、気のせいか？

「第12話 サンクトペテルブルグ？」（後書き）

誤字脱字ありましたらよろしく願います。

「第13話 サンクトペテルブルグ？」（前書き）

回想14話まで続きます。

「第13話 サンクトペテルブルグ？」

ロシア国立美術館から数キロ先、マリー通りを走っている車の中にその男はいた。

「それで、南アフリカのアメリカ大使館襲撃の準備は整ったのか？」

「はい。既に元スペツナズのメンバーが襲撃の準備をしています。現地のチンピラを使い、襲撃します。バフィット少佐が指揮をそうです。このあと美術館は13時から15時まで下見を行い、19時に例の会合があります」。

秘書が今後の予定を話し、男は微笑した。

男の名前は、ニコライ・トフマフ。ロシア連邦警護庁大統領連隊連隊長であり、東京のロシアン・マフィアのボスでもある。

だが、彼にはもうひとつ入っているものがあつた。

「復活と言う意味だ。」

この組織の主体はソ連崩壊後、財政界で生き残ったロシアの政治家や旧ソ連の軍人が主体となっている。今ではアフガンのタリバンやアルカイダよりもたちが悪いとCIAの闇の社会で言われる程だ。

彼らの目的は、超大国の復活であつた。だが、今共産主義国家になつても良いメリットは少ない。

だから、ゆつくりと政界に手を伸ばし、議会を掌握させ周辺諸国のウクライナやベラルーシなど併合する計画だ。

南アフリカのアメリカ大使館襲撃も計画の内である。隣国のナミビアでは、ナヴァレ將軍率いる反政府軍により内戦状態にある。彼らの犯行にしておけば国連軍として米軍も絡んでくるだろう。

その間にウクライナとベラルーシを併合させるのだった。

「ニコライ連隊長。もうすぐ、美術館です」。護衛のワシーリー大尉が短機関銃、Bizonnのコッキングレバーを引く。ほかの護衛も同じように準備をしている。いつもは、こんなこと少なかったが組織の活動が活発になると同時にCIAのエージェントが多数ロシアに入り込んでいるらしい。

東京の拠点が次々とやられているらしい。日本の警察は実に優秀だ。祖国の警察よりずっといいだろう。金で買収されないと聞く。しかも、道路封鎖や捜査にかけては迅速でよいと聞くが、短所といえば、銃をあまり使わない。いや、治安が良すぎて出番が無いからか。

美術館の正門を抜け、正面玄関の前まで来ると2台のBMWが止まった。ドアが開き出てきたのは、ロシアが誇る警護庁のボディガードだ。ロシア版シークレットサービスで、元ロシア空挺軍の兵士などエリートを配備するなど力を入れている。

「連隊長こちらです」。腕で正面玄関をさし、部下に周り警戒を促す。

ビルの屋上、不審人物のマーク、スコープの反射、不審な所が無い
かチェックする。

(大尉、スーツを着た男がこちらを見て携帯を使い、話している)

(3時方向の屋上に人影あり)

(アイスクリーム店のトラックが近くに止まっている動作なし)

全隊員に支給してある無線機からは、部下の報告がはっきりなしに
聞こえてくる。

(アレク、スーツの男を見てろ)

(ボリスは、屋上を見てろ)

(フォマー、トラックを見てろ)

部下に命令し中に入った。

美術館の中は豪勢な作りでロシア芸術を代表している。大統領警護
のときにも来たが、やっぱり美しい。

今の大統領は、芸術には目がない。今回は「モナ・リザ」が来ると
いうことで大はしゃぎだ。テレビでは見られない彼の一面だ。

(アレク軍曹、前に行け)

アレク軍曹に命令し、自分は後方に回る。

指揮官がまん前にいたらダメだろ？

ゆっくりと巡回ルートを進んでいく。いくつもの芸術品を見たあと、話題の芸術品「モナ・リザ」にたどり着いた。

モナ・リザの展示ルームは、素人が見れば普通の展示室であるかもしれない。だがプロから見れば芸術品の展示ではなく、最新の警報装置の展示ルームと言ってもよい。

展示ルームの天井には監視カメラが着いており、赤外線カメラまであるようだ。

モナ・リザの周りには赤外線センサーが張り巡らされていて、盗もうと思うものはいないだろう。

周辺には我々護衛が4人と護衛対象の連隊長と秘書しかいなかったが……

「ニコライ・トフマフノフ連隊長ですね？」いきなり窓に近くから声がした。反射的に声の先に銃を構えた。そこには、リヤザン空挺軍大学で同期だったヤロスラフがいた。しかも、隣には、日本人っぽい奴が立っている。

「ヤロスラフ！どうしてここに！」今日は一般開放しているわけではない。政府関係者としてきたのだ。しかもヤロスラフは、死んだはずだ！

「それはどうでもいいことだ親友よ。俺はニコライ・トフマフノフ連隊長に用があつてきた」。

ヤロスラフは、アフガニスタンのタリバン殲滅戦で多国籍軍の一員として参加した。だが、敵の砲弾で戦死したはずだ。なぜ生きている。

「ニコライ・トフマフノフ連隊長殿。逮捕状です。一緒に来てもらいましょう。ちなみにワシーリー大尉。部下に武装解除してもらおう。」奴の手にはニコライ連隊長あての逮捕状がある。連隊

長の噂は聞いたことはある。マフィアに入っていて人身売買や薬物取引、兵器の売買、恐喝などに手を染めている。だが、確かな証拠もない。部下に武装解除させ、持ってきていたBiztonを投げた。

「隣にいる日本人は一体誰だ？」

「隣の英樹警部補は日本から派遣された………あゝ！もう面倒くせ！」

突然、奴の言葉がロシア語から英語に変わってしまった。

そして、懐から黒い物体を取り出し引き金を引いた。

その瞬間、ワシーリー・トルトレフ大尉の意識は消えた。

「第13話 サンクトペテルブルグ？」（後書き）

誤字・脱字等あればご報告よろしく申し上げます。

「第14話 サンクトペテルブルグ？」（前書き）

何かおかしなところがあればお願いします。！

「第14話 サンクトペテルブルグ？」

俺は人を殺すのには慣れている。反社会的な行為とみなされるのが普通だがこれが俺の仕事だったからだ。

高校が終わってすぐアメリカ海兵隊に志願した。多分、志願した理由が幼馴染女の子の兄が海兵隊に入っていたからだと思う。忘れてしまっていたが、今になって思い出してしまった。

彼女の兄貴は、味方の射撃によって殺された。

アフガニスタンで大規模なタリバン殲滅戦が行われたとき、多国籍軍の駐屯地で憲兵として任務についていたらしい。

その時彼は、偶然コカインの取引現場を見つけて応援を呼ぼうとしたところ、同じ海兵隊の人間に撃ち殺された。

そのあと、葬式が行われ俺も親と一緒にいった覚えがある。

あのあと、彼女と家族は引越しどこかの田舎へ行ったそうだが、それ以外はわからなかった。

あれから、何年経ったんだっけか。

同じことが繰り返されてしまったらしい。

「大尉！」ニコライの護衛達は捨てた武器を拾い上げようとした。だが、間に合わなかった。さっきまで少佐と俺の周りには誰もいなかったのに、黒戦闘服を着た兵士達がMP5SDを構え、一斉に撃った。

護衛達は武器を持つこともできずに蜂の巣となってしまった。兵士達は戦闘服以外に透明なマントを着込んでいた。あれはたしか、アメリカで開発中の光学迷彩だ。光を折り曲げ、そこにいなかったように作り出す。

だが、なぜ彼らはこんなものを装備している。

ロシア兵か？

CIAのコマンド部隊でもない。

こんな結末ではなかったはずだ。護衛達を皆殺しにする必要は無かったのに。

「まったく、だからやりたくなかったんだよ。こんな任務」。そう
いって少佐……もとい少佐の皮を被っている奴は変装マスク

はずし、真っ白い変な銃を俺に向けて言った。

「さてと、高坂 英樹警部補。いやアレックス・イヤマ軍曹と呼んだほうが言いかね？」

「CIAの局員ではないな。NSAか？」男は首を振り、笑い始める。多分コイツは国粹主義者でもない。では一体何者だ。

「あんな奴らと一緒にしないでもらえるかな、軍曹。俺は、もっとちゃんとした目標があるのだから。」

そっつい終わると、引き金を引いた。弾はちょうど胸の辺りに当たった。注射針が刺さり、何かの科学部質が体の中に入ってくるのを感じた。

「が！……」全身の力が抜け、床に倒れこんだ。何かの毒物だろう。何の毒か記憶の隅から出そうとしているが思い出せない。視界がぼんやりとしている。

「待ってくれ！死にたくない助けてくれ！！」ニコライの声が聞こえたが、もう遅かった。銃声が一発轟き、血がモナ・リザの防護ガラスにかかった。

「軍曹、聞こえているか。もうすぐ、ロシア警察が来るだろうが、任務が失敗したらCIAのエージェントはどうするんだったかな？」とかすかな視界の中で、男は笑いながら言って展示ルームを後にした。

CIAのエージェントは過酷な任務でも必ず成功させるように訓練されている。もし失敗し、敵に拘束された場合はどうするのか。

自決だ。

自分の頭のなかにある情報はアメリカを危険にさらす。そう訓練されている。だが、いざとなるとできない。自分がここで死ぬと思っ
てしまうと、怒りが抑えきれない。

奴らに対する怒り、こんな任務をよこした政府への怒り、そして自
分の失敗で多くの仲間が危険に去らされる怒りだ。

いや、まだ危険にさらされてはいないが、俺が生きていれば、いつ
れはそうなるだろう。

仲間のためにも、アメリカにいる家族のためにもやらなければなら
ない。

俺は、青酸カリの入った奥歯をかみ締めて、毒による睡魔に襲われ意識を手放してしまった。

「第14話 サンクトペテルブルグ？」（後書き）

次から異世界に再突入します。

これからもよろしくお願いします。

「14・5話 異世界年表」（前書き）

これは、一応作っておいたほうがいいかな？と思って作りました。

一応資料みたいなものですので読み飛ばしてもらっても問題ないと
・・思います。

ちなみに、時々物語のつじつま合わせるために付け足したりするこ
とがあります。

「14・5話 異世界年表」

異世界年表

2001年から2010年まで実際にあったことを書いています。それ以外は作者が勝手に作ったり、調べたりしたものです。

2001年

9月11日 - アメリカ同時多発テロ事件発生。

10月7日 - アメリカ合衆国、イギリスを始めとした連合諸国がアフガニスタンのタリバン政権に対して空爆（アフガニスタンの侵攻）。

11月17日 - iPod発売。

2003年

3月20日 - イラク戦争開戦。サダム・フセイン政権崩壊。

7月26日 - 日本、イラク復興特措法が成立。

12月14日 - サダム・フセイン大統領が、米軍により拘束される。

2006年

第1回ワールド・ベースボール・クラシック開催し、日本が優勝

7月5日 - 北朝鮮がテポドン2号の発射実験。

2007年

10月1日 - 日本郵政公社が解散。

2008年

1月 - 日本国内で中国製ギョーザによる中毒が相次いで発生する。

10月11日 - 米政府が北朝鮮のテロ支援国家指定を解除。

2009年

3月24日 - 第2回ワールド・ベースボール・クラシックが開催され、日本が2大会連続優勝。

メキシコから世界各国に新型インフルエンザが大流行する

2010年

2月13日～28日 - バンクーバーオリンピック（第21回冬季オリンピック）開催。

5月1日～10月31日 - 上海で万国博開催。

国際宇宙ステーション完成。

日本は中国に抜かれて実質GDP世界3位になった。

2011年

自立式鉄塔としては世界一となる高さ634mの展望タワー「東京スカイツリー」完成。

FIFAクラブワールドカップ日本大会開催。

2012年

ロンドンオリンピック（第30回夏季オリンピック）開催。

京都議定書批准先進国の二酸化炭素排出量対1990年比削減目標

達成。

2013年

世界人口が70億人に達した。
アメリカ軍はイラクを全軍撤退。

2014年

ソチオリンピック（第22回冬季オリンピック）開催

2016年

日本で民間宇宙旅行開始。

リオデジャネイロオリンピック（第31回夏季オリンピック）開催

12月末、イギリス、ロンドンで自爆テロ事件が発生。アフガニスタンのタリバンが犯行声明。

2017年

中華人民共和国は人を月に送り込むためロケットを発射したが失敗。宇宙飛行士3名が事故死。原因は冷却システムの故障。

国連はアフガニスタンに多国籍軍の派遣を決定。タリバン殲滅戦が行われる。そのなかでアメリカ海兵隊の一部が他の軍にコカインを売っていることが発覚した。

2018年

中国騒乱。チベット、ウイグル地区で同時武装蜂起。中国は武装警察を派遣したがあえなく失敗。

両地域は独立を宣言。国連は承認するが中国は抗議した。

タリバン殲滅戦終結。ロシア軍を残し、全軍撤退。

2020年

アメリカ合衆国は、この年までに月面に基地を建設。日本も建設に着手し始める。

6月末に「ニコライ事件」CIAのエージェントが大統領警護連隊の連隊長を暗殺。その後、エージェントも自殺を図った。アメリカとロシアの間に亀裂が走った。(第二の冷戦勃発)

2021年

6月、アメリカ、テキサス州で巨大な竜巻が発生。3日3晩猛威を振るい、死者1000人も犠牲者を出した。

8月、日本に大型台風上陸。これまでと比較にならないほどの破壊力で2万世帯が停電、1万世帯が浸水し、大きな被害が出た。

2023年

4月、イギリス、ロンドンで巨大な津波が発生。堤防を破壊し、都市部まで浸水した。二階建ての建物は全て浸水し、死者一万人と犠牲者を出した。

2024年

朝鮮半島で地震発生。震度8強などの大地震で韓国のソウルや北朝鮮のピョンヤンなどに深刻なダメージを受けた。

日本は自衛隊などを派遣。また津波によって壊滅的打撃を受けた竹島警備隊を海上保安庁が救助すると言ったことが起こる。

2025年

復興間もない韓国に北朝鮮が武力侵攻。第二次朝鮮戦争勃発。アメリカ軍、韓国軍がそれに応戦。およそ一ヶ月で第二次朝鮮戦争の幕を閉じた。

アメリカ軍、軍事衛星を宇宙に打ち上げ。その後何度も資材が打ち上げられる。

2026年

朝鮮統一。韓国改め、「朝鮮連邦」と名称を変え、国連が承認。

2027年

国連は異常気象調査委員会を設置。国連は緊急措置として品種改良した種とナノマシンを入れた水をサハラ砂漠などに散布。

2028年

日本、月面に基地を建設完了。
人工栽培コロニーの開発に着手。

アメリカの南極大陸調査団が「南極大陸の氷が2000年と比べ20%減っている」と国連に報告。
この年から北半球各地で寒冬になる。

2029年

アメリカ軍、パワーアーマー実用化。全軍に配備される。それと同時にレーザー兵器実用化。
人工栽培コロニー開発に成功。一部で自給自足が可能となった。

2030年

12月末、北半球全体に大雪が降り始める。各地で絶対零度の台風が襲う。

2031年

1月、北半球の国と通信途絶。事態を重く見たオーストラリアは台風がきえてから部隊を派遣。北半球の都市で見たものは近代文明の崩壊だった。

北半球は完全に氷河期に入ってしまう。「北半球氷河期災害」と呼称する。

2月、オーストラリア軍、南アフリカ軍、ブラジル軍は生存者の救助作戦を開始。南アメリカはほとんど無事だったものの、北アメリカの生存者は1万人にも満たなかった。一方アフリカでは、ほとんどの国は機能しており、ヨーロッパなど生存者は皆無。日本人生存

者は一万人未満だった。

現在の総人口はたったの20億人となった。

常任理事国が消滅し、国連本部はオーストラリアのシドニーに新設。

この異常事態に対し、新設された国連本部で各国の首脳が全て集まる国際会議があり、

新しくオーストラリア連邦、南アフリカ、ブラジルが常任理事国となり、全ての国が国連に入ることが採択された。

旧常任理事国のアメリカ、中国、ロシア、フランス、イギリスは、臨時政府はあったが、ほとんど機能していない状態で理事国を続ける余裕は無かった。

北半球から救出された人々は、駐屯していた自国の基地でキャンプ生活を送ったり、国籍を変えたりするものも多かった。

2032年、

異常な電磁場が北半球のインド半島、アラビア半島、ヨーロッパ北部、南部、アフリカ北部、南アメリカ東部にて観測される。

異常な電磁場が見つかって1週間後、巨大な門が現れる。そこから異世界の軍勢が押し寄せた。国連は氷河期で生き残った軍を使い応戦するが敵の攻撃はすさまじく、北アフリカは完全に掌握され、南アメリカ東部でさえ、ペルーやボリビアの国が陥落した。

国連は、「氷河期災害」によって軍備が間に合わなくなってしまい、安全保障理事会の3国は急遽国連加盟国の軍を国連が統括すると言ったことが起こる。

陸軍は国連陸軍、海軍は国連海軍、空軍は国連空軍となり特殊作戦軍も作られる。

だが、これは20年間にも及ぶ血塗られた歴史の幕開けに過ぎなかった。

エジプト、カイロに門（転移門）が開き、異世界の軍が侵攻、カイロを掌握し民間人に多数の犠牲者を出した。その1カ月後、エジプトが占領下に置かれる。敵はエジプトに住んでる民間人や兵士を奴隷にしてこき使っている。

国連は「エジプト奪還作戦」を発動。敵を一掃して、門を破壊することだった。

ヘリ100機、機甲師団を1師団、歩兵2個師団、総勢2万と言った戦力を送り込んだ。イラク戦争でも2万六千の戦力を送り込み勝利？を収めた数である。

「アクシユア王国」と呼ばれる敵は門に出てきた敵は4万の兵。だが、異世界から持ち込んだドラゴンによって攻撃は失敗。

エジプト奪還は失敗に終わり、敵は侵攻し北アフリカ全域を占領し、中央アフリカまで侵攻した。

最終手段として国連は彼らにはない技術がエジプトにはあるため、機密情報流出を防ぐために、空爆。4万の兵を壊滅させた。だがアクシユア王国はこれが第一陣であり、第二陣は30万規模の兵だった。

アフリカのミリタリーバランスは大きく傾くこととなった。

エジプト奪還失敗から一ヶ月後、南アメリカ東部にも敵が現れた。敵は、アクチュア王国の兵とは違い、獣人と呼ばれる類のもの達だ。ドラゴンや魔法は使わないものの、攻撃はすさまじく、7、62？ライフル弾でも死ぬことはなく、突撃してくるのだ。

彼らの攻撃も激しくペルーやボリビアの国々を占領されることになったのだ。

2033年、

建設中だったインドのチュンナイ、ジョージタウン軍港にガリビイア帝国軍侵攻。軍港は奪われ、多数の民間人犠牲者が出た。

国連はジョージタウン軍港奪還作戦を決行。

100発以上のミサイルによる攻撃に帝国軍の士気低下。脱走兵が増加。「爆炎の矢」と帝国軍の兵から呼ばれ恐れられた。

ガリビニア帝国は、ミサイル攻撃にくじけ、和平を選択し、戦闘終結。ジョージタウン軍港から10kmに軍を立ち入らせない、国交を結び、不可侵条約を結ぶ。

2034年。

極秘裏に発掘中だったガリビニア帝国軍が偶然、イランの原子力発電所を見つけ、燃料棒が破損。大量の放射能が漏れ出し、付近に駐留していた帝国軍1万5千に被爆し、全員死亡する事故が起きる。

国連は、放射能を浄化するため、爆撃機に放射能を分解するナノマシンを投下。

近くにいたクシャナ王国にも被害が出ており、王国はこれを攻撃とみなし、ガリビニア帝国軍の駐屯地に攻撃を仕掛けた。

この攻撃に巻き込まれ、調査していたオーストラリア軍ロイヤル・オーストラリア連隊第34大隊が行方不明となった。

これにより、ガリビシアとクシャナとの長い戦争が勃発した。

2037年

ガリビシア軍、異種民族粛清作戦決行。人間以外の亜人を見境なく虐殺するなどした。

国連は猛抗議したが、無視。

2038年、

元スペイン領内にあるエスパリーニャ公国と元フランス領内のマルティニア王国とで戦争が始まる。

2040年

公国と王国戦争終結。

2037年

副隊長、初の騎士団任務に参加。元カザフスタン領内の他民族がつくった要塞を攻略。その時、リザを拾う。

2045年

チリ、侵略。ブラジル軍が救援し、占領されたアントガファガスタの町を爆撃。多数の死傷者が出る。

2048年

元中華人民共和国の1万人がガリビニア帝国へ移住。

2050年

ガリビニア軍、東アジア極東部に位置する日本へ。

硫黄島を発見。当時の基地がそのまま残っていたため、オーストラリア軍が来て物資の運び出しを行った。もとの名前にちなんで「イオウトウ要塞」と呼ばれる。

2051年

クシャナ王国オーストラリア軍に使者（総勢100名程）を送る。

クシャナ王国第一皇女、アマーリア・クシャナが行方不明。

クシャナ王国の使者が魔法伝達石で報告したところ、王女が紛れ込んでいた模様。急遽、王国の代表としていくことになった。

2052年、神に派遣された天使が現れる。

「14・5話 異世界年表」(後書き)

誤字脱字、または年表でおかしなところあればお願いします。

「第15話 待ち伏せ？逃避行？さあ、どっち」（前書き）

一応、主人公達は天使ですが人間と同じです。ただ、戦闘能力と体力、精神力など桁違いになっているほか、自動的に翻訳魔法が使えたり、錬成魔法・攻撃魔法などつかえる。また、魔法力は、魔導士師団の一般兵ぐらいの魔法力を備えている。

チートとのようですが、物語の後半から彼ら以上のチートが表れます。

「第15話 待ち伏せ？逃避行？さあ、どっち」

「それで、彼はどうなったんだ？」

「あのあと、俺のところへすぐ来たよ。あの時は、その世界の輪廻転生の部門で働いてたからね」

「それで？」

「輪廻転生して、今はクシャナ王国で騎士団の隊長だ。まあ、今会ってもあの頃の記憶は消してしまったからね。会っても無駄だよ」。

233

課長にはこの世界がどうしてこうなったのか教えてくれた。

あのあとアレックス・イヤマさんは、ニコライを殺したCIAのエージェントとして、世界を騒がせることになった。

今もあの頃もロシアとアメリカの関係はギクシャクしていたが、この事件のおかげでロシアとアメリカは冷戦へと突入していった。

そして核戦争へ

とフオールアウトっぽいことだが、そうはならなくて、あのあと10年冷戦は続く。

このころは異常気象が続き、巨大竜巻、洪水、大雪等……などなど被害を出した。

国連はこの異常気象で大規模な植林事業を決行した。軍はアフリカに品種改良した種をばら撒き、ナノマシン入りの水をまいていく。

そのおかげで、アフリカの荒廃した大地は、緑が増え、8000年ぶりの湿潤環境となった。

だが、2030年にある大事件があった。

北半球に異常気象が相次ぐようになった。理由を聞いていると……

・ 「あのととき、地獄で大量の脱獄があったんだよ。その世界の環境課の神を動員して探したからこんな世界になってたわけ」

異常気象は続き、北半球が雪で覆われた。科学的に言ってしまうと、地球温暖化が原因で水面が上昇。南極大陸の氷がとけ、海流がおか

しくなり異常気象が発生。氷河期に突入してしまったのである。

だが、氷河期ももうすぐ終わるらしい。

2030年から今、まで氷河期だったが俺達が来たおかげで少し干渉することができたようだ。

ここまで聞いていけば人間は屈強なのでそれでも繁栄するだろうと考えたが、物事そう単純ではない。

氷河期に入ると赤道より北の国はほとんど雪で閉ざされ国から脱出した人々を残し滅亡した。

国際連合の常任理事国のアメリカ・ロシア・中国・フランス・イギリスその他の赤道より北の国は事実上消滅し、新たに、オーストラリア連邦・南アフリカ共和国・ブラジルなど3カ国が常任理事国としてできたが、南半球の国々は発展途上国が多く、アメリカなどの大国から支援を受けていた国がほとんどだ。

だが、災難はまだ続いた。

2032年6月に異常な電磁場が北半球のインド半島、アラビア半島、アフリカ北部、南アメリカ東部に観測される。この年は、まだ避難した人々はオーストラリアなどに仮移住と言った感じで生活していて、北半球は住めるが、許可が下りていない。つまり、誰も人がいないのだ。しかも電磁場は普通なら考えられない大きさだっ

た。

国連は、そこに偵察隊を出し監視することになったのだ。だがそれから一週間後。巨大な門が現れ、異世界の軍勢が現れた。今日遭遇したガリビィア帝国軍のように。

その門はインドのチウンナイ、アラビア半島のアフガニスタン、エジプトのモロッコ、南アメリカのニカラグア。

北半球に位置被害はあまり多くなかったが、エジプトは、北半球の端に位置していたためか、あの事件ではあまり被害はでなかった。だが、エジプトの首都に異世界の門が現れ首都は壊滅的打撃を受けた。

当初、国連軍は、彼らが中世ヨーロッパあたりの文化を持ち制圧は容易だと考え、民間人の被害は出るだろうが、銃といったものがあるから大丈夫だと考えたのだ。

だがその考えは甘かった。彼らは、攻撃魔法や呪い、そして異世界に存在していたドラゴンを戦争の道具として使ったのだ。

国連軍は彼らに航空戦力はないと思い込み航空機を前面に押し出したがそれがあだとなった。

国連は「エジプト奪還作戦」を発動した。

ヘリ100機、機甲師団を1師団、歩兵2個師団、総勢2万と言った戦力を送り込んだ。イラク戦争でも2万六千の戦力を送り込み勝利？を収めた。だが敵はドラゴンに乗り、攻撃魔法を繰り返す。

「アクシュア王国」と呼ばれる敵は門に出てきた敵は4万の兵。

ヘリの多くはドラゴンによって墜落した。ドラゴン20匹に対し、ヘリ100機、地上勢力は、戦車など装甲車を前面に押し出し、機械化混成師団で戦いに望んだが、これも撃破されてしまう。

エジプト奪還は失敗に終わり、敵は侵攻。

国連は彼らにはない技術がエジプトにはあったため空爆し4万の兵を壊滅させた。だがアクチュア王国はこれが第一陣であり、第二陣は30万規模の兵だった。

アフリカのミリタリーバランスは大きく傾くこととなった。

そして南アメリカ東部にも敵が現れた。敵は、アクチュア王国の兵とは違い、獣人と呼ばれる類のもの達だ。ドラゴンや魔法は使われないものの、攻撃はすさまじく、7、62？ライフル弾でも死ぬことなく、突撃してくるのだ。

彼らの攻撃も激しくペルーやボリビアの国々を占領されることになったのだ。

その後、20年にもわたる血塗られた歴史が続いた。国際連合の分裂、敵への寝返り、技術の流出、敵による大量虐殺。交渉？そんなものは存在しない。こんな混沌とした世の中にそんなものは存在しない。選択を誤れば死あるのみ。

だが、この混沌とした世界を直すためにある者が派遣された。

俺達だった。

「あの二人にはもう話したのか？」

「ああ、この世界を理解したらしいよ。一応世界地図をパソコンに送っておいた。この時代のネットも使えるはずだ。有効に活用してくれ。それとこの時代のwiki ped iaに周辺の国々が紹介されている。Y A H Oでも乗ってるんじゃない？」

この時代にもウィキあるんかい！ヤフーも……。

「じゃあ、切るからあとよろしく！」と課長はいつて電話を切つて

しまった。そういえば、課長の本名なんだろう。

話すのを夢中になっていた俺は周りを見渡すと色々なものが見えてくる。こちら辺は建物が多い。それは村だから多いのかもしれないが、建築物が彼らでは作ることでできないものばかりだ。コンクリート製のものまであった。

でもこれで今、自分がどこにいるのかはつきりした。俺が今いる目のまん前には、日本語で「山口消費者金融、熊本支社」と書かれた看板があった。

つまり、足元には日本の熊本があるのだ。ここにいる人間は読むことはできないだろう。

ポーチの中に携帯端末があるので、GPSで自分の居場所を確認する。すると

「熊本・総合病院前」驚くことに目の前の診療所は病院をそのまま使ったのだ。

道理で内装がそっくりな訳だ。

「ハックシユン！！」長電話をしていたせいで体がひえてしまった。中に入って飯でも食おう。

「第15話 待ち伏せ？逃避行？さあ、どっち」（後書き）

誤字・脱字・文章がオカシナことがあればよろしくお願いします！

あと感想があまりないので、書いていただけたら……

お願いします!!!

ちなみに主人公達は中2病にはかかっていませんよ。

念のため……。

「第16話 ゲームの展開、現実の展開どっちにしますか？」（前書き）

あと1話ぐらいで戦闘シーン入れていきます。

もっと異世界、ファンタジーっぽいところ書きたいんだけど・・・

・

なんでSFにしたか？

それは・・・・・・SF+ファンタジーのような選択肢が無かったからですよ。主人公のように。

「第16話 ゲームの展開、現実の展開どっちにしますか？」

まず、携帯コンロでお湯を沸す。カップを開き、お湯を流し込み、3分待つ。再びカップを開いて、湯気が顔にかかる。

カップラーメンはすばらしい。カップラーメンはあさま山荘事件に機動隊がカップラーメンを食べているところを全国中継で放送し、それが触発してカップラーメンが売れたとか。

こんな寒いところで食べているとあの映画を思い出してしまう。だけど、ここは野外ではなく室内。でも寒い。祖先はどうやってこの氷河期を生き延びたんだ？脂肪のおかげか？そんなことを考えつつ、麺をすする。だが、後ろにいた敵意に気付くことはできなかった。

「お前、一人でなにやってるんだ！？」いきなり、後ろから銃床で殴られた。犯人は溝口。ヘルメットを被っていたがやっぱりいたい。脳ミソが揺さぶられた。

「アレでも、カップラーメンが全部で7個？みんなの作ってくれたのか？」

そっすだ！、お前がやらないから俺がやったのに、そのおかげで殴られるし！！不平不満言いたいがあまりの痛さに声も出ない……。

「つ……！！！」

「すまん、すまん。このカップラーメンは富田に渡しておくよ」。
と言って容疑者は去っていく。こうなれば後ろ弾を！！！（後ろから仲間を撃つ行為）

と思ったが撃てない。痛い……。

5分後、ようやく痛みが引き、立ち上がる。ヘルメットを見ると、あるところか凹んでいる。もしか、力加減しないでやったんじゃないかな。かろうな……。

しょうがないので、練成魔法を使い、修理を試みる。左手に力を入れ、頭の中で凹みを直すため念を送る。

すると、見る見るうちに、凹みは直り被っても変な感じはしない。

頭を触ると、こぶができている。治癒魔法を先生にかけてもらうか。

「よっこいしょー!」おぼんにカップラーメンを1つ載せて、一号室を目指す。

「失礼しますよ。夕食です。」とドアを開けた。

あまり変わった様子もなく、副隊長は起きて、こつちを見ている。
食べながら尋問でもするか。

「やはり……俺を軍法会議に出して銃殺刑にする気か？日本人

」

この時代……いやガリビニア帝国に軍法会議があるか？いや、無い
だろう。俺のことを日本人だとわかる奴はオーストラリアとか国連
の中にいる国の人間だ。

ガリビニア帝国がそんな人種知ってるわけがない。移住した中国人
とも思われてしまうと思っていたが、防寒着を脱いで、自衛隊の戦
闘服を下に着ているためだろうか？それとも、袖の日の丸に気づい
たか？

「いいや、違うが。あんたのことはガリビニア帝国ビルコラク騎

やっぱり元国連兵か。どうりでおかしいと思ったよ。普通、隊長があんなふうになってもあんな対処をする騎士がどこにいる？現代の兵士ならわからなくも無いが。文化も違う、戦術も違うのに良くあんな指揮ができるよ。

「34年のイランだったか。残留放射能チエック中にエルフの軍団が攻めてきてさ。応戦したんだが、奴ら弓の名手がたくさんいたらしくて、部下が何人も倒れたよ。気づいた頃には味方は全部やられていた。応援部隊だったガリビィア軍に助けられて、ここにいる」。

247

彼は、戦闘糧食の中に入っていた煙草を取り出し、ライターで火をつけようとするが付かない。

ポケットの中にあつたマッチで火をつける。煙草は好きじゃないがこの人は10年ぶりに煙草をすうはずだ。

「3ヶ月前に吸ったけど、これまずいな」。3ヶ月前に吸ったんかい！しかもまずいって……。

「それで、お前が国連軍じゃないことはわかった。日本は、いまだは雪のなか。しかも、お前はまだ中学生じゃないか。」

「ちがう、俺は高校生だ」

「どつちでもいい。君達の年で兵士になることはなくなっている。君達は一体なんだ？」

「じゃあ、これを見てくださいませんか？」バックパックの中からノートパソコン（私物）を取り出す。電源を入れて、windows media playerをつけて、動画を選択した。

動画のファイルで「2010年9月1日2100時、キクテレビ局
放送」をダブルクリックする。

画面が映し出され、夜のニュースだった。

「9時のニュースをお送りします。」女性キャスターが一礼してテ
ーブルにある紙を読み始める。

「痛ましい事件が発生しました。今日の6時過ぎ、。 ×県 市
の住宅街でアメリカ空軍所属のF22が墜落し、かなりの被害が出
ています。現場の南波さん！」キャスターがレポーターを呼んで、
スタジオから現場の中継に変わる。

「はい、こちらは現場の南波です。今は避難場所の 中学校の校庭にいます。ここでは、住宅街から避難してきた人がここで待機しています。」

「被害はどのくらいですか？」キャスターは尋ねてくる。

「はい、ここから500m先に墜落地点があるのですが、そこから半径20メートルに被害が出ています。墜落直後に搭載された爆弾が爆発したらしく、3世帯ほど全壊したと報告が来ています。いまここにいる人々はまた爆発する危険があるためここに避難しています。現在、自衛隊と米軍が共同で不発弾処理に当たっている模様です。現場からの中継でした。」

「南波さん、ありがとうございます」キャスターはそう言つと、画面が変わり、キャスターがまた映し出された。

いきなり横から手が伸びてきてキャスターに紙を手渡す。

「今入ってきた情報によりますと、現場にいた被害者の身元がわかりましたのでお伝えします。」画面が切り替わり、「米軍機墜落事件犠牲者」と出ている。

「 × 県立高校在学の武藤 疾風さん、富田 亘さん、溝口 明夫さん」

高校の体育祭で3人で撮った写真がでてくる。

「 中学校在学の武藤 美緒さんです」よく生徒手帳に貼るような写真が映し出された。

我が天敵、妹だ。

あの世界で暴れないことを祈るよ。

誰にだって？課長以外の神にだ。

この動画には英語字幕があったのでそれを拡大して見せている。

「この顔は……君達か！？でも2010年って今まで生きていたら……」

「17プラス42で、59歳だな。でもこの顔見てわかる通り、17歳の学生だ」。

実際、この世界の2010年には、米軍機墜落事故は起こっていない。それ以前に俺達は存在していないのだ。

「君達は一体何者だ？」

「傭われ天使だ」

「天使？」

まあ、下半身には冬季迷彩のズボン、上は自衛隊の戦闘服。こんな天使がいたら、疑わざる負えないだろう。

「おい、冗談はよせ。お前が天使だったら、俺は神だよ」。やっぱり、信じてくれそうにない。

当たり前か………

天使なら「羽を見せてみる」とか言われかねない。だが羽は生えていないし、あたまの上に輪は浮いていない。

本来なら天使にはあるらしいが、正式な天使ではないため生えないそうだ。

じゃあこれなら信じる?」「コップに水筒の水を入れ、指をパッチン!と鳴らす。

コップの中の水は、徐々に真っ黒になり、泡が吹き出た。

ひんやりと冷えたコーラの完成だ!

「飲みます?」「コップを渡し、一口飲むと、そのまま一気に飲んでしまった。

「美味しい！」これは久々に飲んだようだな。次は……

また、大きなコップに水を注ぎ、指を鳴らす。

水は黄色に染まり、泡が瞬時に出て、コップの淵のところまで泡が満ちる。

それを渡し、ゴクゴックと飲んでいく。

ノドゴクゴクシノ、1!!

つまりビールだ。

なんでこんなことができるのか。つまりは、錬金術ならぬ魔法を使った。某アニメの中で、へんちくりんな宗教団体の教主が、グラスの水を赤ワインに変えてしまうシーンがあった。主人公達は教主の

持つ錬金術の増幅装置があると確信して、会いに行くのだが、今回使った魔法も似たようなものだ。

だが、この魔法は存在してはいけない代物なのだ。

この魔法は、とっくの昔に消えた代物でこの世界の誰一人としてこの魔法は使えないのだ。使えたとしても、不老不死を手に入れた、当時の魔法使いぐらいである。

これをすれば、相手も信じてくれるはずだ。

「ただの水から、コーラやビールまで。何か種があるんだろ？」な

んか信じてくれない。さてどうしたものか。

「じゃあ、なんで天使と名乗る必要がある？こんな服を着てさ。だつたら、わしや鷹の翼をもぎ取って背中にガムテープで貼った方が良くないか？」

「じゃあ、100歩譲ったとして君達の目的はなんだ？」

ちよつとばかりの沈黙が続いた。

「この世界に秩序と平和を取り戻すっただけじゃダメか？」

また・・・沈黙・・・

「っぶははははあ・・・」「ついに笑い転げ、ベットから落ちた。あまりに嘘が（嘘ではないが）下手だったか。」

やっちまったか……

「わかった。訳ありって所だな。建前ではそうなんだけど。世界に秩序と平和を取り戻す。まさしくアメリカンヒーローの再来だね。ははは……」

また笑い始める。この回答でよかったのか？ コマンドはあっていたのかと思っただが、アレ以外の選択肢は思いつかなかったと思うと自分の日本語力（日本語じゃなくて英語だが、翻訳魔法を使っているので日本語で話しても、向こうの言葉で聞こえて、向こうの言葉を理解できるのだ）が無くて腹が立った。

そして3分後、

「じゃあ、また来ます・・・」

「じゃあ、今度はウイスキーね。あと、副隊長と呼ぶな」

「じゃあ、なんて呼べば？」

「そうだな・・・お兄さんで！」さっき作ったビールを鱈腹飲んだせいで酔っているのだろう。顔は真っ赤。こんな酔い方する大人は始めてみた。

3分でもよく飲んだと思う。いや、酔いが速かったのか。

その力を入れてカッコつけたのが最後で、ベットに倒れていびきを立てながら寝た。

一応、仲間に来たのか？このままゲームのように仲間にしていいのか？

と不安を覚えたが、左手につけているデジタル時計を見て仰天した。

「あーヤベ！飯」意外と10分しか経っていない事に気が付いたが、それでも時計を見ると「8時10分」と表示されていた。

急いでカップ麺にお湯を入れて、リザのいる3号室に行く。エルフの方はまだ寝ているかもしれないから後にした。

コンコンコン……

ノックをしてドアを開けた。

「お邪魔しま………」その場で凍りついた。いや心臓はバクバクで、心拍が異常な数字をたたき出している。

俺の目の前には、机に突っ伏して寝ているリザ・アンデションの姿だった。

普通に寝ていたら問題はない。問題なのは、こちらを向いて、よだれをたらしていることだ！！

高校の同級生が学習机に突っ伏して寝ている姿は何度となく見たことはある。だがこちらを向いて寝ていることは必ずと言っていいほどない。しかも、女子がよだれをたらして寝ていることは、夏に雪が降ることぐらいありえなかった。

だが、ここで起きていることは事実。

夏に雪が降る？

「じいじではじゅっちゅっだし、ぶりざーとぐらゐる。

コメント

- ・カップラーメンを置き、そのまま去る。
- ・起こす。
- ・顔を良く見る。

- ・写真を撮る。
- ・匂いをかいでみる。

どう見ても下から1番目と2番目は変態がやることだろーが！！！
写真を撮るって犯罪だし。匂いをかぐってドンだけだよオ！！

ゲームなら後者（一番下）あたりを選んだりするが・・・ありえるが現実としては一番上か、2番目を選ぶ。

もしくは、3番目か・・・

ここで、第6の選択をしようと思う。まず、起きるときにこぼすと困るため、近くの椅子においておく。

そして、キャンプで使うMY寝袋のチャックを開いて寝ている彼女に羽織らせる。この瞬間に顔を見てしまえば、一石二鳥、いや一石三鳥になる。はずだった……。

彼女は、俺の住んでいるところが外国人が住んでいないためか、俺に運がないのかもしれないが、かなり可愛かった。たとえば言うならば、アニメで出てくる女の子ぐらいすごい。

アニメに出る女の子は、髪が金髪だったり、茶髪だったり、目が緑色だったり日本人なのに訳のわからんことになっている。髪を染めたり、色つきコンタクトレンズを入れたら済むかもしれないが、

それとはまた別の次元だ。彼女はそんなことをせず、生まれつきなのだ。

アニメと言うのは、なりたい自分、いて欲しい人を映像化してしまうものであると思う。例えば、18禁のエロゲーの女性キャラクターに例えると、まず、ああいった人たちは存在しない。いきなり同級生の家に上がり込んで寝込みを襲ったり、学校で行為に及んだりとかありえないことなのだ。

つまり、今いるこの状況は、そんなゲームの世界に入り込まないと無理な状況で、目の前に金髪の騎士がいることは、生前の世界ではありえなかったのだ。

黄金でも混ぜたかのような金髪に白い肌、そして澄んだような青い瞳……

見とれていて起きたことに気づかなかつたらしい。気付けば、ほっぺには真っ赤な手の跡、そして、視界が一回転した。

このことで学んだことがある。次の選択肢は、逃げることにする。

「第16話 ゲームの展開、現実の展開どっちにしますか？」（後書き）

えっと、申し上げにくいことなんですけど・・・

タイトル「雇われ天使3人組」を変更して

「Mercenary Angel」にしようと思います。

理由は、「なんかこのタイトルはおかしいぞ」と友人から言われたのがきっかけですが、

今まで読んでいただいた方々には申し訳ありませんが変更します。内容は変わりません。これからもよろしく願います。

ご意見等、ございましたら、サービスカウンター・・・じゃなかった感想のところを書いて下さい。

今のところ、読者であるブラボー6さんしか書いておりません。他の方も書いてはいただけませんかでしょうか。

．．
そうしていただければ、書くときに参考になったりするのですが．．

．．
よろしく願います。

番外編 神である課長の憂鬱（前書き）

あんま憂鬱じゃなかったかな。

少し展開が遅いですので早めます。

次はあるゲームの兵器を使います。

ふっふっふ・・・

番外編 神である課長の憂鬱

書類に埋もれた机に彼はいた。

「さあて、家に帰るか・・・」

「ダメです。この書類と臨時に雇用した天使を増加する書類がありますのでそれに目を通してください。」

鬼である秘書の「鬼椿 桜子」がおぼんに渋茶を入れて持ってきた。脇に挟んだ書類と一緒に。

「過労死してしまうよ」

「死ぬわけないじゃないですか。人間じゃあるまいし」

それもそうだ。神は死なない。例外を除けば神は死なないのだ。

「はあ・・・で天使を増加ってどういうことよ。」

天使というのは天に使えるもの。つまり神の僕だ。

だが世界管理局の職員の大半は天使だ。神は中間管理職、または上の人、つまりは局長だ。八百万の神である私はこんなところで仕事をしている。

もつと名門の神になったらよかったのに……。と思っていたがこう生まれてしまつては仕方がない。やはり、仕事をきちんとなければならないのだ。

鬼は正社員。事務をこつこつとこなしたり、実戦部隊のサポートをする。

天使は実戦部隊。天使は磁場を修復したり、違法な魔法を使い、違う世界に来た生物を捕獲してもとの世界に戻したりするのが仕事なのだ。

だが、これをしなかったせいで変な世界がひとつ生まれてしまった。

「桜子君、」P132564「宇宙の地球はどうなっている？」

「P132564」とは、武藤君達が行っている世界のことだ。た
くさんの世界がありすぎるため、固有名詞をつけるのが難しくなっ
た。

昔は、星座のような感じの名前をつけていたが、誰かさんが世界を
作りすぎたためこうなってしまったのだ。

しかも、あの世界は、同時期に冷戦が勃発して、氷河期も来る予定
であったのでしっかりと見てやらないといけなかったのに、地獄の
看守共ときたらろくな仕事をしない。しかも、この時期に脱獄。

こんなことあってはならないのだ。

脱獄した亡者を捕まえに神まで与えられた仕事を投げ出す大騒動に

なったおかげで、あの世界は氷河期に陥り（氷河期にするつもりだったけど・・・）しかもほかの世界から転移門を開いてしまったのだ。

あの世界はもともとは2つの世界だったのだ。

「P132564」と「P132563」。

「P132563」はもともと人間たちが想像を増大させて作った世界だ。

文明も中世ぐらいの世界で厄介なのは、この世界にある魔法だ。

この魔法のおかげでこんなことになったのだ。

転移門が開き、二つの宇宙の間隔が縮まってくっついてしまったのだ。

N極とS極を知ってるだろうか？

磁石のことだ。この世界は、魔法と言う「電気」でただの鉄屑だった門は電磁石という「転移門」になり2つの世界が重なったのだ。無論、磁石となるためにはコイルを巻かねばならない。コイルの役割が魔法使いだ。

これを修正しようとしたらはじめかれてしまった。多分、誰かが妨害をしているのだろう。誰なのかわからないが………。

いまでは、前の世界の残骸である世界の壁に隔たれている。だがもうすぐ崩れてしまうだろう。

だからこそ彼らを送ったのだ。

つか、俺は誰に話しかけてんだ？

「はい、今の所 Group 6 は日本の熊本市街跡の部落に展開中だったガリビニア帝国軍を殲滅し、現在は負傷者の治療と捕虜の尋問とヘッドハンティング（現地雇用）をしています。天使増加の件ですが、また、囚人が脱獄してあの世界に逃げたようです。」

またか……………

看守はクビだな。

「局長は局の全員を使った超ローラー作戦はしないのか？」

「この前の事件がきっかけで脱獄した囚人は我々が担当するそうです。書類の中に囚人達の能力と名前、写真をリストアップしました。」

超ローラー作戦というのは、以前あの世界をほったらかしにして行った作戦のひとつである。脱獄した囚人を見つけるために時間と労力を無駄に使った作戦だ。

なんでこんなことになったか？

それは、局長に聞いてくれ。

局長は、かの有名なヤマラージャ（??????）（日本語にすると閻魔大王だ。彼は、地獄の最高裁の裁判長であると同時にこの局の局長をやっている。

つまり、かなり忙しい。

で、あの大騒動の中心だった囚人は、生前10件の殺人、放火、窃盗、恐喝など様々な罪で刑務所に入れられたが何回もの脱獄に成功したつわものだった。その時判決を下したのも彼であり、この事態になるのを予想していたらしい。

脱獄の話聞いた第一声は

「やっちゃまったな・・・」だそうだ。

捕まえたあと、魂を消し去ってしまい、二度と転生できないようにした。

「つか、なんで脱獄した囚人を俺達が捕まえなきゃならんのだ。」

「ん？ちょっとまで、「囚人達」って言わなかったか？」

「いま囚人達って？」

「はい、今回は10人ほど脱獄しました。彼らは、「P132564」に逃げ込んで、その住民に憑依しました。多分、彼らを切り離すには勇者と呼ばれるスキルを持った者が必要です、どのみち上から、もっと雇用しろとの命令が出ています。」

上とは、つまり部長、もしくは局長とかの人たちだろう。

勇者と言っているのは悪きものが震え上がる部類の戦士だ。

統率力、カリスマ、指揮能力、戦闘能力などこれは指揮官や士官には欠かせない代物であるが、勇者には何が悪なのかを見定めてそれを滅つすることができなければならない。

これをやらなければ本物の勇者になることはできないのだ。

そして、亡者に憑依された生物を亡者と引き離す能力をもつ。

しかも、憑依された人は（人間とも限らない）体に乗っ取られてしまふ。

ある憑依された人間は帝国の皇帝となり、残虐な行為を働いたらしい。

まあ、Group 6にそれを任せるとしよう。

Group 6は何かだった？

それは神軍第6特殊部隊の略称だ。武藤君達3人のことを指す。

まあ、神軍なんてものは存在しない。昔はあったらしい。

あそこの世界にいるときの仮の名称だ。なんで第六特殊部隊かというと、かれらは2年6組だったし、特殊といえば特殊な集団であるからだ。

なにかの報酬と引き換えに天使の仕事をしてもらう。前例のない試みだ。

だから特殊だった。

「わかった。Group 6に憑依した亡者を生者から引き離す能力をつけ、目標の追加を伝えよう。で、新たに天使を臨時雇用するのは？概要はどのような感じだ？」

「はい、なるべく文明が発達していて、ファンタジーのような世界を好む12歳から16ぐらいの少年がいいと思われれます。多分、魔力も大魔導士レベルまで可能です。下手にハイテク兵器ばかり使っている兵士よりよっぽどいいと思われれます。」

世の中二病の少年達はうれしいらるうなあ。

そういった彼女の手には、ファイルがあり、書類と共に「ファイナファンタジー」が透視して見えた。確か彼女には息子がいたな。

「わかった。端末で調べてみるよ。ご苦労さん。
もう帰っていいよ。早く息子のところに帰った方がいい。今日、誕
生日だろ」

「ええ、お気遣い感謝します。では先に失礼します。」

と行って彼女は帰っていった。

さてさて、だれを喚ぼうかね？

執務机の上にあるパソコンの電源をつけ、検索エンジンを作動する。

テクノロジーを発達した世界で、ファンタジー関連でゲームや小説
が人気がある世界がよい。

ENTERキーを押して検索する。

やべえー————

「該当者210人出ました」と出ている。

何々、中学生、中学生中学生中学生中学生中学生中学生中学生中学生
生……………

中学生ばっかじゃん。当たり前か……。

もう、面倒い……………

210名の名前をトラックして転送の中へ入れる。

ただの転送ではない。そのまま210名を「P132564」に直に転送するといったとんでもないものだった。

「あーはっはっはははははは……」課長は笑いながら、執務室から出て行った。

番外編 神である課長の憂鬱（後書き）

210人+ （不正規で魔法で呼ばれた勇者を指す）の勇者が放たれた。

彼らGroup6はどうなる？勇者は敵か味方か？

予告見たいにしたかったけどうまくいかないなあ……。

次からT51b冬用パワーアーマーを出します。

フォーアウトのゲーム世界から出します。

どのような展開になるか……ふっふっふっふ……

「第17話 アンブッシュそして殲滅」(前書き)

更新遅くなってすみません。

なにぶん学生なもんで中間試験がありましてハッハッハッハ・・・
・(泣)

今日部活あるのにこんな時間まで起きてしまった。死ぬだろうなW

WW

ちなみに、自分は運動部です。そのうち、そのネタ引っ張り出します。

「第17話 アンブッシュそして殲滅」

「アデル隊長、全隊準備完了しました」

彼の後ろには、騎馬兵、鎧を着た重装兵、中国が正式採用していた95式自動歩槍や03式自動歩槍、中国製AKやアメリカ製M16など疎らな武器を装備した兵士など総勢200名ほどの部隊が隊列を組んで命令を待っている。

それを率いていたのは、アデル・バヨン・アブルケル。

彼は、アブルケル家で5代目の騎士あたる軍人家系の生まれだ。部下からの信頼も厚く、元中国人民解放軍の研修をうけ、現代の戦術を取り入れた、戦国時代の織田信長のような人物だ。

彼はこの大部隊、ビルコラク騎士団第2隊の隊長だった。

もうすぐ夜明け。日が昇り次第、重装兵と銃兵を展開させ、殲滅する作戦だ。

3隊の生き残りの報告によると、一個分隊程度の兵士が3隊を壊滅させて、他民族を救ったらしい。装備が国連軍らしいが、青いヘルメットを被っていない。大使館によると、ここに部隊を派遣してはいない。

たまに、国連軍が来ることがあるが、不可侵条約を結んでいて友好関係を保っている。

それを破ってまでここに来るにはリスクが大きすぎる。

では一体どこの国だ？

南アフリカやブラジルなどの国連加盟国は派遣するには遠すぎる。あの村には戦略的価値はなく、あるとすれば敵国「クシャナ王国」の使節を迎えに来た某国か？

3隊の生き残りも使節を見つけ、元老院の極秘任務でつれてくるよ
う言われていたらしいが、あの隊長は命令無視したらしいな。

報告によると、処刑しようとして遠くの敵から撃たれたこと。奴
らしい最後だ。貴族としてはクズ以下だったからな。部下はかわい
そうだ。

確か副隊長はフィル教官だったか。

研修時代は、お世話になって師として慕っていたが、かなり落ちぶ
れてしまったようだ。生死は不明だ。脱出したしたか、もしくは・

・・・。

「アデル！どうかしたか？」ふと見ると、副官であるアルフォンソが不安そうな顔をして聞いてきた。

「すまない。少し考えことをしていた。」

「フィル教官のことだな。」

アルフォンソは、私の同期で、一緒に研修に参加した。一足先に出世してしまったので羨ましがっていた。唯一無二の親友だ。

「大丈夫だ。俺は前線行っているから、お前は弾が届かないところで指揮している」。

上官に対して「お前」はない。だが、友情で結ばれている2人は気にしない。

「ああ、司令官が戦場に赴くのは危険だとフィル教官が言ってたな」

「俺達には、前線に行きたがる癖があるとか何とかで。」

「夜の町にも行きたがるのかもな！」

と言って仮司令部のテントは二人の笑い声が響いた。

中にいる通信兵は苦笑している。

研修時代は、2人で夜の街に繰り出したりして、教官にたびたび起こられることがあった。まあ、二人ではなく、時々3人になることもある。

そのあと一人というのが、フィル教官である。

「じゃあ、行ってくる」とテントを後にした。

それが彼の最後の会話になるともしらず。

「第二銃小隊は左翼に展開。第一銃小隊は右翼、第三は俺に続け！」

整列していた兵士は一斉に動き出し、待機場所に移動する。

「第一重装小隊は、第三銃小隊の前に展開。急げ！」。

第一重装小隊は、大型の鎧を身にまとい、その鎧にセラミックブレ

ートといった防弾プレートを付けた代物で大型の斧や大剣を装備した危険な兵である。

噂では、半分獣人の血が混ざっているらしい。

「アルフォンソ副隊長。馬には乗らないんですか？」

そう聞いてきたのは、新兵らしき兵士だ。まだ若い。考えてみれば、兜に赤十字のマークがある。ああ、衛生兵か。どつりで変な質問するわけだ。

中国軍の講習には参加していないからな。

「君、名前は？」

「ジャンニ衛生兵です。」

「そうか、ジャンニ。もし、指揮官が死んでしまったらどうする？」
「どうするって言いましても・・・」

「敵は遠くの敵を正確に殺す武器を持っている。弓よりも正確で風にあまり左右されない。しかも、殺傷能力の高い。敵の指揮官が馬に乗って指揮をしていたら狙いやすいか？」

「はい」

「君も気を付けることだ。どこから撃ってくるかわからないからな」

ジャンニ衛生兵は、青ざめた顔で下を向いていた。これが初戦。彼にとって初舞台だ。

「なに、心配するな。衛生兵は隊の後ろにいればいい」

そういうと、少し顔色が良くなり、隊の後ろ側へ走っていく。

俺も昔はそうだった。

このヴィルコラク騎士団、第2隊の9割が元人民解放軍の講習を受けており、現代兵器をある程度理解した兵士達で小銃などが扱える。

帝国軍は連絡手段として魔法石の「伝達石」と呼ばれる者を無線機を改造したものに付けている。無線と同じように使用でき、今のところ、通信を妨害することはほぼ不可能だ。

無線の技術は中国の技術の応用である。

「全小隊配置に着きました」

甲冑と一体化させた無線機を身につけた無線兵が報告した。

もつすぐ日の出だ。

無線兵からマイクを取り、送信ボタンを押す。

297

「全攻撃部隊に命ずる、これより敵部隊の掃討作戦を開始する。第一、第一銃小隊は村を包囲。第三小隊は第一重装小隊の後方から前進せよ」

(いちからRED1了解)

(いちからRED2了解しました)

無線のスピーカーからは無線兵の報告が聞こえた。

「第一銃小隊、攻撃準備完了しました。」

「第一重装小隊、いつでも行けます。」

二人の伝令が報告しに来た。

「重装小隊は先陣を切って前進、危うかったら銃小隊に任せろ。銃小隊は後ろから前進。重装のバックアップだ。」

二人の伝令は敬礼をして去っていく。これも講習でやるよう命じられたものだ。

指揮官用の冑を被り、防弾プレートを仕込んだ甲冑を点検する。脚に巻いてあるホルスターには、指揮官自衛用のマカロフ拳銃が入っていて、動作確認をする。転移門ができる前は自衛用に剣を装備していた。

これも彼らの指導があつた賜物だ。今では元中国人が国内の工場で武器、弾薬を製造している。

もしも、この世界の半分が雪に覆われていなかったらオーストラリアやその他国連加盟国に攻撃を受けていただろう。氷河期といったか。ゆきに覆われる前はここに大国があつた。「日本」という国だったか。

他の国連軍と同じく銃を装備しているが、昔は刀を持ち、「侍」という戦士が国を納めていて我が国の騎士道のようにその国をも「武士道」というものがあり、洗練され、屈強なる戦士だったと聞いたことがある。

だがそれも昔の話、オーストラリアに行く機会があるならば、日本人街に行つてそのことを調べたいと思つた。

「部隊は敵を索敵中、3隊の兵士の死体を発見。その中に、外見からして指揮官であると思われれます。」

その言葉に動揺した。

その指揮官の屍は、3隊の隊長かもしれないし、かつての師匠であるかもしれない。だが彼は生きているはず。そんな簡単に死ぬわけがないのだ。

「俺も見に行く。ここ頼んだぞ。」

待機していた残りの重装小隊は敬礼して、見送っていた。

村の中はひどい有り様だ。村人の死体が散乱して臓物が散らばっている。しかも、所々子供の死体らしきものが転がっている。

いくら多民族でもここまでする必要はない。

我々の多民族掃討戦はもつと優しいのだ。抵抗する兵をなぎ倒しては行くが、戦わないものは逃がしている。いくら、神に使えていて信じていようと耐えられない。

だが3隊隊長は貴族でありながらも殺人を好む、常人から逸脱した存在だ。

元々、3隊は精鋭の歩兵部隊であった。首都では式典のパレードに参加する程の部隊だ。

クシャナ軍がジャングルで奇襲攻撃をして、それを臆することなく突破したのが3隊だ。数々の戦歴を持ち、わが軍でも最強と謳われたこともある。

屈強の兵を持つ3隊は最強の称号を持つのにふさわしい。

だがその最強は一ヶ月前に途切れてしまった。

一ヶ月前に近くにあった敵の砦を殲滅するために3隊が派遣された。

簡単に敵の砦は陥落すると考えられていた。

だが敵であるドワーフは掘り出した武器を使い、応戦した。

大規模な白兵戦を得意としている我々に銃などの飛び道具は天敵に等しい。

10日間におよぶ激戦が続き、砦は陥落した。

およそ300人いた部隊の7割が戦死し、この戦いで部隊長は敵の攻撃を受け戦死した。

敵は武器貯蔵庫を見つけ、その中にあつた小銃を使って応戦していた。その数1000挺。

白兵戦が主流な3隊にとっては致命的で、もしかしたら全滅していたかもしれない。

だが、ドアーフは武器を手に入れたものの、弾薬は20年間雪の中に眠っていた物で使用期限もとっくの昔に切れている。

全滅を逃れたのは、弾薬が使えず最後にはドアーフも白兵戦に望んだ。

それが勝因のひとつであっただろう。

3隊は崩壊寸前、普通なら解体され、他の隊と合流してもよかつたのだ。

そこに漬り込んであいつが来た。

あいつというのが今の3隊の隊長だ。そして、そいつは俺の目の前

に眉間を撃ち抜かれ屍となっている。

「眉間にズドン、即死です。痛みも感じないで死んだのでしょう」

古参兵であるエリクソンが苦い顔して答える。

それもそのはずだ。こいつは周辺で死んだ兵士や村人よりもましな死に方だ。

まわりにいる兵は顔がなくなっているやつもいれば、甲冑が砕け、内臓が飛び出しているものまでいるのだから。

すると左翼に展開していた第二銃小隊の方角が爆発した。

(こちらRED2！敵からの攻撃！待ち伏せです。ここ周辺に爆弾らしきものが仕掛けられている！)

(こちらRED1、敵から攻撃を受けている。RED3周辺から狙撃されている。、、至急狙撃手の排除を、、ジョツシュ！しっかりしろ！伏せるんだ！)

(こちらRED2！被害甚大！敵は大砲で攻撃している。退却する。)

左翼側からは爆発音が聞こえ、右翼側は叫び声と銃声が聞こえた。

「銃小隊は前方にでて、狙撃手を探せ。」

「副隊長、あれを！」

ヒルドレンが指差した方向には白い鎧を着て、顔を覆う兜をつけ、手には銃のようなものが握られていた。自分の部隊にあのような兵士はいない。しかもそいつは、銃口を沢山つけた銃を持っていた。

そうだ。あれはヘリコプターといった空飛ぶ機械に付けられていた。かなりの破壊力を持つミニガンと言うものだ。

白い鎧はこちらを向き、銃口はこちらに向けた。

「隠れる！」

アルフォンソは叫んだが意味は無かった。

しろい鎧、冬用パワーアーマーT51bはミニガン「M134」毎分5000発を誇る7、62?弾を放つ最強とも詠われる機関銃で、彼らを襲った。

血が飛び散り、肉が飛んでいく。撃たれた兵士は一瞬にして意識が

飛び、痛みすら湧かない。当たらなかつた兵士は底知れぬ恐怖に襲われた。

遮蔽物となるコンクリートや車のドアなどは粉々に碎け、隠れている兵士に突き刺さる。

アルフォンソは攻撃にさらされながらも、我に還つた。隠れていた場所はコンクリートが厚かつたのか穴は空いていない。

道を挟んだ向こう側には腹を引き裂かれたヒルドレンをエリクソンが止血をしようとしている。

「助けて・・・・・・・・タスケテ母さ・・・・・・・・」

「おい！死ぬな！衛生兵！！！！」エリクソンは懸命に助けようとしているが、ヒルドレンはもう虫の息だった。

第3銃小隊はもう5、6人しか生きていない。

「突撃！！！！」誰が連れてきたのか重装小隊が一列縦隊で突撃し、駆けつけた第4銃小隊が援護射撃をしながら走っていく。

だが彼らは自分達が着ていた鎧を過大評価していた。防弾プレート
を仕込んでいても、無力に等しかった。

パワーアーマーは対弾加工されているのか弾かれていく。

引き金を引き、人間を肉の塊に変えていく。

その第二制圧射撃でアルフォンソの隠れていたコンクリートは砕かれ、アルフォンソは一瞬に意識が飛んだ。

「あと10m、5、4、3、2、1・・・点火！」C4爆薬のスイッチを押して、敵の居る廃屋を吹っ飛ばした。

ここは、村から離れた廃ビル・・・・・・・・・・廃ビルと言うがビル遺跡といってもいいぐらいだ。

ストライカー装甲車とハンヴィーをビルのなかへ入れて隠れている。

312

富田はフォールアウトというゲームで出てくるパワーアーマーを着て、ミニガンを持っていった。課長に頼んでゲームのセーブデータから取り出して使っている。

溝口は某狙撃手映画で出た全自動の狙撃銃を。

全自動（マウスを動かしかクリックするだけ）だから腕が悪くてもへ

「つちやらなのだ。しかも、溝口は迫撃砲を持って行って、俺が爆破しても敵が包囲してくるようだったら撃つてもらおうよう頼んだのだ。」

「なに？実物の全自動狙撃銃はそんなものないって！？」

「これは神製だ。そんなことは気にしない。」

「すごい威力ですね。」そう聞いてきたのは俺の頬を平手打ちしたリザだ。

あ の とき、彼女は自分を襲ってきた暴漢だと勘違いして脚で股間を蹴ろうと思ったが足がでなかったため、平手打ちを食らわせたのだ。

だが、彼女はその時、甲冑を身に付けており、すね当てとブーツを着けていたために蹴られたらつぶれてしまうだろう。男としての人生がああとき終わってしまうのかと思うと震えが止まらない。平手打ちでよかったと思う。

「さて、戻りますか。」

「なにもしないの？」

「すると言ったって、逃げる敵兵士に撃つなんて武士道に反する。」

そついうと、なぜか皮肉ったような言い方をした。

「へー……でもあんな武器を使って騎士道とか関係ないんじゃない？」

「戦いつてのは命を掛けることだろ。出し惜しみして、死んだら、元も子もない。戦いで手加減することは死と隣り合わせなんだよ。怪我人や子供や老人、一応捕虜の部類に入る君たちの命を背負っていたら手加減できないよ」

無線式点火装置を空の弾薬箱に入れてストライカー装甲車の後部ハッチを開く。

ハンヴィーに積み重ねられていた武器弾薬もろもろは、このストライカーの前方に積み重ねられていて、後方ハッチを開くと4人ぐらい座れるスペースがあり、二人ぐらいなら余裕で寝ることができる。

既に寝袋が引かれており、夜中行軍するため、このスペースに交代交代で寝るつもりだ。

隅にある収納スペースにはコーラの缶が入っている。気温が低いためソのままでも冷たい。

彼女を装甲車の椅子に座ってもらい、収納ボックスからコーラを出した。

君の瞳に乾杯 何て言えない、コーラの缶を手渡すと彼女の手は温かかった。

無論、機嫌を直すためさ

「あ、ありがとう……」そう言ってどこを開けるか分からなかったため開けてまた手渡す。

プルタブを開けて、プッシュと炭酸が吹きだし、コーラの匂い。

黒い泡が発っている液体に最初は警戒していたが俺が飲んだのを機に缶に口を着けた。

口の中に入った刺激と爽快感。飲んだ時のキレのよさ。まさに清涼飲料の完成形といってもいい。

洗練された究極の炭酸飲料だ。

生前は一週間に一回位炭酸飲料を飲んでいる。だからこう言った感想を出来るのだが、、、、

「ゴホッ、、何ですかこれ？」

どうも彼女の舌に合わなかったらしいな。

むせてしまったらしい。

「生前好きだった清涼飲料。シュワシュワしてるだろ。あんま美味しくなかった？」

「

刺激が強すぎます。」

俺の友達にも炭酸が苦手な奴がいるが彼女もそうだったか……

「そうか。ほかにもあるけど飲む？」

「いいえ、でも……」

と言って言葉を詰まらせてしまった。

装甲車のなかでグ〜と音がする。どうやら俺の腹のおとではないらしい。

下を向き、腹を抑えて顔が真っ赤っていた彼女がいた。

急いで、収納スペースから電子レンジで作るサウのごはんを取り出し、一番端にある小型の電子レンジに入れて3分半待つ。

電子レンジの調理終了のベルがなり、食べられることを告げた。レンジを開けてサトウのごはんをあけてごはんの香りが鼻を抜けた。

電子レンジはあると便利なので搭載している。そのほか、プラズマテレビや冷蔵庫、WINDOWSのパソコンやP3やらXBXやら……おっとっとこれくらいにしておじつ。

食料の段ボール箱からごま塩の袋を取り出し、少しかける。これで完成！

「ギョウゾ」

それは単に一合のご飯にゴマ塩をかけただけの代物。

よくこれは受験の時世話になったなあ………（作者談）

彼女は箸は使えないのでスプーンを添えておく。

「じれは？」

「故郷の主食である米に塩とゴマをふりかけたものだよ。てか、さ

っきのカップラーメン食べなかったの？」

「それは……凍っていて……」

「い、凍っている?!」

確かにここは寒い。だがスープが凍ることなんてあるのか？

「あのあと兄のところに行ってたら寝ちゃって……」

ああ、眠くなって寝ちゃったのか、、、そう言えばオヤッサン（フイルのことである）と兄弟だったそうだが戸籍を写しただけで血は

繋がっていない。

ん？

ちょっと待てよ。物好きじゃなきゃ女性が軍隊に入るわけない。兄のためとはいえ、そこまでやるか？

血のつながってないわけだから、恋愛関係とかあるかもしれないし……寝てたつてことは……

「ど、どうしたの？」リザがこちらの顔を覗いてきた。

顔めっちゃ近！！

「う、うん、なんでもない」

「？」とこちらを見ている。頭にハテナマークが付いてそうダヨ。

(こちらEagle 2。Eagle Leader聞こえるか?)
装甲車の運転席にある無線機から溝口の声が聞こえた。

「それ持ってちよつとこっちに来て。」そう言って後部ハッチを開けて運転席に乗り込む。

「私も乗る」

「反対側から入って!・・・って言うてるだろ!」

彼女は強引に運転席から助手席に行く。かなりの至近距離。彼女の髪の毛の香りが俺の心を刺激した。

相手は異国の美女。しかも金髪。

高校2年生でもこれはちよつと・・・。。スペックが違いすぎる。

「シートベルと閉めて」

「何それ？」

シートベルトの意味がわからなかったようだ。急いで自分のシートベルトを外して、彼女のベルトを付けて無線のスイッチを入れる。

（こちらEagle Leader。溝口狙撃手聞こえるか？）

（聞こえているよ。迎えに来て欲しい。富田が暴走気味だ。無線でCALLしたんだが、笑い声しか聞こえてこない。麻酔銃を用意したほうがいいだろう。あと催涙ガスとか・・・）

どつやら、富田は覚醒したようだ。でも、アイツそんな奴だったか？

（さっき廃ビルの周りにクレイモア地雷をセットしておいた。彼らには一歩も廃ビルから出るなど言っておいた置いてある。周辺にはガンサイファーを5、6機浮かせてある。必要なものだけ持ってはやく行くぞ。）

エンジンを駆け、スタートした。キャタピラー社製の3126ディーゼル・ターボエンジンは、排気ガスを噴出し、18tもの巨体を動かした。

「これは……」戦場というものは、人間が知力、体力、精神力など全ての力を限界まで出し、殺しあう。これは、自分達が生まれる前にもあったことだ。

目の前にあるものは、戦場というよりも処刑場のようだ。しかも、たくさんの人を殺すための。

彼らを助けたときは、こんなに死体は散らばっていなかった。まばらだった。だが、この通りを見てみると屍の山。肉片があれば、内蔵もあり、ピンク色のたんぱく質でできた脳の破片まである。

装甲車から降りたとき、死体の匂いで吐きそうになった。人間が焼ける匂い、腐ったような匂い、血の匂い。

だが、この匂いを吸わなければならない。俺達がやったことだから。

俺達のせいなのだから。

手に持っているショットガンのスパス12に暴動鎮圧用のゴム弾を装てんする。背中にかけていた、ダネルMGLグレネードランチャーに催涙ガス弾と睡眠ガス弾を3発ずつ装てんする。

最後にホルスターに入っているM92Sを取り出してスライドを引く。中は実弾。もしものためだ。何かの役に立つであろう。

目標はゲームの世界から輸入してきた冬用パワーアーマーT51b、ミニガンを装備している富田。奴は俺の大切な親友だ。

「第17話 アンブッシュそして殲滅」(後書き)

誤字脱字、感想、意見・・ございましたらよろしく願いします。

それと、某狙撃手映画ってわかりました？

「ザ・シューター極大 程」です。うちに原作ありまう。

原作読んでみるとおもしろいですよ。

それと、やっぱこのタイトルじゃあ人来ませんね・・・(涙)

ご迷惑掛けるかと思いますが、またもタイトル変えさせていただきます。かえる期日は未定ですが、変えていくことは確実です。

ですから、タイトルについての要望などお持ちしている所存であります。

よろしく願いします！

「第18話 戦友」(前書き)

修正する前はちょっと変な感じでした。

深夜に書いてたからなのか？

「第18話 戦友」

目標距離200m。

目標の武装、「M134ミニガン」、T51bパワーアーマー装備

ダネルMGLグレネードランチャーの安全装置を外し、引き金を引く。

この村にはもう敵兵士はいない。だから存分に戦える。

ダネルMGLに入っていた催涙ガス弾は放物線を描くようにして富田の近くに落ちて、煙を吹き上げる。

「ははははは！みんな死んでしまえ！」富田はミニガンを撃ちながら叫び、笑っている。

何か悪いもの食べたかな？

何かストレスでも……いやいやいやいや。

パワーアーマーは催涙ガスを通さない作りになっているのだろう。
ぜんぜん苦になっていない。

睡眠ガスもダメだろう。

(こちら溝口、今富田を見てるんだが……変なもの見え
ないか？)

(え？)

小型の鏡を取り出して、富田を見た。富田の姿に黒い不気味なオー
ラが出ている。これが不のオーラなのか？

(あの、2人とも聞こえてますか？)

その声はまさしくリザの声だ。どうしたのか？

(聞こえてるけど、どうしたんだ？ ツーか、なんで無線が使える？)

(見よう見まねで……。それとあの人のことなんですが)

(富田のこと？)

（はい、多分アレは洗脳魔法だと思います）

（洗脳？）

洗脳とは外部隔離、尋問、暴力、薬物など強制的にあたまの考えや思想、行動などを変えてしまうことである。

（はい、笑いなどを強制的に引き出し、戦闘を向上させている。これは感情の改ざんとコンバット・ハイを作り出している。この近くに術者がいる筈だから。術者もやっつけてしまえば、魔法も解けるかと）

だが、敵はどこにいるかだ。周りにいるとしたら脅威となりかねない。

333

「見つけた！」。無線に気をとられ、周辺に気をつけてなかった。

富田は、バーサーカー状態でミニガンにアイドリングを掛けていた。

富田は、ミニガンを発射して俺を挽肉にしようとした。

「冗談じゃねえ！」

背中に掛けたスパス12を取り出し、セミオートにして富田に撃ち込む。

パワーアーマーと言えど、暴徒鎮圧用のゴム弾に当たれば、地面に倒れる。

その隙を突いて、奴のミニガンのカートリッジに銃で穴を開け使えなくする。銃弾に当たったカートリッジは中に入っていた弾薬が爆発して、ミニガンは使えなくなった。

次にそこらへんのポールに縛り付けておく。これで術者はこれでもう富田を使うことはできない。

「放せー・・・はハハハハ・・・ぶっ殺してやる!」

こんな魔法を編み出した魔法使いは間違っている。

(こちら武藤。富田を確保した。これより・・・)

(疾風!後ろだ!)

後ろを振り向くとつむじ風にのった黒いマントを来て、杖を持った少年がいた。

「ブレイン・ウォッシュャー!」

少年は杖を俺に向けて振り下ろし、杖の先から黒い電流の塊のよう

なものを飛ばした。

ホルスターからM9を取り出し、塊に撃ち込む。だが弾はすりぬけ、効果がない。

体をくねらせ、回避した。すると塊は地面に吸い込まれるようにして消えた。

「この野郎！」M9を少年に向け、2、3発発射する。

「フレイム・ウォール！」手のひらをかざして、火の壁を作り出して弾丸を防いだ。

これが魔法なのか？

「弱い……ははは、弱いよ兵隊さん！」

少年はあざ笑うかのように指を指す。少年を良く見ると、黒いマントではなく、学ランだ。

ちなみに、名札も付いており、「3年6組 緒方」と名札に書いてある。こいつも転移者か。

しかもこの口ぶりから察するに、中二病患者だろう。しかも重度の課長が送ってきた210人の中の一人か。面倒な奴を連れてきてしまったな。

「あんなに人を殺したんだ。あんたも死んで償え」

手を銃の形にして、こちらを向けた。

「ばん」そういつと、指から光が飛び出し、当たった材木を焼いた。

「ばばばばつばばばばばばん」レーザーを連射し、急いで遮蔽物にお身をよせる。

「中二病患者が！ふざけんな！ナルシストめ！！」そう叫びM9を撃つ。

中二病患者とかナルシストと言って切れたのか、顔が真っ赤になっている。

「お前らのような軍事ヲタに言われたくねえ！さつさと死ね！軍国主義者め！」

「ファイアー・ボール！」奴はそう言って、手から赤い炎を出し、俺を撃った。

近くにある小屋に走り、雪の中へ潜る。間一髪、雪に潜ったおかげで大やけどを負わずに済んだ。

「クソ！逃げやがったな！どこに行った。出て来い！」そう言って出てくる奴はいない。

弾薬はM9の9mm弾一発しか残っていなかった。

他は攻撃を逃れるために捨ててしまった。

(溝口、奴はどんな感じだ)

(お前の上の屋根から、周りを燃やしているよ。リザのいる装甲車には気付いていないが時間の問題だ)

ここから離れたところに装甲車を止めてある。だが見つかるのも時間の問題だ。

何か無いものか？

ふと腰を触ると、円柱型の物体が付けてあった。

書いてあったのは「M18 SMOKE GRENADE」いわゆる軍用の煙玉だ。

これでいいことを思いついた。

「この野郎！焼き殺す！！」

同じクラスの中に奴らのような軍ヲタがいたはずだ。そいつは似た趣味を持つ奴らと固まっついていてもミリタリー系の話をしていた。アメリカ軍とか自衛隊がどうのとか訳のわからない話だ。

そいつを非難するとこんな言葉が返ってくる。

「兵器、武器は人を殺すための道具だが、人を守るための道具だ」とか抜かしやがった。

俺の仲間と何人かで転校生のアイツを殴っていた。

無論、アイツが軍事ヲタだったからだ。アイツは半年後に転校してしまったが、もう3、4年前のことだ。

ああいったヲタクがいるから世界がだめになる。だから戦争が起きるんだ。自らが武器を持ち、人を守るうとしても、いずれは欲が出てしまうものだ。

それが、戦争につながる。

この村は、俺がいた世界のものをありあわせのもので作った建物が多く、アフリカの紛争地帯でよく見かけるような難民キャンプだ。

周りには、住んでいた人たちの死体や中世の甲冑を身につけ、剣を持っていたり、軍隊が持っているような銃を持っていたりと多種多様だ。

俺がこの地に来たとき、白い鎧を身につけガトリング砲のようなもので甲冑を身につけた兵士を撃ちまくっていた。

体は引き裂かれ、臓物が飛び出し血が流れる。

肉が飛び散り、骨が砕ける。

戦争ではなく、これは虐殺だ。

説明書のようなものを読んだ俺は、「洗脳魔法」と呼ばれる魔法を使い、あの白い鎧を乗っ取った。

(おい、富田大丈夫か！？しつかりしろ)

白い鎧から聞こえる声の中で日本人の苗字が聞こえた。この世界フ
ァンタジーだよな？

説明書には、俺が操作する方法と勝手に動いてくれるものがある。

俺が操作するのは難しいので勝手に動いてくれるように選択した。

えっと、「操作方法はP1304ペー

ジ。自動及び感情の制御は・・・ああもつめんどくせ。」てな感
じだったわけ。

「フレア・ゾーン！」そう叫び、半径5mは全て焼き尽くした。

意外と使える。あまり、ファンタジー系は得意ではないがこれなら
大丈夫だ。

つーか俺って最強じゃね？

足元の小屋に火がついたのだろうか。小屋からはなぜか赤色の煙が
出ていた。

周りを見渡すとなにやら光が反射して……。

光のほうからは眩い閃光と同時に、何か飛び出し頬を掠め、耳たぶに穴を開けた。

「あああああああああああ！！！」

痛い！　耳が引きちぎられた感触と焼けている感触。

クソ！あそこにいるのか！

殺してやる！殺してやる！

「動くな」

後ろから声が聞こえた。どうやら、銃を向けられているらしい。だが、すぐに逆転勝利を決めてやるさ。

「そのまま、膝を突いて手を頭の上に」

言う通りに膝を突いて、手を頭の上に載せた。制服のズボンがぬれるが気にしない。後で、乾かせばいい。

すると、銃を向けている奴は両手にプラスチック製の手錠を付け始めた。てか、これじゃあ魔法使えない。

「どこの中学だ？」

銃を向けた男は俺の目の前に立ち、そう尋ねた。

「どこでもいいだろ」

「ほとんどは俺と同じ世界から来た人間が多いんだが、1995年生まれか？」

「違う、1993年生まれだ。」

「なに？俺と同じじゃないか！」男はそう言ってヘルメットとフェイスマスクを脱いだ。

男と言うが俺と同じぐらい歳の奴だ。なんか腹が立った。

「あんたも勇者か？」

「いいや、もつと上の類だな」。上の類？レベルが高いつてことか？ゲームじゃあるまいし。

「俺は2010年からここに来たが、何年ぐらいの人間だ？」そいつは俺に聞いてきた。

「2007年だ。それで俺をどうするつもりだ？」

これを聞かないと不安だ。

「お前は俺の親友を殺そうとした。だから、それに値することを
するつもりだが」

どうやら、死亡フラグが立っただけらしい。

「あんたらが人を殺していたから、とめようと……」

「俺は仲間とここにいた人たちを守ろうとしただけだ。人を殺すの
に手加減が必要か？手加減したら自分達、民間人をきけんにさらす
んだよ。平和主義のお前さんには悪いけどお前も人を殺そうとした
んだぜ？」

「準備できたか？」

何の準備だ？

いや、分かり切っている事か。

「……………」

奴は銃の動作を確認しているのだろう。ガチャガチャと音がする。

「悪く思っちなよ……………」

村に一発の銃声が響いた。

敵の攻撃から3時間後……。

派遣2日目、8050時

「アレでよかったの？」

ストライカー装甲車の中で助手席にいたりザが聞いてきた。

戦闘のあと、富田は意識を取り戻して、荷物をまとめて東に向かって車を飛ばしている。俺はストライカーを運転して、溝口はハンビイーを運転していて、以前荷物があつた場所は負傷者二名（エルフの美女とおやつさん、エルフの彼女はいまだ意識がもどらず。おやつさん、フィルは足がまだ治っていない。）のベットを作り、残りの後部座席をドクターとダンを座らせている。

富田はストライカーの後部座席の寝袋を使い寝ている。ゲームの身体能力があるといえど、二度の戦闘と魔法により乗っ取られていたダメージは大きい。

俺達も結構疲れているんだが………。まあいいや。

GPSのナビゲーションシステム（よく車に付けられているあれ）を頼りに東に向かっている。

GPS衛星は飛んでいるらしく、異世界の実感が沸かない。それもそうだろう。一面銀世界。しかも出会った敵はビルコラク騎士団、中国製の銃や無線兵がある部隊と遭遇してしまったのだ。そりゃ沸くはずもない。唯一実感が沸くとすればエルフの美女ぐらいだろう。タイプではないけど……。

「ねえ、聞いている？」リザが顔を寄せ、至近距離で迫ってきた。今被っている戦車兵用のヘルメットが無ければ、唇が触れてしまう近さだ。思わずブレーキを踏んでしまった。

（おい、疾風。どうした？）溝口の無線に少し驚いてしまった。すぐに、無線機のマイクを取った。

（いや、なんでもない。今、ペンを落としちゃって踏みそうになった。スマンスマン……）

そう言った答え方に溝口はため息をこぼし、「しっかりしろよ」「な」と言いながら無線を切った。

「ねえ、聞いているの？」

「ん？なんの話？」

「だから、あの魔導士をどうしたかって聞いているの？」

「ああ、そのことか……」

そんなことだったのか。俺はてっきりこ……いやいやいやなんでもない。

俺がどんなことをしたかなんて決まってる。

「逃がしたよ」

「え!!!!!!!!!!!!!!」

「正確には眠らせたといった方が正しいかな」

俺は、あの魔導士、「緒方」といったか？そいつを殺さず、生かした。

「なんで？」

「そりゃ、あいつがまだ若いからだよ。あともうちよいすれば、見えてくるよ。」

「なんか、夜会った時と雰囲気違いますね。」

「そう?」

「そうですよ。なんか見直しました。」

「どこら辺を見直したの?」

「最初の印象は、女性を泣かすような最低な男だと思ってたけど、見直した」

「どんな印象だよ……」

「あ、そう」「こういった返し方しかできない。」

「最低な男と言われてへこまない男がいるだろうか?おそろくない……」

「つか、ちゃんと自己紹介してなかったような気がする。」

「俺の自己紹介がまだだったんじゃないか?」

「ああ、そういえば……」

「改めて、俺の名前は武藤 疾風。故郷ではこの名前だけど、ここでは疾風 武藤って言った方がいいかな。よろしく」

「そう言って彼女に言った。」

「私はリザ・アンデション。これまで通りリザでいい。よろしく」

そう言って握手した。

もうすぐ、富田と交代の時間だがもうちょっと続かないものか。

そして、息を潜めているストライカー後部座席では……

「くう！疾風の野郎！羨ましい。だったらエルフの子と……！」

「青春だねえ」

中年オヤジは自分の過去を思い出しているのだろう。そして、もう一人はある策略を練っていた。

「第18話 戦友」(後書き)

誤字脱字、御意見等ありましたらよろしくお願ひします。

次は登場人物紹介です。

「第18・5話 登場人物紹介」（前書き）

登場人物紹介です。

今のところ、このぐらいしか出ておりませんがもっと出るのだから
しく願います。

「第18・5話 登場人物紹介」

《登場人物》

武藤 疾風

身長170cm 60kg 県立高校2年6組登山部。
妹のせいで神によって異世界に派遣されることになってしまった。

富田と溝口とは小学校からの親友で中学1年生の頃から同じゲームにはまっている。

ゲームの能力を引き継いでしまったので戦闘能力が高い。

接近戦、中距離、近距離戦に向いている。

ポイントマン（偵察兵）の能力は高く、戦闘指揮能力も高い。

一応、ゲームの階級では中尉。

ゲーム中で獲得した特殊能力は「衛生兵」

仲間思いで仲間が倒れたらすぐ助けに行ってしまう。現実主義で普通の高校生では考えないような哲学的な名ことを語るときがある。女子に弱い。また、妹と言う言葉に弱い。

富田 亘

身長168cm 57kg 2年6組弓道部

疾風と同じように神に派遣された。

戦闘能力を引き継いだため戦闘能力が高い。

遠距離・中距離戦に向いている。狙撃手としての能力は高い。

ゲームの階級は少尉

特殊能力は、「狩猟の名人」。

弓道の能力も高い。

沈着冷静で学校ではポーカーフェイスだが、溝口や武藤と3人になるとポーカーフェイスではなくなる。子ども好きである。3人だけになるといじられキャラに・・・

溝口 明夫

身長180cm 65kg。2年6組情報処理部

2人と同じように神に派遣された。

戦闘能力が高い。

近距離・中距離戦に向いている。機関銃手としての能力は高い。

特殊能力は、「ハッカー」

ゲームの階級は少尉。

某蛇のゲームの主人公の声優さんのファーストネームが同じで、そのためスネークといったコードネームをゲームで使いたがる。

以外と図体がでかいのにこれでも情報処理部でたまに柔道部に間違えられる。

そしてヲタクでもあり、趣味に一途である。また、生前の自分の部屋に自分のフィギアを置いてきたのを後悔している。

疾風の妹の下着を盗んだことがアル。

だが、必ず殺されている。

神（課長）

武藤達3人を異世界に送った張本人。外見は中年親父のようにも見えるが、かなりの老齡。実年齢は……「歳だつて？言つたつて信じてくれないよ」と。

武藤の妹にボコボコにされるが、本人曰く「かわいい子にボコボコにされるなんて……」と抗わなかつたそうだ。

世界管理局破損世界修復課に勤めている。

武藤の妹、（武藤 美緒）

武藤疾風の妹。中学生で、某蛇のゲームの主人公やなぜか列車のコックをしている元特殊部隊隊員位、戦闘能力が高い。

3人が死んだのはコイツがいたおかげでもある。

今は「鋼の錬金 師」の世界へ行っている。

リザ・アンデション

身長165cm、16歳

ガリビニア帝国軍ビルコラク騎士団3隊の衛生兵をしている。

16年前にフィル・アンデションに助けられ、妹として育てられている。

2年前に帝国の横暴のおかげで本当の両親が殺されていることを知り、帝国で信仰している宗教を嫌う。

兄思いであり、武藤の妹とは正反対。料理が美味い。

フィル・アンデション

身長180cm、45歳

ガリビニア帝国軍ビルコラク騎士団3隊副隊長をしている。元は、国連軍所属元オーストラリア陸軍、ロイヤル・オーストラリア連隊第34大隊、アレクシス・パートリッジ少尉と名乗っていた。2034年の旧イラン領内で残留放射能チエック中、エルフの軍に攻撃を受け、原隊が全滅してしまい、帝国軍に助けられ一命を取り留める。助けられた後、国連の元兵士だと言うことで、ビルコラク騎士団に入団し、出世コースまっしぐらだと思ったができない上司にぶち当たり、上司を殴ったことから左遷してしまう。

戦闘能力は高く、指揮能力も高い。

ヘビースモーカーで愛用なのは、「Lucky Strike」である。

余談として、15歳の頃、日本人街（日本から避難してきた人が作った町）で焼きそば食べて、大好物になった。

今でも忘れられず、時々作っているが死ぬほどまずい。

グループ6からは、「オヤツさん」と呼ばれることがある。

アデル・バヨン・アブルケル

身長179cm 24歳

カリビニア帝国軍ビルコラク騎士団第2隊の隊長である。自分の部隊に中国の武器など近代化を進めた織田信長のような人物ではあるが、そこまで野心家ではない。元中国人民解放軍が自主開催した講習（講習とは名ばかりの軍事訓練）に参加し、当時教官兼オブザーバーとしてフィル・アンデションに会い、師弟関係を結んだ。部下などに気を配り、貴族でありながら庶民など見下したりせず、部下から慕われている。

アブルケル家の次期当主で、高官になろうと奮闘中。

アルフォンソ・フィオ・シルバーバーグ
ガリビニア帝国軍ビルコラク騎士団第2隊の副隊長。アデルを友として支える人物。中国軍の講習にも参加しフィルとも師弟関係を結んでいる。

緒方 雄介

課長が地獄の脱獄犯を捕まえるために出した勇者。魔法騎士団の一個小隊規模の魔力を持っている。
バリバリの中学3年で、少し中二病にかかっている。

「第18・5話 登場人物紹介」（後書き）

特殊能力については19・5話辺りに出します。

ついでに登場兵器の紹介もします。

お楽しみに！

誤字脱字ありましたらよろしくお願いします。

「第19話 フリーズド・ハイウェイ」(前書き)

こんな時間までやってるのばれたら、怒られる。

「第19話 フリーズド・ハイウェイ」

派遣3日目、6010時

「ふあゝ…………よく寝た…………」寝袋から這い出て体を伸ばす。

背骨がなり、体が起きたことを知らせた。まずは顔を洗おう。

トイレに行って蛇口をひねった。

「あれ？水が…………」蛇口をひねっても水は出てこなかった。

それもそのはず、20年も前に断水なのだから。

え、ここは一体どこだ？と思うことも多いはず。

ここは、旧長野県自動車道駒ヶ岳サービスエリアだ。

富田を操っていた勇者兼魔法使いを倒し（ノーキル、つまり殺さなかった）、一日夜通し走らせた。それが良かったのか、追っ手は来なかった。現代兵器を所持した騎士団でも俺達にはかなわなかったのだ。だが、夜通し走ったためかかなり疲れたためここで野営して

いるのだ。

ここからは、旧上信越自動車道を走って日本の首都、東京に行くつもりだ。そこには港町があり、流れ者が来た町で貿易が盛んであるらしい。

なんで雪があつて車がスリップしないかつて？

神製だから仕方がない……。

「おはよう。」

後ろからタオルを首に掛けた溝口が眠そつな顔しながら来た。

「あ……水が出ない……」お前もやったか溝口！

「当たり前だろ！すっかりしろよ溝口！」自分の事を棚に上げた。

「じゃあ、なんでお前はここにいるんだよ？」

「……」それを言われてしまつと答えられない。

「二人とも朝っぱらから何やっているんだい？」

そう言ってきたのは、見事にスーパーサイヤ人と化している富田だ。そして……

「水出ねーな・・・」お前もか富田！

顔を洗うような生活用水が無いため、作ることにした。まず、そこから辺から雪を運んできてガソリンスタンドにあったドラム缶に雪を入れて火でとかし、お湯にする。

そして、建物の二階に同様のものを作っておき、下にブルーシートで囲んだ。

何をしているかわかるだろうか。

「生き返る！」リザはまるで砂漠から生還した生存者が水を飲むかのような台詞だ。

無理もない。彼女は16歳。日本にいるならば青春を謳歌しては
ずである。そして、我々は3日間ふるにはいっていないし、彼女達
イルコラク騎士団は近くの城から片道4日に来ていたため通算1週
間ふるに入っていないかった。

男ならまだいいのかもしれない。だが、彼女は女の子。しかも軍隊
だから男だらけ。川で水浴び（この極寒でできるのかどうかはとも
かく）しようとしても無理だった

「おい、疾風」と溝口がにやけながら俺をつついてきた。

「ん？何？」

「おまえ、リザちゃんとうまくやってるらしいじゃねえかよ、富田
から聞いたぞ」

富田はかなり嫉んでいる。なぜかという俺が7時位に交代したあ
と、リザは富田と話すこと無く、寝てしまったらしい。

たぶん派遣2日目の朝方に会話していたのを聞かれていた。だから
嫉妬しているのだ。

「してねえよ。お前はエルフの生き残りがタイプだろ？」

あの村を攻撃する際、助けようとしたエルフは、ずっと意識が戻らない。食事も出来ないから点滴をして栄養補給をしている。頭に外傷はなく、ドクターは……、

「多分、魔力がそこを尽いてしまったのだろう。魔力が尽きると意識を失い、最大まで起きることはない。彼女はあまり魔力は無いから2日から3日で起きるじゃろ」。

って事は、港町につくころには起きる計算になる。

奴は、起きたところを狙っているのだ。

「へっへっへ、じゃあお前はどうなんだよ」

「俺！？ 俺は……………」

リザは、ガリビニア軍の騎士団の騎士だし、オヤツさんとデキちゃっている可能性もある。だけど髪はロングで金髪だし、顔もかわいし……………スタイルだって……………

「どうなんだよ」

「もしかして、リザちゃんのことを……妄想？（笑）」

コイツに悟られてはいけない。

悟られてはばれてしまう。

中学校の時、コイツは俺の片思いの女子の名前をばらし、恥を書いた。多分、奴もそのつもりだ。

ここで抹殺してやらねば……………!!

「どうしたん？疾風??」

「こんのお野郎オオオ!!」

手を鋭くして溝にさした。

「ひでぶ!!!!!!」溝口は痛恨の一撃で宙へ舞い上がった。

積み上げられた凍ったダンボールに当たり、ガチャゴチャと音を立

てながら崩れて行く。

「疾風、どうしたの？」とりざがブルーシートから顔を出して様子を伺っていた。

「あー・・・なんでもない。溝口がふざけてハメはずしすぎたんで、掃除しておいた」。

「掃除？」

彼女は頭をかしげ、不思議そうに崩れたダンボールを見ている。

「ご飯の支度するから、先行ってるよ。」

「ありがとう。疾風。」そう言ってりざはシャワーを浴び始める。

ありがとうって言ってもらえたぞ。ヒヤッホオオオイ!!

「さて、ご飯の準備をっ」と

溝口のコートをつかみ、引きずって装甲車まで行くことにした。

これから、20分後、溝口は意識を取り戻したがシャワー室にリザが入ってから記憶が無いそうだ。

セーフ!!!!!!

「美味すぎる!!!!」某蛇のゲームの主人公がカローメイトやアミメニシキへビを食べると、感想としてそう叫ぶ。

今回叫んだのは、オヤツさんもとい、フィル・アンデションだ。

もつとも、黒毛和牛のステーキや大トロの刺身ではなく、ただの焼きそばなのだが……。

「おいしい！」

「ほおー、脂っこいが美味しいのお」

「おかわり！」

などなど大盛況だ。

「はあー、美味しい。兄さんが作ったのと比べれば……」

「そんなにまずいのか？」

「ええ、私の誕生日会の時に、こんな感じの焼きそば出したんですけど、食べた日と全員食中毒で。」

かなり問題だな。もしも、オーストラリア軍で糧食班にでもなったら……

戦う前に白旗あげそうだ。

いや、白くはならないな。トイレットペーパーの代わりに使われるな。

てか、オヤツさんなんで焼きそばのこと知ってるんだ？

「おやつさん、なんで焼きそば知ってるんだ？」

「だからオヤツさん言うなって。アルベリーの陸軍基地の近くに日本人街があつてそこで食べたんだよ」

北半球氷河期災害を乗り越えた日本人は1万人を満たない。彼らは、日本の国籍を持ちながらもオーストラリアに住んでいる。彼らは日本国籍を持ちながら、オーストラリアの国籍も取得している。これ

が出来たのは、日本とオーストラリアが親密な関係だったからだろう。

だから、彼らは店を出すこともできるし企業にも就職が可能。オーストラリア国防軍にだって入隊することが可能だ。

オーストラリアの国籍は期限があり、氷河期が終わって3年をめどにしている。俺たちがここに来たことで氷河期はゆっくりとなくなっていくだろうが日本はどうなってしまっただろうか。

370

すでに、異世界からは多くの人々が来ている。もし、氷河期が終わって、領土問題、人種問題、病気など様々な問題がある。

ここは、異世界と言えど、自分たちがいた世界と似ているとどうも考えてしまうのだ。

ちょっと重い朝飯を食べた後、食べなかつた焼きそばをタッパーに入れて装甲車内にある冷蔵庫にしまう。

生ゴミはその場で燃やし、シャワー室などの備品はハンビィーのルーフにくっつけておく。

「

富田、溝口。銃の点検頼む」

「了解」

「おう」

自分が持っていたアサルトライフルFN SCARのマガジンリリースボタンを押し弾倉を外して、チャンバーに入っている弾丸を取り出すため、コッキングレバーを引いて弾丸を取り出す。

次にテイクダウンレバーを引いて、機関や銃身を引き金の引き離す。耳かきのふわふわな部分にオイルをつけて銃身にいれ、ごみを取り除く。次は機関部に油を吹き付け動きを良くする。

ACOGサイトはアメリカのトリジコン社が作った近距離から中距

離で使用可能なサイトで非常に使いやすい。銃に装備していたそれは指紋や煤で汚れてしまったレンズを布でふき取った。

こんな感じで銃を整備している。生前はエアガンの整備すら間々ならなかったが、これではつきりした。

かなりめんどい……。

ソ連製でミハイル・カラシニコフが設計したAK-47は、過酷な状況でも正常に作動する傑作アサルトライフルで、イラクのテロリストやアフリカの民兵が好んで使う突撃銃である。実際、小学生や中学生などの年頃でも使うことができ、今このときでさえこの武器で多くの人々の血が流されている。

整備がしやすく、一番使われているアサルトライフルだろう。

今使っているFN SCARはアメリカ製で5.56mm弾と7.62mm弾が使える利点がある。

だが、AKと比べるとある程度の訓練が必要であり、AKにしておけばよかったのと思ってしまうのだ。

まあ、これから拠点を作っているいろいろな武器をつかっていけばいいけどね……。

「おい、疾風。俺のは？」こういつてきたのはオヤツさんだ。

そういえば、彼は、元オーストラリア陸軍の兵士だ。武器ぐらい必要だろう。

今の彼の服装は、ビルコラク騎士団の紋章の入った甲冑を着ている。多分防弾機能は無いだろう。ビルコラク騎士団3隊は、現代兵器は使用はしていないので防弾プレートは仕込まれていない。

だが、追いかけてくるであろう騎士団2隊は現代兵器を身につけた部隊であり、防弾チョッキやアサルトライフルを装備している。

この前のように蹴散らせばいいかもしれないが、流れ弾で当る可能性がある。これから仲間になるというのに武器を渡さないのはおかしいだろう。

「何使う？」

確かオーストラリア陸軍はステアーAUG やM16を使っていたはずだが？

だけど、今は2052年。俺達が使っている武器、兵器は時代遅れになっているかも……。

それと、リザとオヤツさんは寒くないのか？

ドクターやダンは厚着してるけど？

「そうだな、インターセプターボディーアーマーに冬季迷彩。AK

103、ガバメントと手榴弾を頼む」

後から聞いたが、氷河期災害後はあまり、銃の開発が活発ではなかったし、テクノロジーの発達もそこまで行かなかった。今でさえ、オーストラリアはステアー AUG と呼ばれるアサルトライフルを使っているし、レーザーガンだってあまり普及していないのが現状だ。

多少は進んでいるらしいが後ほど説明しよう。

パソコンの転送プログラムを起動し、おやっさんが言っていた装備をここに転送させた。

すぐに、即席テーブルの上に樹脂製のコンテナが4、5個ぐらい出てくる。

その中には、ボディーアーマーやら銃が新品同様に収められていた。

「よしこれで戦える」

そう言って、オヤツさんはマガジンポーチから弾倉を取り出し、A Kに叩き込んだ。

「じゃあ行くか！」後片付けを済ませた俺達はサービスエリアを後にした。

5時間後、1500時、圏央道、人間IC、臨時滑走路内

この滑走路は、今さっききれいにした臨時滑走路だ。廃車になった車やごみを取り除き、飛行機が飛べるようにする。

この滑走路にあるのは、RQ-1 プレデターと呼ばれる無人航空機である。

アメリカ空軍で採用された無人攻撃機で偵察を目的とした任務が主だが、地上の敵を攻撃するのにも使え、ミサイルを装備することが可能である。

だが、今回飛ばすのは偵察任務なので非武装だ。

滑走路の後部には人間ICの料金所を借りて、臨時管制塔と操縦席を確保している。

だが、それは名前だけで管制塔などないし、操縦席だってノートパソコンがあれば操縦可能だ。

本物はできないがこれは神製品である。

「こちら管制塔、離陸を許可する」

管制官の真似をした富田が離陸の合図を送る。

「了解、管制塔。こちらイーグル1、離陸する」。

ゆっくりと加速し離陸する。

「高度制限を解除する。貴機の幸運を祈る」

「高度制限って、ドンくらい？」

「うーん、ざっと1000mくらい」

なんて雑な管制官だろう。こんなんじゃ、離陸した瞬間に空中分解しそうだ。

このまま東京に行ってもよかったのだが、待ち伏せされている可能性も無くはないし、そこに集落があるか不安だったからだ。

「東京までプレデターでどれくらい？」オヤツさんが聞いてきた。

「5分で23区に入る。アメリカの町ってどんなところだ？」

「ほとんどは門から来た人たちでかなり活気があふれているはずだ」

東京にあるらしいそのアメリカと言う町は、異世界から来た人たちの町で、漁業が主な産業で、商船の中継場所として使われている。

そこには、ギルド連合組合の拠点がある。異世界から来る人々は仕事をするさい、そこに登録して仕事をする。

例えてみれば、農家のおっさんがその組合の人間で作物を作ったとする。それを組合で買取り、個人経営の店舗に売ったり組合がやっている店に出すなど、卸売り販売業者の統合バージョンとでも言ったほうがいいだろう。

ギルドには、農業、漁業、工業（鉄の製造、加工など）武器兵器産業、遺跡発掘、冒険、傭兵、運送などがあり、遺跡発掘と言うのが雪で埋まっているものを集めて製造し模倣するがあまりいい仕事ではない。我々のテクノロジーは彼らに対しては魔法同然で、模倣するにしてもできないからだ。

全部説明したいところだが、また今度にしよう。

このアメリカは、港があるため軍艦の補給などにも使われているため、異世界から来た兵士が集まり、その中にはガリビニア海軍もいる。

もしも、俺達の顔がばれていたら、大変なことになるだろう。

アメリカはどここの国にも属していないため、司法機関は存在していないのでギルド連合組合がその町を取り仕切っていて、いわば、経済特別区ともいえる。

一度、ここで羽を休めて、ギルド登録をして仕事をするつもりだ。

そこで傭兵派遣会社でも設立するかな。ふっふっふっふっふ……。

「行ったことは？」

「ない」

カリビヤ海軍とは管轄が違うらしい。つまりは、メンツとかそんな感じなのだろう。

ノートパソコンには東京の様子が映し出されていた。

東京は、氷河期災害のとき、絶対零度の台風もどきにさらされ、日

本全土が凍ったと聞いている。

東京は白いペンキを満遍なく塗ったように真っ白に染まっ
ていて、ひとつの芸術品になっていた。

だが、この下には、放置された車などが数多くあり、ところどころに風化しなかった亡骸があった。

（ミサイル！敵にロックされました！）ヘッドセットからは機械的な声が出る。

すぐにジョイスティックを動かし、回避する。

だが、ノートパソコンの画面は真っ黒にそまってしまった。

撃墜されてしまったのだろう。

でも誰に？

（疾風！敵の大部隊だ！）溝口がいる狭山パーキングエリアには敵の大部隊が来ていた……………。

「第19話 フリーズド・ハイウェイ」(後書き)

次は、武器兵器の解説みたいなものをお願いします。

誤字脱字等がございましたらよろしくお願いします。

「第19、5話 兵器、国ゲームシステム紹介」（前書き）

投稿する前からこれは作っておりまして。それに改良をして今回投稿しました。

次から戻ります。

「第19、5話 兵器、国ゲームシステム紹介」

《国連の構成》

2030年に北半球が死滅し、常任理事国は事実上、席がなくなってしまう。2031年1月下旬に国連を再建。オーストラリア連邦、ブラジル、そして南アフリカ共和国を常任理事国として再建した。

オーストラリアに国連本部をおき、国際司法裁判所はオランダのハーグはなくなっているため、南アフリカのブルームフォンテインに裁判所を置いている。

北半球に現れた門から異世界の軍勢が現れ、国連は国連加盟国の国軍を国連軍として再編成。国連軍は国連陸軍、国連海軍、国連空軍、特殊作戦軍と4つの軍に分けられ、各国の国軍は割り振られた軍に入り、各国の特殊部隊は特殊作戦軍の一員となっている。

また、侵略された国は国家単位で国軍を有事に出すことが可能となる。

オーストラリア連邦

「北半球氷河期災害」以後、国連の新常任理事国となり、今や、超大国オーストラリアとなっている。

周りの先進国の避難民に移住といった形で住まわせているが、氷河期が過ぎれば元の領地に戻すつもり。

だが実際、避難民の5割弱が国籍をオーストラリアに移しており、公用語である英語を話せない国民が増加している。元々は5人に一人が白人至上主義であったため、避難初期に白人至上主義による暴動や殺人事件などがあったが今は落ち着いている。

国連本部が置かれていて、国連軍総司令部と陸軍の司令部が置かれている。

南アフリカ共和国

「北半球氷河期災害」以後、国連の新常任理事国となっている。犯罪増加など2010年代、アメリカの一年間の犯罪件数を上回る治安の悪い国家だったが、2020年には、犯罪は減少しており、今では、災害前の日本のような治安が続いている。

だが、2032年に起きたアクチュア王国侵攻により難民キャンプなどができており、南アフリカ北部では治安が悪化している。

国際司法裁判所があつたオランダのハーグはなくなっているため、ブルームフオンテーンに裁判所を移している。また、国連軍はポートエリザベスに巨大な軍港を築いており、国連海軍の司令部がある。

ブラジル

「北半球氷河期災害」以後、国連の新常任理事国となっている。南アメリカでは、数多くの北アメリカ避難民が多くいる。軍備は南アメリカ最大の規模を誇っており、2032年に起きた南アメリカ侵攻を食い止めたのはブラジル軍のおかげでもある。

いまでは、侵攻してきたイエヴァレ帝国と緊張状態が続いている。

ブラジルには国連空軍総司令部が置かれ、巨大航空要塞が建設中という噂がある。

ガリビニア帝国

2032年にインド、チンナイに現れた転移門から侵攻。まだ、産業革命は起こっておらず、中世の文化に似たものを持っている。

首都は、ビィアグラード。ヨーロッパであるような城塞都市である。

異世界では、かなりの軍事力を持っており、航空戦力を有している。
(ドラゴンを主とした航空部隊)
独自の宗教を有しており、他民族、つまり、エルフやドワーフ、獣人を悪しき者、汚らわしき者と差別するような宗教がある。

2033年にインド、ジョージタウン軍港を攻撃したが、国連海軍のミサイル攻撃により、大敗。以後20年の不可侵条約を結ぶ。

2047年にガリビヤ、異種民族粛清作戦決行。人間以外の亜人を見境なく虐殺するなどし国連は猛抗議したが、無視をし、国連との外交が不安定となる。

元の世界では、強大な軍事力を持っているが、あまり国交がなく、国交があったとしても、宣戦布告。農業を中心とした国家(中世の国家はほとんど農業中心である)である。

元中華人民共和国の避難民が移住(里帰りしたと言ってもいい)して若干、科学力が向上している。

クシャナ王国

ガリビヤ帝国と同じ時期に移ってきた国家で、人種はエルフが90%、ドアーフが10%程で、君主制の国家であるにもかかわらず、元老院が政治を仕切っており、国王はいわば象徴的存在となっ

ている。

今は、第20代アレクサンドレ・クシャナが国王をしているが、ほとんど、元老院が実権を握っている。

2032年にこちら側に転移してきたが、本国はガリビリア軍が王都を掌握しており、その生き残りがこの国を支えている。

軍備もさほど強力ではなく、少数精鋭だが数は3万、敵国に位置するガリビリア軍は300万の兵力を持っている。弓を使った戦術に長けており、ゲリラ戦など得意とする。

強力な魔法師団を持っているが、航空戦力は有していない。ガリビリア軍に連敗しており、国が疲弊しているため、国連に助けを求めた。

使者を送ったが、ほとんど全滅してしまった。

アクシユア王国

エジプト、カイロから転移門が開き、侵攻。現在ではアフリカの半分を占領しており、現地の住民を奴隷化している。

首都はアルスタ。

航空戦力を有しており、魔導騎士団と呼ばれる魔法に特化した部隊が主でかなり強力である。

魔法に特化しているため、魔法院などが数多くあり、魔法使いを目指すならここに行ったほうがよい。

イシュバレ帝国

獣人が人口の70%を占めていて30%はドワーフを占める。

南アメリカ北部に現れた転移門から侵攻。ペルーやボリビアを占領されて隣国ブラジルと緊張状態が続いている。

魔法やドラゴンなど使わない白兵戦を好み、ライフル弾を撃つても突撃するような種族で国連軍が負けた敗因でもある。

異世界では、本国は滅亡しておりガリビビア軍の追撃を逃れるため門を破壊したとのこと。

30の種族があり、様々である。現在は国連とは休戦している模様。

《ゲームシステム紹介》

「Assault company」

自分のPMCを育成して業績TOPを目指し、最強のPMCを編成するゲームである。

インターネットを通じ、仲間とP M C (TEAM) を作り、合同でP M Cを運営していくことも可能。自分のキャラクターを作って、戦場で戦い、ヘッドハンティングすることもできる。このゲームのユーザー数は日本だけで1000万人。世界で1億人を超えてしまった傑作ゲームで、大手P M C 同士が戦う大規模戦があり、自分で購入、作成、奪取した兵器が使える、中規模以上の戦場なら、戦車やヘリが使用可能になっている。

本文から……

P M CとはPrivate Military Company、民間軍事会社のことである。

ゲーム内では、P M Cを育成していくほかに自分の兵士を育成していく。経験値を増やして階級を上げていき、接近戦能力・実弾系武器射撃能力・爆発物取り扱い能力・医療系能力・車両操縦能力・情報処理能力・隠密作戦能力・指揮能力などの能力を上げていく。

7つの能力の中で100まであげると特殊能力が付くようになる。

接近戦能力がLv100になった場合、「格闘技王」の称号が与えられ、パンチ一撃で敵を殺める能力。

実弾系武器射撃能力がLv100の場合、「狩猟の名人」の称号が与えられ、スコープで敵を見たとき、まったくぶれなくなる。

爆発物取り扱い能力がLv100だと、「発破の達人」の称号が与えられ、手榴弾などの所持数が倍になり、威力が三倍となる。爆発物処理にも長けており、敵の仕掛けた爆弾を解除する事ができる。

医療能力の場合、「衛生兵」の称号が与えられ、瀕死の状態でもHPを満タンにすることができ、しかも10秒間無敵状態が続く。

車両操縦能力の場合、「撃破王/撃墜王」の称号が与えられ、攻撃力、防御力が増す。自然と修理することが出来る。

情報処理能力は、「ハッカー」称号が与えられる。敵の指揮系統を乱れさせる。

隠密作戦能力は、「忍者」の称号が与えられ、走っても足音が出なくなる。

指揮能力は、「最高司令官」の称号が与えられ、カリスマ性に優れ、「ハツカー」の影響を受けることがなく、自軍の戦闘能力および体力、知力、経験値が50%上昇する。

<武器・兵器説明>

ACOGサイト

ACOG (Advanced Combat Optical Gunsight : 高度戦闘光学照準器) はアメリカのトリジコン社が開発した照準器シリーズのひとつで、中距離、近距離向きのサイトである。

FN P90

FN P90は、PDW（個人防衛火器）と呼ばれる種類の武器であり、5.7mm×28弾を発射する。主に軍などが使っており、防弾チョッキをも貫通する能力を持っており、人体工学に基づいたフォルムを持ち、左手でも右手でも同じ操作ができるようになっていて、排莖孔が銃の下部に設けられているのがポイントである。

FN SCAR

FN SCARは、SCAR（Special operations forces Combat Assault Rifle

）の略称で呼ばれ、アメリカの特殊部隊「特殊作戦軍」向けに開発されたあさるとライフルである。軍用向けのタイプには3つほどあり、SCAR-L、SCAR-H などがありどちらも、部品を変えれば、この2つのタイプに変更可能で高い汎用性を誇る。SCAR-LはLightの意味で、スカーライトと読む。5.56mm×4.5mm NATO弾仕様で、M4、M16の後継となっている。通称Mk 16。SCAR-HはHeavyの意味で、スカー・ヘビーと読む。7.62mm×5.1mm NATO弾仕様で、M14の後継となっている。通称Mk 17。また現在導入が検討されている6.8mm×4.3SPC弾にもできるため将来有望である。

インターセプターボディアーマー

インターセプターボディアーマー（Interceptor body armor）は現在米軍で使用されているボディアーマーで高い汎用性を誇る。

ストライカー装甲車

ストライカー装甲車は、米軍で使用されている装甲車でLAVと呼ばれる装甲車ファミリーのひとつである。さまざまな武装を施すことができ、汎用性が高い。

ハンビイー

ハンビイーは、アメリカ軍を代表すべき、車両のひとつである。汎用性が高く、民間の車両にはハマーと呼ばれる車が存在する。

プレデター

プレデターは、アメリカ空軍が採用した無人航空機である。基地にいるパイロットが無線誘導で操作するもので偵察から爆撃まで行う多目的無人機である。今では後続のグローバルホークが作られ、アメリカ空軍に800機程配備されている。

レミントンM700

アメリカを代表すべきボルトアクション式狙撃ライフルで、アメリカ、レミントン社製造。狩猟などにも使われておりアメリカ海兵隊でに使われている。7.62mm弾を使い精度が高い。

ベネリM3ショットガン

イタリアのベネリ社が作ったセミオートマチックとポンプアクション

ンを兼ね備えたショットガンで特殊部隊から狩猟まで活躍するショットガンである。

ブッシュマスターACR

ブッシュマスターACRはブッシュマスター社、マグプル社、レミントン社が製造しているアサルトライフルで、FN SCARと同じで、部品を変えるだけで銃弾の口径をすぐに変えることができる。7.62×51mm NATO弾、5.56×45mm NATO弾、7.62×39mm弾、6.8mm×43SPC、5.45×39mm弾、6.5×39mmグレンデル弾などが使え、次世代アサルトライフルとして将来が有望である。

M1911ガバメント

この拳銃は1911年にアメリカで正式採用されてから今まで使われている傑作拳銃である。45口径弾を発射し威力は大きい。各部改良を加えられ「M1911クローン」とも呼ばれる類のもがあり、現代風にアレンジされたものもできている。アメリカ海兵隊でも、改良されたものが使われている。

M14DMR

アメリカのスプリングフィールド造兵廠が開発した自動小銃で、スプリングフィールドM14

第二次世界大戦・朝鮮戦争で使われたM1ガーランドの改良型として開発され、ベトナム戦争に投入されたがM16に取って変わられた。しかし、有効射程が長く、長距離射撃に向くため、海兵隊や特殊部隊を中心に狙撃銃として使用されていて、精度が高い。今回使

っているのはアメリカ海兵隊がM14を改良して作った狙撃銃である。

M134ミニガン

M134ミニガンは7,62mm弾を発射する電気回転ドライブ方式を利用したミニガンである。威力が高く普通車を撃てば、たちまち蜂の巣に変わり、人間に当たれば、言葉どりの挽肉になる。

パワーアーマー

全身装甲を施し、一人では携行不可能な重火器を装備でき、一人の戦闘能力は一個小隊に匹敵する。光学装置、自動診断装置、治療用ナノマシンの自動投与。放射能の遮断。対戦車小型ミサイルなどを標準装備している。氷河期災害の前年にアメリカ軍は全軍配備を行っている。富田が着た「T51bパワーアーマー」はゲーム「fallout3」に登場したアーマーである。

M240機関銃

FN MAGをアメリカ軍向けに改設計された汎用機関銃である。7,62mm弾を発射する威力が高く、汎用性が高い。NATO諸国はこれを導入しており、アメリカ軍の実践報告によると100%の兵士は、彼らの武器に自信を持っていた。

トカレフTT33

1933年にソ連に採用された自動拳銃である。M1903に似ており、M1911の機構をまねしている。今では使われておらず、旧式である。

マカロフ拳銃

ソ連時代から使われ続けているロシア軍採用の自動拳銃である。今は新しい拳銃に更新されている。

「第19、5話 兵器、国ゲームシステム紹介」（後書き）

誤字脱字、内容の間違いございましたらご指摘よろしくお願ひします

「第20話 凍てついた弾丸 前編」(前書き)

19話の続きです。

「第20話 凍てついた弾丸 前編」

軍用双眼鏡で確認すると、敵の補給基地らしい。

「航空部隊のドラゴンか。厄介だな」

隣にいたオヤッサンが渋い顔をしている。俺たちが見ているその基地にはドラゴンが20匹駐留しているのだ。

異世界から来たガリビニア帝国は、1000年ほど前から戦場にドラゴンを投入している。他の国でも軍用として使われてはいたが、ガリビニア帝国軍はそれに現代兵器を装備させ、ミサイル、機関砲などを取り付けている。

元人民解放軍の策略であったのだろう。第二次大戦後、欧米諸国よりも経済が発達していない途上国であったのにもかかわらず、常任理事国の仲間入りを果たしたのだ。だが、氷河期災害で国土は失われ、常任理事国の席を失ってしまったのだ。

彼らは氷河期災害で失ったものを取り返すため、常任理事国の席に返り咲こうとした。

だが、周りの国々は断固拒否をして、友好関係だったロシア連邦でさえ首を縦に振らなかった。

彼らは孤立無援の状態を作り出してしまった。それが原因で拍車をかけてしまったのか、中国の臨時政府は持てる資源をかき集めてオーストラリアを後にした。

彼らはガリビビア帝国の貴族となり元老院の役人や軍人として働いている。彼らは帝国を乗っ取って新生中国を作るつもりではないだろうか。

そのための抑止力としてドラゴンに武装を着けたのだ。ドラゴンなら、レーダーに余り映らない。速度はジェット機並みで垂直離陸、その場にとどまり攻撃も可能である。唯一の短所は後続距離が短く、パイロットであるドラゴンライダーがGに耐えきれるかどうかだ。

だが、この能力さえあればステルス戦闘機に匹敵する性能を持つていて、万が一国連軍が来たとしても、かなりの苦戦を強いられることがわかっているからだ。自分達を常任理事国にしなかった恨みだ

ろうか。

彼らは勢力を拡大して、ロシア領内やモンゴル、ベトナム、そして日本に勢力を拡大している。

多分、この補給基地もそのためだ。

「あのドラゴンは厄介だ。でも、あの補給基地も目障りだな。どうする疾風？」

溝口は構えているスナイパーライフルM24のスコープを覗きながら聞いてきた。

このままだと、偵察機に見つかって追撃してくるだろう。

「ある程度の攻撃を与えよう。ドラゴンは殲滅して、弾薬と燃料は残らずぶっ壊そう。基地にいる部隊は殲滅しなくても良いだろ？」

必要のない戦闘は控えようと思った。この前の待ち伏せは、どう見てもやりすぎだ。あのとき、適当に地雷を仕掛けて逃げればよかったのかもしれないし、ほとんどの敵を殲滅しなくても良い選択があったはずだろう。あのときは、ガリビディア軍の残虐非道な行為を知って冷静に考えられなかったのだろう。もう少し冷静に考えればすむことだったのに。

「わかった。まず、誰か一人が偵察に赴いてレーザー照準でドラゴンの中心をマークしてくれ。こっちはHIMARSの準備をしているから頼むぞ」

HIMARSは、長距離ロケットが発射可能な長距離支援兵器である。これの兄貴分にあたるMARSは湾岸戦争やイラク戦争に参加したものでとても強力である。

「じゃあ、行ってくるよ。」持っていたFN SCARの銃口にサプレッサーと呼ばれる、銃声を聞こえなくするもので隠密作戦にはぴったりの代物だ。

「。か、ゲームの隠密作戦能力のレベル上げとけばよかったな。。。

> 一時間後・・・敵補給基地、ガリビニア空軍サヤマ補給基地、極東方面隊第34航空師団司令部>

氷河期災害からもう22年。祖国を旅立ってからもう20年は経っている。10年前に帰ってきたが、そこにはもう家族はいない。我々の臨時政府は国連の常任理事国になることもなく、オーストラリアから追い出された形になってしまった。10年前は敵同士であったガリビニア軍とは、自分がガリビニア軍の将官なるとは、あの時思いもよらなかったがこの際仕方がない。

20年前にあつた髪の毛は白髪となりもう50を迎えてしまった。この年になると、孫がいる世代だが私にはいない。妻と娘は20年前に死んで、それからというもの再婚、離婚を繰り返している。

元人民解放軍である証拠に、当時の制服を將軍の階級を付けて着込んでいる。周りには、私のような古株はもういない。若い士官が書類の整理など事務を淡々とこなしている。これが、時代の流れなのだろうか・・・。

「師団長、大丈夫ですか？」

ふと声をかけてきたのは、C中隊のクライトン中隊長だ。彼は部下から慕われており、D中隊の中隊長とはえらい違いだ。

「ああ、すまん、考え事をしていた。どうした？」

「例の飛行物体の件ですが、東に4ペソ（1ペソ＝0.7km）のところ墜落していました。機体番号を照合してみても、どこにも該当するものはありませんでした。」

彼らは、知らないだろうがあれは、米軍が開発したプレデターという無人偵察機だ。オーストラリアでも、採用されたことがあったがもう更新されちがうものになっていたはずだ。なら、一体誰が？

「あと、今来た情報によりますと、キウシウにあります村を掃討中だったビルコラク騎士団の3隊と2隊が壊滅しました」。

「なに！？」大きい声で言ったせいかわりに、周りにいる士官がこちらを見る。

確か、ビルコラク騎士団は陸軍の中では精鋭中の精鋭。その中で2隊は人民解放軍の同志が武器、兵器を提供し、戦術を叩き込んだ最強と言ってもいい部隊だ。そんなわけが……

窓ガラスから閃光が見え、一瞬見えたかと思うとドラゴンの駐留場所が吹き飛んだ。

「伏せる！」

痩せこけた自分ののどをめいっばいにして叫んだが、それに答えるものは少なかった。

ドラゴンの駐留場所が爆発して衝撃により窓ガラスが吹き飛んだのだ。

「目、目がー！！」

「衛生兵！こつちだ！」

臨時司令部が怒声と悲鳴に淀めく中、クライトン中隊長がこちらに駆け寄る。

「師団長大丈夫ですか！」

彼は額に傷があるものの、それ以外に怪我はしていなかった。

「状況は？」

「駐留していた20匹の内、15匹がやられました。5匹は無事ですのでパイロットを乗せて厳戒態勢を牽かせます。」

部隊は壊滅状態だ。航空師団というものの、そんなにドラゴンを集めることはできない。歩兵とドラゴンを連携して戦わせるのが航空師団のやり方だ。ドラゴンがいなければ、ただの歩兵師団に他な

らない。

「全機発進させる。本国に緊急連絡。国連の攻撃の可能性が高い！無線兵にそう伝える！」

「了解です！」中隊長は額を抑えながら、走っていった。

この部屋にいた10人の若者のうち3人が死んだ。どうしていつも、老人の血ではなく、若者の血が流れるんだ。

「第20話 凍てついた弾丸 前編」(後書き)

誤字脱字あらばよろしくお願いします。

後半は元人民解放軍の将軍でした……。

「第21話 凍てついた弾丸 後編」(前書き)

ちよつと遅くなりました。

今月の4日に新しいゲームを買いまして・・・

知っている人にはわかる、そんなゲームです。

「第21話 凍てついた弾丸 後編」

ドラゴン駐留場は跡形もなく吹っ飛んだ。

次は弾薬庫だ。

FN SCARのレイルに着けているレーザー照準器のスイッチを入れて、弾薬庫に照準を合わせる。

(こちら溝口、座標を確認。攻撃開始！)

遠くから3発のロケット弾が見え、弾薬庫を突き刺す。弾薬庫はロケットの爆発により、誘暴した。

これで目標の破壊に成功し、追跡するものもいなくなった。

今いるのは、サービスエリアに隣接するビルの屋上だ。ここまでくるのに、スノーモービルでここまで来た。

屋上まで来るのにだいぶ時間がかかったがなんとか離陸する前に間に合ったようだ。

降りるときに、階段で足を滑らせるのはいやなのでロープを取り出してラベリングをすることにする。

よく映画などで見かけるが、屋上からロープで降りてきて籠城しているテロリストや犯人の所へ突入するシーンがあった。今回は、突入ではなく、直で下まで降りるのだ。

急いで停めてあったスノーモービルに乗ってキーを回し、エンジンを掛ける。氷河期が来てから雪が積もり、すべることができた。

（こちら武藤。今、そっちに向かっている。ステインガーミサイルの準備をしてくれ）

もしも、さっきのレーザー照射で場所が特定されて、ドラゴンが追撃するかもしれない。

だが、ステインガーミサイルは携帯型対空ミサイルで「パッシブ式赤外線アクティブシーカー」・「紫外線シーカー」と呼ばれるものがあり、目標の赤外線や紫外線を探知して追尾すると言つもので、生き物に対しては未知数だ。

様々な武装を施してはいるが、それが赤外線を発しているかわからないし、野生のドラゴンが出てきたとき対処できない。

仕方がないので、熱追尾センサーを取り付けた。

これならば、武装のない野生のドラゴンにも対処できる。

銃弾は、ドラゴンのつろこに当たり、火花が飛び散った。

「ガアアアアアアアアアアア！！！！！！」

唸り声を叫びながら上昇していくが、すべて鱗に跳ね返されてしまったようだ。どうやらミサイルを使ったほうがいいらしい。

スピードを上げ、高速道路のところへ行く。

途中、1車線崩れているところがありそこは雪の積もった傾斜になっている。

スピードを上げ、高速道路に登っていった。

「いたぞ！！あそこだ！！」

しまった……。

敵はここに防衛線を張っていた。所々に中国製の偽ハンビーやスノーモービルがあるらしく2個小隊の兵力はあるだろう。

「撃て！逃がすな！」所々から銃声が聞こえ、銃口から出る閃光がみえた。

ガリビニア兵は、小銃から撃ち出された弾丸はすぐ横を通り過ぎる。

(こちら武藤、まずいことになっている！今すぐ第二集合地点に変更だ。前の集合場所で決着をつける！)

(了解、富田はハンビィーで第二集合場所で待機させる。こっちは、ステインガー準備している)

グロック18の弾倉を交換して、後ろからついてくる敵のスノーモービルに弾丸を浴びせる。

たしか、この先に今走っている車線が10m程崩落している。そこでやつらを巻けば……。

スピードをだして反対車線に突っ込み体制を整え、追跡する敵も同じように追いかけてくる。

アクセルをいっぱいにして、斜面になっている坂をあがり、対岸へ跳んだ。

映画で「スピード」という映画があったのをご存知か？

あれは、市営の十数名乗ったバスが建設中の高速道路を飛んで奇跡的に対岸へ行くが、あれは物理的に不可能だ。80キロ以上出してもあれは不可能。あれはコンピューターグラフィックスの魔法が生み出した奇跡に過ぎない。

だが今回は、一人乗りのスノーモービル。しかも神製。できないわけがない。

「ヒヤッホー！！！」叫び声をあげ、意気揚揚と対岸へたどり着く。

敵は何度かチャレンジしたが6人がこの対岸へたどり着くことができなかつた。たどり着いたのは天国だろうか？

追跡されると厄介なため、スモークグレネードと呼ばれる、軍用の煙玉を取り出して、ピンを引き抜きそこらへんに投げておき、そこを後にした。

ちょうど人間インターチェンジまで5分程度だろうか。追ッ手もこないし、あきらめたのだろうか。

エンジンを止め、水筒の中にあるスポーツ飲料を飲む。

「うーん、これが勝利の味ってやつ？」

普通は死んでたまるかと言いそうな所だが、もし死んでも課長が生き返らせてくれるかもしれないが、焼死体になるのはご免だ。もしも、その死体から細胞分裂を始めてもとの体に戻るっていうのはグロテスクだし、服は細胞分裂しないので真っ裸だろう。

だが、運は尽きたようだ。

埋まっていたパトカーのランプに足を取られてこけてしまった。

振り返りたくはないが、ここは潔く死のうと思いい、振り返った。

飛んできたドラゴンは、飛んできた鋭いものに突き刺さり、大爆発した。

溝口から撃ち出されたステインガーマサイルはドラゴンのちょうど胸のところを当たり、大爆発したのだ。

近くでもしも戦闘ヘリが撃ち落されたなら、周辺にいる兵士はその破片に身を裂かれ負傷する。

俺の場合、ドラゴンの肉、血が俺の体を直撃して、冬季迷彩服が真っ赤な迷彩服に大変身を遂げた。

「おう疾風・・・・・・・・・・臭せゝ・・・・・・・・生臭い」

「うるせえー！」

と血でべっとり手の手を奴の顔になすりつけ、真っ赤なフェイスペイントの出来上がりだ。

もしも、これが溝口や富田以外の誰かであれば先にありがとつの一言ぐらい言つたろう。だが、富田たちにはありがとつは言わない。そんなことを言わなくてもわかるからな。

だけど、一応食事時とかボソツと言つたりジューズおごつてやつたりするけどな。

このあと、急遽作つておいた第二集合場所まで行つてから、皆と再会して旧上信越自動車道を使い東京まで行く。だが偵察機の情報ではそこに集落はない。雪に覆われた東京があるだけ。

俺達のファンタジーな生活は一步遠くなつたな・・・・。

「第21話 凍てついた弾丸 後編」(後書き)

誤字脱字ありましたらよろしく。

次は町に到着です。

「第22話 ギルド連合組合」(前書き)

この頃11月4日発売の「fail out new vegas」
「ばっかやってる。」

「第22話 ギルド連合組合」

「ふわアアア?・・・」

ベッドから出られず、何度寝したのだろうか。睡眠不足で気にしない。隣の部屋で音がしていようと。

「遅いぞ。もうすぐ8時だぞ、もうみんな飯食ってしまったよ」

「疾風の分はここにあるから」

富田達は既に食べ終えてしまったらしい。

テーブルには皆が食べた皿やコップが置いてあって、真ん中には残ったサンドウィッチがあった。

食文化は殆んど同じでテーブルマナーは同じだ。

今回のサンドウィッチは、牛に似たガラパという動物の肉を分厚く切ってパンに挟んで、レタスのような葉を挟んで食べるというものだ。

サンドウィッチにしてはパンは堅いし、肉もかなりの臭みがあった。まだ、胡椒のような臭みを消すものがなかったためだろう。

生前の世界のサンドウィッチを食べたいが、彼女達をここにさせるためには仕方がないのだ。

「疾風置いてくぞ。」

「ちよつと待ってくれよ」

サンドウィッチを食うの止め、自分の寝ていたクローゼットからオリブドラフ色のフィールドジャケットを取り出し、寝巻きとして使ったTシャツのうえからフリースを着て、ジャケットを着る。下は、コンバットブーツにジーンズを履き口にガムを放り込む。

最後に、ベルトにホルスターを入れて、マガジンポーチを着けてグロック26と呼ばれる小型の拳銃をホルスターに納めた。

これで準備完了。

「おいちよつと待ってっ！」

皿の上にあったサンドウィッチをラップで包み、彼らのあとを追う。

急いでエレベーターのドアを開けて、地下一階を押し下まで急ぐ。

地下一階に出ると、貸し出し可能な馬車のところに皆が集まっていた。ダッシュした。

「いったじゃないか、ギルドの登録は8時から8時半までなんだ。」

6ブロック先にあるけど、渋滞に巻き込まれたら元も子もないぞ」

「すまん、今日の5時に寝るんじゃ起きられないよ。たくさん寝ていた富田と違ってな」

今日の午前5時に交易の中心アメリカと呼ばれる港街に到着した。このときの運転手は俺で、富田は後ろでいびきを立てていた。

東京に作られていたのかと勘違いをしてしまったが、ここは、2020年代に作られた人工島だった。

最初は、東京湾に存在しており、巨大な人工島として世界から注目されていた。だが、2030年の氷河期災害により、その人工島が太平洋に流されてこの場所にあるのだった。

ここには、当時建設中だったビルが残っており異世界から来た人たちが使っている他、オーストラリアなどの企業がここに市場を構えたりしていた。

だから警備も嚴重だから……

港街に入る際、

「何者だ！動くな、撃つぞ！」

と門番に銃を向けられ、危うく蜂の巣になるところだった。デジャ

ヴか？前にもこんななかつたか？

企業といってもいろいろあり、食品からコンピューターチップまで幅広い市場があり、戦争もその市場となる。

この門番は、戦争を市場とした企業が彼らを訓練して警備に当たらせているようだ。

一応、自分達は国連軍の空挺部隊で、何者かに撃墜されてここまできたということにした。

誤解は溶け、中にはいることに成功したが、問題なのは、ここには24時間営業の宿泊施設はあるのかと言うことだ。

こんな時間に始める店はなく、24時間営業の店は先進国でなければできない技である。程度技術が発達してサービスという部門を追及していなければならない。ここに住んでいる人々は転移門から来た人達が大半だ。24時間営業の宿は見つかりっこない。

「ここから3ブロック先に国連人が住んでいる経済特区に宿があるはずだ。そこなら泊まれるし、その自走車も停めて貰えるはずだ。」
国連人というのは、異世界人といえど同じ言語だったらよかつたかもしれないが、やはり言語が違うと語弊というものが存在する。国連に加盟している国の人間や元々この世界に住んでいる人を国連人といつて、自走車は、自分で走る馬車を略して自走車となっている。

門番をしているおじさんにその話を聞いて、まだ暗い街中を3ブロック先まで走ることになった。

「お帰りなさいませ、シドニーホテルへようこそ。」

支配人でありそうな50代くらいのおじさんがドアを開け、出迎えてくれた。

「総支配人がお待ちです。向こうのエレベーターまでご案内します。」

そういわれたので、全員エレベーターに乗ろうとする

だが、総支配人なんて知らないぞ。一体何者だ？

「お客様、武藤様と富田様、溝口様だけが、招待されております」

そう言うと、エレベーターに乗っていたリザとおやっさん、ダンが降りた。(ドクターはエルフを装甲車の中で看護している)

「すぐ戻ってくるから」

「おう、わかった。早く戻ってこい」

その言葉を交わし、エレベーターのドアが閉まる。

だが、エレベーターには、ビルの階ごとのボタンがなく、ただ白い小部屋だった。

「なんだこれ、何階まで行くんだ？」

「まあ、言うてからの楽しみです」

そう言うて支配人は笑ってごまかす。なにやら嫌な予感がするが・・

そう考えているうちにピーンと音が鳴った。どうやらついたらしい。

エレベーターのドアが開くと、そこは雲の上だった。

「おいおい、冗談だろ？」

溝口が首をすくめている。

本当に冗談のようだった。雲の上。しかも周りには翼が背中に生え、頭の上に黄色の輪をつけた人が行きかいしている。

だが、冗談と言ったのはこのことではないようだ。

自分達の背中にも翼が生えていたのだ。

「あーあ、とうとう俺も変人の仲間入りか」

「おいおい、君達と同僚になんてこというんだよ。まあ、あの服装はやめるつもりだがね」

俺のつぶやきに反応したのか、後ろには、スーツ姿の課長が居た。しかも、真っ白のスーツを着てた。

「何で呼んだんだ？」

「私の仕事場だからな。それと、やらなければいけないことを思い出した。」

「なに？」

「衣食住の保証だよ。拠点を作ったほうがいいだろう。車庫もあるし、グラウンドセフトオートだってちゃんと住めるところがないとセーブできないだろ？それと同じだよ」

もちろんうれしいが自由度がなくなるではないか！

「自由度だって？仕事をやってからにしろ。ギルドとかはやってもいいけどこっちが先だ」

課長はビジネスバックから書類を一束渡してきた。

書類には人相の悪いオッサンから絶世の美女の写真があり、すべての人物が皆、囚人服だ。

「なんだこれ？囚人2341号？これが目標か？勇者は地獄から脱獄した囚人を捕まえるために借り出されたけど、こいつもそうなのか？」

そこにはほかにも、1134号、9356号、0368号、0001番などがあつた。

「これは、その脱獄した囚人のリストだ。こいつらは、世界を修復するより先だ。」

「彼ら勇者に俺達のこと伝えたか？ある一人の勇者に殺されかけたのだが。」

富田は課長の目を見ながら聞いた。

「ああ、天使と名乗る偽者が居るので発見次第、滅することとっておいた」

「こいつ、わざとてこずらせるつもりだな？」

「聞こえたけど、まあいい。君達の住居を作っておいたからがんばれよ」

課長はそう言って後ろを向いて、去っていった。

ついでに後ろを見ると角が生え、青鬼がいた。しかもさっきの支配人らしく、制服を着ていた。

「総支配人からお部屋を用意するようにと言われておりますので、こちらへどうぞ」

支配人はエレベーターを呼び出し、エレベーターの中に入った。エレベーターはしっかりとボタンが付いているものだ。

「close」のボタンを押してドアを閉め、最上階である、34階を押した。だが、今の雲の上が最上階ではないのか？

「このエレベーターは一般の方も使っておりますので、今回は特別なんです」

俺の疑問を察知したのか、エレベーターのことを教えてくれた。

ピンと鳴り、ドアが開いた。

そこは豪華な作りとなっていて、日本の帝國ホテル並みではないだろうかと思った。エレベーターから出ると、廊下が広がっており、1号室から4号室まである。奥には「大広間」と書いていて、皆で集まることができるどころだろうか？

後で入ってみようと思う。

「ここでは、1号室から3号室までは普段の部屋と同じとなっております。時間がないので3号室と4号室、5号室を案内します。」

支配人は、3号室のドアを指紋認証キーと網膜パターンキーで開いた。

「こちらへどうぞ」

そこに入ると、ここは豪邸ですか？と言っぐらいの広さだ。これがスイートルームってやつなのか？！

まず、入るとリビングルームがあり、60型はあるプラズマテレビ。しかも3D仕様。ピカピカに光ったテーブルに、プラズマテレビの台の中には各種ゲーム機器やDVDプレーヤー。

おくには、キッチンがありダイニングルームまで作られている。

また、キングサイズのベットが三つあり、ホームシアターまで完備されている。

浴場は、シャワールームにバスルーム。露天風呂、サウナまで用意してあった。

「この部屋……最強だな……」

溝口は呆然と眺めながら言った。

「これ以上の部屋をご用意致しますか？」

「いやいやいやいや、いいですよこの部屋で」

これ以上の部屋あのかよ！これで十分だあ！！！！

「そうですねか……分りました。4号室を案内します」
そういつて我々は出ていく。

4号室は3号室と同じようなドアで各種センサーがあった。

「では試しに試して見てください」

富田は最初戸惑ったがそれに応じ、指紋認証キーをして、網膜パターン認証を行う。

ガチャン、と鍵があいて中に入る。

なかは、3号室と変わらずとても豪華。だが端には他の部屋にはない、書斎のような場所があった。

「では、これをご覧ください」

支配人は机のパソコンを起動させ、お馴染みのデスクトップが写し出された。そこから「すべてのプログラム」を選択して「ヒミツキチ」をダブルクリックする。

すると、パスワード入力画面が写し出された。

「今現在のパスワードはこれです」

支配人はそう言って、キーボードに打ち込み始める。

打ち込んだパスワードは「MARS」と打ち込んだ。

MARSというのはローマ神話の神様で戦いを司る神様マルスであ

る。

勇敢な戦士、青年の理想像として慕われている。

俺達にも見習えと言っことだろうか。

エンターを押すと、すぐ横の本棚が動き出して扉が出てきた。

「通りで秘密基地な訳だ。」

「追いて来てください。」

支配人はそう言って中に入った。

中は小規模のオフィスだ。さっきの部屋と違い、独特の雰囲気を出している。更に透明のガンケースがあり、どこかの民間軍事会社のような。はたまたイスラエルのオフィスだろうか。

さらに奥へ進むと、アメリカの港町が立体映像としてテーブルに映し出されていて、武器を持った人が赤く光っている。

他にも世界地図のテーブルがあり、世界中の基地や戦力配置。戦闘機が何処を飛んでいるのか、国連海軍のフリゲート艦が何処にいるのか、国連の戦略インターネットにリンクしていて、異世界の軍隊の居場所が出ているのだろう。

ここは、アメリカのホワイトハウスと同じ機能を持っているようだ。

「説明書はここに置いておきますのでよろしくお願いします。」

支配人は一礼して去っていった。

年上の人に頭を下げられるのは、あんまりなれない。

だが、もっと慣れないのはこの環境だ。余りにもあり得ない。普通じゃない。4、5日前までは中流家庭にいた高2の男子高校生3人がホテルに住み、しかもスイートなんて………。

今現在でもなれない。まあこれは、3時間前のことだ。重要なのは、俺は2時間しか寝てなくて富田達は5時からずっと起きている。ちよっと早起きしちゃったなと思っっていることに腹が立った。

そうこうしているうちに、ギルド連合組合の登録所に着いた。

周りは繁華街から少し離れたところで馬車の駐車が可能だ。

馬車を降りて、二手に別れることになった。

俺と富田、溝口、オヤッサンにリザは、ギルド連合で登録を済ませ、ドクターとエルフ、ダンは近くにあったWHOがやっている病院に行くことになった。

「おろろ………なんで………」

富田は、テストで赤点とったような顔をしている。今にも泣きそう

だ。

「まあ、中に入ろう。」

ギルドの事務所は意外と閑散していた。壁に飾られた剣。ファンタジーな世界に行きたいのに、なぜか電話があつた。

「あの、ギルドの登録をしたいのですが。」

受付にいるのは、猫耳がある女性だ。しかも、同世代ぐらい……。

この世界には亜人という人間とは、違う種族が存在する。この世界では人間のことを人族といい、受付にいるような動物の耳や尻尾がある人を半獣人と呼んでいて人族とのハーフである。

だが、獣人も存在していて、生前の世界での動物と同じような姿をしている。彼らは、イエヴァレ帝国から来た人が多い。転移魔法を使えばすぐらしい。もしくは、転移門で元の世界に戻り、そこから渡航すればよい。

そのほかは、長い寿命を持つエルフ。背が低いが強いドワーフ。ファンタジーな世界に来ているのに剣を持たないで、銃を使いファンタジーな世界に来たのは罰当たりだったか？

「えっと、こちらの書類にご記入をお願いします。お一人ですか？」

「いいや、彼らも含めて5人分頼む。」

「わかりました。少々お待ちください。」

彼女はそう言って奥の部屋に急ぎ足で行く。1分ぐらいで戻ってきた。

「これが、その書類です。空欄に記入して下さい。あそこに机がありますのであそこでお書きください」

渡されたのは、5人分の申請書。

全員に渡し、机に赴く。机は3方向に壁で隔てられている。他者から見えないようにするためだろうか。

まず書くのは氏名。注意事項は「魔法で登録するから本当の名前を使うように。」だそうです。

次に偽名。注意事項は「ギルド内で使われるもので、呼び出したり、パーティーを結成するときはこの偽名を使うことをお勧めする。」
「かあー……………」

偽名って言ったって思いつかない…………。

映画から出すか。

「BAND OF BROTHERS」という映画を知っているだろうか？

厳密に言えば映画ではなくドラマだが…………。

この映画は第二次大戦中、アメリカ力軍第101空挺師団506連隊E中隊の彼らの話でノンフィクションである。

その中に一人の衛生兵がいて、映画を見て医療系に興味を持った。ゲームで衛生兵の特殊技能を取得したのもそのためだっけか。

それと、ギルドを選択しなければならぬ。

「疾風、やっぱこの4つぐらいだよな」
溝口が聞いてきた。

ギルドには7つほどあり、農業、漁業、工業（鉄の製造、加工などの武器兵器産業）、遺跡発掘、冒険、傭兵、運送がある。ギルド内で仲間と結成する際はパーティーを組む事ができる。

その中でも特殊なのが傭兵と遺跡発掘で、傭兵は戦争参加のほか、討伐や治安維持、警護などをする。

遺跡発掘は雪を掘り返してこちらのテクノロジーを取り入れるのだという。だが、殆んどが国の下請けであり儲からないらしい。

選択肢は全部という手もあるが、面倒だろう。

「じゃあ、ここは遺跡発掘と冒険、傭兵、運送にしよう。富田にも伝えておいてくれ」

「あと、これなんだが……」

溝口が渡してきたのは、パーティーの申請用紙だ。

パーティーは、ギルドに所属する人を集め、合同で依頼を達成するものだ。大きい獲物の討伐依頼などは大抵短期間のパーティーを組む。だが溝口が渡してきたのは長期間のパーティー申請用紙だ。

運送ギルドは、輸送中に盗賊に攻撃を受けることが度々ある。大抵、運送ギルドは、傭兵ギルドと協力してパーティを組むこともある。それが発展して独立したパーティーもあるのだという。

「うーん、でもこの長期パーティーは、拠点が必要だぞ。」

パーティー用紙の中には、拠点の住所を書く空欄がある。長期パーティーは大抵、拠点を作ることが多いらしく、依頼をするとき連絡先して書くそうだ。

「あのホテルの名前を書くに困るしなあ……」

ギルドの情報網は侮れない。多分、ホテルを拠点としてしまうといろいろな問題が発生する。

シドニーホテルは、国連加盟国の企業が多い地区にあり、その地区に拠点を持つだけでいろいろと疑われる。また、ギルドと国連加盟国の企業の中はあまりよくない。もし、ギルドの人間が国連から来た人間だと知ったら仕事をくれないだろう。

「仕事用の拠点はまた今度作るとして、その申請書書いておいて」

「パーティー名は？」

「Battle Eagle companyはどじつ。」

この名前は、3人でやっていたゲームのチーム名だ。

「いいんじゃないか。おれは書き終えたぞ。」

富田も賛成して、これで決まったな。

「承りました。偽名で呼びますので、そのままになってお待ちください。」

受付の女性は、書類を受け取り、引き出しから水晶を取り出した。

「ユージンさん、こちらへ。」

どうやら俺が一番手だ。

「本当の名前はこれでよろしいですね？」

「はい、大丈夫です」

「では、ユージンさん。片手を水晶においでください。魔力の測定です」

右手をおき、目の前の彼女は呪文を唱えていく。

「すごい！これなら、アクチュアの魔導院に行くことも可能ですよ。」

俺の魔力はすごいらしいな。まあ、課長がつけた能力だが、

「何か、特殊技能はありますか？」

「一応、衛生兵の医療知識は持ち合わせている。あとは、国連人が使う武器、兵器に関しては知識豊富だが」

ちよつと、余計なこといつてしまったかもしれない。

「ありがとうございます。登録完了しました。情報漏えい防止のため、この紙は処分させていただきます。」

そう言つて、指を鳴らすとギルド登録用紙が燃えていく。魔法か・・・
・・本当に魔導院にいつてみようかな。

「では、登録料金として銀貨1枚貰います。」

異世界からきた彼らの通貨は、銅貨100枚で銀貨1枚。銀貨100枚で金貨1枚となる。銀貨1枚は異世界の平民1か月分の食費に匹敵する。意外と高いのだ。

登録が終わり、登録を終えていない富田たちが呼ばれていく。

何分か経ち、全員が登録を終えた。

「さて、ダン達を迎えに行こうか」

行こうとしたそのときだった。

「ちょっと待って!」。

後ろを見ると、紺のマントを着た少女が一人立っていた。

なにやら、厄介ごとの予感。

「第22話 ギルド連合組合」(後書き)

誤字・脱字ありましたらよろしく。

「第23話 初めての依頼」(前書き)

更新遅くなってすみません。

少しずつやっていますが、思うように進まなくて。

「第23話 初めての依頼」

ボルトを引いて、弾を装填する。銃身に入った弾丸は狙撃手が引き金を引くのを待っている。

東から風。狙撃には好都合だ。

湿度は45。気温は-20 位だろう。

目標は距離700m。

「すーはー、すーはー、すー……………」

息を止め、銃の震えを抑えた。そして、引き金を引く。

銃弾はこの凍りついた世界に飛び出し、狙っていた兵士の首を突き刺した。

兵士は何が起こったのか分からないだろう。

ちょうど10時間前のことである。

「ちょっと、待って！」

その声を掛けたのは紺のマントを着て、フードを被った女の子だ。フードを被っていて顔は判別できないが、声で性別は分かる。

「傭兵ギルドの方ですよね？」

「ああ、傭兵と運送、遺跡発掘に冒険ギルドに所属してるけど。」

「非公式で頼みたい事が有りまして……………」

頼み事を聞きたかったのだが、受付の女性が水を差した。

「彼らは、Fランクの傭兵だけどいいの？そんな大役任せちゃって。」

ギルドに依頼された仕事は、その仕事に適したランクを持つ者を送る。例えば、Fランクを持つ傭兵は主に討伐依頼を貰う。小規模の戦闘や一般人の警護などをするのはDランクの傭兵でしんがりみたいなもの。だがC〜Aランクの傭兵は戦力不足の正規軍など、地方の大物貴族などの警護にあたる。Sランクを持つものは国から依頼される仕事をするところがある。まあ、つまりFランクの俺達はあまりあてにされていないのである。

正規の依頼は、ギルドを通じて自動的に適任者が決まるが、不正規の依頼というのはランクに関係なく依頼することが可能で、ギルドは一応黙認している。莫大な報酬を得る一方、やはり鉄砲玉のような、帰ってこない依頼もある。自分が弱いにもかかわらず依頼を引き受け死んでしまう。

俺達にこの依頼あっているのか？

「どんな依頼なんだ？」

「それが……」

普通の非公式の依頼の理由は、一つは周りに情報が伝わらないようにするためだろう。

一般の依頼の場合、ここの事務所ではなく隣のギルド依頼受付所で行われる。そこは、例えば、市役所の受付のようなもので人が多い。だから、身元を隠したい人間にとっては依頼することが難しい。代理の人が依頼する場合でも、魔法でわかってしまうし、貴族などの場合は、スキャンダルに発展する恐れもあるのだ。

もう一つは、鉄砲玉が採用されることが多い。

鉄砲玉とは、行って帰ってこない人のことだ。例えば、ヤクザの抗争で敵の本拠地に取り込むでしょう。その口火を切るのが鉄砲玉だ。捨て駒と同じ扱いだ。今の日本では鉄砲玉はいなくなった。だがここは異世界。文化も違い、マフィアとおぼしき組織も存在する。そういう輩はバーとかにいるのが当たり前だが、地方の事務所ではマフィアと手を組むことはよくあるという。

だが、今回の依頼はちょうどよい依頼だった。

<主目標>

・貴族の救出

<副目標>

- ・ 実行犯の束縛
- ・ 殺傷禁止

< 概要 >

・ アメリア町の検事であるリヴァール家の党首の娘がアメリアの郊外移動中、盗賊に襲われ郊外にある船の遺跡に捕まっている模様。

・ 党首の娘、ソフィア・リヴァールは当時の服を着ている可能性が高く、乗馬服を着ている。

・ 単なる盗賊ではなく、「洗練された動きだった。」と元軍人の馬車運転手が証言。

・ リヴァール家と対立している元ガリビニア軍が集まったマフィア「ケルベロス」が身代金を秘密裏に要求。表沙汰にすると党首の娘が殺される恐れがある。

・ 敵は一部、銃を使用している可能性が高い。

・ 実行犯の束縛（リーダー格だけでもよい）できれば一人頭、銀貨1枚。リーダー格は、銀貨5枚。

・ 殺傷しなければボーナスとして、銀貨3枚。

< 報酬 >

・ 銀貨2枚（実行犯の束縛により上昇の可能性あり）

前も言ったようだが、銀貨一枚は平民の月収にあたる。フランクなら討伐任務で銅貨50枚程で銀貨2枚というのはすごい金額だ。

「やはり、だめですか？」

フードを被った彼女は不安そうに聞いてきた。だが、俺達に聞いているのではなく受付に聞いていた。フランクに任すんだ。俺達の素性が分かんないやだめだろう。

「この人達なら大丈夫だよ。彼らは、ここに来る前から腕利きの傭兵だったんだ。私がこの水晶で見たんだ。安心して」

受付の彼女はフードの子の頭を撫でている。知り合いなんだろう。あのと気が付いたのだが、俺があ水晶を触ったとき、俺がやっていた事を見たんだろう。

一応、ゲームのキャラクターの能力を引き継いでいるから、そのキャラクターの経験まで引き継いでいるのかも知れない。彼女にはそれが見えたのだ。

「では、下準備があるのでこれで。明日の今頃には、ここに連れてきますのでよろしく願います。」

一礼して事務所をあとにした。

で、10時間後の今。18時50分。

700m離れた敵兵士の首を撃って雪へと倒れた。

首には小型の注射器が刺さっている。某蛇のゲームで登場した麻醉狙撃銃だ。

第二次大戦中にソ連で狙撃銃として使われ、SVDと呼ばれる自動狙撃銃が採用されるまで、30年間もの間、使用され続けたボルトアクションライフル「モシンナガン」だ。

今回は銃身をサブレッサー一体型に取り返え、暗視スコープを取り付けてレイルを取り付けたものだ。

仲間が倒れたのに気が付いて、周りの兵士が近づいてくる。

狙撃手は敵兵士に嫌われる。一人の兵士を負傷させ、仲間がそれを

助けるのを撃つからだ。

近づいてくる兵士を一人づつ片付ける。それも見つからずに。

(こちらEagle Leader。周りの赤ん坊は寝た。ミルクを送れ。)

(了解。座標を指示せよ。ミルクを送ったあと、ベビーシッターを送る)

モシンナガンのレイルにレーザー照射装置を取り付ける。

レーザー照射装置は、GPS装置を通じて照射した座標を後方に送って航空支援するのに使われる。たくさんあった方が精度が高いがレーザー照射する人間はおれしくないから仕方がない。

匍匐前進しながら、寝ている兵士近づく

敵の装備は、ガリビリア軍が使っている鎧に剣という一般的なものだが、中にはアサルトライフルを持っているようだ兵士もいた。

そこら辺に倒れている兵士を引っ張っていき、まとめてくるぐる巻きにロープで縛っていく。

ここから見えるのは座礁したタンカーだ。

絶対零度の台風のおかげで座礁して、普通なら盛れるはずの石油は凍って漏れていない。

ところどころにぼんやりと光っている。多分そのどこかにいるのだろう。

狙撃銃のレーザー照準器のスイッチを入れてタンカーの艦橋に照射する。

(座標を取得した。ミルクを撃ち込む)

独特な花火に似た音をだして、迫撃弾がタンカーに降り注いだ。

ミルクというのは、催涙迫撃弾のコードネームだ。

バックパックにしまっていたガスマスクを取り出し、装備する。

次にホルスターのベレッタM92F拳銃を取り出し、スライドを引

いて次弾を装填した。

さて、救出しますか。

タンカーは少し傾いてはいるが、中に入れるらしく催涙ガスはあまり充滿していない。外の見張りは目の痛さに悶え苦しんでいるが、もうすぐガスが薄くなるから急がなければ。

艦橋付近の水密ドアを開けて、閃光手榴弾を投げ込む。

「手榴弾だ！逃げろ！！」

ドアの向こうから叫び声が聞こえ、走る音が聞こえた。

閃光手榴弾の独特な破裂音を合図にドアを開けて突入する。

「敵が来たぞ！撃て！」

どこからか銃声が響き、水密ドアを跳ねる。

睡眠ガス手榴弾を取り出してピンを引いて、向こうへ投げた。

「また手榴弾だ！ゴホ！ゴホ！……」

これで無力化完了

敵兵士を引きずって、そこら辺のパイプに縛り付ける。

それをやっているうちに船の真ん中にある食堂に到着した。

「身代金はどうなっている？」

「今のところ、要求に応じません」

「しょうがない。指を切り落として送ってやれ。事の重大さが分かるはずだ。あと、治安維持をしている傭兵ギルドの駐屯地襲撃準備は整ったか？」

「アボック中尉が指揮する第二小隊が襲撃します。第二小隊は市内に潜伏中です」

「そうか、あの娘はどうか？」

「今は、艦橋と呼ばれるところに拘留しています。そのとき、ジョンソンが顔を蹴られて3針縫いました。厄介なやつですよ。殺してはダメなのですか？」

「一応、身代金は貰うつもりだからな。生かしておくつもりだ。下がっていいぞ」

ガラス越から見ると、清潔でたくさんの勲章をつけた軍服を着た男と迷彩服に鎧を着た兵士がいた。

どこから見ても、軍人崩れのマフィアとは到底思えない。いまだ現役のようだ。規律正しく、名誉を重んじているかのように思える。

もしかして特殊部隊？

だが、こんなところで時間を潰している余裕はない。彼女は艦橋、ブリッジにいるはずだ。つまり、もっと上に行かねばならない。

ゆっくりと廊下を進んでいくが、目の前に黒っぽい頭文字がGの生物が

「!!!!!!!!!!!!!!」

Gと呼ばれる生物は、カチンコチンに凍っている。気持ち悪い……。

「誰だ！」

俺の声のない絶叫に気が付いたのか、食堂を守っていた兵士にばれってしまった。

兵士は、持っていた03式自動歩槍、アサルトライフルの引き金を引いて撃ってくる。

片手で持った拳銃で威嚇射撃をしながら、走って階段までたどり着いた。

「こっちにいるぞ！撃て！」

銃声を聞いた兵士が押し寄せてくる。急いでもうひとつの階段を登って、艦橋までたどり着く。

「敵を見失った。草の根分けても探し出せ！」

敵は見失ったらしいが、搜索を諦めないつもりらしい。

目の前に偶然あった艦橋と書かれたドアがあった。

艦橋の扉を開けて、ホルスターからM9を取り出して左右に向ける。

確か、ここら辺にいるはずだが、ほどかれたロープしかなかった。

「えい！」

掛け声と共に、頭に衝撃が走った。周辺には電気機器の破片が散らばっていく。

ヘルメットを被っていなかったので、痛みによる自分の再起動には時間がかかる。

痛てえ……………。

ごそごそ

懐に何か動いている感触がある。

誰かが懐を探っている。

天使の懐を探るとはいい度胸だな。

探っている手を捻ね上げ頭に銃を突きつける。

「痛い！痛い！」

悲痛の叫びを上げたのはガリビィア兵ではなく、乗馬服を着ているリヴァール・ゾフィア本人だ。

外は - 20 度。茶色い皮のジャケットを着ているが、そんな薄着で寒くないのか。

「ここも調べるぞー！急げ」

「あ、やべー！」

腕を話して近くにあったロッカーを倒して入れなくする。

「そこまでしても欲を満たしたいの？」

皮肉っぽく聞いてくるが、どうやら大きな勘違いをしているようだ。

「救助を依頼されたユージーンという傭兵だ。助けに来た」

「それにしても、手際が悪くない？あなた何ランク？」

普通の傭兵は、副目標である殺傷禁止を守らない。そんなことするのは面倒なのだ。

「殺傷禁止との依頼主からの命令でね。見つからずに来るつもりだったんだが。脱出する準備するから少しドアから離れてくれ」

ドアを押さえていた彼女を退かせた。もしかしたら、奴らはドアを撃って突入するかもしれないからだ。

バックパックに入っていた頑丈なロープを取り出して、そこら辺に縛り付ける。

「まったく、これじゃ逃げられないじゃない！どうするのよー！」

悲鳴に近い声を上げているが気にしない。ロープの先端にコンクリートを着ける。これで準備完了。

「今からここを出るからしっかり俺に捕まっつてよ」

「変な仮面見たいな奴と行きたくないわ！」

ワガママだな。

そう思ったが、変な仮面もといガスマスクを着けてちゃダメだな。ガスマスクを脱いで、ポケットにねじ込んであったゲームで作ったチームのロゴが付いた野球帽を被った。このロゴには、驚が足でアサルトライフルを持って飛んでいるロゴだ。

「これでいい？」

「……………ええ」急に黙った。まあいいや。

ホルスターからM9を取り出して、艦橋の窓ガラスに数発撃ち込んで窓ガラスを粉碎する。

「キヤアアアア！」

銃声に驚いたのか、うずくまってしまう。ロープの先端につけた石を窓の外に投げて、下に降りる事ができるようにした。

「何をしたの？」

「さあ行くぞ！」

彼女を抱き抱えて降下する。

ほんの30秒ぐらいだったと思うが、彼女には長い時間だっただろう。見知らぬ傭兵に抱えられ、4階建て相当の建物から降りるのだ。怖かったにちがいない。もし、俺が消防士で助けに来たというなら安心して身を任せるだろう。しかし、消防士という概念がない世界で、見知らぬ傭兵で変なマスクを被っていたら誰でも警戒して当たり前だし、身を任せることもできない。

底知れぬ不安があったことだろう。

「いたぞ！あそこだ！」

ドアのバリケードを突破したのか。ブリッジには、ガリビニア兵がこちらに銃を向けていた。

銃声とともに、雪が跳ねて、まるで空に帰るかのようで見ていると面白い。

だが実際には、敵が放った銃弾が雪に突き刺さりその衝撃で飛び上がっているだけなのだ。

「こんなところで死にたくない！どうするのよ！」

とっさの判断でタンカーの陰に隠れたが、身動きが取れない。しかも、催涙ガスの効果も切れたので苦しんでいた兵士も来ることであ

ろう。

(こちらEagle Leader。パッケージを送れ。ついでに降伏勧告をスピーカーで促してみよう。その前に近くの雪に爆弾をたんまり仕掛けたからそれを合図に来てくれ)

(こちらEagle 2。了解した。待機する)

もしものために、プランBを用意していた。

当初はプランAと呼ばれる、隠密に助け出そうと思っていたのだが、隠密行動ができなくなる可能性も考慮に入れて、プランBを作っておいた。

プランBは、俺と対象者R(ロメオ、Rはリヴァール家の頭文字から取った)が窮地に立たされた場合に発動するものだ。そのためにタンカー正面500m先にオクトーゲン爆薬をたんまり仕掛けておいたのだ。

この爆薬は、対艦ミサイルなどに積まれる爆薬で、一般でも知っているようなダイナマイトやプラスチック爆薬の部類に入るC4やTNT爆薬よりも強力で、1トン単位で仕掛けると、地獄の門を開けたのではないかというぐらいの大穴を開けてしまうが、今回は戦艦が2回撃沈するぐらいの量の爆薬をセットしておいた。

ポケットの中から無線式起爆装置を取り出し、安全装置をオフにする。

「何をするつもり？」

こちらを不思議そうに見てくる。

「こっつするのさー!」

起爆スイッチを押し、500m先にあるオクトーゲン爆薬を起爆させた。

爆発と同時に衝撃波で地面が揺れた。赤く爆発して、ものすごい爆音と地響きが響き渡った。

パラパラパラパラパラパラ……

2機のヘリコプターと無数の無人攻撃機が、東の空からやってきた。

<こちらは国連軍だ!今すぐ武装解除して投降せよ!>

富田の声がタンカー上空に響き渡る。

銃声は静まり、辺りはヘリの音だけになった。

「あなた国連の人?」

「いや、あれは嘘だ。ああ言わないと傭兵だからと言って投降しないだろう?」

2機のヘリ、とHi 24Dが地上に降り立った。

「あなたがゾフィア・リヴァールさんですね？私はBattle Eagle companyのグレイ・ウォーター少尉です。リヴァール家の当主、チャールズ・リヴァール様の依頼でここに来ています。今から屋敷のほうへお連れいたします。」

グレイ・ウォーター少尉は、富田だ。映画から取った名前らしい。服装は、ヘリパイロットが着るフライトジャケットだ。

「わかりました。助けていただきありがとうございます」

富田の礼儀正しい作法に、受け答えて一礼した。

「えつとですね、あなたを助けたのは、Battle Eagle companyの代表、ユージン・クロウ中尉です。」

「改めまして、ユージン・クロウ中尉です。以後よろしく。」

「……よろしく」

なんだか、少し沈黙があったようだがまあいいや。

<手を頭の上にしてこちらに来てください！抵抗すれば射殺する！>
拡声器を持っているのは、溝口だ。

タンカーから出てくる敵兵士に一人つつ手錠をつけ、CH-47と呼ばれる大型ヘリに乗せていく。

「では、ヘリに乗ってください。アメリカ郊外で一度馬車に乗り換

えて屋敷に向かいます。」

富田はそう言っつて、先に乗り込む。

Hiir24D（ハインドD）は、旧ソ連が開発したガンシップヘリだ。

分隊規模の兵士を積載可能で、両翼にはロケット弾やミサイル、機関銃などが搭載されている。

ゾフィア・リヴァールは、ヘリの中を見渡して一番近い座席に座る。

こっちは、捕虜の収容状況を聴くために操縦席に寄った。

「とみ……ウォーター少尉、ヘッドセットを貸してくれ」

「了解です、中尉殿」

富田は笑いながら、ヘッドセットを渡した。結構ウザイ。

（オヤツさん、聞こえるか？疾風だけど）

（おう、疾風。見ていたがあの子結構美人だな。どう思うよ？）

このオヤジ……。

そんなことした考えていないのか。

だが、彼女には興味はない。俺は、リザのほうがいい。

(俺の娘はダメだ！)

(娘！？妹じゃなかったの！？)

戸籍上は妹になっっているはずだ。でも、20代に結婚して子供を授かっていればあるかもしれない。

(戸籍上はな。だが、親として接しているぞ。それと・・・)

(そうだ、そうだ。今捕虜を收容中らしいけど、どんな感じ？)

(ん？今收容中だ。溝口がやってるよ。規模は2個小隊ぐらいあるな。だが、指揮官が行方不明だ。)

(行方不明？あの、中国軍の軍服を着ているような奴か？)

(ああ、その指揮官と側近が行方不明だ。多分こいつらは、全員ガリビアンだろう。中国人だけ逃げたんじゃないか？)

あの軍服をきた奴はアメリカに潜伏している部隊のところに逃げたのだろう。悔しいが、なんでガリビアン軍がこんなところでアメリカの検事の娘を拉致して身代金を要求するんだ？

(行き先は多分アメリカだ。どこかに潜伏している部隊と合流するはずだ。)

(なに？どういうことだ？)

(敵は、傭兵の治安維持のための駐屯地を襲撃すると聞いた。アメ

リアに部隊が潜伏しているらしい。)

(そうか。だが、俺達は傭兵だからな。依頼あるまでできないぜ。今から無線でそのことを報告するからお前はもう休め。)

(へ?)

(何かあるかわからんからな。寝られるときに寝ておけよ。これが先輩のアドバイスだ。)

先輩のアドバイスかあ。20年も兵士だったからな。じゃあ寝るとしますか。

無線を切って、近くにある座席に座る。

「もうすぐ離陸します。ベルトを締めてください」

富田は、後部座席にいる俺達に言って、操縦席に座った。そのうちにメインローターが回り始める。

ヘリのローターが真上で回っているため、ヘッドホンがないと眠れなかった。

「ちょっと窓閉めて……」

ヘッドホンから、悲痛の叫びに近い声が聞こえてきた。

空を飛んでいるのは俺にとっては楽しい。だが、異世界の住人は大抵空を飛ぶことに慣れていない。慣れているとすれば、ドラゴンライダー位だろう。多分、貴族の部類に入る人間は空を飛んだことは

無いようだ。

へりのハッチを閉めて自分の座っていた場所に座る。彼女はハッチを閉めたものの、かなり怖がっているようだ。

うん．．．．．近くに行つて、気を楽にしてあげようかな？

．．．．．眠い．．．．、こりゃ無理だな

さっきまで疲れすら感じなかったのに、どっと疲れがこみ上げてきたようだ。

腕を枕にして横になった。

どうやって、リザにアタックしようかな？

「第23話 初めての依頼」(後書き)

誤字・脱字ありましたら宜しく願います。

今回、富田君の偽名は、「ティアー・オブ・サン」と言う映画に出てきた主人公、を元にしてみました。

「第24話 過去の亡霊」(前書き)

遅くなりました。今ちようど試験期間中で……。

番外編予定中です。

オリジナル新兵器が登場します。

「第24話 過去の亡霊」

「ふあわわわ?.....」

「どうした?寝不足か?」

溝口は、大きな欠伸をした。どおってことのないただの欠伸だった。

だが、理由がかなりヤバいのだ。

「そりゃそうだろう!したくもない仕事を一晩中やってたらなあ!
しかもデバガメなんて.....!!」

俺達のいるところはアメリカのとある裏通りの屋上。丁度午前10
時ぐらいだろう。

そして見ているのは、対岸にある娼館、つまり売春宿だ。

異世界の文化では、娼館は裏通りでよく見かける。ヨーロッパでは昔、裏通りを通ると普通に露出度の高い女性たちが目につく。それらの法律も作られたが、売春自体を禁止するわけではなく、客引きの場所を限定して商売させるというものだ。

その娼館やこちら辺や一体を仕切っているのは、「ケルベロス」で、駐屯地からの情報によるとガリビニア軍の軍服を着た兵士が中に入っていたという。

他国の軍隊ならば、普通である。自分の部隊の軍服を身につけて、水商売に手を出す。ほとんどが海軍兵だ。

海軍の兵士は、危険な航海の任について、やっとここまでついたの

だ。そのストレスがその水商売に向くとするのは当たり前だった。それ以外の発散方法はないわけだし。

だが、その軍服を着た兵士は、迷彩服を着ていたらしい。国連軍はここにはこない。だとすれば、ガリビビア軍の特殊部隊と考えるのが普通だろう。

「まあそう言うなよ。それで、駐屯地の方は？」

「溝口が駐屯地で傭兵にAKを支給して訓練している頃なんじゃないか？装甲車とRPGを支給して、ある程度の医療物資を医者に渡しておいたから大丈夫だよ」

あのと、ゾフィア・リヴァルを屋敷に連れて行き検事から驚くべきものが渡された。

「これは、ギルドを運営している会長からの直接依頼だ。しっかりと読んでくれたまえ」

その紙の要約したのがこれだ。

<Op2、Hunting Kerberos>

<主目標>

・マフィア「ケルベロス」の殲滅

・指揮官の拘束

・傭兵駐屯地を死守する。

<副目標>

・駐屯地の傭兵に、新しい武器を支給する。(資金はギルド持ち)

・駐屯地の傭兵に、新しい武器の使い方を教える。

・駐屯地の傭兵に、現代の戦術を教える。

・ガリビディア軍の士官、または指揮官の血液サンプルを手に入れる。

<概要>

・「ケルベロス」は、元中国人民解放軍傘下のガリビディア軍特殊部隊であることが判明した。指揮官は元人民解放軍陸軍少佐、李増峰であり、多数の元中国人がいるとの事。

・現在彼らは、アメリカ町にあるギルド運営の治安維持のための駐屯地を襲撃する予定である。

・彼らの戦力は、不明で装甲車などの重装備など確認されていない。

・ギルド運営の駐屯地、アルファス駐屯地は二個中隊ほどの戦力を有しているが、殆どが剣などを武装している。

・現在、溝口によって傭兵の近代化をしているが、時間がかかる模様。

・今回の依頼はギルドのからの直接依頼だ。今回の任務が成功すれば、ランクを上げるばかりか、名前が広まり仕事が増えるだろう。

・血液サンプルは、国連軍が採用している兵士の認識票であるナノマシンを見つけるためである。ガリビィア軍は、その技術を応用しているらしく、士官にそれを施している。

・なお、敵の目撃情報は、裏通りにある売春宿で目撃された。

<報酬>

・銀貨50枚。(副目標を行なっても、加算されない)

・戦闘中、ギルド所属以外の店舗が壊れた場合は弁償すること。

一応、報酬はかなりいいものだ。Fランクの傭兵はこんな報酬はあ

り得ないことだ。

目撃情報は、その常連客の情報だ。間違いないだろう。

「あれは？」

富田が指差した先は宿の二階にある窓だ。そこは、日光が反射したようにも見えた。

一瞬の出来事だ。

窓から飛び出したライフルの弾丸が、富田の肩を直撃した。

「伏せろ!!!」

窓から撃たれたのを期に、戦闘の火蓋を切られた。

だが、まだ下にはたくさんの人がいるのだ。

たくさんの銃火が見え、遮蔽物が蜂の巣になっていく。

「逃げる!!」

「キヤアアア!!」

下は混乱に包まれている。たくさんの怒声や悲鳴、走る音やドアを閉める音。完全にパニック状態となってしまうた。

「富田!大丈夫か!」

富田の肩からは、大量の血が溢れだし、幸い弾は抜けているものの富田の骨は砕かれていた。

救急バツクから止血帯を取り出して、出血を抑える。

「痛い!焼けるようだ!くそお!」

足をばたつかせながら、悶え苦しんでいる。

痛みを抑えるために、モルヒネという強力な痛み止めを注射する。

痛み・・・もとより感覚は、消えて富田の顔色は良くなった。

バックから治癒ナノマシンを取り出して、富田の肩に注射する。傷口はふさがったがモルヒネのおかげで意識は朦朧としていて、闘うことは出来ないだろう。

（こちらEagle1。緊急事態だ。今すぐアパッチを送ってくれ！オーバー。）

（了解、今すぐ送る。）

窓からは、未だに銃弾の雨が降り注いで身動きがとれない。高い練度で正確な射撃だ。

パパパパパパ・・・AKの独特な銃声が聞こえている。

ここまで来るのに何回も修羅場をくぐり抜けたが、自分の力で倒せるかどうか不安だ。歴戦の兵士の経験と能力と身体強化していても、生前の自分と変わりない。

特殊部隊の精鋭と渡り合えるのか？

パラパラパラ………

上空からはAHI64Dアパッチ・ロングボウ攻撃ヘリが弾薬を満載してやってきた。

(こちらEagle 1。宿の二階からも猛攻撃を受けている！制圧してくれ！)

(了解、少し待て)

アパッチは高度を落として、機関砲を二階に向けた。

20mm機関砲から吹き出した20mm弾が二階を粉碎していく。

建物は、発泡スチロールのようにボロボロと崩れていく。

だが、今いる屋上には20mm弾の空薬莖が降り注いでいた。

しかも薬莖は高温でメチャクチャ暑いのだ。

「暑い！くそ！富田！こっちに来てい！」

富田のボディーマーを掴んで、下の二階に行く。

「富田。今から向こうに行ってくるから、ここで待っている。動くなよ、モルヒネで朦朧としているからな」

「わかったよ、ここでじっとしてる。」

富田は、持っていたサイドアームであるコルトガバメントを取り出してスライドを引く。

朦朧としている戦友をここに置いておくのは、嫌だったが突入するときに連れていくのはもつと嫌だった。朦朧としている戦友は、仲間を身を危険にするからだ。

F N SCARのコッキングレバーを引いて建物を出た。

既に通りは封鎖され、バトルフィールド、戦場と化していた。

一階の入り口はバリケードで塞がれ入れない。

ボディーアーマーのポーチからC4爆薬を取り付けて、起爆剤として、破片手榴弾を取り付けてピンを抜く。

遮蔽物に身を隠し、第二安全ピンから離しているから、ピンは外れて3秒後に爆発した。C4爆薬は、パソコンのマウスの大きさにして混ぜたものだ。よく混ぜると威力がますが、壁一枚ぐらいなら充分な量だ。

壁はこつぱ微塵に吹き飛び、アメリカの街は揺れた。

「爆発だ！突破されたぞ」

上から聞こえ、ドタバタと走る音がする。二階にまだ生き残っていたのだろう。

「敵だ！撃て！」

階段から飛び出した兵士は銃を瞬時に構えたが、こちらが少しだけ早かった。

フルオート連射で、敵をなぎ倒していく。

敵がどんな状態かって？

至近距離でアサルトライフルを撃ちまくったら目標はどうなると思う？

5、56m弾の殺傷能力は7、62m弾より弱い。

だが、至近距離ならば体に大穴が空くと同じぐらいだ。

弾が切れたら、すかさず銃身の下に着けてあるショットガンに手を伸ばして引き金を引いて敵を粉碎する。

前は敵を撃つのにためらったが、ためらったら死ぬ世界だ。容赦は出来ない。

ツーマンセル（二人一組）が2組程来たが、あらかたやつつけた。だが、彼らは異世界から来た人達、つまり白色人種だ。黄色人種の中国人はいない。

ひとまず二階にあがって、部屋の状況を目の辺りにした。

そこは、ベットがあり、窓があった場所には瓦礫と大きな穴が残されていた。

至るところには人間の体とおぼしき塊があるが、頭の中で機械的に処理してしまったのか、吐き気は湧いてこなかった。

（こちらポスト1。ポスト2応答せよ。）

隣の部屋の奥は通信室兼指令室となっているらしく、無線機数台と無線の暗号変換解読装置。アメリカの全体図などが置かれていた。

（ポスト2応答せよ。無事か？）

無線機から発せられた声の主は、もうひとつの隠れ家にいるのだろう。ポストというのは拠点を表しているのだろう。

「動くな。」

冷たい銃が首筋に触れた。後ろの兵士は怪我をしているのか、息が荒い。

「これでお前達は終わりだ。」

後ろの兵士は、引き金を引こうとした。

長年のゲーマーの感と神から授かった戦闘能力のおかげで瞬時に体を反らし一発目をよける。

着ていたボディーアーマーの胸に着けていたナイフを抜いて兵士の右腕を刺した

兵士は、ナイフを刺した勢いで一発壁に撃って、後ろによるめいた。

すぐに体制を立て直して俺を撃とうとしたが、ホルスターに入っていたM9を素早く抜き取って、照準を合わせる間もなく引き金を引く。

兵士の眉間に当たり、重力に従って床に倒れた。彼の服を見る限り、この拠点の責任者だろう。

着ていたのは迷彩服ではなく、軍服で腕には階級章があり、「少尉」だということがわかった。

アメリカの地図に書かれていたのは、彼らの拠点と襲撃作戦の予定図だ。

この拠点は「ポスト2」と呼ばれ、他にも「ポスト1」、「オフィス1」と呼ばれる拠点があつた。

多分、「オフィス1」と呼ばれるのが敵の総司令部だろう。

(こちらEagle1。敵の機密書類を発見した。写真を送る)

バックパックに収納していた携帯端末を取り出して、内臓されたカメラで地図を撮った。

この写真は、戦術ネットワークを介して全員が持っている携帯端末に転送した。

（こちらEagle 4。写真を受け取った。訓練を済ませた傭兵をポスト1に送っておく。大丈夫だろう。装甲車も一台派遣しておいた。）

Eagle 4はおやっさんのことだ。以外にもアパッチ攻撃ヘリのパイロットは彼である。

オーストラリア軍に入る前は、農家で農薬を散布していたらしく、ヘリコプターの免許を取ったそうだ。

（こちらポスト1！敵の攻撃に晒されている。応援を……ワアアア……）

敵の無線は途中で途切れた。無線兵はやられたのだろう。雑音が残っているだけだ。

（こちらオフィス1。チャンネルオープンで交信中。全部隊に告ぐ）

先程とは違い、落ち着いた年期の入った声が聞こえてきた。

（敵からの攻撃により部隊は、壊滅的打撃を受けたが作戦は続行する。残っている隊は、ラインアルファまで撤退、もしくは個人の判断に任せる。）

ラインアルファはここから3ブロック先にある個人経営の店が群が

った商店街の通りを指す。だがこの通りまで後退することは、戦闘地域の拡大を意味する。ポスト1でも、ラインアルファから4ブロック先にあるのだ。敵がそこまで撤退することは、戦闘地域の拡大、犠牲者の拡大を意味する。

（こちらEagle1。ポスト1にヘリを派遣してくれ。ここはもう大丈夫だ。）

（Eagle4了解。今すぐ援護に向かう。）

この拠点の人員はおよそ一個小隊。多分ポスト1もおなじくらいの規模だ。

たぶんアメリカ傭兵部隊は1個小隊規模。それに強力な戦闘ヘリアパッチを加えれば十分だ。

持っているM92Fをホルスターに戻して、床に投げ捨てたFN SCARを拾い、銃の点検を軽くした。

チェスに例えれば、ポーンやビショップ、ナイトは失い、人質であるクイーンはこちらの手にある。

誰がチェックメイトを決めるかだろう。

（疾風、聞こえるか？）

無線からは、モルヒネで朦朧としているはずの富田の声が聞こえた。

（え、どうしたんだ？）

(言つとくが、俺達は身体強化されているのを忘れてるだろ?)

結構忘れていた。身体強化されているといつても実感湧かない。反射神経や運動神経、筋肉量などかなりすごいことになっているらしいが、見た目は生前と変わらないらしい。

(忘れてた。もう直つたのか?)

(ばつちしょ。どうする? さっきの観測ポイントの近くにジープがあるから、それで敵陣地に乗り込もう)

隣の建物に来る時、馬車に無理やり牽引させてきたのがジープだ。何かあつたときのために持ってきたが役に立つようだ。

テーブルにある地図や書類を黒いコンテナに入れて、蓋を閉めた。ライフルのコッキングレバーを引いて次弾を装填する。

建物を出ると、ちょうどジープが停まっていた。

「お客さん、どちらまで?」

「敵の陣地まで」

「了解、そのパワーアーマー着て」

そこには全長3m。

自衛隊の戦車のような迷彩色施し、甲殻 動隊に出てきたりするよくなやつだ。この前、富田が着ていたのよりも強そうに見える。富田が着ていたのがパワーアーマーならば、これは重装型だろう。

「これを着るのか？」

「ああ、中にあるAIが使用方法について説明してくれるよ。まずは、ボディーアーマーを脱いでからこれを着てくれ」

富田の言う通りにして、スプリッターと呼ばれる市街地迷彩の戦闘服だけにした。

このパワーアーマーは背中から入るらしく、着ぐるみのような感じである。

着ると自動的に背中中は締め、10秒間真っ暗になった。閉所恐怖症なら耐えられないだろう。

「システム起動します。」女性の声が耳元で聞こえた。すると、視界が明るくなり外の様子がはっきりと映し出された。

(システムアップロード完了。AIナビゲーションシステム作動)

目の前に映し出され、視界には周囲の地図、敵の場所、味方の配置が分かるようになっていた。かなりすごい。

「DNA認証確認。武藤 疾風中尉でよろしいですね？」

さっきの女性の声が聞こえた。多分これはAIの合成の声に違いはない。

「ああ、あんたは？」

「私は、世界管理局破損世界修復課の通称「課長」に作り出されました。これからは、戦闘時のナビゲーションを担当させていただきます。」

通称課長に作り出されたのか。しかしこのAI、なんかの映画に似ているな。えっと確かアイ・・・アイアン・・・

「元は、課長が見ていた映画、「アイアンマン」が元ネタです。他にも、ウィル・スミス主演の「アイ・ロボット」なども含まれます。」

見たんか・・・。

まあ、あの映画のしゃべるAIには驚かされた。家にああいう物がいいなとずっと思っていたところだ。

「私の本体は、シドニーホテルの地下5階に位置していますので安心ください。私の名前はありますので自由にお呼び下さい。」

「自由に？俺に名前をつけると？」

「はい、自由に呼び下さい。」

困ったなあ・・・考えつかない・・・。

「わかった。〈サリー〉でいいか？」

「理由を聞いてもよろしいですか？」

「ああ、シドニーホテルの頭文字は〈S〉だ。〈AI〉だから、一番最初にSをつけて〈SAI〉。でもサイなんて変だから〈SAI〉の〈A〉と〈I〉の間に〈R〉を入れる。そのあと、〈I〉のあとに〈-〉をいれて〈SARI-〉。キーボードで打つと〈サリー〉だ。」

「そうでしたか……。よかったです」

「何が良かったの？」

ちよつと気になるので聞いてみた。

「課長が言っております。あなたなら変な名前をつける可能性があるあるって。」

俺が変な名前を付ける訳ないだろう！

課長はこういったことを考えていたのか。

いや、俺がこう思うことを予想してたに違いない。

だって神だし……。困らせようとやっただに違いない。

突っ込みたいところだが、これ以上時間を費やすのは危険だ。

「準備できたか？仲良く出来そうか？」

富田は、俺の顔（パワーアーマーの頭部カメラだが）を見て聞いてくる。俺たちの会話を聞いていたな。

「まあな。この機体の武装は？」

「右腕にM134ミニガンを装備、左腕にはヴィブロブレードを装備しています。両肩には対戦車ミサイルポットを搭載しています」

サリーが答えた。

「弾は？」

「弾薬は創造魔法によって無限に撃つことが可能ですが、対戦車ミサイルポットには再装填に時間が掛かります。」

ミサイルには制限はあるらしいが、ミニガンが無限で助かった。

「さて、サリーさん。敵の陣地の位置を地図でマークして。」

視界には町の立体地図が映し出され、自分がいる現在位置と目的地が表示された。

「おい、富田。先に駐屯地に戻ってて。」

「え？一人で大丈夫か？」

「機体を慣らしとこうと思う。対戦車ミサイルにミニガン。しかもパワーアーマーだけ。天敵はいないと思うけど？」

念願のパワーアーマーを着て、重火器を肩と手につけている。それはもう、かなりの興奮だ。小さい子供が新しいおもちゃを貰い、喜ぶのと似たようなものだろう。

「わかった。先に帰っているが、無茶するなよ……。」

「了解！気をつけて行って来るよ」

新しいおもちゃを貰い、興奮している俺を見て少し呆れているようだ。

そこまで走るため、ジープから立ち上がった。

周りの店からは、人々がこちらを見て目を丸くしている。外からコイツを見てみたいが、帰ってからにしよう。

まず一歩。

ゆっくりと右足を踏み出した。

ズシッ、と音と足の機動音が聞こえて、足を動かすとこのパワーアーマーも動いた。

両手を見て、握ったり開いたりを繰り返す。

「ミニガン起動」

腕からミニガンが飛び出し、目の前にカーソルが出る。

「サーベル起動」

左腕からは日本刀に似たものが飛び出し、真っ赤に染まる。ミニガンは右腕に納まり、近接戦闘のカーソルが出てくる。

アーマード・コアがFPSだったらこんな感じだっただろう。

笑いが込み上げてくるぜ。

ヒヤヒヤヒヤヒヤ……

サーベルをしまつて、一歩ずつ踏み出して走り始める。

足が羽のように軽く、高速で走っている。これならオリンピックで金メダルは軽くいけそうだ。

そう思ううちに、時速40キロ。

だが足に結構負担が掛かる。

「中尉。足に付いているローラーを使わないと、足に重大な疾患を引き起こします。ローラーダッシュモードを使用してください。」

「ローラーダッシュモード？何だそりゃ？」

いきなり足にタイヤが出て、バランスを崩して酒場に突っ込んだ。

壁は、段ボールの壁のように破壊して、オープンカフェ……つまり半壊にしてみちゃくちゃにした。

ところどころに並べられたテーブルは吹っ飛び、人に負傷者を出さ

なかったものの、ひどい状態となった。

「わしのバーが……」

店主の親父が、力が抜けたらしく床に潰れた。

「おじさんゴメン。後で弁償します！」

手を合わせて、立ち上がる。

パワーアーマーが、バランスを崩さないように補助したらしく、ローラーブレードで起き上がりにくい姿勢でも起き上がることが出来た。

「スピードの調整はどうするんだ？」

「考えるだけで実行できます。さっきの兵器の起動も言わなくても起動できますが。」

あらそうですか。言うの遅いよ！

じゃあ、こう考えればよいか。

車のアクセルを踏むように考えればいい。

右足でアクセルを踏むように……

足のローラーが動きだし、高速で走り初め、半壊した酒場を後にした。

「それで、この機体の愛称はなんだ？」

「ミヨルニル……」

「HALOか!？」

「すみません、冗談です。正式名称は、APU（Assault Powered Unit）と呼ばれています。その機体は、旭日重工業の30式歩行戦闘車、愛称は「雷電」です」

AIが冗談を言うとは思わなかった。2030年に正式採用されたらしいが、戦闘車両と言うよりも戦車のほうがしつくりと来るが……。

「2030年の時に、米軍が新しく巨大人型兵器を開発している噂があり、戦闘車になりました。当時の基準は、車両に大口径の火器があるかが基準でした。実際、戦車以上の戦闘能力があるのは確かです。」

このほかにも、アメリカやロシアなどの大国は、開発して実戦配備をしたらしいが、中国は遅れをとって配備できなかった。しかも、氷河期災害で北半球は壊滅して事実上、APUは消えていった。あまり、APUは兵器市場荷は出回らず、オーストラリアは開発しているかもしれないがまだまだ時間が掛かるだろう。

「目標をレーダーで確認しました。向こうも気づきました。今すぐ攻撃を加えてください。」

レーダーに、敵の赤い表示が出てくる。しかも、戦闘は開始されているようで、味方の緑の表示が目立っていて、銃声が所々に聞こえた。

「ミニガン起動」

右の腕からは、ミニガンがニョキッと出てきて、アイドリングしている。

(こちら、ガリビィア帝国軍、正体不明の機体応答せよ。所属を明らかにせよ)

ガリビィア軍がこちらに無線をしてくる。どうやら向こうのレーダーに見つかったようだ。

無線の周波数は国連軍が使っているチャンネルだ。

(こちらはアメリカ傭兵部隊。貴官の部隊は包囲されている。速やかに武装解除し投降せよ。)

(……!……!)

マイクの向こうにいるのだろう兵士は、相手が傭兵だと分からなかったようだ。なにしろ、国連軍の暗号通信を使っているのだ。相当ビクビクしてるな。

ちとど、行くとしますか。

「第24話 過去の亡霊」（後書き）

誤字脱字在りましたらよろしく願います。

ご感想も宜しく。

旭日重工業は、日本の軍事力（防衛力？）を支えている企業があり、それを基にしました。

「番外編 劇的びフォー・アフター？」（前書き）

某番組の題名をパクりました。

まだこれ続きます。

「番外編 劇的びフォー・アフター？」

「無理でしょ。こんなところ買うなんて……」

俺はクリップボードをもってつぶやいた。

目の前にあるのはギルドの事務所の近くにある2階建ての建物だ。

事務所の近くに位置していて、2ブロック先にはギルドの商店街があるため、この建物はかなり人通りの多い。もし個人営業にしても商売繁盛まちがいなしだ。

だが、一つ問題がある。

それは、建物がぼろくそひどいのだ。

窓という窓には板で塞がれ、裏口と正面口にも板で塞がれていた。しかも、所々落書きされていた。

いい所といえば、地下室と繋がっている車庫ぐらいだろう。

こんな人通りの多い、東京の一等地のような場所にこの建物があるが、いままで誰も買いに来たがる客は居なかった。

それには訳があり、ひとつが氷河期災害の前に作られた建物だから

だろう。

もとは、交番だったらしく、赤ランプがくっついていた。

一応俺は反対した。だが警察ヲタクの富田君によってここになった。

「さてどこから始める？」

作業着に着替えたおやつさんが指を鳴らしながら聞いてきた。

「じゃ、まずドアをぶっ壊すか」

溝口はスレッジハンマーを大きく振って、ドアをぶち破った。

ドアは、バラバラに吹き飛び、元々鉄製の引き戸だったらしく、金属製のところは大きく変形した。

497

「臭い」

さっきまで見物として見ていたりザがこの建物の近くに来て言った。

中は、交番だから事務用机が3つ置いてあって、「警察官募集」のポスターが貼ってあった。パソコンも置いてあって、電気さえあればしっかりとした交番に見えなくもない。

だが、所々には制服姿の骸骨が2、3体ほど倒れていた。

遺体は荒らされた様子もなく、

いすに座り机に突っ伏した遺体、

机にもたれ掛かって家族の写真を見ながら死んだように見える遺体。

誰かが入ってきた後はあるものの、すぐ引き返した後があった。

「ここに入ってきてサルベージしようとした旅人が発見してな。あの噂があつて、古代文明、つまり俺たちの世界のものを触ると未知の病にかかるとか言う噂だからここを長い間封鎖したらしいよ。」

もちろんこれは噂。

未知の病なんて、せいぜい遺体を触って感染症とかになったんだろう。もしくは、ガリビニア軍の原子力発電所発掘事故でそういった噂が広まったのかもしれない。

「彼らを生かさないとな。骨壺を用意してくれ」

そういつてマスクとゴーグルをつける。

ゴム手袋をはめ直して、近くに倒れていた遺体を丁寧に服から取り出して壺に収めていく。まずは、頭蓋骨を壺に入れて、着ている防

弾チヨツキを脱がしていく。ふと遺体のポケットから定期のようなものが落ちた。

それは、警察官の警察手帳だ。

「警視庁」とかかかれていて、開けると旭日章がみえ、彼の生前の姿が見えた。

顔立ちもよく、嫉妬してしまいそうな顔だが、制服を身に纏った彼は正義のオーラが写真からでも感じ取れた。

一体この人はどんなことを考えて天国に旅立ったんだろう。

名前は「和田 秀樹 巡査」と書かれていた。

すべての骨を壺に納めたあと、残ったのは彼が着ていた制服と帽子、拳銃や手錠、財布や免許証。

最後に胸ポケットに入っていた彼の奥さんと子供の写真。

それらを箱に積めて、箱を閉じた。

「疾風、ちよつと来て。」

もう終わっていた溝口が俺を呼んだ。

「なんだよ。ここを綺麗にする方法見つけたか？」

「まあね。それと、ここにあったパソコンだけど。まだ動くかもしれない」

ここの人工島は、氷河期災害の時に流されここに至る。

その流されている時にも、絶対零度の嵐はここを襲い、ここにいた彼らは死んでしまった。

その絶対零度の影響で、パソコンは凍って水分が基盤に入って使えないだろう。

溝口によると、ハードディスクなら情報を得ることは可能らしい。

「さすが情報処理、頼りにしてるぞ」

「ああ、それと奥に地下室があるからそこも見ておいた方がいいな。外で暇そうにしている人を連れていったら？」

溝口は笑みをうかべてパソコンの解体作業に移った。

外にいるのは、リザしかいなかった。

溝口よ。貴様は俺にどうしろと・・・！

「リザ、ちょっと・・・」

「いや」

「へ？」

断られたか。

「中にいる骨を片付けるのはいやよ。ドワーフに任せればいいじゃない」

俺達がいた世界のドワーフは、身長が低いが強靭な肉体を持ち、バンカー（塹壕）を作ることに長けている話じゃなかったか。後で富田に聞いてみよう。

この世界のドワーフは、そこまで小さくなく、せいぜい140cm位である。肉食系で青白い肌をもつ。

肉食なのだが、彼らは腐った肉を食べるらしい。戦場で見掛けることもあるが、実際、腐った肉を食べているところは見ていない。

噂ではあるものの、これがドアーフが嫌われる理由となっている。

旧中東にあるクシャナ王国に、たくさんのだアーフがすんでいるらしい。

「彼らは、ここで以前働いていた人達なんだ。それに俺がいた国の人間なんだ。だから丁重に扱わないといけないんだ。彼らはもう、壺に納めたからもう大丈夫だから。」

「……そう、わかった」

彼女は分かっただらしく、マスクとゴーグルをつけ始める。彼女の服装は、前に着ていたようなビィルコラク騎士団の甲冑ではなく、ジ

インズに厚手の白いコートだ。

その白いコートと金色のヘアアの相性抜群でメチャクチャ可愛い・・・いやいやいや、それは置いといて。

シオルダーバッグに入っていた耐水LEDライトを取り出して、地下室に入った。

階段を降りると、暗闇が広がっていた。

「ランタン貸して」

懐中電灯なんだけどな・・・と呟きつつ予備のライトを渡した。

燃料タンクだろうか。円柱型のタンクが2つ並べられ、ガソリンスタンドのようになっていた。

他にも発電機が置いてあり、案外見えそうだな。

「あれは？」

リザが指を指した方向には、青いカバーに包まれた車が一台止まっていた。

「うししし・・・」

思わず笑ってしまふ。

「気持ち悪」

リザが言っているがそんなことは知らん。

一気に車のカバーを剥がした。

カバーの中から出てきたのは、黒と白を基調としていて、正義の味方の醍醐味。黒白ハッキリしたパトカーだ。

発電機の近くに停めてあったため、まだ動かせそうだ。

ドアが開いているのかなと、試しに引いてみると簡単に開いてしまった。

パトカーに乗り込んで、車内を見渡した。雑誌で見た通り、前方を監視するためのカメラや無線機。そして何故か、助手席と運転席の間にスパス12と呼ばれるショットガンが備え付けられていた。

アメリカの警察などは、運転席と助手席の間にショットガンをおいたりする。アメリカは銃社会だし、治安も悪い。最近ではアサルトライフルのような軍用ライフルが犯罪組織の手に渡っていて、ショットガンのような高火力な銃が必要になったからだが、

日本はそんなに治安が悪かったか？

しかもスパス12というショットガンは軍用ショットガンである。警察ならベネリM3ショットガンだろう。

2030年の日本はそんなに治安が悪かったのか？

「これは……車？」

「ああ、警察が使うものだよ。俺の知っているのと微妙に違うが」

「警察？ギルド警備隊のこと？」

ギルド警備隊とは、ギルドが保有する私兵部隊のことである。まあ、ぶつちやけギルド所属の奴は、みんなはいつているんだが。ゲームでいえば、治安維持もクエストのうちに入る。街が盗賊や山賊に襲われた場合、街の代表がギルドに依頼して警備に当たってもらう。簡単にいえば強力な警備会社と行ったところだろう。ギルドの仕事を手放すのは、一生仕事を受けられないのである。

社会って厳しいなあ……。

「まあ、そんなとこだな」

車内にいろいろ変なものがないか探してみたが、ショットガンとM92と呼ばれる拳銃が一丁と9mm弾薬が30発置いてあった。

本当に日本のパトカーなのだろうか。

「では、車検に出しますか」

リュックから、ノートパソコンを取り出して置く。電源を入れて、デスクトップにある。「兵器整備」をダブルクリックする。ノートパソコンの小型カメラを起動してパトカーを撮る。その画像をドラッグして、プログラムのの中に入れて「整備・保管」をダブルクリックする。

パトカーは、霧に包まれゆっくりと姿を消した。

既にパソコンには、パトカーが映し出され点検が行われているようだ。

ドラえもんの道具のようだ。例えるなら四次元ポケットぐらいか。

「おーい、疾風そっちはどうだった？」

上から降りてきたのは、2階を掃除していた筈の富田だ。

「これを見てみるよ。」PCを見せる。

「これは……パトカーじゃん！しかも2030年代では最新型のパトカーだよ！よっしゃあ！！ここ買ってよかった！」

久々に富田のはしゃいでいる所を見た。前にも言ったが彼は警察ヲタクである。ファンタジーのゲームも好きらしいのだが、三度の飯より警察が好きらしい。

彼の祖父が昔、警視庁捜査一課だったことから好きになったのだという。

「あと、車の中にM92とスパス12が在ったんだが、この銃器は警察では導入されてないはずだが？」

俺は聞いてみたが、富田は腕を組んで「ふっふっふ」と笑っている。あまり見たことがないので富田の行動には驚いた。

「2020年代になってから、暴力団と海外から来たチャイニーズ・マフィアやロシアン・マフィアとの抗争が激しくなって、警察とマフィアの銃撃戦なんて珍しくなくなった。現に2階はサツカン（警察官の略称）の休憩場所らしくてさいろんなものがあったさ、ガンキャビネットがおいてあったよ。なかには、M4カービンアサルトライフルやMP5Kサブマシンガン、防弾チョッキにシヨット

ガンと・・・」

「わかった、わかった。なんでいままで街の人達が銃を持っていなかったのか不思議だったよ。それで要らないものの処分は？」

普通は、交番にそんなものはない。

「2階も変な臭いしてるから、全部取っ払うよ。あと、壁紙や断熱材を交換して、窓を変えて床ひっぺがして・・・地下室はまあいいか。問題は1階と2階だな。」

「そうだな、備え付けられた家具を退かして、何とかするか。計画通りにな」

「了解。計画通りにやるよ」

計画とは、30年もほったらかしにしておいたため、壁紙や断熱材はぼろぼろになっている。その他、建物の塗装や内装工事に電気設備を作っておかなければならない。そして、この建物は臭いがきついためいろいろしなければならぬ。

手順としては、

- 1、警察官達の遺体を回収。
- 2、彼らの私物を集める。
- 3、使わなそうな家具類を処分する。
- 4、壁紙や断熱材を取り外して、新しいのに替える。建物の塗装を行う。
- 5、搬入作業

まあ、こんなところだろう。

1〜3は完了したので、4を今からするはずだ。

「最初はグー！じゃんけんポン！」

建物のなかに、5人の声が反響した。

俺はグー、富田はチョキ、溝口はチョキ、おやっさんはチョキ、そしてリザはグーでした。

「決まりだな。俺とリザが塗装するから、あとは壁紙交換しておいで」

「……！！！！！！」 溝口と富田は殺意を向けてきた。

「な、なんでしよう？」

念のため聞いてきた。

「天誅！」

と二人は拳を俺に向けて、突進する。つまり、パンチをしてくる。

「待て話せばわかる！」

「問答無用！」

二人は、懐から黒のネームペン（油性）を取り出す。

後ろに逃げようと思ったが後ろから誰かに捕まれた。

振り返ってみたのは、ニコニコしているおやっさんの姿だ。

「離せばわかる！分かるから！」

「ふっふっふっ……」

おやっさんは既に笑っていなかった。口では笑っていても、よく見たら、目が恐ろしいほどにピン曲がっているようだった。

「おい！離せ！……ワアアアアああ嗚呼！！！！……」

アメリカの街に、叫び声が轟いた。

なぜ、その悲鳴が町中に響いたのかは、誰も知らない。

ひとつ言えることは、古代文明の建物が復活したことと、そのために一人の少年が犠牲になったことだ。

「番外編 劇的びフォー・アフター？」（後書き）

誤字脱字または、何かあったらよろしくお願いします。

アドバイスなどあれば助かります。

「第25話 アメリカより愛をこめて」(前書き)

映画「パリよ 愛をこめて」最高だった。

更新が遅くなりましたが、試験とかありまして……。

最近、自分の小説がまわりくどいとよく言われます。

小説の書き方についてのアドバイス等ありましたらお願いします。

「第25話 アメリカより愛をこめて」

< Target : 2 Infantry Company .
3 AFV . 3 APU .

< Guild Security Forces : 2 Infan-
try Unit .

< emergency !

< Danger size of the annihilat-
ion !

< recommend : frontal attack or
prepared attack .

「ええい、日本語にしゃがれ！」
サリーが英語で作戦の進行状況を伝える中、こう突っ込みたくてう
ずうずうしていた。

「ギルド警備部隊が全滅の危機にさらされています！正面突破をお
奨めします。」

よりもよって正面突破だったが、まあいい。

肩のミサイルポットを起動して、敵の防御陣地にロックオンする。
ミニガンを正面に向け戦闘地域に突撃準備を整える。

戦闘地域に着いたとき、道には多くの傭兵の死体が横たわっていた。支給されたばかりの戦闘服に身を包み、濃紺のボディーアーマーに大穴が開いている傭兵がいくつも横たわっていた。

「やっぱりな……」

パワーアーマーを着た俺は、建物の陰に隠れ、敵の正面を伺ってつぶやいた。

傭兵部隊は、戦場を何回も生き抜いてきた歴戦の兵士だ。新しい武器や防具を与えれば、大体は習得しているだろう。だが、彼らの戦闘スタイルは接近戦だ。

槍や剣を持ち、敵を薙ぎ倒していく。彼らは接近戦のプロだ。

だが、待ち受けていたのは近代戦を知り尽くしたプロだ。遠距離から鉛を撃ち込み、敵を殲滅する。文明の差とはいえど、技術とともに進化し続けてきた近代戦のプロにギルドの傭兵は惨敗した。いきなり新しい武器を渡されたところで戦闘スタイルは変えられない。いくらボディーアーマーを着させても、至近距離でライフル弾を食らえば、ひとたまりもないのだ。

敵は、ドでかい屋敷を司令部としており、正面には、AFVと呼ばれる戦闘車両と重歩兵、それにいくつもの傭兵たちの死体が門の前に捨てられていた。

ミニガンをアイドリングし、うるさい音を立てているが気にしない。

「行くぞ！」

自分とサリー掛け声を掛け、ミニガンを敵に向け走り始めた。

(発射!) 頭で考えると、ミニガンに装填されていた7、62mm弾が発射され、敵を蜂の巣にして行く。

「き、きたぞ! 撃て!」

いきなり出てきた敵に驚いたのか、すぐには行動できない。

装甲車は、搭載されている機銃をこちらに向け、応戦する。

「フォックス2!」

米空軍や空自がミサイル発射するときのコールサインを叫び、ミサイルを発射した。肩から発射されたミサイルは、装甲車の腹に直撃し、舞い上がった。

ミニガンを、撃ち続け邸宅へ侵入した。

< 敵襲! APU来了。使用仗汽? 兵?! (敵襲! APUが来たぞ。対戦車兵器を使え!) >

近くにあったスピーカーからは、俺が乗っているAPUの対処を仲間に伝えているが、同時に俺にも伝わっていることが気づかないのか?

門を抜けると、目の前には噴水が広がっていた。邸宅は来客を威圧するかのようになられている。今のアメリカには、この屋敷はふさわしくない。

もともとの所有者は、どんな警備をしていたのかかなり気になった。それも、屋上には機関銃、周りは土嚢が積み上げられていくつもの銃口が見えた。邸宅の窓にも銃身が突き出ていた。

まだ、邸宅の敷地内を入ってはいないが、入れば撃たれそうな雰囲気だ。

つてことで、一步踏み出してみる。

「?????始! (撃ち方はじめ!)」

「打死! (撃て!)」

「?????! (殲滅しろ!)」

四方八方から、銃弾が飛び、自分の方へ飛んでくる。

着ているのが、パワーアーマーだったおかげで生きているもの、生身なら言葉通りの蜂の巣だったことだろう。

(煙幕放出)

肩に装備されていた煙幕を出し、周辺を遮る。敵は狙いをつけられなくなっただけ、あまり当たらなくなった。

(サーマルスコープ作動)

A P Uの頭部に内蔵されているサーマルスコープをオンにした。サーマルスコープというのは、温度に反応してそれを映像化するものである。これさえあれば、どこに敵兵がいるのかわかる仕組みだ。

(オートロック。全敵兵に照準、撃て)

自分で撃つのではなく、機械が自動的に敵兵を追尾してロックオンする。撃てといった瞬間、毎分何千発もの銃弾を浴びせられた敵兵は、蜂の巣ではなく言葉通りのミンチになっている、それを詳しく言うのは、避けておこう。

あらかた、敵を殲滅したのでは後は傭兵部隊に任せるとしよう。

(こちらイーグル1、アルファ1応答せよ)

(あゝ・・・えっとこれでいいかな?どうだいそっちの調子は?)

出たのは、声が渋いおっちゃんだ。

声から考えて50代?

(邸宅の正面はあらかた片付けた。中に入れないから後はよろしく。そちらの損害は?)

(ああ、6人ぐらい馬鹿なやつらが突撃して死んじまったが、本当に大丈夫だよな?)

スピーカーの向こう側の親父は、おびえているのか?

まあ、それも当然だろう。

知らない武器渡されて、目に見えないもので殺されるなんてたまつたもんじゃないからだ。もう、異世界と繋がって20年は経つだろうが、実際のところ彼らが銃器を持つことはなかったのだ。国連の厳重な技術管理がなされているため、早々流れることがなかったが、中国系ガリビアン人の手によって技術漏洩が起こっている。あと5年もすれば、彼らも中国製の銃器を持つことになるだろう。

(大丈夫だ。門の近くまで来てくれ)

一度、無線を切り、溝口と富田に連絡を取った。

(こちら武藤、溝口！聞こえるか？)

(.....!!)

パワーアーマーのスピーカーからは、度重なる銃声と悲鳴、それと爆発音だ。

(こちら武藤！誰か聞こえるか？)

(こちら.....聞こえてる！敵の.....から攻撃を受けた！敵の.....は、装甲車にAPU.....だ。数はこっちが上だが、.....だ。もう半分はやられた。援護に来てくれ。)

あまり声が聞こえない中、唯一聞き取れたのは富田の悲鳴に近い声だ。もう、絶体絶命のピンチだろう。

もう一度、アルファ1に連絡を取った。

(アルファ1聞こえるか？敵は駐屯地を攻撃した！そちらはここで待機していてくれ)

(了解だ。必ず勝てよ坊主)

無線の向こうから、ちょっとした激励をもらい、足のローラーを起動して走り始めた。

ミニガンの弾薬は無制限だし、ミサイルは充填完了した。

「サリー、味方の損害は？」

「駐屯地にいた傭兵200名のうち、50名ほどが戦死。50名程が重症です。駐屯地にある医療センターの方でやっていますが難航しています。敵は、駐屯地の西門から侵入し他模様です。戦力は、APUが3機と装甲車が3両、歩兵が一個中隊ほどです。」

駐屯地は、もともと小学校があり、そのまま使われている。駐屯地はグラウンド側にある西門。校舎(傭兵ギルドの兵舎)がある東門。この二つのうち西門に攻撃を受けた。今はグラウンドを掌握されていて、戦闘は校舎の中で行われているらしい。

道を走っていても、駐屯地から出るけむりを見ることができた。

駐屯地に到着すると、死屍累々の光景が広がっていた。門は破壊され、傭兵の死体が転がり装甲車が火を噴いていた。

いたるところに死体が転がっていてよく見れば、小さい子供の死体まで見ることができる。

戦争というのは敵国の軍隊同士が戦いあうのが普通なのだ。国際的な解釈で「民間人を殺してはならない。」これが一般的なものだ。だが、実際たくさん民間人が死んでいくのだ。第二次大戦以降はゲリラという兵士が民間人を装う卑劣なものが始め、国際ルールでは、捕虜の権利は認められない。その場で射殺というのが一般的だ。だが、異世界とつながりを持つたら、「ゲリラ」という概念は存在しない。しかし、そんな概念を持つのが持つまいが、そんな幼い子供を死なせてはいけないのだ。こんなことをした敵に腹が立った。

「敵のAPU発見！応援を送れ！」

門の残骸から出てきた敵兵士が、こちらを見て、応援要請していた。

「対戦車兵器を……」

兵士の声は途中で途切れ、ミニガンによって粉碎した。

ミサイルを撃ちだし、装甲車を撃破していく。

RPGを装備した敵は見たら、即座に撃ち、殲滅する。

この2パターンの繰り返しだ。

装甲車を3両とも撃破したとき、パワーアーマーのディスプレイが緑から赤に染まった。

「WARNING! MISSILE ALERT! (警告!ミサイル接近中!)」

肩に搭載されているフレアと呼ばれるミサイル欺瞞装置を発射して、追尾を逃れる。

ミサイルは熱探知型であったため、向けて当たり爆発した。

レーダーには、3つの点がこちらに接近していた。

白の塗装を施し、頭部に赤い点が見えたそれは、某ロボットアニメに出てくる兵器にそっくりだった。

「中国軍の20式二足戦車です。機動力は低いですが、火力は高いです。慎重に。」

三対一はかなり不利である。こちらのほうがスペックは高いが、向こうのスペックの低さは、火力で補っている。初戦でこの戦いは、ゲームの初プレイで難易度をHARDにするようなものだ。

敵の兵装は、両手にミニガン、両肩にミサイルポット。指揮官だと思われる角突きは、片手にサーベルを装備している。

訓練をしていないから、ちゃんと戦闘できるかどうか不安だ。

「なあ、これにはビームライフルとかないの?」

「ビームライフルはありませんが、レーザーライフルはありますが作戦に集中して・・・前です!」

サリーが叫び、意識を戻すと敵は撃とうとしていた。

敵のミニガンから、たくさんの銃弾が飛び出しさっきいた土が掘り返されていく。

左によけた俺は、ミニガンを撃ちながら敵の左翼に攻撃を仕掛けた。

敵のミサイルが、すぐ横で爆発して破片が飛び散る。

敵の機体に照準を合わせ、ミサイルを放つ。

敵のAPUは動けずにミサイルが当たり、爆発する。

残り2機。

もう一機の方は、走りながらこちらを撃ち続けているが指揮官機は見当たらない。

ミニガンの照準を合わせボタンを押す。

毎分数千発撃ち、射程の長いショットガンとも唄われる兵器は、APUのパワーアーマーを蜂の巣にした。

レーダーにも、カメラにも指揮官機とおぼしきものは見当たらない。

「ふう、やっと終わったか……。サリー、味方の……」

「後ろ！敵機です！」

右に振り返ると、赤く染まったサーベルが真横を通った。

そして腕にあったミニガンがごっそりと、斬れていた。

「チツ！」

サーベルを起動しようとしたが間に合わない。

指揮官機は体当たりをして、コンクリートの壁にたたきつけられた。

「機体損傷度15%。ミニガン使用不能、右肩ミサイルポット発射不能。先ほどの戦闘から判断しても撤退を進言せざるおえません。」

「撤退しろだと！ふざけるな！」

「今のあなたに何ができるといいますか？訓練もせず、こんな非力な高校生に。」

「だが俺は・・・」

「“ゲームの力を引き継いだ”だからなんだといのです？所詮、あなたは出来損ないの天使なんですよ」

いまから、シドニーホテルに行つて、このAIを破壊したいという衝動に駆られたが、途中でやめた。

やつの行っている事は正しい。

ただ、俺は非力な高校生にゲームの能力を加えただけの存在だ。頭の中身は高校生のまんま。

変わってはいなかった。

だけど、守らなきゃいけないものがある。

自分が非力でいようとも……。

足に力を入れて、一気に立ち上がる。

ソードを出して、それを抜きとり握る。

ブウウウウウン……。

高周波ブレードの起動音が周囲に響いた。

少しの間沈黙が流れた。沈黙ではなく黙禱のようにも思えた。

だがどちらのための黙禱かわからないが。

誰が合図したのか、2機のパワーアーマーは、走り衝突した。

互いの刃が重なり合い、火花が飛び散る。

敵のAPUは、腕からサブマシンガンを取り出して、疾風に浴びせる。

疾風は、肩にあるミサイルを発射して、サブマシンガンのある左手を吹っ飛ばす。

それと引き換えに、疾風の太ももに敵の刃が突き刺さる。

「・・・!!!!!!」

悲鳴を上げる暇はなかった。

やつは、刃を抜き取り、大きく振りかぶった。

疾風は、痛みを噛み殺して自分の刃を敵の胸に突き刺した。

敵の頭部カメラからは、ゆっくりと光が消えてゆく。命が途絶えるかのよう。

それを最後に、視界は真っ暗になり、意識が途絶えて地面に倒れた。

「おい！疾風！起きろ！！！」

目の前に広がったのは、我が親友の溝口の顔だ。

「ここは？」

白い天井。消毒液っぽい匂い。あらかた想像はついた。

「ここは診療所だよ。お前の戦いが終わった後で、回収して治療した。この医者が藪医者だったからさ。ほかのゲームの能力使って脚直しておいた。お代は高くつくのでお忘れなく。」

溝口は手でOKを横にしてお金を表現した。本当にお代がないことを祈ろう。

「あれからのくらいだった？」

「5、6時間って所だな。もう後片付けは済んじまったから。お前を連れて帰るだけさ。」

「富田は？」

「行方不明のAKを探しているよ。すぐ帰ってくるはずだけど」

産業革命が起こっていない異世界で、AKのような武器は最強とな

りうる。

もし、それを手に持ったよからぬ傭兵がいてもおかしくないのだ。

「俺、戦場を甘く見ていたよ。」

「俺もだ。」

溝口は、持っていたミント系のアメを口に放り込み言った。

「俺と富田は、駐屯地内の診療所で見ちまったんだよ。あれをさ。」

駐屯地には職業や年齢、性別を問わずさまざまなか人が搬送されていた。

血の海でのた打ち回り、“痛い！痛い”と泣き叫ぶ子供。自分の死を予期したのか落ちて着いた兵士。目にガラスの破片が突き刺さり、息子たちへの顔を見られなくなり絶望のふちに立たされた中年女性。

戦場の現実を知ってしまったのである。

「俺は、自分の無力さを理解したよ。どんだけ無力かを」

頭の中身は高校生のまんまの自分なんて無力に等しい。自分を根本的に変えることが必要だ。

「変わらなくちゃな。俺たち」

「そつだなあ……」

少しの間、沈黙が流れる。

「よし、じゃあ行くか。」

「ああ」

ベットから立ち上がり、上着を着て、病室を後にした。

どこへ、行くなって？

そりゃあ、守りたいものところへだよ。

「第25話 アメリカより愛をこめて」(後書き)

誤字脱字等ございましたら宜しく願います。

感想も願います!!!

「第26話 後始末」(前書き)

まず最初は報告書。

作り方おかしいかな？

アドバイスお願いします。

ついでに最後はなんだこれ？と思われると思いますが、調子によって書きました。

「第26話 後始末」

依頼2号 <Hunting Kerberos>作戦報告書

作戦計画日程：2051年9月 9日

作戦実施：2051年9月 9日～ 2051年9月10日

主目標

- ・マフィア「ケルベロス」の殲滅
- ・指揮官の拘束
- ・傭兵駐屯地を死守する。

副目標

- ・駐屯地の傭兵に、新しい武器を支給する。（資金はギルド持ち）
- ・駐屯地の傭兵に、新しい武器の使い方を教える。
- ・駐屯地の傭兵に、現代の戦術を教える。
- ・ガリビニア軍の士官、または指揮官の血液サンプルを手に入れる。

遂行不可目標

・傭兵駐屯地を死守する。

作戦内容

9月9日晴れ

1900時 : ケルベロス傘下の売春宿の向かい側に位置する建物の屋上にて敵の兵士の出入りを監視する。

2000時 : 状況変化なし

2100時 : ギルド所属の傭兵数名が入店。これといって変化は見られない。

2400時 : 状況変化なし、

9月10日

0100時 : 状況変化なし

0700時 : 一時動きあり。運送ギルドの馬車が到着。酒樽を搬出している模様。搬送しているものは武器を携帯していない。樽の中は何も入っていない。遠距離投資スコープで確認。

0800時 : 店舗は、0800時から1900時まで酒場となっているために開店する。しかし、2階はまだ営業中……。

1200時 : 2階の左隅の窓に反応。狙撃ライフルでウォーター少尉が左肩を負傷。その後、攻撃ヘリで2階を制圧。

1203時 : 目標の建物に突入。再度建物を制圧。敵の配置地図を発見味方部隊へ連絡。

1210時 : 装備を整え、移動を開始。攻撃目標をポスト2からオフィス1へ変更。オフィス1までに酒場の「ホワイトフラッグ」に突っ込み半壊させた。

1220時 : オフィス1を制圧。ギルド警備部隊が突入。指揮官の李増峰を拘束。

1220時 : ガリビニア軍特殊部隊が駐屯地を攻撃。防衛ラインを後退。建物まで後退させる。

1250時 : 駐屯地内の敵を制圧。

1300時 : KIA（戦闘中死亡者）の確認。負傷者の引渡し作業及び装備品の回収。

1350時 : 傭兵の一部が今回使用した武器の回収に応じずトラブル発生。

1400時 : 武器のロックを実行。これにより、警備部隊が使っていた自動小銃150挺、拳銃200丁、手榴弾300個使用不能。

1645時 : 作戦終了

被害状況

軽装甲機動車 支給した10両中5両大破、2両中破。

ギルド警備部隊 200人中、27名戦死。72名負傷。

その他、自動小銃12挺破損。拳銃3丁使用不可能。自動小銃15挺行方不明。

民間人死傷者 0・負傷者23人

その他物的損害多数。

考察及び提案

今回は損害が最小限になったが、ギルド警備部隊の育成が必要と考えられる。ガリビニア軍は最新装備が多く、熟練兵が多く存在する。直接的な侵略を視野に入れる事は難しいが、犯罪グループがこれらの装備を手に入れるとも考えられる。

よって以下のことを提案する。

- ・ 装備の強化。
- ・ 警備部隊をパート制から志願制に移行する。
- ・ 訓練内容の改革・強化

「それで、“ばあと”っていったい何かね？」

上物の生地を使った服にかつら、それなりの風格を持つアメリカの
検事、ガルシア・J・リヴァルは見慣れない単語に戸惑っていた。
「えつとですね、パート制というのは時間制で働いている労働者の
ことを指します。祖国では時間制のことをパート制やパートタイム
と呼んでいます。」

検事は自慢の髭をいじくりながら、「ふん」と言うような感じで
報告書を見ていた。

あの依頼から一週間。

診療所に行つて、治らない怪我を直したりしていた。

酒場「ホワイトフラッグ」の修繕や行方不明の銃の搜索。

ギルドの警備部隊は、パートタイムでやっている。普通だったらこんなことはない。警備部隊を作ったのは目の前にいる髭親父だ。

この町が商業の町、港町として栄えるときは、海から来た水兵が町を荒らしてしょっちゅう事件が絶えなかった。

そのことがきっかけとなり、警備部隊が作られた。

一応治安は回復したものの、犯罪組織などに対抗しうる技術がなかった。

今回は、俺たちのおかげで被害を最小限に抑えられたが。

まあ、この検事は職業柄ゆえに戦争をよく知らな過ぎるため、俺が来る前にできなかつたのもこのためだろう。

「それにしても今回は痛手だった。どうだろう。君が警備部隊の部隊長になってみるのはどうかね？」

思わず、目玉が飛び出て床に転がった。

それはないが、気持ち的にはそのような感じだ。

「じ、自分がですか!？」

「ああ、そうだ。事件が起こる前は、ガリビィア軍に支援を求めるつもりだった。それが国連軍とかにな。今となるとガリビィア軍は信用できない。国連に掛け合っても彼らは秘密主義だからあかさんと来た。」

「そこで自分の技術が・・・」

「そういうことだ。支払いはたんまり出すぞ、どうかな?」

「遠慮させていただきます。」

「な、何!？」

検事は耳を疑った。

目の前にいる奴、傭兵を金で丸め込めると思ってたのことだ。だが、俺は違う。

「自分は、そんな大役には勤まりません。ギルドで営むので精一杯ですよ。でも、適役の人が一人いますよ」

「誰だねそれは?」

「それは・・・」

「おれかよ！」

場面を変え、オヤツさんは、自分に指を刺し、漫画であつたらおでここに血筋が出そうなものであつた。

彼は、オーストラリア陸軍にいたこともあり、ガリビニア軍の指導教官もやったこともある。これ以上の適任者はいないであろう。

で、ここは、拠点その2として使っている元交番であつた場所だ。

いまでは、1階が武器販売店兼ギルドのパーティー拠点であり、2階が寝床。地下室は武器庫兼弾薬庫兼車庫となっている。

ホテルのスウィートルームはどないした！？と聞かれてしまうと結構痛い。

お忍びでいく別荘と化している。

まあ、中流家庭で育つた少年A、B、Cが行くのはもつたいない気がするし……。

「いいじゃない。適役だと思っけど。」

「だけどなりざ。あんま気が進まないんだが。」

「あ、そうそう。あの検事、あんたの経歴を少し変えて教えておい

た。ぜひ雇いたいそうさ。」

疾風がつい放った一言が一発の拳が頭の上に突き刺さる原因になった。

「ごめんなさい！でも、オヤツさんが一人の父親ということをごどこかでつかんだらしくて、部隊長になれば報酬として家を与えるらしいよ。」

実は、二人でよく食事の買い物をしていくときがあるのではなかったらしい。

「……………」

「オヤツさん？」

富田が不思議そうに顔を覗く。

「そうか。」

「？」

「いいだろう！引き受けよう！」

オヤツさんは意気揚々と建物から飛び出して、検事の屋敷へと向かった。

「これじゃあ、昼飯まで間に合わないなあ……。」

溝口が腕組みをしながら“あゝあ”と言っている。

「じゃあ、先に食べましょう。そこで待ってて」

リザは、そう言って台所へ向かう。

「おい疾風、行け！」

「がんばって散って来い！」

「幸運を祈ってやらないからな」

励まされているのか、馬鹿にされているのかわからなかったが、勇者が囚われの身のお姫様を救うべく魔王に突撃を敢行するがごとく、台所に向かう。

「なあ、リザ」

「ん？何？」

彼女は振り向き、こちらを見る。

逃げちゃだめだ。逃げちゃだめだ。逃げちゃだめだ。逃げちゃだめだ！！

疾風は、喉から力を込め心を込めて言った。

「俺と付き合ってください！」

自分の声が部屋に大きく響いた。

「第26話 後始末」(後書き)

誤字脱字在りましたらよろしく願います。

次は武器&兵器紹介に入ります。

「第27話 サンタはいるー!!!」(マジ)「(前書き)

遅かったか……。

まあいいや。途中で寝ちゃったのが駄目だったなあ。

急いで仕上げたんでまちがい等あるのでよろしくお願いします。

ちなみに、「青春っぽいことやっているな」「甘すぎる!」「と思われると思います。

学生が妄想を小説に書いているだけなんだなーとでも思ってください。

「かしこまりました」

溝口は、ホットココアを通りすがりのウェイターに頼んだ。だが、奴は固まった。彼の目の前にいるウェイターは、銀の髪を後ろで結び、猫の耳を生やしていたからである。しかも尻尾つきで……。

「……どうされました？」

ウェイターは固まった溝口に困惑していた。いや、怖かったのかもしれないが……。

「コイツのことなら心配しないで！ ああ、そうだ。ここにあるマテリの串焼きを1つ下さい。」

「わ、分かりました。」

と言って、ウェイターは去っていった。

溝口は……

「惚れたぜ……」

「ふざけるのも大概にしる。滅するぞ？」

「じよ、「冗談だよ！ハハハ……」

「冗談じゃないだろ。」

と冗談を交えながら言っているが、奴の目は本気だった。冗談な訳がない。

そして、溝口は身体をこちらに向けて、話を変えた。

「そうそう、今日何日か知っているか？」

「えっと9月11日だよな。確かそのはずだけど・・・」

そう言うと、溝口は嫌らしい笑みを浮かべる。

「何だよ、」

「えっとね、武藤君知らないのかね？今日は12月25日だよ。」

そうやって店のカレンダーを見た。だが、カレンダーには9月のカレンダーが貼ってある。異世界の月の数え方は変わらない。どこが違うのだろうか？

「どづいづことだ。」

「えっとな、いまこの時間は、12月25日なんだが、異世界の時間が9月11日なんだ。」

つまりは、異世界の時間とこの時間の時間がずれているのだ。やっばりと思っただが、周りではサンタやクリスマスの飾りをしていなかったのどことなく残念でならない。

「ふ〜ん・・・。。。けどここは9月11日だ。オーストラリアに行ったら波乗りサンタに出くわすだろうよ。」

「だから、この時期なんだから何かプレゼントしてやれって言うて

んだよ！」

やっと奴の真意が分かった。だが、何をプレゼントしたらいい？

「ほう？何をプレゼントしたら言いか分からないような顔してるな。くっくっく……」

怪しげな笑いをする溝口……。

「じゃあ、お前だったら何をプレゼントする？」

「俺か？俺はな、熱い抱擁を……うぎゃ！」

コイツにアドバイスしてもらうことが馬鹿だった。

いきなりそんなことをしてもうたら、不審者やんけ！

ぶっ倒れている溝口を後に、店を出て行った。

さて、なにをしてみるか……。

と、考えているうちに、あることがひらめいた。

急いで事務所にかえることにした。溝口を担いで。

それから三時間後の1800時。

「ねえ、どこ行くの？疾風。」

高鳴る胸を押さえつつ、リザの手を引っ張ってとある空き地まで連れて来た。

「うーん、ここではやめた方がいいと思うけど・・・」

「ああ、地主さんには許可とってあるし」

「とってあるの!?!」

と意味不明な会話をしたが、横からは大きな袋と水を張ったバケツを持ってきた富田と溝口が来た。

「いっちょやりますか!」

「おう!」

「だからなんだってば。」

とりざは突っ込んできたが、ちよつと無視をしてロウソクに火をつけた。

「show timeだ!」

富田は柄にもないハイテンションで、赤い和紙に火をつけた。すると、先端部分が燃えて火薬に火がついた。

すると、赤や青などの火が出てあたりを照らした。

「きれい。魔法？」

リザは聴いてきた。

「いいや、先端の赤い紙に火をつけて、中にある火薬を燃やすんだ。そうすると、あんなふうに火が飛び出す。これは、「花火」って呼ばれているんだ。」

説明を終え、一本花火を渡す。

「さあ、どうぞ」

彼女は、花火に火を付け盛大に楽しんだ。

他にも、ダンやオヤッさん、ドクターなども見ることが出来た。みんな楽しそうだ。そうこうしているうちに、周りの子供も参加し、にぎやかになっていった。

「うひゃひゃひゃひゃひゃ！撃て！」

溝口はロケット花火を手で持ち（よい子は持たないように）点火した。ロケットは空に飛び上がり周りから歓声上がる。

「点火！」

一方、富田は離れたところで打ち上げ花火を打ち上げた。富田は空き地でやる花火に最後まで参加することは出来なかったが、町にいる人たちに花火の光景が目に見えついた。

そしてー……………

「疾風。ちよつとこつちに来て。」

リザにお呼びがかかり、胸が高鳴って締め付けられる。

落ち着け俺！落ち着くんだ！！！！！！！！

空き地から少し離れて、空き地に生えた木に来てからだ。

……………

少し沈黙が流れた……………。

……………

「よろしくお願いしますー！」

……………
……………
……………

「あ、えつとこちらこそよろしくお願いしますー！」

「よっしやー！」

「よくやった二人とも！」

「拳式はいつ拳げるんじゃ？」

「く〜！！！！・・・泣」

と陰で見ていた彼らがこちらに出てきて言った。

いや、ちょっと待て！

これは現実か！嘘だろおい！

（頬をつねる）

痛い。夢じゃあない！

「ヒヤッホい！」

返事が来て一分後、やっと意味が分かり喜びの声を上げた。

今日は12月25日と言う事がハッキリ分かった。

一日遅れのプレゼントだったが、サンタがいることを信じてしまった疾風であった。

オーストラリア、シドニー国連本部。

「総長、不明機の国籍が分かりました。」

シドニーのシンボル、オペラハウスなどを一望できる事務総長のオフィスでは、年老いた男が一人と黒いスーツを身にまとった秘書が老人に報告していた。

「どこの所属かね？」

「それが・・・」

「早く言いたまえ」
老人は早く終わらせたいらしく、不機嫌だった。だが、それも仕方あるまい。

この老人は、第17代国連事務総長。つまり、世界のトップだが、仕事も沢山あり、その上異世界移民問題。

彼らが来て20年も経つのに、未だに戦争がある。我々は戦争はしたくないのに、向こうは領土拡張を大義名分として侵略してくる。北半球氷河期災害で荒れ果てたのに、神はまだ試練を与えるのかと教会に行ったこともあるぐらいだった。

「はい、機体は旭日重工業の30式歩行戦闘車、「雷電」。IFF（敵識別装置）では、JSDFと表記しました。ですが、既に自衛隊は解体されております。」

自衛隊か……。

懐かしい響きだ。

老人は思った。

「田中 事務総長、エージェントの情報ではアメリカ経済特区で妙な動きもあります。」

「ほう、どんな？」

「今、火花が上がっているらしいですよ」

「はははは、それは妙な動きだな。少し一人にしておいてくれ。」

そういつて、老人は秘書を部屋から追い出した。

いすに座り、窓際に置いてあった写真を見る。そこには、志半ばで倒れた戦友たちといっしょに撮った記念写真だった。バックにAPU「雷電」にして、みんなでポーズを決めている。真ん中にあるプラカードには「APU教導隊」と筆でしっかりと書かれていた。

若き彼の姿の横には、氷河期災害で命を落とした仲間を見ていた。

「前を向いて頑張らないとな。」

写真たてを置き、新たな写真を見つめた。その写真は、アメリカで撮られた白黒写真だ。そこには、パワーアーマーで大暴れした疾風の姿が映っていた。

「第27話 サンタはいるー!!!」(マジ)「(後書き)

誤字脱字ありましたら宜しくお願いします。感想のところを書いていただけると幸いです。

COD BOにはまっています。もしかしたら似た登場人物出すかもしれません。

「第28話 開店・・・か? (前書き)」

12月からずっと貯めていました。

皆様遅くなりました。

それと、例の二人は「ロミオとジュリエット」のようになると思います。死にませんが。

「第28話 開店・・・か？」

チェスというのを知っているだろうか？

将棋と同じように、ポーン（歩兵）、ビショップ（僧）、ナイト（騎士）、ルーク（飛車）、クイーン（女王）、キング（王）といった駒がある。敵から奪った駒を使えないというのが特徴ともいえるだろう。

そして・・・、

「チェック」

「あゝ・・・」

富田と俺はチェスをしていた。

勝者は富田だ。

敗北の原因は、ポーン（歩兵）を押し出しすぎて、敵に攻撃を与える隙ができたことだった。これは、指揮官プレイヤーが抜けていたからに過ぎない。

「これで5対2かあ……。弱くないか・疾風？」

「はあ……」

深くため息を漏らした。負けたことに対してだがほかにもある。

「リア充め。死にてえか？」

PSPをいじくり回していた溝口がふいに言ってきた。表情がなかったのでめちやくちや怖い。

だが、負けずに俺はため息を出す。

「なんだよ、ロミオとジュリエットみたいにあいつの家に突撃すればいいじゃないか。」

富田はふざけて言ってしまったがスイッチをつける原因になってしまった。

「無理だ！ロミオのように庭の中に入る前に自動機銃か地雷踏んで木っ端微塵だよ！！！」

12月25日の事件以降、オヤツさんとリザとは別行動となった。オヤツさんは警備部隊の部隊長に就任した後、記念に、メイド付きの邸宅と大きな庭をゲットした。そして庭には埋設地雷を仕掛け、ブービートラップも多数。おまけに庭に入った瞬間に作動する自動機銃をいたるところに仕掛けたのだ。これでは入ることもできず、某蛇のゲームの主人公でさえ不可能であろう。まあ、こういうことがあったからリザが鉄火場から離れるのも事実ではあった。

「まあ、落ち込むなって。解決策を考えよう。」

富田は笑って、ノートを取り出した。

「光学迷彩を着ての潜入は？」

光学迷彩は、俗に言うステルス迷彩だ。光を折り曲げ、そこに物体がなかったかのようにする迷彩である。

「赤外線センサーで見つかるし、自動機銃が作動する。」

「チャフ・グレネードは？」

チャフ・グレネードは顕微鏡で見えない微細なアルミ薄片が飛び散るもので、センサーをかく乱するのに使われる。

「赤外線ゴーグルをつけての潜入なら、庭までいけるかも知れないが、家の中には多数の警備兵がいるしなあ……。」

「ヘリからの潜入は？」

「音が出る時点でだめだろ。パラシュート降下もやだぞ」

とうとう富田はネタを出し切ってしまったようだ。

おれだったら、穴掘ったり、警備兵に成り済ますけどなあ。まあ、邸宅は鋼線を張り巡らせたコンクリートが地中にあるし、警備兵はナノマシン注入済みだろう。だからおれが考えたのも没だった。

「つーか、依頼も武器を買いに来る人すらいねーな・・・」

「そうだな・・・」

またまた前のことに振り返るが、元人民解放軍の特殊部隊の方達を殲滅した後、傭兵たちに自動小銃やら車やらを返してもらった。

当然の如く、

「こんな便利な武器、手放してたまるか」という輩もいるわけであつて、銃の紛失がたくさんあつたのだ。

それで、某蛇のゲームで血液に流れているナノマシンが敵兵の銃を拒絶するというようなシチュエーションをゲーマーなら知っているはずだが、支給した銃にもそれを仕込んであつた。ただ本格的に始動をさせてないだけで、戦闘していないときや民間人に銃を向けたときなどは自動的にロックする仕組みとなつている。

手元には使い慣れない武器。しかもなぜか使えない。こうなつては危険なものは持ちたくないから売り払つてしまうのが普通で、すべてとは行かないが回収することができた。

ほとんどの銃器を回収したのはいい。だが回収したのが癪にきたのか依頼を回さなくなつてしまった。(だが裏があり、オヤツさんが手引きしたとうわさも流れている。)

それで、副職の「異国武器店」を開業したのだ。店のモットーは「矢より速く、剣より強い武器を提供する」にしてあるが早々店に客

がこない。上客といえば、新生警備部隊なものだった。

「遺跡発掘、冒険、傭兵、運送は依頼が飛び込まない。かろうじて兵器の売り上げが黒字だ。」

富田がクリップボードにある売り上げグラフを見ながら言った。

そこには、カラフルな線が下の方で絡まり、一本の緑色の線が上昇している。

「せめて、猟銃買いに来る人來ないかなあ……。」

溝口がそついい終えて口元にコーヒーを運んだ。

その温度は10 前後。氷河期なのになぜかあったかい。ゆっくりとはあるが雪が解けて行っている。

カランカラン

ドアの鈴が鳴り、客が来る事を知らせた。

「あの、すみません。リョウジュウってやつ買いたいんですけど……。」

来たのは、いかにも農民のような格好をした若者だった。

「ええ！どうぞこちらへ！こちらのソファァーに座ってください」

一番に動き出したのは富田。

次にお茶を出しに行った溝口。

そして俺は、カタログを取りに行った。

「こんな寒い中どうも」

「いえいえ、今日は暖かいですよ。人工太陽の方もすっかり動いているようですし」

「じ、人工太陽!？」

人工太陽というのは、つまり核融合である。今、世界が最新技術をかき集めても出来ていないことだった。それができてしまう彼ら異世界の人たちはなんで地球の約半分を占領できたがわかった気がした。もし、彼らに科学技術も同程度だったらばとつくの昔に占領されていただろう。科学技術が進歩しているから量の多い彼らに負けてはいないのだ。

「ええ、この人口島の地下にありますよ。ギルドの精鋭パーティが警備しています。あれがあるおかげでここ一帯は暖かいです。」
道理で暖かいわけだよ。魔法のメカニズムが知りたいが、それは今度としておこう。人工太陽にしたって、重要なことではない。

、青年は自分の財布を見ていた。

昨日作っておいたカタログを持ってきて言った。

「えっと、このような猟銃を購入していただく前に許可証が必要となります」

「許可証!？」

青年は驚いて、財布を落とす。

異世界での”許可証”とは非常に高価なものを連想させる。例えば街や要塞の通行証や市民権などがある。

要塞などの軍事施設に入れるような通行証はとても高価なもので大手の商人でないととてもじゃないが買えない。なので、このような通行証は大手商人のステイタスとも言うべき存在である。

市民権は古代ローマなどでよく用いられている。

古代ローマなどでは、属国などの人々には市民権を与えない。市民権というのは選挙権や婚姻権などの諸権利のことで、ローマに対してよい功績を残したり、多額の出資をしたものに市民権が与えられる。ローマの闘技場で戦っているグラディエーターなどは、奴隷で連れてこられた人々がやっている。彼らは自由を掴み取るため、市民権を掴み取るために戦っている。

話はそれだが、異世界でローマ市民権のようなやり方している国は、ごまんとあった。

「えっとですね、まずこの紙に名前と住所など記入してもらい、指紋、DNAサンプルを取らせていただき・・・」

「でいーえぬえーさんぶる?」

「DNAサンプルとは、つまり・・・あなたの情報です」

「じゃあ、しもんは？」

「あなたが触った時に、あなたの指の跡が残ります。それが指紋です。」

いつものように使っている言葉でも、周りでは結構こまっっていることに気がついた。生前使っていて通じている言葉でも、ここへ来れば周りは何のことかさっぱりわからない。

「この紙を書いてもらった後に取扱い等の説明をさせていただきます。それと取扱い説明のときにご希望の商品にて説明を行いますのでこのカタ・・・この紙の中から選んでください。」

富田が説明をして、カタログと申請用紙を彼に渡す。

カタログには猟銃がほとんどで、レミントンM870と呼ばれるショットガンやボルトアクション式ライフルなどがカラー印刷で書かれている。他にもボウガン（異世界のよりも高性能なもの。許可証不要）やハンティングマグナムなどを販売している。

著作権や製造権、販売権は？

そんなの知ったこっちゃないね。

一応刻印と、名称だけ変えてあるが大丈夫だろう。

もしものために、前にやったロック機構を装備しておいた。これな

ら事故は起きないだろう。

「じゃあ・・・、「ホワイトフラッグ」で見かけたんですけどこれで。」

そう指差したのが、スプリングフィールド社の半自動ライフル「M1A」だ。もつとも、カタログには「M1A」とは書いていない。「R1A」と表記している

これじゃあまるで、安い中国製エアガンのようだが、性能はオリジナルより高性能だ。

「お目が高いですね。オプション・・・取り付け可能なスコープなども販売していますよ。お値段は、銅貨10枚です。」

「た、高いですね。」ちょっと冷や汗が噴き出ている。もしかすると諦めて出ていく可能性もある。ここで帰ってもらっちゃ金ヅルに逃げられる。

「大丈夫ですよ。ローンが組めますから。」

「ローン？」

「ええ、月に銅貨2枚払っていただき、5か月を通しての請求となります。」

こう富田が言うと、彼はにやけた。

「じゃあそれをお願いします。」

交渉成立。

彼はさつさと申請用紙を書き、地下で取扱い説明を溝口にやってもらい、その間パソコンに彼の情報を打ち込んだ。

カランカラン

ドアは閉まって、青年は帰って行った。大きな包みを持ち、レジには、銅貨二枚が収められていた。

「帰ったな〜……。やっぱり、軍用にもっと出せば？」溝口が利益中心的なことを口に出す。

「だめ！青い国旗の方たちに、八子の巣にされる。」

一応、俺たちは天使だ。墮天使のようなことはしたくない。もしかたとしても、バックに青い国旗にして黒いサングラス、黒いスーツを身にまとったエージェントがこの世からおれたちを消すためにくるかもしれないのだ。つまり、国連の諜報機関が俺達を消すために刺客を送りこんでくるかもしれないのだ。まあ、そういった機関があるかはわからないが……。

「だけどさあ……。傭兵稼業からの収入がないのはちょっとさびしいね。なんか依頼飛び込んでこないかなあ……。」

富田がつぶやき、マグカップに入っているコーヒーを飲む。

「身長伸びなくなるぞ？」

「うるせえ！溝口は黙ってエロゲやってろ。」

エロゲじゃなくてギャルゲーね。と念を入れる溝口。やったことのないおれたち二人にとっては同じに見える。

引出しからクラッカーを出して口に放り込む。堅い触感からゆつくりと溶けて飲み込む。目の前にある申請用紙の続きを書いていた。

年齢は25歳。職業は農業ギルドと。銃の使用目的は、害虫駆除。

プルルルルル・・・プルルルルル・・・

音を出したのは、オフィスにあるような白い電話。外線1番が光っていた。

「はい、BECです。」会社及びパーティー名の略称である。もし、異国武器店を電話したら、外線2番となる。

「アリエですけど、疾風さんですよ。依頼です。」

スピーカーには女性の声。リア充になる前はこんなにもうれしいことなのに、今ではなぜか罪悪感を感じる自分がいる。なんでだろう。ちなみに、このアリエという女性はギルド事務所で受付をしている猫耳の女性だ。

「い、依頼？」

「ええ、そうです。傭兵ギルドの依頼です。依頼内容は手紙で送り

ます。」

「それって本当？」

「え？」

思わず聞き返してしまった。

「そうですよ。しかも、あなたたちのパーティーを指名です。」

「指名？誰が・・・依頼主は？」

「私が言うことができません。今回は特例で極秘事項となっています。追って連絡します。」

と言って電話が切れた。

「誰から？」

「ギルドの人。依頼内容は手紙で送るって・・・。」

「へっ・・・え！！！！？？？」

富田と溝口は驚いて、寝ていた体を起こす。よほどびっくりしたらしく、富田のコーヒーはこぼれていた。

「嘘だろ？」

「嘘じゃないって」

「作り話か？」

「違うから……。」

「ドツキリカメラか？」

「……なんで信じてくれないんじゃない？」

と突っ込みを入れてみると、郵便受けに何か入った。

「なんだこれ？」

溝口は、それを接客用の机に置いた。

それは羊皮紙で書かれたものであったらしく、濡れないように箱に収められている。あけると羊皮紙は丸めて納められていた。

ざっと依頼内容をまとめるところだ。

< o p e r a t i o n 3、 p u m p k i n h o r s e c a r
t >

< 主目標 >

・ 対象「R」^{ロメオ}の護衛。

・ RをポイントA^{アルファ}からC^{シエラ}に移動後、ポイントD^{デルタ}へと移動する。

< 副目標 >

・対象「R」が観光中のさい、案内する。

< 概要 >

・ポイントAからCに移動は海上にて行う。なお、ポイントCからDへ移動する際も海上の船を使って行う。

・ガリビニア帝国軍の追撃の可能性もあるので、対艦兵器を準備すること。

・なお、今回の作戦は極秘である。集結ポイントは知らされておらず明後日の1300時に第七停泊所に集まることとある。船はここで停泊させるように、書かれている。つまりはわれわれに船を調達するように言っているのだろう。

・船はミサイル艇を用いる。性能などの閲覧は後で報告書を提出する。

以上！解散！

「いや、つーか何でブリーフィングになっているんだ？」

「だってその方がわかりやすいだろ？」

「まあ、そりゃーね」

「サングliderヘッドにはなれないけどさ」

「お前は航空管制指揮官か！」

富田よ。よくぞまあ、乗り突っ込みを噛まないで突っ込んだものだ。褒めて遣わさすありがたく思え。

(以前やったとは思うが、ACE COMBAT5が元ネタだ。)

「だけどさ、船なんてどうするんだ？俺達ゲームでだったら船動させるけど、実戦はちよつと無理だよ」溝口が持っていたサイダーをすすする。

「昔に戻りたいか？勝手にしろ！ベガスの外にある栄光を見てこい！」

「fail outネタかい！しかもコアなゲーマーしか知らないよ！」

「富田があきれ半分で突っ込みを入れる。まあ、読んでいる皆様にはわからないかもしれないが、fail out new vegasというゲームの初回生産版についてくる本がある。そこには、今のようなセリフが描かれている。」

なぜこんなセリフを吐いたんだって？そりゃあね、同じ趣味の読者がいないか探したかったんだよ。

「今お前がストーリーテラー（語り手）からストーリーキラー（物語の破壊者）に変わっていることがわかるぞ」

「ばれたか……。」

いろいろとふざけまくっているが話を元に戻そう。

「船ならさ、クエストでミサイル艇ゲットしていたら？1000艇ぐらい。それにゲームの能力引き継いでいるから大丈夫なはず（…）だ。」

以前、3人でネットゲームを協力プレイをしていて、味方上陸部隊を援護するためにミサイル艇を使っていた。それらの残りが、山のようにあるのだ。

「一応、海上自衛隊のハヤブサ型ミサイル艇があるけど。たぶん、今の科学技術はすごいと思うから、改造を加えたら？」

富田は、ハヤブサ型ミサイル艇の見取り図や性能、この時代の軍艦などを見比べている。

ハヤブサ型ミサイル艇の製造は2004年。

今の国連海軍の主力は何回もフラム（大規模近代化改修）受けている元太平洋艦隊だったり、大規模になったオーストラリア海軍などで、俺達が所持しているミサイル艇と向こうのミサイル艇では性能が違いすぎる。

原型を留めない位のフラムをしなければならなかった。

「じゃあこうしよう。明日、第七停泊所にミサイル艇を浮かばせておく。その前に改造をしておいて、荷物を積み込みにかかる。」

「ってことは、今日中にミサイル艇の改造内容を決める必要があるなあ……。ついでに店も誰がやるか決めなきゃならないし」
手元にあるクリップボードを見ながら、富田はいった。

「その点なら大丈夫だ。一時休業にしよう」

「は、はい？」

「うそだろ。店長。」

店長などと気安く言うな。私の名は神だ！！

と言ってみたいけれども、正直やつらがここまで驚くとなあ……。

一時休業には訳がある。

それは、雇える店員がないことである。

ご存じのとおり、この店は一風変わった「異国武器店」。剣とは違い、鉛などの弾を火薬で発射する殺傷能力の高い武器だ。人間が殺人の効率よくするために作られたものだ。この店では基本的に猟銃を売っているが、ある組織、つまりギルド警備部隊には自動小銃や軽機関銃、手榴弾や拳銃などの武器装備を販売している。

いくら効率が良くても、殺傷能力が高くて、俺達がつかっている銃は彼ら異世界の住民には異質の存在。そんな簡単に受け入れられるはずがない。

だから従業員募集！とポスターを作っても見向きもしてもらえない。

そしてもう一つは、今の状態で新しく来た従業員に任せることができない。

一から教えるのには簡単で、そんなに手間のかかる作業ではない。だが、従業員に様々なことを教えて、裏切りにあつたらたまつたものではなかった。

「一応あと3週間だったら、ギルド警備部隊の弾薬は在庫がなくなるだろうけどさ。この店だってただ店の気分を味わいたいだけのものじゃないか？」

「ん……」

どうやら凶星。ここの店を出したいって言ったのは富田だ。

「作戦遂行中、店はお休みにしよう。」

「賛成」溝口が手を小さくあげて、賛成の意思を伝える。

富田はため息をついて、頭をかいた。

「わかったよ。」

富田はドアにある立札を「open」から「closed」に変えた。

さて、船の改造の始まりだ。

「第28話 開店・・・か? (後書き)」

誤字脱字あれば宜しく願います。

感想もよろしく願います。

「第29話 汚物は消毒だ!!」(前書き)

更新遅れました!

長くなりますがよろしく。

「第29話 汚物は消毒だ!!」

「壮观だなあ……」

「これなら立ち向かえる」

「いや、国連に立ち向かうつもりはないけど、ガリビィア軍を打ちのめす力はあるぜ」

俺達は目の前にある巨大な鉄の塊を見つめていた。

全長 65.1m 。 LM500-G07ガスタービンエンジン
(16,200PS) 3基 搭載。 速力 最大60ノット。
21名で操作することが可能だ。
武装 は、 VLSセル1基。
62口径76mm単装速射砲 1基 。
Phalanx30mmM61ガトリング砲1基 。

コンピューターなどは、最新のものを入れている。レーダーなどの情報解析などは最新の機器と海上自衛隊と同じイージスシステムを導入している。

まあ、プチイージスでも思っていて欲しい。だが、性能はイージス艦以上だろう。

溝口は紙に包まれたボトルを持っている。未成年なのに、シャンパンを飲むつもりか。

「ん？ああ、これはシャンパンじゃなくてカルピスさ。」

「紛らわしい！」

それにシャンパンは入水するときにするものだ。船はパソコンから出す際、座標を海水の中に指定したのでシャンパンをだそうが、カルピスを出そうが無意味だった。

「船の名前はどつする？」

富田は白のペンキ缶と刷けを持っている。

「じゃあタイタニックで」

「そんな縁起悪い名前つけんじゃねーよ！」

「ビスマルク」

「撃沈したよ！」

「大和」

「かつこいいけど、さっきと同じ！」

「みらい」

「タイムスリップするよ！」

そのほか、溝口は某運び屋の船や某宇宙空母などが出されたがパクリはいけないのでやめておこう。

「じゃあ、俺達の傭兵会社の名前を取ってくおおわし〜でどうよ。」

富田は服に刺繍されているワッペンを見ていった。俺達の傭兵会社（まだ発足してないし、ギルドのパーティーのなまえである）はBattle Eagle company。つまり、戦うワシであった。

「自衛隊の船は、ひらがなだしいいと思うぜ」

「じゃあ決まりで」

「え〜・・・おれはくいそかせ〜いいんだが・・・」

「なんで、縁起悪いものをいくつも出すんだよ！」

突っ込みと称して、溝口の溝を殴る。突っ込みではなくただうざいだけだが・・・。

といったこともあったが、いよいよ出航である。

渡してある板を伝って、右舷の水密扉を開ける。なかを入ると、外見よりも大きく感じられた。それもそのはずで、某眼鏡をかけた魔法使いの映画にて、外見よりも広いテントがあった。それと同じようにこの船中はかなり広くなっている。ただし、基本的には普通の船と変わらず。攻撃を受けた時は壊れるし、揺れる。普通の船にはない設備と言えば、VIPルームと船倉の半分がロボットで埋め

尽くされていることだろう。

船倉の半分は、さまざまなおロボット。某銀河戦争に出てくる、工兵ドroidや海兵ドroidで埋め尽くされている。我ながら考えたものなのに某ジェダイの心境になった。つまり、恐れたわけであるが・・・。

VIPルームは、急遽設けた部屋だ。科員居住区（船員が生活する場）を4分の1改造したもので、確実に自分たちの生活スペースが小さくなるわけだが王族だし仕方がない。

いま、王族って言った？

今言ったことは忘れて・・・。

「さてと、船員を起こすか。」富田は、CIC（戦闘指揮所）のコンソールから海兵ドroid起動させた。

今回登場するのは、某銀河戦争の敵役、やられ役とも言つべきこいつらである。

「艦長。<おおわし>ノクルー集合シマシタ。全21名デス。」

細々とした体つきに、ぎりぎり俺達の背丈になる身長。殴ったりしようものなら絶対壊れそうなロボット。オーバーテクノロジーな技術ではあるが以外にも出せてしまった。ゲームの中から・・・。

「神様って何でもできるんだな・・・。」

富田が呟いた。おれと溝口は頷き、顔を合わせた。

「明日の1300時に来賓が到着する。それまでに艦の整備をしつかりとしておくように。それと艦長代理。」

俺は、目の前にいる艦長代理と書かれているドロイドを呼んだ。

「ナンデシヨウカ。艦長」

「CIC要員と艦橋要員は配置につけ。我々三人は重要な命令しか下さない。航行中、戦闘配置以外は貴官に任せる。残りの攻撃要員は機器のチェック、及び艦内清掃を行え。それと海兵隊員には第七停泊所の警備を行わせる。人間の格好をさせてな。」

「了解デス。艦長」

「それと、俺が艦長。こっちは富田副艦長。溝口副艦長で」

「副艦長八二人デヨロシイノデスカ？」

「それでいい。じゃあ解散！」

そう言うドロイドは、一寸の狂いもなく回れ右をして配置に着く。

「さてと3手に別れよう。溝口は海兵隊員のサポート、つまり警備主任を頼む。富田は医務室のストックを確認してくれないか。これからギルドの事務所に行ってくる。」

「わかった」

「了解。これで借りは帳消しで」

いつ借りを作ったか知らないが、まあいいや。

2人と別れ、水密扉を開ける。

一応言っておく。この港は広い。ここ第七停泊所は中型船が一隻入るスペースしかない。周りには倉庫で囲まれ、ミサイル艇の船体が見えないようになってる。つまりはお忍びや秘密裏に船を止めるときに便利な場所だ。一応ここは港の端に作られているためか人は滅多に來ない。氷河期災害から誰一人として来ていませんよって言うくらいに。停泊所のコンクリは到る所壊れていて、ほかの停泊所で使われているクレーンも錆びついていて動かない。

ここを選んだ、いや、ここが選ばれた理由はそこにあった。

一応ここら辺の警備部隊の兵士に扮した海兵隊ドロイド（ドロイドではなくターミネーターの方がいい）に警備をさせている。あの警備を突破することは不可能だろう。

渡されていた板を伝い、地面に降りて、止めてあった馬に乗る。

この町では、馬車や馬、ロバやラクダが移動手段。車なんてものはない。緊急時は使ったが生活に使ったら怪しまれることこの上ない。一応これはレンタル馬である。

馬に乗り、手綱を引く。最初は馬から落ちたりすることもあったが、今ではすっかり慣れて車のエンジンをかけるようにして手綱を引く。

馬は落ち着いた様子でパカパカと歩く。

目指すは、ギルドの事務所。

片道はそうだな・・・15分ぐらいだろう。

ipodの電源を入れて、イヤホンを耳につけて上からニット帽を被る。右手で曲を選択し、選んでいく。

今回のお題は船。ということは、某運び屋のOP「Red Fiction」を聞きながら行くことにしよう。

再生ボタンを押し、ポケットに入れた。

船に乗って、旅をする興奮とは裏腹に、戦闘になって自分が不慣れなせいで仲間が死ぬのではないかと不安があった。

その不安を押し殺しながら、津々と降る雪で体を冷やしながらギルドの事務所を目指した。

ギルドの事務所に着くと、馬をおく駐馬場に手綱と南京錠をして、ipodの電源を切る。最低限雪を払い落してドアを開けた。

「いらつしゃい・・・ああ疾風さんですか。向こうの部屋にお待ちしている方がいます。」

「え？だれ？」

「秘密です。」

受付のアリエはこっちに背を向けて仕事に戻る。

前に言ったかもしれないが、ギルド事務所は、非公式の依頼及びギルド組員の指定ができる場所で新しく入ることもできる場所だ。普通は隣の受付所があるので、依頼主はそちらを利用する。だが、そつちだと依頼を遂行する人間はランダム、レベル別に決まる。

突き当りの部屋のドアを開けると、溝口が会いたがっていた人物とその護衛がいた。

実戦で己を守るため必要最低限の装飾を残し、胸に王国の紋章と思しきマークが描かれた甲冑を身に着け、剣を携えた百の戦を制し生き残ったような風貌を持つ兵士が両サイドに立ち、その二人とは正反対のような美女が甲冑を着て座っていた。言っておくが、いかつい兵士二人もこの美女も耳が尖がっているエルフである。

一応、誰が依頼したのか想像はついていたし、答えもわかっていた。しかし、会ってしまったとどのタイミングで話せばいいのやらわからない。長いようで短い（そんなに経っていない。一瞬である）沈黙を破ったのは俺じゃなく彼女だった。

「私はクシヤナ王国第一王女、ミカエラ・クシヤナ。あなたが2週間前にあの村から助けてもらったものです。」

王女……つまり姫君というわけか。まあ予想はしていたけど、王族だったとはなあ……。

「私はあの病院から国連と言う組織に支援を要請しようとしたので

すが、ガリビイア軍のアサシンに見つかってしまい今日まで会うことができなかったのです」

彼女は付け加えた。

彼女が言うには、昏睡状態から目覚めたのが10日前だ。つまり、パワーアーマーで大暴れした時だ。あのあと彼女は国連大使館に赴いて事情を説明したが、掛け合ってもらえず、市内に潜伏していた王国の作業員と出会い、地下に潜伏し時が来るのを待っていた。

「今日は、これを渡しに来ました」

王女は、羊皮紙を俺に渡した。

そこに書いてある文章をまとめるところだ。

< o p e r a t i o n s , p u m p k i n h o r s e c a r
t >

< 主目標 >

・クシヤナ王国第一王女、ミカエラ・クシヤナの護衛。

・護衛対象をここから、国連本部まで護送。会談が終了次第、護衛対象をクシヤナ王国の首都ラティアに護送する。

< 概要 >

・クシヤナ王国は現在、ガリビイア帝国と戦争中である。王国は

疲弊しており一刻の猶予もない。

・護衛対象は急いで向かう必要があるため、予定の1300時ではなく今日の2100時出航とする。」

「さつき収集した情報によりますと、ガリビニア軍遊撃隊が市内を搜索中です。」

「遊撃隊？どのくらいの規模ですか？」

「およそ一個分隊」

右側にいる金髪でオールバックの騎士が答えた。

一個分隊……ピンと来ないと思うが、人数と言えば……8人から13人位だ。

「いや、一個分隊なら我々のパーティーで何とかできますけど。」

いや、そりゃも赤子の手を捻るような感じで。

「あなたには悪いようですが、勘違いなされているのでは？」

左の銀色の髪をした騎士が言った。

「一個分隊って8人から13人ぐらいの隊の事ですよな？」

「そうです。彼らはガリビニア軍の異端で、多くのものは傭兵や流れ者です」

「戦力に換算するとどれくらいです？」

「一個大隊程に相当します・・・」

遊撃隊の戦力がそれほどまでに大きかったのがびっくりした。だが、彼らの部隊編成やクシャナ王国の部隊編成が今の軍隊の部隊編成が同じであることにも驚いた。

中世のヨーロッパでは、部隊編成などは100人隊長がどうかで、小隊、ましてや分隊や班などは作られなかったと思う。今のような8人から13人ぐらいの隊を「分隊」といい、30人から60人を「小隊」。60から250人を「中隊」。300から1000人を「大隊」という。

つまり、遊撃隊は一人につき30から100人分の戦力を持っていることになる。

「その遊撃隊は魔法に特化しているのか？」

「ええ、通常の魔法師団の魔術士20人分の魔力に相当します。」

普通の国軍は、傭兵や流れ者など軍の中に招き入れない。人手不足のため雇ったとしても部隊を彼らのために編成するなんてことないのだ。少数精鋭だとしてもこの馬だか知らない人間を雇い入れるはずない。

このことから推測するに遊撃隊は、「勇者」である可能性が高い。
非常に中二病でとても危険な奴。

「それって勇者が絡んでます？」

「詳しいことは分かりませんが、多分それかと思います。」

あやふやではあるが、確実に奴らだろう。

「じゃあ早く行かないと、今すぐ友人をお呼びしますの……」

ポケットからsoftbank携帯を取り出して、電話帳から富田の番号を出そうとした。

「いらっしやいませ……きゃ〜!……」

受付から悲鳴が聞こえた。受付のアリエの声に違いない。

腰につけているグロック26を取り出してスライドを引いて初弾を装填する。

二人の騎士は剣を鞘から取り出し、臨戦態勢をとる。

手でここで彼女を守るように指示する。

音をたてないように、そつとドアを開けた。

「それで、ここにクシヤナ王国の男が2人と女が一人来ているはず

だが見なかったかな？ネコ耳のねーちゃん。」

これは夢か？

背の高い男が彼女の首を掴んで壁に叩きつけて、刃物で脅すついでうのが普通だが、俺が見ているのは彼女より頭一つ小さく、彼女を机に叩きつけて刃物で脅している。

周りには、取り巻きと思われるレザーアーマーを着込んだ男が一人と女が一人。男の方はAKを構え、女はつえを持っている。多分、魔法用。背筋がいいの持つ必要がない。

3、4秒でどう3人を対処するかシュミレーションしてカウントする。

3

2

1

・ ・ ・ ・

一気にドアを開け、銃弾を一発放つ。

一発は女の肩に当たる。

次は男に照準を合わせ、引き金を引く。まだ銃になれていなかった

のか、すぐに反応出来ず銃を向けるのが遅かった。

引き金を引いて二発発射、男の腹と左胸に当たる。

最後に一番反応が遅れた背の低い男は、未だに身体をこちらに向けていない。三発放つて、全員倒れたと思った。

「危ないじゃないか。死んだらどうするんだ。死んだら」

狙ったのは、頭、腕、足。

もし一発目が当たらなかつたとしても、他の弾は当たるはずだ。

「もしお前の短剣が彼女の首に刺さつたらどうするんだ。死んだらどうするんだよ。」

奴が言ったように同じように答える。

「つてことは君も勇者か？創製魔法は基本物質さえ分かつていて設計図さえ分かればつくれるからなあ」

俺より背の低い奴に君とか言われたくない。それに勇者になるのは中二病患者。中学生だろう。

だがなぜ奴は倒れない？

よく見ると、丸いものが浮かんでいるような・・・

「これ返すよ」

手を降り、その丸い物体とてつもない速さで翔んでくる。

「!?!」

とっさに近くにあったテーブルを倒し、壁を作る。そしてそこにダイブした。

物体はテーブルを突き抜け、壁に命中した。

紛れもない、今は俺が放った銃弾だ。マトリックスみたいに銃弾を止めて一方向に放ったのだ。

「マトリックス紛いなことしやがって・・・」

「俺に神が味方したようだな」

神が味方する訳がない。と言いたいところだが急いで奴を片付けないと大変だ。

ポケットからC4爆薬を取り出して、廊下の奥にある壁に投げる。

丁度壁のど真ん中に当たり、爆発すれば人が通ることができる大穴ができる。

ベルトから着けていた閃光手榴弾を取りだし、ピンを抜いて奴の頭上に投げた。

「しゅ、手榴弾!?!」

こうなることを予想しなかったのか、かなり驚いていたらしく、逃げることもしなかった。

閃光手榴弾は爆発して、視界を奪う。

そしてC4スイッチを押した。

「走れ!」

煙幕を作って、視界を奪い3人を誘導した。

「あ、やべ」

忘れていた。受け付けをしていた彼女を忘れていた!

部外者といえども、助けない訳にはいかないからな。

受付の机にスライディングして、周囲を伺った。手探りで探すと彼女のチャームポイントである黒い尻尾(チャームポイントで在るか不明)を見つけた。さっきの閃光手榴弾で失神してしまったようだ。呼吸はしているが揺すっても起きない。

「よっこらせ。あ、以外と軽い。」

彼女を抱え(俗に言うお姫様だっこ)して大穴まで突っ走った。

大穴を抜けると路地裏に出た。

「こっちに来てくれ」。

3人を誘導して、路地裏を走る。

「ここから何処へ行けばいい？」金髪騎士が俺の肩を掴む。

「考えがあるから彼女を頼む」そう言っただけ抱き抱えていた彼女を彼に渡して、走りながら携帯電話を取り出した。

(富田、聞こえるか)

(どうした疾風)

(今すぐにストライカーをここから200m先の道の真ん中に寄越してくれ)

(どうしたんだ)

(話は後。緊急事態だ)

(了解、東セントラル駅に転送した。ミニガン装備にしておいた)

(了解した)

通信をやめて、後ろを伺う。どうやら追っては来ないらしい。まさか、あの閃光手榴弾で失神したんじゃないだろうか。

数分走ると東セントラルモノレール駅に着いた。いい忘れていたが、

この人工島の名前はセントラルシティと呼ばれていて大きさはニューヨークとほぼ同じ大きさだ。回りにはモノレールが引かれ、都営バスが通り、地下鉄が運行する予定だった。やっと交通機関の整備が完了して企業のビルや商店などが作られる時に北半球を襲う氷河期によって中止になったのだ。今ではモノレールはおろか、バスは走ってない。馬車などが走っているのだ。

だが、その風景の中に異色を放つものがあつた。

デジタル市街迷彩でペイントされていて、横には、「Battle Eagle company 最強の盾と矛をお売りします」と書かれていた。

「見つけたぞ！奴らだ！」

後ろからは、失神したはずの男とレザーアーマーを着込み剣を片手に持っている男が駆けてきた。

他にも、周りからは幾人もの兵士が走ってくる。武器はアサルトライフルだろう。

「早く乗れ！」

ストライカー装甲車のハッチを開いてホルスターから、銃を抜いて引き金を引く。周りの取り巻きを倒したがそいつはまだ死なない。またバリアで塞がれた。

「やりやがったな。“フリーズアロー”!!!」

周りからはいくつもの矢が作られ、飛んでくる。銃で撃ち落とすが

3、4本撃つと弾が切れた。矢は装甲車に当たって砕け散る。装甲車の装甲を貫くようには出来ていなかったそうだ。

「装甲車二乗ツテクダサイ。援護シマス」ハッチからスターウォーズの戦闘ドロイドがM4カービンライフルを装備して出てきた。何故レーザーライフルじゃないのかと言うと、鹵獲されるとあぶないからだ。

ご厚意に甘えて、装甲車に乗り込む。

「ちょっと退いて。」

どこに座るのが分からなかったのか、装甲車の中で立っていた。

それらを押し退け、操縦席へ向かう。

「私ガ機銃ヲ使イマスカ？」操縦席にいたのは、さっきと同じ戦闘ドロイドだ。

「いや俺が機銃を使う。敵をある程度殺ったら、外にいる兵を中に入れて撤退する。」

「了解」

戦車兵が被るようなヘルメットを被り、上部ハッチを開く。

「COD4みたいだな。」目の前の武器を見て、このセリフを言うしかなかった。

「目標は？」

「いや、腕のいい用心棒が居たもんで。部下が全員死んだ。これじや誰が誰だか分からない。」

「そう。政府が寄越したにしてはちょっと弱すぎるわね」

「まさかとは思つが、部下を殺したのか？」

「あんな使えない部下はいても邪魔なだけ。彼らがどこに行ったか分かる？」

「ええ、戦車には”Battle Eagle company”と書かれていました。多分傭兵と思われます。」

「分かったわ。ちょっと待って。」そういつとドタバタと雑音が混ざり、悲鳴が聞こえた。

「第七停泊所よ。そっちに田辺を向かわせるからよろしく。」

そう言つて電話を切られた。

「全く上司が狂っていると部下が困るんだよ。」レザーアーマーから煙草を取り出して口にくわえる。指をならして、人差し指から火を出して、煙草に灯す。

吸い込んで、ため息をした。

「さて、ウイルスや菌が出ると大変だし、汚物は消毒しておくか」
煙草を捨てて、靴で踏み潰す。

「ドラゴンブレス」
手から1000 を超える炎が出され、ミニガンによってばらばらになった兵士達の死体が燃えていった。

「敵ノ追跡ハアリマセン。第七停泊所ニ向カイマス。」

戦闘ドroidは、後方カメラに映っている液晶テレビを見て答えた。

しかし、ロボットが装甲車を運転しているのはすごい変に思える。

「詠唱なしの防御呪文に攻撃呪文・・・生きているだけでも奇跡に近い。」

銀髪の騎士が自分の剣の血を拭き取り言った。俺がミニガンを操作する前に二人の騎士と戦闘ドroid何体かが敵の兵士を退けたのだ。

この世界では、魔法使いが魔法、魔術を使う際詠唱をする。詠唱は魔法を強力、精密化する時に使用し熟練であれば詠唱なしでも精巧な魔法が使えるという。しかし難度の高いものは詠唱が出来ない。難度が高ければ高いほど詠唱は長く複雑で無詠唱は困難である。「フリーズアロー」などの魔法は魔力と練度が高くなければ使えない

のだ。

「だが、あんたらの兵士はすごい。細くて硬い身体。魔法の杖を使って奴らを撃退するなんて。彼らはどこの種族なんだ？」

「どうやら銃器を魔法と勘違いしているらしい。しかもロボットである戦闘ドロイドを何処かの種族とも間違えていた。

「彼らは生物ではなく機械です。それに俺が持っているこの銃やドロイドのライフルも魔法ではなく火薬の炸裂によって鉛の弾が跳ばされる物です。」

「機械？それは奴隷のようなものですか？」

「いいえ。糸で動かす操り人形のようなものです。彼らの原材料はスチールやレアメタル、簡単に言えば鉄です。ゴーレムのような人形でも思ってください。」

「そうでしたか。私の名前はレオン・バーナーキン。しがない兵士ですが、国に帰れば料理人です」

「自分は、ユージーン・ウィンターズ。一応衛生兵だから”ドク”
とでも読んでください。」

俺と銀髪の騎士（30代前半の風貌。）は握手をした。

「職業軍人だったと思うのですが、召集兵ですか？」

「まあね。元は王国の東側に位置するソウトアという町で料理人をやっていたのさ。でも、ガリビニアのせいで町を捨てざる負えなか

ったんだ。難民キャンプで料理作っていたら、騎士団に拾われてここにいるんだけどね。もう2年も前の話さ。料理人と狩猟をもしてたからここにいるんだ。弓の腕がいらいらいから救出部隊に入れられたのさ。」

「で、弓はどうしたの？」でできたのは金髪オールバックの騎士だ。まだ20代だがこっちのほうが歴戦の兵士に見えた。

ちなみにレオンさんは弓兵らしいが弓を持っていない。それどころか矢を入れるボトルすら持っていなかった。

「ギルド事務所に来る前に、追つてに撃たれて弓矢が壊れてしまったのです」

考えてみれば、狙撃兵がライフルを庇わなかったことに等しい。弓兵や狙撃兵にとってエモノは命同然なのだ。

「分かりました。船に着き次第、代わりの物を渡します。あの戦闘ドロイドと同じような物を使ってください」

そのあと、レオンさんは、ありがとうと言って座席に座る。

「ちなみに私はエドワード・アダモフ。救出部隊の隊長をしている。」

「ですが、部隊は二人だけなので？」

そついうと空気が重くなった。地雷を踏んだようだ。

「最初に40人の部下がいた。上陸して10人に分けて市内を潜伏。」

そのあと町を探索して姫を救出。手配済みの船にのり、帰還することになっていました。しかし、ガリビニア軍の部隊と鉢合わせ。ここは交易の町ですからそのぐらいいは良くあることで皆魔法で耳などを隠していたんです。しかし先ほどの遊撃隊に見つかり、部隊は壊滅。難を逃れたのは、レオンと私、それと市内に潜伏している10人のみとなっています。」

通りで暗いわけだ。部隊の半数が遊撃隊にやられ、傭兵の部隊に助けられるなんて。生き延びてうれしいはずなのにこの屈辱は一体何だ、といったところだろうか。見ず知らずの奴らに仇を奪われ（倒しちやいないけど）おまけに姫の恩人ときた。正規軍の兵士、誇り高き騎士としちゃ苦汁をすすする気分だろう。

「すみません。変なことを聞いてしまいました・・・」

「・・・？いいえ。姫が無事だっただけでも良かったですよ。」

驚いた顔をして姫の方を見る。俺が謝らず、バカにしたりすると思っただろうか。エドワードは姫の方を見つめていた。その視線は心配と安堵が見えるが違うものも見える。はて、いやな予感がするが・・・。

そういった感じで見ていると、エドワードは姫の隣へ座る。王族の隣に血生臭い騎士が座っているいいものではない。「私の近くに座らないで！」みたいなことを言うのが普通だが、その予想していたものとは裏腹に予想外の事が起きた。

.....

つまりは・・・その、なんだ。

座高の違いだ。エドワードの座高が姫より少し高いので、ちょうど頭が方につくようになるのだ。そして姫の頭がエドワードの肩に寄りかかる。

これはまさしく恋愛。

溝口の片思いは一挙に崩れ去ったのだ。

「ユージン中尉。目的地に着キマシタ。現在、警戒線デ敵ト交戦中デス。」

操縦していたドロイドが言う。こうなるとは思っていたが、少しばかり早かった。

「損害は？」

「既ニ一個分隊ガ全滅。装甲車ガ一台大破シテイマス。」

どうやら本気を出さないとだめらしい。

「速射砲を使って敵を砲撃。それでもだめならトマホークで片を付けよう。船の端で停車。海兵隊一個小隊を準備させる。」

「了解。」

しばらくすると、ストライカー装甲車は停車しハッチが開く。そこには、富田の姿があった。

「お前死ぬ気か？T-600を20体出してみたら全滅したぞ。」

「……………やっぱやめとく」

「決めるの早！そんなんでいいの？」

驚かれたが気にしない。

「部隊に爆薬20キロ持たせて突撃させる。そうすれば花火が上がるぞ。」

「もういいよ。さっさと行こう。」

3人を降ろして、周囲を確認する。T-600が周囲を警戒している。手にはミニガンとグレネードマシンガン。勝てそうな気がするのだがだめなのか？

「艦長。地上に残ったイル部隊ハドウシマスカ？」

「一個小隊を出してあるからそれを前線に。彼らは我が艦が出航後、自爆させる」

「了解」

これがロボットではなく生きた人間なら大変なことだが、戦闘ドroid。しかもすぐに配備可能なため救出は必要ない。

「じゃあ富田。彼ら客人にVIPルームへお連れしてくれ。」

「了解中尉。」

富田は、こちらになりますと言って船の中へ案内する。近くで交戦中なのになんて呑気なといわれるだろうが、今から出すT-800には某俳優の顔にデザインしていた。しかも、第七艇船所には多くのスピーカーを仕掛けていた。あの映画を見たものなら恐れおのくだらう。

「第29話 汚物は消毒だ!!」(後書き)

誤字脱字ありましたら、よろしくおねがいします。

それと感想もよろしくお願いします。

感想がないと結構しんどいです。

次はバレンタインデー前に掲載します。

「第30話 対艦戦闘用意！！って帰るんじゃない！」 (前書き)

最初は、遊撃隊の視点。

次にアノ3人組の話です。

今回は短いけど宜しくお願いします。

「第30話 対艦戦闘用意!!!って帰るんじゃない!」

<ガリビディア帝国陸軍第一遊撃隊、吉村 恭輔。アメリカ第七停泊所内>

「う、嘘だろ?」

吉村 恭輔は、SF映画の主人公のような緊迫した戦場に身をおいていた。

例えば、ジョン・コナーのような屈強な肉体と精神を持っていたとしても立ちほだかるシュワルズネツガー演じるT-800がいる逆境に見舞われたでしょう。

だが、例に例えるにも及ばず既に起こっていた。

ターミネーターが俺の目の前で赤い目をキラキラさせながらこちらに近づいてくるのだ。

しかも複数。

BGMはターミネーターのテーマソングで。

ジャ・ジャ・ツ・ジャ・ジャ・ジャン・・・ジャ・ジャ・ツ・ジャ・ジャ・ジャン・・・

「フレイム・バスター!」横の智久が叫び、手から連続して火の玉

が飛び出し目標に向かって飛んでいく。しかし、あたったはいいが、依然として歩いている。

だが、フレイムバスターを受けつつも歩いていたターミネーターが大爆発を起こす。何人かの部下が吹っ飛ばされた。

「た、退却うう！」

殿をしていた兵士が走ると周りの兵士達も逃げ出し始めた。

「おい待て！何処行くんだ！？」横の智久が叫ぶが構わず兵士達は走って行く。

出来れば俺も逃げたい。だが逃げたらターミネーターよりも怖い奴に殺される。いや死ぬ以上の辛いことが起きる事は確実だ。

「俺達も逃げた方がいいんじゃない？」

そう言つと智久が睨み付けた。

「逃げたら奴に殺られるんだぞ！撤退なんかできない！」

「だけど……」

「何でこんな雑魚に手を焼いているの？」

後ろから女性の声がして、心臓が止まりそうになった。だが、振り返ればセーラー服を着た女の子、唐島がいた。

「無理だぜ。＜フレイムバスター＞位じゃびくともしない。それにお前は医療系だろ？」

魔法にも特性がある。火系や水系、土や植物など色々ある。その中でも医療系は難しく攻撃魔法などと一緒に鍛練を積んでも、医療系についてはうまくならない。もし、医療系に進むのならば、攻撃魔法はそこそこに抑えて医療系に専念しなければならぬのだ。

「あら失礼しちゃう。私の事、そんなに弱いと思っていたの？」

そう言うと、彼女の後ろから黒い影が飛び出し俺達の真横を抜けていきターミネーターにぶつかった。

一瞬のうちにターミネーターは黒く染まって動かなくなった。

影。それは光が物体にあたり、物体が遮ってしまい明るくならなかったところを影と言う。だが、このどす黒い影は影と言っていいのだろうか。人間の憎悪、悲しみ、恐怖、怨み、憤り、妬みなどのすべてが具現化されたような姿にみえた。

「精神系・・・いや憑依したのか？」

「失礼ね。智久君。操り人形とでも言えるでしょ」

智久は、目配りでもしているかのように俺の目を見て直ぐ下を見た。人間のような手が俺と智久の足を掴んでいた。

「そうね。あなた達も操り人形になって貰おうかな。」

「き、貴様あー!!」

智久は持っていたナイフで影を切り取り、手を唐島に向けた。

「ドラゴ・・・」

「遅い！」

唐島は、影を繰り出し物凄い勢いで智久のところへ飛んでいき、一瞬の内にはらばらに引き裂いた。

一瞬にして返り血が顔にかかった。

「操り人形というのは、情がないと操れないの。あの子達だってそうだし、あなたも・・・」

彼女は俺の近くまで来て抱きつく。

そして黒い影もまとわりついた。

「大丈夫。ちゃんと自我はあるわ。だけど、最初は気を失うけど・・・」

そう言うと視界が彼女の瞳に重なり、唇に柔らかい感触が広がる。黒い影が飛び出し体内に入り込んで、全身に激痛が走った。

「よろしくね　勇者さん」

まるで他人事と思えるかのような言い方だった。これを最後に意識を手放した。

<太平洋上。ミサイル挺「おおわし」CIC(戦闘情報指令所)>

(対空戦闘用意、対空戦闘用意)

アラートの鐘の音が聞こえ、ドロイドの声が聞こえた。

「敵機八二体。機種八ドラゴンデス。」

(VLS、オール・システム・グリーン。迎撃準備ヨシ)

(了解。待機セヨ。)

このCIC(戦闘情報指令所)には俺を含め、富田と溝口、残りのドロイドがいた。いくつものスクリーンに囲まれていて本当に海兵になったようだ。

「艦長、攻撃命令オネガイシマス」

3D型のレーダーを見ているドロイドが言った。CICのほぼ中央には船を中心とした3Dレーダーが設置されている。船からみてほぼ北に二体のドラゴンが飛んでいた。

「方位340、武装八不明、2機ノ模様。」

「シースパロープラス発射。2発発射しろ。ファランクス(対空火器)準備しろ。」

「了解」

ここまで行くと某ロボットアニメの戦艦「ホワイトース」の艦長であるブライト中尉を思い出す。彼は18歳でありながら一隻の軍艦の艦長をしている。指揮官の重圧を18歳の青年に耐えられるとは思えない。まあ、俺らは規格外だから耐えられるかもしれないが、

。。。

「シースパロープラス発射」

こもった轟音が船に響き渡り、ミサイルが飛んだことを告げた。

「弾着まで30秒！ほかにも船が二隻接近中！」

富田が叫び、30秒後2つの機影が消える。

「敵機の撃墜を確認。敵艦二隻が接近中。種類は中国軍の瀋陽級駆逐艦2隻。ガリビヤ海軍のものと思われる。」

「敵艦カラミサイル！数量八3ツ。」

レーダーには、2隻の敵艦が移りそこから3発のミサイルが撃ち出される。

「スタンダ ドミサイル3発発射。ハーブ ンミサイル4発発射。連続発射だ。」

「了解」

ミサイルの発射音が立て続けに7発聞こえ、船が揺れた。

「ミサイル2発撃墜。1発撃ち洩ラシマシタ。」

「フアランクス と76 mm 砲で撃ち落とせ」

「76 mm 砲で？」

富田がびっくりしたようにこっちを見ている。

76mm砲で何が悪い。砲弾だからと言って決して撃ち落とせないわけではない。イージス艦が日本軍の大和の砲弾を撃ち落とす能力がある。(まあ、アニメの話だが理論上可能である)

「大丈夫だ。急いで迎撃させる」

「了解。」

船の対空火器が起動し、空へ弾をばらまいていく。76mm砲はとてつもない速さで撃っていく。

「敵ミサイルの撃墜を確認。敵艦はレーダーから消えました。」

3Dレーダーには、何も映っていなかった。

「艦長、警戒解除を。」

溝口がヘッドセットを渡してきた。それを受け取り、付けた。

「警戒態勢解除。繰り返す警戒態勢解除。」

ヘッドセットを艦長代理に渡して幹部常装第三夏服(学生服の夏服に階級章やいろんなものをつけたようなもの)の第一ボタンを外す。船に乗っているときは、海上自衛隊の服装をすることに決めたのだ。

何でかって？

そりゃカッコいいからに決まっている。

「さてと、もうすぐ6時か……」腕時計を見てみると17:50と記されていた。

「艦長代理。後は任せる」

「進路はこのままでいいのか？」

富田は航海図を見ていった。

航海図では、この方角で行くとハワイに行くことになるのだ。今いるのは太平洋のど真ん中。赤道から500キロ近く上に位置するアメリカ島、その海域からは東南アジアの島国で補給を繰り返し返しておおよそオーストラリア大陸の西側を通ってシドニーを目指す。だが航海図のルートではここまま南へ行き、ハワイにて補給をし、シドニーを目指すのだ。

「このままでいいのだよ。ふっふっふ……」

おれのこの笑みに2人は恐怖した。

俺がこのような笑みをする場合は、この俺が何をするか周りがわからない場合が多い。奇想天外なことをする時にこの笑みをする場合がおおいのだ。

「で、ハワイで何をするんだい？」

富田はちょっと引いていたが聞いてきた。

「着いてからの楽しみさ・・・ふふふふ不負府・・・」

大丈夫かこいつ？いっちょ殺つとくか。

みたいな見方をしているが、そんなことは気にしない。

CICを出て、居住区へ帰った。

「第30話 対艦戦闘用意!!!って帰るんじゃない!」 (後書き)

誤字脱字あれば宜しく願います。

それと・・・わたくし作者は、新兵並びに依頼主、モブキャラ、魔法募集中です。

「こんな部下がほしい!」

「こんな依頼主がいたら最悪だ・・・」

「このモブキャラ主人公より濃い」

「こんな魔法あったら今の軍隊なんてふふ腐・・・」

などなど・・・

感想等にご書いていただけると幸いです。

よろしく願います。

「第31話 ハワイ！ハワイ！っていうけどホノルルはオアフ島にあるんだぜ」

アメリカ合衆国のハワイ州はハワイ島、マウイ島、オアフ島、カウアイ島、モロカイ島、ラナイ島、ニイハウ島などが主な島で、州都がハワイ島じゃなくてオアフ島のホノルルにある。

ほとんどの日本人はホノルル国際空港に行くので、言ったことない人は区別がつかないようだ。

だけど、行ったことがあるにも関わらず知らない人もいるようで・
・ry

「第31話 ハワイ！ハワイ！っていうけどホノルルはオアフ島にあるんだぜ」

海外旅行で日本人が一番最初に思い浮かべるところはどこ存じだろうか？

砂浜や波、日光や英語を話す欧米人。

俺が一番最初に考えるところと言えば「ハワイ」である。

ハワイの真珠湾はアメリカ海軍の太平洋方面の前線基地で太平洋戦争中は日本軍の攻撃により多くの被害をもたらした。

「Remember Pearl Harbor!（真珠湾を忘れるな!）」とアメリカ人のなかで言われた。実際、無謀な戦争、軍部の暴走と言われているが石油の輸出制限に人種差別、ハルノートなどで圧力も掛けられていく。アメリカには未だ差別感情があるが、外国から見れば、「窮鼠、猫を噛む」といったところだろうか。

ともあれここは、ミサイル艇「おおわし」の艦橋。

「見えてきたけど、あれがハワイ？」

溝口が双眼鏡を使い、数キロ先のハワイの様子を伺っている。

「人っ子一人いやしない。国連海軍も異世界の人々もいない。荒れ果てている。」

溝口はそう言って双眼鏡を渡してきた。

その双眼鏡を使いハワイを見た。

海氷が浮かび、ハワイの北側だけ海氷と繋がっている。観光地として知られるワイキキビーチはほとんど無い状態で周辺のビルもボロボロだ。

人影なし。野良犬もいなければ、鳥もない。無人島と化しているようだ。

「あそこがオーストラリア？」

後ろから声がして、後ろを見た。甲冑に身を固めたものではなく、ワンピースのような赤い服を着ている。そして両サイドには二人の男が休めの体勢だ。

「いいえ、あそこは昔観光地として知られていたハワイ島です。一度あの島で補給をします。よろしいでしょうか」溝口が丁寧な口調で話す。以外と冷静に話しているが顔が真っ赤である。

「そうですか。」

「一応自分を含めて一個分隊でハワイに上陸します。富田と溝口はここで待機してくれ。」

そう言って、ドROIDに湾の近くへ行くよう指示を送る。

「ミカエラ殿下はここでお待ちください。安全が確認次第上陸できるようにしますので。」

「分かりましたけども、ここに補給に来たというのは嘘なのでしょ
う?。」

なぜ嘘がばれたのか。聞こえたのか? いや聞こえるわけがない。と
したら当て図っポだろうか。

「どうしてそんなことが?。」

「話を聞いていたんです。あなた方に聞こうと思ひまして。」

「何を?。」

「それは・・・。」

急に顔が赤くなった。結構かわいい・・・。いやいやいやそんな
こと考えたら溝口に殺される。

「お風呂に入ろうとしたんですよ。使い方がわからなくて・・・」
レオンは見たまんまの証言を述べた。

「ち、ちよつとそのこと話さないでくれる!?。」

「殿下に失礼だぞ!。」

エドワードは顔を真っ赤にして怒っている。こういうことは日常茶
飯事なのだろうか。とてもじゃないが3人とも楽しく喋っている。
横にいる溝口は、指をしゃぶっているように見えた。まあ、指はし
ゃぶってはいないが。

「さて、艦長代理。船の横にエア・クッション型揚陸艇をだせ。ス
トライカー装甲車2台に戦闘ドロイド2個分隊準備しろ。」

「了解シマシタ。」

「上陸する必要あるのか？多少の物資があるとはいえ、PCのほうから転送すればいいんじゃないか？」

富田が心配そうに俺に言った。

ハワイや東南アジアの島国で補給を受けなくても、船の上で3年ほど過ごすことのできる余裕はある。だが、物資にも限りがある。食糧だってPCに保存している間は劣化しないが食べれば減るし、銃やミサイルを撃てば弾薬は消耗する。弾薬を無限にすべきとあの二人から言ってくれたが「弾創交換なきやつまらないだろ」と反論するが「弾薬をたくさん使う戦いのとき手持ちの弾薬が尽きたらどうするんだ？」と反論を受けた。それにより設定は弾数無限にしていくがドroidやターミネーターにはそういった弾薬無制限はないのだ。

「この前溝口が国連のデータベースに不正アクセスしてハワイの機密資料を見たんだけど、どうやらここには国連軍はいないらしい。」

「見ればわかるさ。氷河期災害でハワイに住んでいた人々が避難したんだろ。」

「いや、そうじゃない。確かここはアメリカ海軍の基地があるはずだろ？」

「ああ、ここから太平洋全域に戦艦を出していたな。こここの基地は条件にぴったりはまっている。……まてよ。じゃあなんで国連軍はここを基地にしていないんだ？」

富田はやつと気づいたらしい。何故、立地条件がとてもないこのハワイに国連軍が基地を作らないか。なんで人がいないのか。

「ここは、氷河期災害をあまり受けずに済んだ唯一のアメリカ領土なんだ。当時は意外にも人は住んでいたし、アメリカ軍だって存在していたんだ。」

「じゃあ、なんでひとがいない？」

「生物兵器つてのは知ってるか？」

生物兵器とは、ウイルスや細菌を使用した兵器だ。細菌兵器と呼ばれることもあり、ジュネーブ条約によって使用が禁止されている代物だ。だが、その防衛のための研究と称して細菌兵器の研究がいまでも行われている。アメリカも例外ではない。

「知っているけど・・・なあ、読めてきたんだけど、汚染されているんじゃないのか？ だったらお前が行かなくてもいいんじゃない？」

「国連の調査報告によると、そのウイルスは空気感染はしないで血液や体液によって感染するらしい。しかも、そのウイルス人を凶暴化させるウイルスだとか・・・」

「バイ ハザードじゃねーか」

富田がさりげなく突っ込んだ。

「まあでも、感染者はもう死んでいるんだろ。この調査報告だってもう、かれこれ10年前だし・・・。」

「なんだよ。28日後みたいに餓死したって言うのか？俺はドーン・オブザデッド路線だと思う」

「いやいや、走らないかもよ？」

「そついうことじゃねえ！」

と現実離れた話をしていたが、国連の報告にはその通りにしか書かれていない。

実際のところ、信憑性も余り無い。もしかしたら、データベースの当直士官がダークユーモア満載させた頭を使いふざけて書いたのかもしれない。

真実は行ってからのお楽しみだ。

「第31話 ハワイ！ハワイ！っていうけどホノルルはオアフ島にあるんだぜ」
誤字脱字等ありましたら、宜しく願います。

感想もよろしく願います。

「第32話　ゾンビ？感染者？どっちにしる同じだろ？」（前書き）

「ゾンビ」と「感染者」の定義。

ゾンビは死体。感染者は生きて人間が発狂ウイルスにした感じの人たち。

似たようなにも思えるが、詳しくは「ドーンオブザデッド」 「28日後」を見ればいい。意外とクリ　チャ　（敵役）の違いがわかる。

「第32話 ソンビ？感染者？どっちにしる同じだろ？」

「上陸マデ3分！」

海兵ドロイドは無機質な合成音を出して、人間のよう聞こえるようになっていた。だがそれでも限界があり、時折聞き取りにくいのが現状だ。

「全員装甲車に乗れ。」

号令を出して、整列していたドロイド兵が乗り込み始める。装甲車のハッチを閉めて、小さい液晶画面をオンにした。そこには、二台目の装甲車の映像とミサイル挺「おおわし」のCICが見えた。

「オワフ島への上陸終了後、車道に入って町を偵察する。それが終わり次第安全地帯を作って駐屯する。上陸挺は終了後二個中隊のドロイド兵と戦闘へり、偵察へりを載せてきて安全地帯を固める。偵察へりは周辺の地域を偵察し逐次、報告する。感染者がいた場合でも作戦は続行する。もし国連軍がいた場合は・・・船に帰って作戦を練る。以上だ。」

「了解」

（上陸10秒前！）

液晶画面のドロイド兵が言った。

装甲車の武器ラックからサブマシンガンを取り出して、予備の弾薬をとる。

上陸挺のハッチが開き、装甲車の拘束具が解かれてエンジンブレーキを切って走り始めた。

この装甲車には液晶画面が何個もあり、二つ目の液晶画面には装甲車の上部に付けられていたカメラの映像が映し出されていた。

「2号車は車間を適度に開けて、ついてきてくれ。」

「了解」

後ろから来ている二両目の装甲車は適度に車間を開いていく。

「軍曹。ガンナー（機銃手）についてくれ」

「了解」

腕に軍曹の階級章のついたドロイドは機銃を操作する座席に座り、コンソールを操作し始めた。

上にある、50口径重機関銃は銃座に座っている兵士が撃たれないように遠隔操縦となっている。もっともそれは兵士の生存を高めるための措置で、コストの低いドロイドにとっては必要ないように思えた。

「中尉殿、防護マスクノ着用ヲオネガイシマス。」ドロイドはそう言って防護マスクを渡してきた。

国連の調査報告が正しければ空気感染はない。しかしもしもということもある。飛沫感染でしか感染しないウイルスなのに、変異して空気感染する可能性もあるのだ。「アウ ブレイク」というウイルスパニック映画がいい例だ。

自然の摂理に乗っ取っているウイルスは、ワクチンを作ればどうにかなるかもしれないが、ウイルスも環境に適応するもので、適応しなければ絶滅してしまうから変異するのだ。人間が人工的に作ったにせよ、自然の摂理に逆らうことは出来ない。この世界に生きているものは皆、適応能力を持っているからだ。

「サーマルセンサー（熱探知機）になにか映っているか？」

「イエエ、特ニアリマセン。」

運転席に着いているドロイドはサーマルセンサーと結合してあるリーダーを見て答えた。

「中尉殿、モウスグ「ヒツカム空軍基地」デス。国連軍が駐屯シテイル危険性ガアルノデ、チカクノハンバーガーショップ二停マリマ
ス。」

「わかった。一号車はハンバーガーショップで停まれ。2号車はホルルの町を巡回して撮影しろ。30枚ぐらい撮ったら、ここで集結する。以上だ」

「了解」

装甲車は指示されたように、ハンバーガーショップの駐車場に停めた。

「周囲1キロに赤外線センサーを張り巡らせる。軍曹と残りの3人はセンサーを4か所取り付けてこい。残りは俺についてこい。」

ハッチが開いて4人・・・4体のドロイドは、センサーポールと呼ばれる赤外線センサーを取り付けて二方向に飛ばして四角形のテリトリーを作ると言うものだ。これは3日前に皆で「バイ ハザード3」を見たときに考え付いた模倣品だ。実際のものとは違い、センサーの近くには地雷が数機仕掛けるつもりだ。

「伍長が殿しんがり、上等兵が後方だ。その操縦席にいるお前は、ここで待機しろ。いいな」

「了解デス」

ハッチが開いて、伍長がおり、車両から降りた。オーストラリアでは紫外線が強すぎてサングラスや日焼け止めのクリームが必要だった。だが、今では雲が出ていて人気もないから薄気味悪さ倍増だった。

持っていた、「MP5rk」と呼ばれる小型のサブマシンガンの弾倉をチェックして、銃に叩き込んでレバーを引いて装填した。

そして、セーフティレバーを「フルオート」にした。

「デハ、中二入りマス」

ドロイドは腰を低くしてショップの扉の近くで銃を窓へ向ける。そいつの横に近づいて、周りに銃口を向けて警戒して、後ろにいる二等兵は後方を警戒した。

「クリアリングで行くぞ」

「了解、シカシ感染者ニ銃ガ効カナイ可能性ガアリマス。ソレデモ
デスカ？」

「ああ、お前が先頭だ。2番が俺。サイレンサー装着」

タクティカルベストのポーチからサイレンサーと呼ばれる銃の発砲
音を最小限にする筒状のものを銃口に取り付けた。

「3カウントだ。」

「3」

「2」

「1」

ドアを開け一気に飛びだした。

ドroidが先頭を歩き、俺はキッチンを目指す。

周囲を警戒しながら進み、ウェイターが料理を受け取る付近にしゃ

がみ込んでいる男がいた。

引き金を引き絞り、3、4発頭に撃つ。頭は脆かったのか男の頭部は砕け散った。

感染者の足元には腐りかけの犬の死体が転がっていた。お食事中だったらしい。

念のため、犬の頭を吹き飛ばす。

「ターゲットダウン」個人通信機器のマイクに呟いて進む。

「ターゲット一名排除」

「捉エタ。攻撃スル。」

「感染者の一人は残して拘束しろ。サンプルを摂る。」

そう言っつて裏口を確認した。

裏口には店長らしき人物が、骸骨になって放置されていた。こめかみには撃たれた様な穴があり、手元には23口径のリボルバー拳銃が錆びついていた。

裏口は、冷蔵庫を倒して開かないようにしてあり、感染者が入らないようにするためだろうか。近くに屋上に通じる梯子があった。

「まるでcod4のバーガータウンだな」某FPSゲームのステージの名前を呟いて、意気揚々と屋上へ上がった。

上には感染者は一人もいなかったが、近くにはヒツカム空軍基地の滑走路があった。

UNと機体に書かれている3機の大型輸送機CH-130が駐機しているが、感染者がそこら辺をうろついている。滑走路は草が生い茂り、整備していなかった。

「中尉、バリケードノ補強完了シマシタ。ソレト、感染者ヲ一人拘束シマシタ。」

はしごを上ってきたドロイド兵は、手にサイレンサー付きの狙撃銃を持っていた。

「二等兵、ここで感染者を見付け次第撃て。」

「了解中尉」

はしごを降りて、バリケードの出来を確認した。

ハンバーガーショップの窓には、前からあったシャッターを下ろしてあり、その上からテーブルが置かれていた。

「冷凍庫ニ監禁シテイマス。」

「一緒についてこい。サンプルを採る。」

ハンバーガーショップには、必ずと言っていいほど冷凍庫がある。どこの店も変わらないそうだ。工場で調理したものを店内で火を通

「まあいいか、寝かせてサンプル取れば問題ないでしょ」

ポーチの中から拳銃型の麻酔銃を取り出して、麻酔薬を入れてある弾を装填した。

「効力ナイ方二銅貨十枚賭ケマス。」

「効いた方に銅貨20枚」

引き金を軽く引き、弾は首に命中した。

「……………ぐう……………」

どうやら寝てしまったようだ。素早く血液サンプル用の注射器を取り出す。

いきなり起きて、襲われると困るので背中に注射器を打ち込んだ。どす黒い血液が注射器の方へ流れて注射針を抜き取って絆創膏を貼る。

「さて、死体の方も採っちゃいますか」

先ほどやつつけた死体から血液を採って、ひと段落ついて懐から缶の炭酸ジュースを取り出す。赤いラベルに黒い液体と言えば分るだろう。

プシュ！！

「あ、防護服来ていたら飲めないじゃん！」

缶を思いっきり机に叩きつけ、我に帰った。

「アノ、中尉殿？」

「ん？何（涙）」

防護マスクの視界を少し曇らせながら、ドロイドを見た。

「空気感染ノ心配ハナイソウデス。」

「は？」

「ダカラ、感染ハアリマセン。」

ウソーン！！いままですべて無駄だったってことかい？

「じゃあ、何でそんなのわかったんだよ」

「アナタハ天下ノ天使デスヨ。モシ、空気感染ダトシテモ心配スル
必要ナイジャナイデスカ。」

その手があったか・・・！！

忘れていた。すっかり設定を人間のままだと思い込んでいた！

「よいしょ」

防護マスクを外し、空気を吸い込んだ。

「不味い。もっと新鮮な空気がいい。」

と呟くがドロイドは無視してくれました。

「はあ……。」溜息を洩らして机に叩きつけたコーラを飲んだ。しばらくの間、ハンバーガーショップのイスに寝っ転んだり、ドロイドとポーカーをしたりして他の部隊が来るのを待っていた。

ちよつとしたエンジン音がここまで来て停車して、ドアから4体のドロイド兵が入ってきた。

「偵察写真ヲ持つテキマシタ。ドウデシヨウカ？」

ドロイド兵は、持っていた偵察写真をテーブルに置いた。

それらの写真の被写体は建物で、至るところには感染者が歩いている。

「偵察デハ、死体同然ノ感染者を目撃シテイマス。身体能力八人間ト同ジデス。」

「つまりは、走るってこと？」

「ソウイウコトデス。」

接近戦はやめておこう。感染者に近づいたら喰われかねない。

いわゆる「ゾンビ」のリメイク版、「ドーンオブザレッド」のゾンビだろっ。

ウイルスにやられた感染者は、死体同然の体でも襲いかかってくるらしいがさっきの感染者は感染してから日が浅いのか？

ここを封鎖したのは何年も前だと思うが、あの感染者は損傷をあまりしていなかった。

気を取り直して、何枚かの写真を捲っているうちに2枚の変な写真を見つけた。

一枚目はホノルル美術大学でそこには、「South Oceanic Airways」と書かれたジャンボジェット機が墜落していた。

二枚目は、大学の近くに建っている工場から人が手を振っている写真だった。

「おい、なんだ？これは？」

「ホノルル美術大学ト近くノ缶詰工場デス。工場ノ人々ハ旅客機ノ生存者デス。偵察ガ任務デスノデ無視シマシタ。」

さっきの感染者が旅客機の生存者なら納得がいく。ハワイに元々住んでいた人々は長い間、体を洗っていない、服を着替えていないせいで体はボロボロ。共食いもした形跡も少くはない。口元は血のようなもので汚れ、いたるところ怪我をしている。それに比べてさっき感染者は、ボロボロな服を着ているが体の損傷はあまり見られなかった。しかも、感染前に貼ったような絆創膏がいまだに貼っている。ほかにも変な点はいろいろあるが、口元には血が付着してい

ない。つまりは肉を食っていないのだ。

「おお、そうだった」

血のサンプルを取り出して、ドロイドに渡した。

「このサンプルを船まで届けてくれ。向こうで解析してもらおう。」

「了解です」

そう言つて、ドロイドは外に出てつて装甲車に取り付けてあるバイクに乗り、上陸艇まで走って行った。

「さてと、二等兵。そこにある無線機の調子は？」

このハンバーガーショップの角には、大型の無線機を設置してありここを前哨基地にしようと思つていた。

「完璧です。ドウゾ中尉殿」

無線の前に座っているドロイドが、ヘッドセットを渡し、それを頭に付けた。

「富田、これ見たらジョージ・ロメロが気絶するぜ」

「第32話 ゾンビ？感染者？どっちにしろ同じだろ？」（後書き）

誤字脱字ありましたら、宜しく願います。

話がずれている？異世界転移ものじゃないのか？！そう言うと思いましたがゾンビものが書きたいなと思って書きちゃった・・・。

作者の勝手な路線変更お許しください。

あと数話で路線修正いたします。

もうしばらくお待ちを！

え！石を投げないで！

「第30・5話 登場人物<改>」(前書き)

急いで書き上げました。

誤字脱字あれば宜しくお願いします。

「第30・5話 登場人物<改>」

《登場人物》

<天使側>

武藤 疾風

妹のせいで神によって異世界に派遣されることになってしまった。
哀れな主人公。

富田と溝口とは小学校からの親友で中学1年生の頃から同じゲーム
にはまっている。

ゲームの能力を引き継いでしまったので戦闘能力が高い。
接近戦、中距離、近距離戦に向いている。

ポイントマン（偵察兵）の能力は高く、戦闘指揮能力も高い。
一応、ゲームの階級では中尉。
ゲーム中で獲得した特殊能力は「衛生兵」である。

仲間思いで仲間が倒れたらすぐ助けに行ってしまう。現実主義で普
通の高校生では考えないような哲学的なことを語るときがある。女
子に弱い。また、妹と言う言葉に弱い。突っ込み役に回ることが多
いが、ボケる事もたまにある。

現在はリア充。

富田 亘

疾風と同じように神に派遣された。

戦闘能力を引き継いだため戦闘能力が高い。

遠距離・中距離戦に向いている。狙撃手としての能力は高い。

ゲームの階級は少尉

特殊能力は、「狩猟の名人」である。

弓道の能力も高い。

沈着冷静で学校ではポーカーフェイスだが、溝口や武藤と3人になるとポーカーフェイスではなくなる。子ども好きである。3人だけになるといじられキャラに……。数少ない「常識人」の一人である。

溝口 明夫

2人と同じように神に派遣された。

戦闘能力が高い。

近距離・中距離戦に向いている。機関銃手としての能力は高い。

特殊能力は、「ハツカー」であり、PCの能力が高い。たとえばル曹長……

ゲームの階級は少尉。

某蛇のゲームの主人公の声優さんのファーストネームが同じで、そのためスネークといったコードネームをゲームで使いたがる。

以外と図体がでかいのにこれでも情報処理部でたまに柔道部に間違えられる。

そしてヲタクでもあり、趣味に一途である。また、生前の自分の部

屋に自分のフィギアを置いてきたのを後悔している。ポケ役であり数多い「非常識人」

疾風の妹の下着を盗んだことがアル。だが、必ず殺されている。

神（課長）

武藤達3人を異世界に送った張本人。外見は中年親父のようにも見えるが、かなりの老齡。実年齢は……「歳だつて？言つたつて信じてくれないよ」と。

武藤の妹にポコポコにされるが、本人曰く「かわいい子にポコポコにされるなんて……」と抗わなかつたそうだ。

世界管理局破損世界修復課に勤めている。

武藤の妹、（武藤 美緒）

武藤疾風の妹。中学生で、某蛇のゲームの主人公やなぜか列車のコ

ツクをしている元特殊部隊隊員位、戦闘能力が高い。

3人が死んだのはコイツがいたおかげでもある。

今は「鋼の錬金 師」の世界へ行っている。

今後小説内で登場するかは未定である……。いや、個人的に出せない。

<アメリカ・ギルド連合組合>

リザ・アンデション

身長165cm、16歳

元ガリビニア帝国軍ビルコラク騎士団3隊衛生兵をしている。

16年前にフィル・アンデションに助けられ、妹として育てられている。

2年前に帝国の横暴のおかげで本当の両親が殺されていることを知り、帝国で信仰している宗教を嫌う。

兄思いであり、武藤の妹とは正反対。料理が美味い。

一応、疾風に告られ付き合っているが、父親によって逢えない。

フィル・アンデション

身長180cm、45歳

ガリビニア帝国軍ビルコラク騎士団3隊副隊長をしている。元は、国連軍所属元オーストラリア陸軍、ロイヤル・オーストラリア連隊第34大隊、アレクシス・パトリッジ少尉と名乗っていた。2034年の旧イラン領内で残留放射能チエック中、エルフの軍に攻撃を受け、原隊が全滅してしまい、帝国軍に助けられ一命を取り留める。助けられた後、国連の元兵士だと言うことで、ビルコラク騎士団に入団し、出世コースまっしぐらだと思っただができない上司にぶち当たり、上司を殴ったことから左遷してしまう。

戦闘能力は高く、指揮能力も高い。

ヘビースモーカーで愛用なのは、「Lucky Strike」である。

余談として、15歳の頃、日本人街（日本から避難してきた人が作った町）で焼きそば食べて、大好物になった。

今でも忘れられず、時々作っているが死ぬほどまずい。グループ6からは、「オヤツさん」と呼ばれることがある。

今は娘と主人公が出来てしまっているので、あれやこれやと逢えないようにしている。

ゾフィア・リヴァル

アメリカの首席検事。事実上アメリカの全権を握る貴族である。一

番最初の依頼で娘の救出を依頼した人物である。連合組合にもつてがある。

<ガリビニア帝国軍ビルコラク騎士団>

アデル・バヨン・アブルケル

身長179cm24歳

ガリビニア帝国軍ビルコラク騎士団第2隊の隊長である。自分の部隊に中国の武器など近代化を進めた織田信長のような人物ではあるが、そこまで野心家ではない。元中国人民解放軍が自主開催した講習（講習とは名ばかりの軍事訓練）に参加し、当時教官兼オプザーバーとしてフィル・アンデシヨンに会い、師弟関係を結んだ。部下などに気を配り、貴族でありながら庶民など見下したりせず、部下から慕われている。クシャナ王国の要人を搜索中に主人公に攻撃を受け、部隊が壊滅する。この戦いで親友を失っている。

アルフォンソ・フィオ・シルバーバーク
ガリビニア帝国軍ビルコラク騎士団第2隊の副隊長。アデルを友として支える人物。中国軍の講習にも参加しフィルとも師弟関係を結んでいる。

以前の戦いで戦死。

李増峰

、元中国人民解放軍傘下のガリビイア軍特殊部隊隊長。元人民解放軍陸軍少佐。氷河期災害の時は24歳であった。意外とコネを使って昇進した人物だが、それに反して人望も厚く技量もある。

ケルベロス撃滅作戦で捕虜となった。捕虜となつてからの行方は分からない。

<ガリビイア帝国陸軍第一遊撃隊>
急遽作られた部隊。課長が派遣した何百人の中の勇者がほとんどで貴族待遇となっている。

吉村 恭輔

第一遊撃隊のメンバー。中学三年生。

受験勉強中、塾に行く先にトラックにひかれ召還される。数少ない常識人の一人。唐島に憑依され操り人形となる。だが、自我はあるらしく逃げるために奮闘中。

智久

メンバーの一人。非常識人と常識人の間に位置するような性格。唐島に八つ裂きにされて死亡。

唐島 三咲

メンバーの一人。ほかのメンバーと違い、医療系の魔法使いだが・・・。

樋口

メンバーの一人。遊撃隊隊長の右腕をなす人物。

<クシャナ王国>

レオン・バーナーキン。

白髪騎士で弓兵。しかしながら戦闘中に弓が壊れた。哀れな兵士。本国では小さな町で料理人をしている。

エドワード・アダモフ

金髪オールバック騎士。クシャナ王国の騎士団の副団長で救出隊の隊長である。

ミカエラ・クシャナ

クシャナ王国の第一王女である。

<その他>

緒方 雄介

課長が地獄の脱獄犯を捕まえるために出した勇者。魔法騎士団の一個小隊規模の魔力を持っている。

バリバリの中学3年で、少し中二病にかかっている。

今後出てくる予定。

<国連>

田中 事務総長

第十七代国連事務総長。初の日本人事務総長である。以前は陸上自衛隊でAPU教導隊に所属していた。

社員募集中

作者は現在、傭兵派遣会社の社員を募集中です。

我が社の採用試験に参加したい方がいましたら、本小説の感想掲示板にて承ります。人種など問わず、エルフだろうとホビットだろうと獣人や猫耳を持つ女性も参加可能です。

氏名、年齢、性別、種族、入社理由や過去などをご記入の上、履歴書（感想）にご記入ください。

またクライアント（依頼主）や敵兵なども募集中です。

なお、正規軍の作戦に参加した場合、公式の戦死者リストや戦死者数などにはカウントされませんのでご了承ください。

「第33話 救出作戦」(前書き)

やっぱりするんじゃないかっただけ……。

作者はかなり後悔しています。

批判でもいいです。なんでもいいんで感想ください……。

作者メンタル面に非常に弱いです。

感想が来ないだけでも……。(泣)

	1	ド	兵	兵	ド	1
	1	ド	兵	兵	ド	1
	1	ド	ド	ド	ド	1
	1	装	装	装	装	1
	1	甲	甲	甲	甲	1
	1	車	車	車	車	1

「こちら地上部隊、右翼の感染者にミサイルを撃ち込んでくれ。」

(こちらデビース1了解。)

上空にいる攻撃ヘリは、右へ旋回して3、4発のミサイルを撃ち込んでいく。感染者・・・もといゾンビは肉が千切れ飛び、肉の塊あつたりに散る。

「中尉！もうすぐ工場の外壁です！」

M4A1ライフルの弾倉を換えながら、黒い戦闘服を身にまとった兵士が走ってきた。

この兵士はアメリカ警備部隊の一人で、救出部隊の半分が警備部隊の隊員だ。

このまま自分の部隊に編成したいが、おやっさんの部下だから借りているだけだ。もし、部下の一人でも死んだらおやっさんに殺され

るだろう。たしか、この兵士はウィリアムだったか。

「ウィリアムだったか？今から正面の感染者を上のヘリで吹っ飛ばすから、全員で正門を確保しろ。」

「了解です。あの亡霊たちに一泡吹かせます！」

亡霊じゃないんだがな〜・・・。と思いつつも、走ってくる感染者の頭を撃ちぬく。

周りからは、俺たちに気づいた感染者が走ってくるも装甲車のミニガンや榴弾の餌食になっていく。元は人間でも、今では既に別物だった。

「こちら地上部隊！中央に突破口を作れ！」無線兵のバツクパツクについているマイクを取り出して、ミニガンなどの銃声でうるさいため、叫んだ。

（こちらデイベス1了解した。もうすぐ弾薬が切れる。これを機に空からの援護は出来なくなるOUT!）

ヘリは、出し惜しみのないようにミサイルとミニガンの洗礼をゾンビに与えた。

（こちらデイベス1！あとは頑張れよ。次来るときは別嬪さん連れてくるからな！）

ヘリは旋回して飛び去っていった。

「今だ！正門に侵入しろ！」

装甲車はスピードを上げて、正門に突撃した。

猛スピードでぶつかった正門の扉は大きくひしゃげ、工場内に吹き飛んだ。

「正門が開いたぞ！突入しろ！」

その掛け声とともに、救出部隊は中へ突入した。だが、ゾンビはそんなことを構うことなく襲いかかってきた。

M P 5 Kの弾が切れたら、ホルスターに入れているM 9 2 Fを取り出し引き金を引く。

それでもだめなら、サブマシンガンのグリップを強くつかんでゾンビの脳天に叩きつけた。

「正門が閉まりません！」M 2 4 0を撃ちまくっているサーポート兵が最後だった。

「装甲車で閉めるから下がれ！早くしろ！！」

手に持っていたM P 5 kのマガジンを装填して引き金を引いて叫んだ。

最後の兵士が入ってすぐ、装甲車を正門に横付けして入れないようにした。

「各部隊損害報告してくれ」

「ドロイド損害ナシ」

「アメリカ警備部隊も損害有りません」

あれほどのゾンビに囲まれたのにも関わらず、一人も死なずに済んだのは奇跡に近かった。普通のホラー映画なら部隊の半分が殺られると思う。

「ドロイド隊は正門と裏口に歩哨を配置しろ。残りはここで待機。ジヨンソン准尉来てくれ」

「中尉、何でしょうか。」

ジヨンソン准尉は、アメリカ警備部隊の小隊長を勤めている。救出部隊はアメリカ警備部隊一個小隊とドロイド兵二個小隊編成で、警備部隊はミサイル挺に載ってここまで来た。おやっさんのいきな計らいだが、損害があれば死刑。戦わせようとしても、つつい消費極的になってしまうのだ。

「准尉。君は君を含めた10名を選抜してもらいたい。一人は衛生兵。モラルがしっかりとあるものにしてくれ。」

「了解。あと・・・」

准尉は言葉を濁した。軍曹は俺と同じぐらい背丈で髭を生やし、バンドナを着けている。それに比べて、俺は生えはじめの髭で歳が17。若造に指揮される気分じゃどんな気分か。いや、かんがえたくない。

「何でしょうか」

「我々が来たにも関わらず、この歓迎の無さは一体何でしょうか。敵の包囲を突破したら、普通はよろこぶんじゃないですか」

「准尉、自分達に属していない国の軍隊が助けに来たら普通警戒しません？しかも、亡霊に包囲されて信じられるのは自分のみ。無闇に出てきたら、撃たれるかもしれない。って思う筈です。生存者は工場のどこかに隠れています。そのために5人選抜してここに連れてきてください。」

「了解です。中尉」

軍曹は部下が休んでいる工場の一角に走っていった。

工場は昔、拘置所として使われ、十分な拘留スペースが足りず、民間の食品会社に買われた。

工場は壁に囲まれていて、搬出棟、加工保存棟、と別れている。今いるのは搬出棟に隣接した駐車場で、使われなくなったトラックなどが放置されていた。どのトラックも誰かが使えるかどうか試したらしく、ボンネットが開けっぱなしになっていた。

「さてと武器を変えるか」

自分の銃を見てみると、銃身が歪み傷ついでいて、銃星などの照準が壊れていた。銃の至るところががたついていて、廃品同然だ。

Made in Gods にしても、素材は同じわけだから銃を鈍器として使えば、ボロボロになってしまう。

装甲車のハッチを開けて、武器ケースを開いた。

使っていたMP5kを仕舞い、新しくG36Cと呼ばれるアサルトライフルを取り出した。

G36Cはドイツ連邦軍の制式アサルトライフルで、コンパクトで扱いやすく命中精度が良いのが特徴である。

オプションパーツには、マスターキーと呼ばれる短銃身をショットガンのアサルトライフルの銃身に装着して、照準にはホロサイトを取り付けた。そして、フラッシュライトを銃に取り付けられているレールにくっ付けて、取れないように黒いテープで補強する。

着ているタクティカルベストから、9mm弾のマガジンを取り出して、G36Cのマガジンに入れ換えた。

「中尉殿、ジョンソン・アルバーン准尉以下10名集合しました。」
准尉が敬礼して、他の者が軍曹に合わせて敬礼した。

俺は身長が175cm。日本人男性の平均身長だ。日本人は比較的背が低く、高校のLETの男性教師と比べたとき、10cm以上

高かった。

しかし、目の前にいる兵士たちは3人を除き俺と同じくらい、それ以下だった。

「准尉、彼ら。背が低くないですか？」

そう言うと、一人の兵士が一步前にでた。

「中尉殿、これでも我々は周りから精鋭と呼ばれました。この前のケルベロス掃討戦においても、戦果を残しました。背は関係有りません」

「しかし、君は・・・」

声からして、女性。

肩幅は小さく、小柄な体つき。ヘルメットと覆面で顔を隠しているがかなりのナイスバ・・・じゃなかった近接戦闘が得意だろう。

「女だからですか。戦場には性別は関係ない筈です。私の国は女でも戦争に出て戦います。」

そう言って、一步下がった。

俺は准尉の肩を組んで、後ろを向く。

「彼女は？いつもあんな感じなんですか？」

「彼女はあの分隊の衛生兵です。名前はクリス上等兵。この世界で

言うなら、ヨーロッパ地方のマルティニア王国というのをご存じですか？」

「ああ、知っている。確か、王政で君臨しているのが女王で様々な性別差別政策を打ちだしているんだろ。」

2030年、氷河期災害にて壊滅したヨーロッパ地方に新たな2つの転移門が姿を現し、異世界の軍勢があふれ出た。2つの軍勢は安全を確認するとすぐさま植民地化をするため移民団を差し向けた。2つの門から来た彼らはそれぞれ、「マルティニア王国」「エスパニア公国」と名乗り、王国はフランス全域を支配。公国はスペインを占領した。

そのマルティニア王国を知ったのは、あるオーストラリアの衛星番組で放送されていた「ファンタジー・トラベラー」という、いわゆるバライティー番組だ。

その番組のスタッフはマルティニア王国に国連の特使と記者に同行して、国内に入った。

その番組は観光などをする場合に備えての紹介番組だ。今や視聴率は高く、オーストラリアの70%が見るほどの超人気番組だった。

しかし、カメラが捉えるものは信じがたいものだった。

カメラには、道歩く女性が非常に多かったのだ。

渋谷などの日本のファッションの中心なら、それほど珍しくはない。しかし、そこは首都の大通り。女性の人口が多いのかもしれないが、

これは異常な量だった。

街ゆく人に男はどこにいるのかと聞くと……

「ここから5エール（異世界の長さの単位、約20m＝1エール）先に男用の大通りがあるから、そこへ向かえばいいわ」

スタッフは通りがかりの人に聞いてそこへ行くと……

服装はまばらであるが、ほとんどが男でボロ衣のような服を着て大通りを歩いていた。

ある歴史学者曰く……

「ローマ帝国の逆パターンが存在した！」

王国は、男を奴隷として扱い、女性を人間としていた。ローマ帝国では、女性は男の所有物となっていたためこのような言い方をしていたがここまでの性別差別は人類学者や歴史学者は目を驚かせていた。ローマ帝国でさえ、身内の女性に対しては優しく愛情をだして接している。だが、テレビで見る限り、それはなく身内の男性であるうと容赦はしていなかった。そのため、国連の大使（男）は王族に会うことはできず、取材スタッフ（男）も詐欺にあい、人身売買されかけたという話だった。

この番組のあと、視聴者（女）は旅行会社に問い合わせ回線がパニック状態となった。何故このような事態になったかは割愛させていただきます。

「ええ、そう言うことなんですが・・・彼女の家族は政治的理由から亡命するはめになりました、アメリカに流れ着いたのです。しかも、彼女の家系は軍人揃いだったらしく、性格はまさに男勝り・・・」

「おお」

「しかも、平気で男の上官の命令無視はするはで困ってるんです。」

「そうですか。ってなんで選んだんですか！」

そう突っ込んでみた。普通なら選ばない。普通なら・・・。

「さつきまでは遠距離や中距離の戦闘で銃が優位に立つことができますが、接近戦だと剣やナイフの方が戦いやすいのです。」

そう言うって准尉は、背中に取り付けた剣を叩いた。

彼らはもとは接近戦のプロだ。無理やり、おやっさんや俺達が銃の使い方なりスパルタしたからできる所行だった。

「彼女は馬術や剣術格闘などの士官の基本的要素が得意だったので選抜しました。他は魔力、爆発物、医療にたけているものを選抜しました。」

准尉はそう言うって、煙草を勧めてきた。

不良ではないので、手でいらぬいそぶりを見せて、肩から手を離れた。

「では今から、そのシャッターから搜索を開始する。生存者を発見次第、救出する。何か質問は？」

「生存者の数は？」

「不明だ。大学に落ちた旅客機は中型機。130人収容可能で機体は二つに裂けていたが、ここにゾンビが群がっていたのを確認したから救出活動に赴いたわけさ。他は？」

「抵抗はありますか？」

「あるかも知れない。パニック状態で襲いかかってくるかもしれないが、殺さないでくれよ。亡霊になったときは殺してもかまわない。他には？」

もう誰も聞いては来なかった。

「よし、アンドレ二等兵とカルビン上等兵が殿。あとは続け。」

一行は、搬入棟に辿り着いた。

搬入棟は、トラックに荷物を楽に乗せられるよう、ホームが作られていて横には、内部へと続く鉄扉がある。

指を使い、二人の兵士ドアを開けるよう指示する。

アンドレ二等兵とカルビン上等兵が扉に取り付き、扉を開けようとした。しかし、開かず、二等兵は首を振った。

「曹長、ブリーチクリアだ。」

「了解。」

爆破担当、セドリック曹長がドアに近づき、爆薬を仕掛ける。

「やれ」

合図とともに、扉は爆発して、すぐに3人は突入した。

「二階への通路クリア」

「加工棟への入り口クリア」

「オールクリア」

搬入棟1階は、掌握したので残りのチームが中に入る。

中は、フォークリフトや段ボールなどが置かれていて、大量の保存食料が放置されていた。中には開けてある段ボールがあり、空き缶やペットボトル。焚き火をして、調理した場所と思われるところも発見した。

「セドリック曹長とアンドレ二等兵とカルビン上等兵、それとクリス上等兵はついてこい。残りの5名は・・・、准尉。搬入棟の二階を搜索してくれ。こっちは加工保存棟で搜索する。」

「了解。イーサン、チャーリー、クリフトン、サイラスついてこい。ダニエルが先頭だ。」

ジョンソン准尉達は、二階へと上がっていった。

「じゃあ、アンドレ二等兵先頭だ。行くぞ。」

銃のストックを折りたたみ、コンパクトにした。

二等兵は、ゆっくりとドアを開けて加工保存棟に続く通路を開いた。

他は銃を構えて、出てくるものを迎え撃とうとした。

しかし、感染者はおろか、生存者は出てこなかった。廊下は台車が何台か転がっていて何もなかった。

「あゝ……。曹長、二等兵がしんがり。ドアを開ける」

次は本番とばかりに気を取り直し、銃をドアに向けて 待ち受ける敵を待った。

二等兵は一気に扉を蹴飛ばし、強引に開いた。

「キヤアアア！」部屋には、20人ぐらいの生存者が焚き火を囲っていたり、缶詰を食べていたり携帯等をいじくっていたり多種多様だ。

その20名全員が一斉にこちらをみた。

「救助が来たぞ！」

「やった！助かるぞ」

周りから歓声と喜びの声が上がった。

「我々は、国連から派遣されたPMC（民間軍事派遣会社）のものです。皆さんを救助しにやって来ました！ここに代表はいらっしゃいますか？」

歓声が轟くなか、機長のような男が立ち上がりこちらにやって来た。

「南オーシャンニック航空、815便機長のアダムスだ。会えてよかった」

「ユージーン・ウィンターズ中尉です。生存者は何名でしょうか？」

「ここにいるのは私を含め、26名だ。他の負傷者はすべて搬入棟の3階の休憩室に手当てを受けていたが……」

機長は、最後のところを言わず、そのままうつむいてしまった。

（こちらジョンソン、只今搬入棟の3階だ。突入する）

無線からジョンソン准尉の声が聞こえた。

「無線の方はなんと言っているのです？」

異世界の人たちとここにいる兵士の使っている言葉は違っていた。俺は魔法でほんやくしているから分らなかつたが、機長は英語でしゃべっているらしく、ジョンソン准尉は違う言語を使っているらしかった。

「いまから搬入棟の3階にて救助活動を行います。」

そう言うと、機長の顔色が変わった。

「だ、だめだ！3階は開けてはならない！！」

機長は掴みかかり、首が閉まる。

「どうしたんですか！？ちょっと！話して下さい！！」

機長は、俺より背が高いため、体が持ち上がる。

ゴツ……

機長は倒れ、気絶した。

「ありがとう。クリス上等兵。」

気絶した原因は、クリス上等兵が剣の柄の部分で殴ったことだ。あのままやっていたら昇天していたかもしれない。……そうでもないか。

「ふん……」

照れてしまったのか、顔を横に振った。

「こちらユーゾーン。3階には入るな。繰り返す突入するな」

(ノイズがひどくて聞こえない。ブリーチクリアだ。やれ)

やれという合図で爆発音が聞こえた。

「畜生、やりやがった・・・」
悪態をつくがそれだけでは収まらなかった。

(クソ！出てきやがった！撃て！撃ちまくれ！) 無線からは銃声と
叫び声が聞こえた。

「アンドレ二等兵！カルビン上等兵！今すぐ搬入棟の扉を閉鎖しろ
！急げ！」

「了解！」

二人は走っていき、急いで鍵を閉め周りの机などをバリケード代わ
りにする。

(こちらジョンソン。サイラスとクリフトンがやられた。奴らの一
員だ。敵は20人程度、我々は2階の白いタイルの部屋にいる・・・
・・・)

途中で切れてしまい、聞えてこなかった。

無線をいじって、出力を大きくした。

「こちらは救出部隊のユージーン中尉だ。工場内に感染者が発見さ
れた。工場の中から出てきたものは撃ってかまわない。」

部屋には、俺の声が寂しく響いた。

「第33話 救出作戦」(後書き)

誤字脱字ありましたら、宜しく願います。次の話で作者の暴走は終わります。

ご迷惑をかけました。

次回予告

「第34話 地獄からの脱出」

宜しく願います。

「第34話 地獄からの脱出」(前書き)

一ヶ月間ほっぴらかしで失礼いたしました！

進級する準備で忙しかったのです。主に勉強とか・・・。

この話は第三者視点で書きました。今までの主人公視点ではありません。急遽変更したため変な文法あると思いますがよろしくお願います。

「第34話 地獄からの脱出」

<36時間前 太平洋上空 高度5000フィート 南オ
ーシヤニツク航空815便>

「こちら南オーシヤニツク航空815便。順調に航路を飛行中。機体に異常なし。EWDS (Early-Warning Dr
agon System) 異常なし。」

(了解、815便。気をつけてビイアグライドまで飛行してくれ。)
アジア系でスポーツ刈りの頭をして、ヘッドセットを首にかけている体育会系ばい男は、ジャンボジェット機ボーイング747の副操縦席に座ってヘッドセットのマイクを手で口もとに近づけていた。横には「A・ボイル機長」と名札が胸ポケットにつけている白髪が交じり始めたヒスパニク系の男は操縦桿を握らず、キャビンアテンダントが注いでくれたブラックコーヒーに手を付けていた。

2051年現在、オートパイロット技術は飛躍的な進歩を遂げて、着陸や離陸、その他の緊急事態の行動もほとんどがオートパイロットになっでいて、パイロットが二人も要らないんじゃないかと航空業界を騒がせて不景気なれば機長だけにする寂しい事態に発展したこともあった。機長や副機長、それらの乗務員までもがオート化さ

れて来ているこの時代、あと20年で定年だがクビになる可能性もなくはなかった。

今回のフライトはコロンビアから元中国、ガリビニア帝国の首都ピイアグリード国際空港が目的地となっている。乗客はもっぱら豪系の企業や観光客、帰省者だ。

ほとんど骨董品であるボーイング747型機は、いくつかの大規模改修を経てここまで来た機体で、二階部分だけを客室にしてしまい、あとの空間をすべて貨物室にした代物だった。

「そろそろあの地点だな。よし、機内スピーカーに切り替えてくれ」

アダムス機長は、ミュージックプレイヤーに挿し込んでいたヘッドホンのソケットを機内のスピーカーにセットした。

「ご搭乗の皆様、誠にありがとうございます。私は機長のアダムス・ボイルです。当機はまもなく、ハワイ諸島マウイ島を通過します。ハワイは唯一アメリカ領土のなかで氷河期災害に生き残ったリゾート地ですが、2040年に隔離された島です。噂では新型ウイルスによる隔離というのがあったらしいのですが真相は謎のままです。10年以上たつ現在でさえ、渡航が許されておらず通信も途絶しています。では目的地まであと8時間弱、機内では災害以前の映画の特集を放送しています。ごゆっくりお楽しみください。」

アダムス機長は短いスピーチを済ませて、スピーカーをオフにした。

「機長、なぜあのようなことを言ったのです？」

マイルズ副操縦士は手元にあるルービックキューブをいじりつつ、答えた。

「あそこには昔に住んだ家があつてさ、歩いて一分で海水浴ができる場所があるんだ。そこを思い出してね」

「そういうことでしたか。そいつは知らなかったです」

「まあ、今やっている「バイオハザード」って映画が機内で流れているからね、それとハワイの噂を考えると笑えるじゃないか。」

「そうですね、これは笑い話になりそ……」

といい続けようとしたが、マイルズはふと見たレーダーを凝視していた。

マイルズが見ているEWD S の画面には、「unknown」と赤く表示されたものが円の中心に向かってきていた。これはつまり自分のところに向かってきているのだ。

「機長！レーダーに反応が！」

「慌てるな。野生のドラゴンじゃない。今は3月だろうっ！」

ドラゴン。

それは神話やファンタジー小説やファンタジーゲームでお馴染みのドラゴンは、幼少期に転移門から飼育用や軍用、研究用として連れてこられた。

だが、逃げ出したものや迷い込んだものが成長して航空会社に害を及ぼすようになった。

研究は進んで、活動期は7月から9月までというのが判明し、それによりおよそ3か月は飛行が禁止され、航空会社は窮地に追い込まれた。経営困難なため、会社は要らない人員を解雇していき私の首も危うくなった。なんとかコネを使い、首を繋ぐことができたのだ。だから今は2月のはずだ。ドラゴンがいるなんてあり得ない。

「方位は!？」

「方位230、こちらに接近しています。」

急いで高度を上げるため、シートベルトのサインを出す。

「こちら南オーシャニック、815! ビアグラード応答せよ!」

無線に向かって叫ぶ。

(こちらビアグラード管制塔。815便、何があった?)

「緊急事態だ。現在オアフ島上空、未確認機が接近中。何かの演習か?それともセスナでも飛んでいるのか?」

(815便、冗談だろ。こちらのレーダーには何も見えない。空軍

にも確認中だが、竜騎兵をそちらには派遣していないようだ。」

「こちらの後ろに着いているんだ！だから急いで……」

「機長、見てください。これ……」

マイルズに止められ、レーダーを見た。接近中の未確認機が消えてこちらに急接近中してくるもの点滅しているものがあつた。

「A A M（長距離対空ミサイル）か！！旋回しろ！」

オートパイロットを解除して、操縦かんを握って右に旋回する。

流石に旅客機にミサイル回避のプログラムは仕込まれていない。第一、ロックオンを表示して警告するシステムすら導入されていないなかつた。

地震のような揺れに襲われ、客室から叫び声が聞こえた。すぐさまアダムス機長は酸素マスク着用のボタンを押して、後部カメラの電源を入れた。

操縦席の上に設置されている小型の液晶画面には、右翼が火を吹いていて今にも千切れそうな勢いの火が見えた

「油圧が低下！付近に滑走路は……ヒツカム空軍基地が有りませす。」

計器から警報が鳴り響くなか、マイルズが立体地図を開き、近くの滑走路を表示した。

「こちら南オーシャニック815便！ヒツカム空軍基地応答せよ！機体が損傷している。緊急着陸する」

国連空軍の周波数や緊急用の周波数に合わせてみるが、なんも応答がない。

「進入経路は？」

「このままを維持して下さい。残り10km、車輪を下ろします。」
マイルズが車輪降下パネルをオンにして車輪が降りる。だが油圧が低下していて、操縦かんがおかしくなり始めた。

「第一エンジンが停止します。高度が低下！このままだと墜落します！」

「くそ！踏ん張れ！」
操縦かんを思いっきり引いて機首を上げる。だがエンジンの推力が追いつかず高度が低下していく。

左翼が時計台に当たり、翼が吹き飛び、左翼がなくなったことにより、地面に着地して半円を描きながらホノルル美術大学の校舎にめり込んだ。

計器などを保護するガラス片や液晶パネル、ありとあらゆるものが飛んでいき、パイロット用緊急エアバッグが作動して視界に白いものが移り、次第に意識が薄れていった。

何分、いや何時間経ったのか。

目が覚めると、辺りはコックピットのガラスの破片で計器類の上に散りばめられている。そのガラスで切れたのだろう。頬や頭から血が流れている。

「おいマイルズ……。だ……。大丈夫か？」

隣はマイルズがいる筈だが、そこにはいなかった。

シートベルトを外して立つてみるが、少し斜めになっている。コックピットから出る扉は開かれていて物音がしない。

まるで誰も乗っていないかのようだ。

マイルズが私の代わりに避難誘導を行ったのだろうか。全く音がしていない。耳がおかしくなったのかと疑ったのかと耳の近くで指を鳴らした。しっかりと聞こえていた。

周囲は、完全に死んだかのような静粛に包まれている。

ガタツ……

キャビンアテンダントが使うカートの傍らに、副操縦士のマイルズが後ろを向いて突っ立っていた。

「おい、マイルズ。助かったよ。避難誘導は済んだのか？」

アダムスは、いつものように彼に話しかけた。

だが彼は何も言わない。

「おい、聞いているのか？客は何処行った？」

アダムスは彼の肩を掴んで振り向かせた。

マイルズの顔は蒼白で生気のない顔でまるで死人のようなかんじだった。

「大丈夫か？」

マイルズは、肩を掴んでいるアダムスの腕を突如噛みつくこうとする。

「おい！何すんだ。」

噛まれる寸前に腕を引いたので噛まれることはなかったが、もう彼ではなかった。

振り向いた彼の腹からは内蔵がでて床に垂れ下がっていた。

アダムスは腰が抜けて、扉を閉めようとするが墜落した影響でうまく閉まらない。

「ああああ……」

さっきまで隣で仕事をしていた同僚にそっくりだったものの、既に彼ではなくなっていた。

まさしく映画やゲームのゾンビ、感染者にそっくり同じだった。

両腕を伸ばして獲物を食おうとする。

「こっちに来るな……来るなあ！……」
叫ぶが助けは来ない。

まずい……ここで死ぬのか……脳裏に2文字の言葉が浮かぶ。

血の味がする口の中で歯を噛み締めた。

パンツ！

乾いた破裂音がコックピットないで響き、制服が血で汚れた。

マイルズだった物は、頭に穴が開き倒れた。

いるのは銃を持ったブロンドのショートヘアな美女がそこに立っていた。

彼女の着ているスーツは血で汚れていて、破れているところもある。

「連邦捜査官のアリスです。機長のアダムスさんですね？助けに来ました。」

「これは何かの冗談だろ？」

マイルズだったものを指差していった。彼女から見れば怯えているようにも見えていたであろう。だがそれを隠す余裕もない。

「いいえ、現実です。速く外へ行きましょう。歩けますね？」
冷静に彼女は言った。

「ああ、それより生存者は？」

「ここからすぐの建物に避難しました。急ぎましょう。」手を差し伸べてくれたので、それに応じて手を掴んで起き上がる。

「さあ行きましょう。彼らがやって来ます。」

彼女は後ろを向いて、銃を向けて近づく感染者に撃つていく。

操縦席から出てきて、すぐ近くの開いているハッチに近づく。

外は雑草がたくさん生えていた。もとは美しい中庭だったであろうそこには、至るところから感染者が歩いてくる。

「走って！」アリス捜査官の掛け声と共に脱出用のスロープを滑り降りて、彼女のあとへ続く。もう40前半の歳の身体にムチを打って、走る。

感染者から逃げるため、後ろから迫る手を見ないで走る。

なぜハワイに来れないかがわかった。こんなところに来るよりガリビアの不味いラム酒を飲む方がましだった。

「クソツタレが!!!!!!」

アダムス・ボイル。44にして初のゾンビとの鬼ごっこ。ゴールは生か死か。生死を懸けた鬼ごっこが始まった。

<現在、プロイア缶詰工場ホノルル支店。加工保存棟>

「んで、どうするんだ。これから」

ノートパソコンから富田の声が聞こえている。画面には「おおわしのCICの様子が生し出されていて、向こうからはこちらの顔と後ろにいる、クリス上等兵が映るだろう。」

「うーん、まず、ドロイド兵を突入させて一階を制圧。そのあとにCH147に民間人をのせて輸送船に避難。輸送船はPCから転送させよう。それなりに武器弾薬、兵器を載せてさ。そのあとヘリで警備部隊を引き上げさせて、立地条件がいい所に基地を設けるのはどうだ？」

彼らが来た目的は、武器弾薬、兵器から軍用食糧、兵士の生活を支える生活用品に至るまでを生産する施設が必要だった。オーストラリアなどの国連諸国にある軍需に携わる企業は、見知らぬ傭兵会社には軍事物資を売ることはない。

もしも傭兵が事件を起こして、その事故を起こした兵士が持っていたのは軍需物資を売ったオーストラリアの企業の武器だったら、その企業がマスコミに叩かれる。

軍需企業にコネクションが無ければ、売ってもらえない。例えば国連特殊作戦軍の元兵士や軍需企業と密接な関係がある補給士官、政治家などの支援、雇用が必要だろう。

「まあそれでいいと思うけど、そっちにヘリポートが無いと思うんだが・・・装甲車で突破すればいいんじゃない？」

溝口が持っていた飴を口に入れて言った。

「既に奴らに包囲されてしまったし、装甲車では突破できないよ。駐車場をヘリポートの替わりにして、着陸させることもできる。それが船に搭載されているハーブーンミサイルを使って工場の外にいる奴らを吹っ飛ばして強行突破もいいかな」

「余り派手なこととして国連の偵察衛星に見つかるからな。今は辛うじて、国連の衛星通信をハッキングして偽のデータを送らせているがもうそろそろやばい。いそいでここから離れないと。」

国連の軍事衛星や偵察衛星は46時間に一回、上空を通過する。もし、その衛星に捕捉されれば戦闘機なり軍艦を送ってくるだろう。

「じゃあ、ヘリ案と車案。どっちがいい？」

疾風は机に置いてあったヘリコプターの模型とハンヴィーに似たような軽装甲車両の模型をカメラの前に置いた。何故あったのか知らないが、ここで働いていた従業員の忘れものらしい。

「へり」と富田。

「車」と溝口。

「では、車案で。まずこつちにヘリでドロイド兵一個中隊派遣してくれ。それとハーブーンの替わりにコブラ三機でガトリング、ミサイルで奴らをミンチに。それと呼応して工場脱出を図る。脱出後は上陸ポイントに戻って上陸艇に乗って引き上げる。」

「そんな感じでいいと思うんだが、トイレに籠城している軍曹はど

うなっている?」

「無線でCALLしているんだが、帰ってこない」

俺達がこの加工棟に突入したときに、別の分隊のジョンソン軍曹とその部下が搬入棟3階に突入した。だがその三階には、墜落の時の負傷者がいたらしく、負傷者をその階に集めて看病していたらしいのだが、その負傷者のなかに感染者が居たらしい。犠牲を払いながらも、軍曹達は2階のトイレに籠城しているようだ。だが、向こうの無線が壊れたらしくいくらCALLしても連絡がない。やられた可能性があった。

「抗ウイルス剤はどうなっている?」

「今のところ他にいた警備部隊の全員に投与した。ヘリで増援を送るときにヘリに載せておく。それと俺も行くのでよろしく。」

と溝口が言って、親指で自分をさしてカメラに顔を近づけた。

「おいおい、見えないだろ!」

「わるかったな」

「なんで行くつもりだったんだよ？」

そう言うと、溝口の顔が歪んで、嫉妬の念がガンダムで登場するソロモンでのドズルザビの怨念のように見えた。

「当たりめくだろ！なんで学園黙示録みたいなことになってんだよ！」

「いや学園黙示録ってもね、鉄バットで戦う訳じゃないし……」

「しかも何か！そんな美女がいながらもまだ、そんなこと言っているつもりか！武藤！！」

こちらを指差して、怒り心頭だ。まあ、いつものようにぶざけているわけだが……。

「まあいいや。じゃあいまのやつ頼むぞ」

「おい、ちょっと待って……」

疾風は呆れ顔でパソコンのマウスをクリックし、回線を切つてぶざけをやめた。

これ以上騒げば、この部屋の外にいる815便の生存者に聞かれるかもしれないからだった。

「今のつて、何語なんです？」

後ろにいる、クリス上等兵が腕組みをしながら言ってきた。

（俺、お前の上司なんだよ……。）
と、突っ込みたい気持ちを抑えつつ説明に乗り出した。

「今のは日本って言う国の言葉さ。国連の方達が使う言葉だとJapaneseって呼ばれてて。日本のことはJapanって言うんだ。」

「へ……」

（答えたのに興味無さそうにすんじゃねーよ。目出し帽とヘルメットを被って顔が見えねーし、ツンデレしてても萌えねーよ！それにさっき、銃持っていた捜査官らしき女性と談笑していたし、素顔がみたいよ！しかも俺がこっち見ていた時にヘルメットと目だし帽脱いだろ！）

「さてと……」

山ほど、突っ込みたい事項があつたが、喉元から出る直前に押しとどめてPCをバックパックに入れて、壁に立て掛けてあつたライフルを首に掛けて部屋を出た。

すると・・・

「はやくここから脱出させてくれ！金ならいくらでも払うから！」

「武器を貸してくれ！このままでは全滅だ！！」

「なんで救援が早く来なかつたんだ！」

「ちょ、皆さん下がってください！危ないですから！」

部屋の外にはビジネスマン風の男が3人とミュージシャン風の男が一人出口を塞いでいて、中に入らないように小柄なアンドレ二等兵が押さえているが、今にでも突破されそうな勢いだ。

「アンドレ二等兵もう大丈夫だ。部隊の指揮をとっています、ユー・ジーン中尉ですが何かありましたか？」

「なにかあつたじゃない！いつになったらここから脱出させてくれるんだ！」

とバーコードの髪形をしたいかにも会社の重役が詰め寄ってきた。

「我々も全力を尽くしています。現在洋上にわれわれの輸送船とミ

サイル艇が待機中です。もうすぐ増援が来ますので体力を温存してはいただけませんか？」

「冗談じゃねえ！おい銃を貸せ！こんなところもうたくさんだ！」

と、ちららそんな髪の毛を真つ赤に染めた男がアンドレ二等兵のAを奪い取るうとした。

だが一瞬のうちに、隣にいたクリス上等兵は男の腹に剣の柄を叩きつけた。

「グエ！！！」

男はそのまま吹っ飛んで壁にぶつかり、苦しそうにしている。さっきまでの威勢をなくしその場で倒れこんで息をできないでいる。

「な、なんてことを」

ビジネスマン風の男が驚きを隠せないでいた。

「我々は護衛任務中に皆さんの飛行機を見つけ、ついであなた方を救出しに来ました。今のようなことをすれば、最終手段も辞さないと思っておりますので・・・速く視界から失せろ」

持っていたライフルのボルトを引いて、カチャツという音が合図に蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。

「・・・あゝやっちゃった。オーストラリアに行ったあと訴えられるな・・・。やべ〜ことしちゃったな」

「いいじゃないですか。許してくれますよ」とアンドレ二等兵が肩を竦めて笑って言った。

「笑い事じゃないよ。下手したら今のようない仕事ができなくなるよ」

「そんなことで訴えられるって変な話ですね。」と剣を鞘に納めているクリス上等兵がこちらを憐れみの目で見ている。

「つかみるなよ。世論つてもんは怖いんだから。」

君たちの世界では、傭兵がどっかの店の親父を殴ったところで個人が罰せられるかもしれないけどさ。おれたちの世界ではその傭兵を雇っている雇い主まで罰せられるんだからたまったもんじゃない。もし罰せられなくとも、株価は落ちて、世間からは厳しい目で見られるであろう。

そう文句を言いたかったが、無論。言ってもわからない。根本的な意味で。

疾風は、時計を見ると12時半と指していて腹時計も鳴っていた。

「セドリック曹長、搬入棟に通じるところに歩哨を配置して下さい。残りは食事をお願いします。」

「了解、おっと中尉殿。」

と、セドリック曹長がふいに疾風の肩を叩いた。

「中尉殿、もっと覇気のある声で命令して下さい。これじゃあ指示する俺まで気がなくなっちまう」

40を越えて、口髭を生やしているセドリック曹長は、どこかの山奥に住む木こりやアメリカ南部の農業従事者にも見えた。しかし、彼の顎に刻まれている大きな傷を見ると、銃を持つ以前に至近距離で剣を駆使して戦っていたことがわかる。彼という人生の半分を戦場で過ごしてきた彼は、疾風にとって大先輩であった。

「・・・わかりました」

「しっかりとしてくれよ。あんたの下で命はっている部下がいるんだしな」

セドリック曹長は、疾風の肩を叩いて、搬入棟につながる入口に立っていた部下たちのところへ行ってしまった。

自衛隊でもこういったことは珍しくはなく、たたき上げの前任軍曹（高卒が多く、年配40代〜50代が多い）が幹部自衛官である士官（大卒）をサポートするような関係がみられる。幹部自衛官と下士官との円滑油が前任軍曹であり、トラブルや人間関係、進路など

をサポートする。父親的存在であることは間違いないだろう。

「霸気か……経験値ゼロで体力、気力記憶共に兵士……
こんなんでやっていけるかな？」

疾風は独り言を漏らしながら、とぼとぼ歩いて行った。

工場の加工棟は、部屋は少なくベルトコンベヤに乗せられた缶が流され、機械がその中へ肉や魚、果物を入れていく。この工場は様々な缶詰を生産するため加工棟は広くいくつかのセクションに分かれていて、生存者の腹を満たしていた
その端にある果物のセクションには、異世界から来た二人の兵士が昼ごはんを食べていた。

「クリスティーナ様、そんなにがつつかないでください。お召し物が汚れてしまいます」

冷静沈着、 unnecessary ことは口に出さないカルビン上等兵は、元奴隷なのがゆえに元あるじである彼女に注意をしていた。

「いいじゃない、このセントウフクだっけ？今回ボロボロで次の戦いに使えそうになかったら、新しいのをくれるなんて驚きよね。」

クリス上等兵は、普段の男勝りな言動は一変して、一般的な女の子らしい話し方にならっていた。

中世の軍隊では、給与の中に装備品の維持費が含まれることが多い。甲冑などの防具は行きつけの店で修繕してもらい、剣は自分で磨き上げる。その修繕費は給与、つまり自分の懐から出され、その費用を引いたお金を生活費に充てるのが一般的なのだ。そのため修繕費が大きいと生活費が圧迫され、貧しくなってしまう。クリステイナの家、アルベルト家では、早い時期から自立させるため12の頃から奴隷一人と家を一軒渡され、軍へ行くのであった。そのため最初の頃は防具などの修繕費がかさみ、生活費が圧迫してお気に入りドレスなどを手放したことがある彼女にとって、驚きが隠せなかった。

「はい、ほかの奴隷は主人から食事を貰えず、痩せこけていました

ね。」

カルビン上等兵は、脳裏によぎる奴隷仲間の瘦せこけた姿を思い浮かべた。仲間の笑顔やもとのいた田園の風景に思いを馳せながら、手元にある「セントウリヨウシヨク」と呼ばれる食べ物を口にした。

「あの頃の日々が懐かしいわ。エイミーやデニスはどうしているかしら?」

「あの方たちも楽しく生きていることでしょう。何せ兵役を免除された方たちですので」

カルビンは、腰につけていた水筒を取り出し、中の水を飲んでまずい漬物を飲み込む。「こんなものを作ったのは誰だ?腐った食べ物のおいがする」という本音を言わずに黙って食べる彼のことを彼女は好きだった。

12歳の頃から一緒にいて、戦場を駆け巡り苦楽を共にしてきた仲だった。奴隷と主という関係ではあったが、戦友という深い絆で結ばれていた。周りからは、戦場でも子造りに励んでいると噂された時期もあったが、二人は接吻さえしたことがなく、友情といった深い信頼関係が築かれていた。

「それにしてもユージンでしたっけ？あの中尉。鏡みたいなものから船の仲間に連絡を取っていたらしいけれど、毎度毎度ふざけすぎよ。もっとあなたみたいに静かになれないのかしら。」

「さあ、どうでしょう。私はいつもこんな感じですが、世の男性は中尉のような忙しい（・・・）方なのかもしれませんよ。」

あまりほかの兵士と話したことがなかったので、他の男はどのようなことをしているのか見当がつかなかった。母国では、奴隷だったので自由になってからというもの、よくわからなかった。自由という言葉の意味が。

「でもどうしよう。結婚なんて・・・。向こう（マルティニア）ではすぐ見つかるのに、ここじゃ見つからないわ。」

とクリスティーナは、ちらっとカルビンを見た。カルビンはその視線に気がついたのかすぐに違う方向を向く。

友情といった深い絆で結ばれているものの、クリスティーナはそれ以上の関係を望み、カルビンは現状維持を務めていた。

つまりは……一般男子がうらやむようないいシチュエーションであった。(M属性の男子にとっては)

「私はあまり知りませんが、中尉の友達である富田少尉は、とてもいい人であると聞き及んでおります。」

カルビンの急務は、早く対象から外れることだった。深紅のさらりとした長い髪、透通るような白い肌。しなやかな体躯。これらはカルビンの胸を締め付ける要因になっているが、掟では、主と関係を持つてはならないとされているから一刻も早く対象から外れてもらわなければならなかった。

「富田少尉は、中尉や溝口少尉などの騒がしい一面を持っていません。私のように物静かであると聞きます。」

「ふん……」

クリステイーナはカルビンの意図など簡単に見抜いていた。

「私だったら、あなたを選ぶけどな。」

「えっ!？」

カルビンはクリスティーナのストレートない方に驚いて、頬を真っ赤に染めた。いつもなら遠巻きに言うクリスティーナの内容ならまだ表情などに変化を出さないようにしている。しかし、今回のようなストレートのようなことを言われてしまったのは、頬を染めざる負えなかった。

クリスティーナはしてやったりという表情を浮かべていた。

プロイア食品加工株式会社ホノルル支部工場の討議室と呼ばれる部屋には、さまざまな額がある。その写真はここに勤めていた社員の写真や労働組合の組員の写真もあった。この人たちはどうなったのだろうかと疾風は思ったが、すぐにやめて今からする行動表を見た。ここの従業員だった人たちはもう人ではなかったからだ。

行動表にはこれからするメモ書きのようなもので、疾風が今からすることは、学校でやるような学級会議とは比べ物にならない。生死を賭けたことだから念には念を入れて、慎重に事を運ばなければならない。

しかもミスをすれば、自分だけでなく多くの人々が危険にさらされる。これ以上死人を出すのはいやだった。

行動表をみて、部屋にいる人の顔を見た。

飛行機に乗っていた生存者の代表、機長のアダムスさん。

オーストラリアの連邦捜査官のアリス警部補。彼女はオーストラリアから逃走した殺人犯の身柄を引き取るために飛行機に乗ったらしい。

元アメリカ海軍将校だった齢70歳のアンソニーさん。妻が病で病死して、妻の遺灰を捲くために飛行機に乗った。

旭日重工業という世界屈指の企業に勤めている重役の菅田さんで、彼はガリビニア帝国の旭日重工業の新支部長で約20人前後の社員とともに来たのだとか。

この4人は生き残った生存者をまとめて今まで生きていたらしい。

機長のアダムスさんが先頭に立って指揮をとり、あとの三人が機長を支えていた。

「時間がないので手短に済ませます。これから一時間後。1430時から洋上の輸送船に避難します。この地図見て下さい」

疾風は手元の丸められた市内の地図を広げた。

その地図には赤いペンで工場には赤い丸が描かれ、幹線道路から海岸までを赤いマジックでなぞられていた。

「我々はここに来るのに、10両の装甲車と歩兵、機械歩兵、ヘリでここに来ました。脱出方法は、機械歩兵を搬入棟に展開し3階までを消毒。安全が確認され次第、搬入口から外に出てもらい、装甲車に乗って下さい。そこからはわれわれが来た道かた行ってエアクッション揚陸艇で輸送船に行きます。」

「その機械歩兵というのは？」アンソニーさんが興味深そうに聞いてきた。

「高度な人工知能を備えた戦闘ドロイドです。外見はSF映画を参考にしたそうです。それを2個小隊導入します。」

「国連の援軍は？」

「多分援軍という名の燃料気化爆弾か核ミサイル。良くて消毒するための特殊部隊が派遣されるでしょう。我々の規模はお教えすることはできませんが、こういったことに慣れているので心配いりません。」

「あと、皆さんに知ってもらいたいことが一つだけ。」

疾風は話を区切り、部屋にいる人をもう一度見渡す。

「ワクチンが完成しました。」

疾風がそう言うと、周りは歓声と喜びに包まれた。

4人の主要メンバーの以外にも重要な会議に出席したいと数多くの生存者がいたため、彼らの声が大きく響いた。

「全員分の生産が完了しましたので、脱出する少し前に皆さんに渡します。では打ち合わせ通りをお願いします。」

疾風はそう言って会議を終えた。

一時間後・・・・・・・・1430時

疾風は自分のホルスターに収められているM92Fのスライドを引いて初弾を装填して、安全装置を付けて掘るスターに戻すと、肩にかけたG36Cアサルトライフルのボルトを引いて、セレクターレバーをsafeからfullに変えてストックを伸ばして射撃姿勢を安定させた。

無線の電源を入れて、マイクを口に近付けた。

「こちらPhantom1、RED1応答せよ。迎えのエスコートはどうなっている？OVER」

(こちらRED1・機械人形が一階を掃討中。一個分隊をそちらに向かわせている。しばらく待ってくれ)

無線とここからの位置からでも、いくつもの銃声が聞こえ、感染者の叫び声が聞こえていた。

分隊用無線機のヘッドセットのスイッチを入れて、マイクを近づける。

「偵察隊全各員、もうすぐ増援が到着する。民間人を一人も死なせるな」

疾風は、ヘッドセットを首にかけて、ポケットのミントガムの封を切って、包装紙からガムを出して放り込んだ。

・・・ガン！ガン！ガン！・・・

扉をたたく音が三回鳴り響き、扉の近くによって「誰だ？」と向こう側の人間に声をかけた。それが人間ではないものか・・・。

「クロネ ヤマトの宅配便です。印鑑お願いします」

「持つてるわけねーだろ！」

疾風は、扉を飛び蹴りで開けて向こう側にいる溝口を扉と壁のサンドウィッチにした。

「ヒデブー!!」

某世紀末映画のヤラレ役が死ぬ前に放った言葉を言って、マンガの潰されたキャラクターのように、ふらふらしながら床に倒れるのだった。

それから10分後……。

(3階を制圧中、ジョンソン准尉を救出。命に別条はありません。何名か負傷しているのでヘリで移送します。)

無線からは増援部隊とともに来た、マクギー准尉が野太い声で話していた。

「こちらはワクチンの接種を完了した。いつでもいける」

(了解、第三分隊を援護に回らせますOUT！)

一通り連絡を終えると、疾風は目の前にいる友人溝口に向き直った。とても怖い顔をして……。

「あ……あの疾風君？……」

溝口は猫撫で声を出すが、疾風の背中出る黒いオーラは一向に収まらない。

「……今ここで頭を撃ち抜かれて死ぬのと、外で奴らに喰われるのどっちがいい？」

疾風は持っていたM9のスライドを引いて初弾をチャンバーに入れた。

そして溝口は素早く疾風の前へ行き……

「ごめんなさい！」と土下座するのだった。

「どうしたんですかい？」とセドリック曹長が異常事態に気付いて二人の元へ来た。

「軍隊で上官に従わない場合はどうするんだっけ。曹長」

「従わなかったら？そりゃ、憲兵に身柄拘束の上営倉。悪けりゃ軍法会議の上銃殺刑……。」

それを聞き、溝口の顔はゆっくりと青ざめていく。

「いやその場で射殺つてもやばいですよ！しっかりとした軍法会議の上で銃殺じゃないと……。」曹長が慌てふためき……

「だがそれって正規軍の話だろ。一応俺達傭兵だぜ？」

傭兵というものはPMCを除き、正規軍、雇い主クライアントから見てもいいように扱われない。暗殺や不正規任務でない限り、頭数を揃えるため。ゲリラなどの反政府軍は自分の戦力を高めるためであって綺麗な仕事なんてものは存在しない。それはグリーンカラー（戦争生活者）の人間は綺麗な仕事なんてものはないが……。

ドン！ドン！ドン！

またドアが叩かれ、疾風はM9を持ったままドアに向けつつ曹長に開けさせた。

「第三分隊のジェンキンス軍曹です。援護にまいりました。」略帽を被り、M60軽機関銃をもったジェンキンス軍曹は、左手に銃を持ち替えて敬礼した。

「では今から移送開始する。一グループに3名ずつ護衛をつけてく

れ。」

疾風はそう言って、後ろに待っていた曹長に声をかけた。

「銃殺できなくなったみたいだ。少尉！俺と一緒に来い！曹長は民間人をここに並ばせて、一グループずつ連れていく」

「了解、連れてきます」

曹長は手元のカラシニコフを肩にかけて、民間人が固まっているエリアに走り出した。

そして10分後……。

「早く行って。急いで下さい」

扉を開いて、続々と出る生存者を援護する。……敵が来ないよう
に援護はしたいのだが、民間人はお疲れのせいかゆっくりと歩き始
めた。これでは援護はおろか、渋滞している車を整理する交通課の
警察官みたいだ。

「急いで！急いで！」

そして次のグループも歩かせるが長蛇の列となっている。これでは一向に進まない。

「クリス上等兵とカルビン上等兵は後方警戒、曹長達は先行してくれ」

「了解」

やっと列が出口が見え、一応警戒しながらも、薄暗い空を見た。昔はリゾート地であったのに、こんなにも黄ばんだ空で気持ちが悪かった。

（こちらデAVIS2。Phantom1を発見、彼らが収容次第清掃を行う。OVER）

上空では、警戒中の戦闘ヘリ、コブラが旋回している。都市迷彩を施したコブラは、くすんだ空に溶け込んでいて、戦闘ヘリの威圧感が感じられなかった。

（こちらHQ了解・・・方位243から何か接近中！大きさからすると・・・竜騎兵だ！）

デAVIS2、コブラ戦闘ヘリのパイロットは、すぐさま真北の方向に機体に向けて機関砲の安全装置を解除する。

茶色の鱗に真っ赤な目、戦闘機のミサイルや機銃を植え付けたドラゴンが雄叫びを上げながらまっすぐ戦闘ヘリに滑空していく。

パイロットは、操縦幹のトリガーを引いて機関砲を放ちながら旋回する。ドラゴンは竜騎兵の操作により、銃撃を交わし続けた。

ヘリの機関砲は直ぐにオーバーヒートを起こして撃てなくなり、ドラゴンからも小銃弾が打ち出される。

何発かはコックピットに当たったが、デイス2のパイロットは機器の安全をすぐさま確かめて、ドラゴンの射線に入らぬよう旋回する。

対空ミサイルの安全装置も解除して攻撃準備に入るが、突如アラームが鳴り始める。ミサイル接近アラームだ。

「ミサイルか。ガンナー！フレアだ！」後部座席のガンナーに叫んだが返事がなかった。

デイス2のパイロットは、ヘリの操縦席に設けられた反射鏡を見て後部の銃座席を見た。

後部座席には小銃弾が何発も降り注いだらしく、銃弾の一つはガンナーの顔面に直撃して顔が判別できなくなっていた。

パイロットはすぐさま、ガンナーのコントロールを呼び出してフレアを放出し旋回しだす。

しかし、そのときには遅く。ドラゴンから発射されたAIM 920短距離対空ミサイルはヘリのエンジンに直撃して大爆発を起こした。

「ウィリアム二等兵！ステインガーミサイルを使い！」

疾風は命令してウィリアム二等兵は装甲車からFIM-92ステインガー携帯型対空ミサイルを背負い、空のドラゴンに向けた。

ドラゴンは獲物を狙うかのように上空を旋回している。デイビス2の僚機、デイビス1は補給中でいなかった。ドラゴンの識別マークは消されていて、何処の国、何処の基地所属か分からないようになっているが、ガリビニア帝国軍の竜騎兵なのは確かだ。

「四角いカーソルに合わせろ。ロックしたら引き金を引け」

疾風はウィリアム二等兵の耳元で言い、ライフルを門に向けた。装甲車には生存者が乗り込んでいて、ちょっとした混乱が見られている。

「ロックしました！」

「撃てエー……！」

ステインガーから出された1m弱のミサイルは、まっすぐドラゴンの脇腹に命中した。

「ウガガアアアア！！！！！！！」

ドラゴンは激痛に苛まれながらも、両手の羽をばたつかせて飛ぶのを維持する。

だが爆発はしなかった。

「不発・・・？」

ウィリアム二等兵と疾風は顔を見合わせた。

(Made In Godだぞ！不発なんてことあるのか？)

疾風はそう思い、ドラゴンを凝視する。

それから一秒もたたぬうちに、ミサイルは大爆発してドラゴンに取り付けていたミサイルや弾薬が誘爆しドラゴンは木端微塵となった。

「遅延信管かよ！洒落にならね〜よ！」

疾風は叫んで、落ちてきたドラゴンの肉片を蹴っ飛ばした。

遅延信管とは、着弾した後に爆発する信管のことでステインガーマサイルならば接触信管などになっていたはずであった。

「おい、ちょっと見せる」

疾風は神製のミサイルが不良品というのに納得できず、ウイリアム二等兵が担いでいるステインガーミサイルのモニターを覗いてみた。モニターには四角いカーソルが表示されて、上には信管が選べるように設定が施されている。

そのモニターにははつきりと遅延信管と表示されていた。

「お前のせいじゃねーか！」と二等兵の軽量ヘルメット（穴の空いている樹脂製ヘルメット）を殴った。

「痛て！」と、二等兵は頭を押さえていた。

信管を換えるためには、ミサイルを分解して信管を換える必要がある。しかし、ステインガーミサイルのような携行型ミサイルの場合、製造側が交換出来ないようにする場合が多い。

しかし、Made in god製は信管を換える事が出来てしまうというのには、疾風は驚いた。

だが、驚いているわけにもいかず、疾風はチェストリグにつけている無線機を使ってミサイル艇「おおわし」を呼び出した。

「いちらPhantom1。HQ応答せよ」

（いちらHQ。）

「目標『D』の破壊に成功。引き続き生存者の救出に当たる」

(了解、Phantom1。おっと、偵察ヘリによると通常よりも巨大な感染者が近づいているぞ。距離は工場まで200m。)

HQからゴーグルに観測ヘリから撮った写真を送信してもらった。

その写真には、バイオハザードで出てきそうな怪物がいた。2m以上の巨漢で黒い頭巾で顔を覆い、上から釘を打ち込まれ、手には大きな斧を携えていた。

「処刑マジニじゃねえか。」と疾風が呟いたが誰も突っ込むものがないかった。

「生存者の収容、完了しました！」とセドリック曹長が走ってきた。

「急いで離脱しろ。戦闘ヘリが掃除を完了次第、脱出する！」

「了解！」曹長は敬礼して走って行った。

「こちらPhantom1。デイス1、掃除を開始してくれ！」

(了解Phantom1。掃除を開始する。)

補給から帰ってきたデイベス1、コブラ戦闘ヘリと多目的ヘリUH
ー1「ヒューイ」は横列飛行で、ミサイルと機関銃の弾をありつた
け工場の前にいる奴らに撃ち込んでいく。

ヒューイに搭載されているミニガンやロケット弾、コブラ戦闘ヘリ
の機関砲や対戦車ミサイルが感染者に当たり言葉通りのミンチにな
っていた。

「よし！いいぞ！装甲車隊発進しろ！」

（こちら第一小隊、了解）

（第二小隊了解した）

（こちら第三小隊、発進する）

（第四小隊、装甲車を動かす。第一小隊から出ていってくれ！）

門代わりだった第四小隊の装甲車を退かすと、道路には人間であつ
た死体が埋め尽くされていた。

(こちら第一小隊、前進する。デイビス1援護を頼む)

(了解、第一小隊。これより撤退の援護に移る。Phantom1、そちらの援護はできなくなる。Hornet1しか援護が出来ない。Over)

「了解した。行ってらっしゃい！」

装甲車の一群は、揚陸艇を目指して前進を始めた。たった一機残った戦闘ヘリは彼らを援護するために空から消えて、UH-1イロコイのみが空を飛んでいた。

ライフルに付けられているマスターキーショットガンを外して、M230グレネードランチャーを装着して、40mm榴弾を装填する。

「中尉！奴等です！」

後ろにいたセドリック曹長は、疾の肩を叩き、やつらのいる方向を指差した。

壁があつた場所には、墜落したコブラ戦闘ヘリのテイルローターが突き刺さり、そこから奴らが押し寄せていた。

「撃て！撃ちまくれ！」

疾風は引き金を引いて、5、56mm徹甲弾をばらまいていく。徹甲弾だったためか目の前の感染者を撃つと後ろの感染者に当たると

いうことが起きた。

「中尉！中に避難しましょう！」

アンドレ二等兵は持っていたSVDを腰だめで撃ちながら叫んだ。

「全員中に入れ。援護する」

疾風はグレネードランチャーの引き金を引いて、感染者を粉碎して、ついでと言わんばかりに火炎手榴弾を投げ込む。

「ウオオオオオオ」

うめき声を挙げながら、周りの感染者を蹴散らしてきたのは、バイオハザードに出てくる「処刑マジニ」と呼ばれるクリーチャーにそっくりな感染者だった。

空になった弾倉を捨てて、チェストリグから新しい弾倉をだして、ライフルに叩き込んで弾を装填して引き金を引く。

「中尉！早く中へ！」

アンドレ二等兵の呼ぶ声を聞いて疾風は周りを見ると、既に囲まれていることに気が付いた。

（ヤバい！ゾンビに路上解体ショー何てやりたくねえ！）

疾風はこう思っているのも束の間に、銃を掴まれ引き剥がされて地

面にコケた。

ホルスターからM92Fを出して、引き金を引いて襲い掛かってくる感染者の頭を吹っ飛ばす。

疾風はあと数メートルのところまで搬入棟の入り口に設けられている4、5段の階段を登ってセドリック曹長の腕を掴む。

「掴んだぞ、引っ張れ!!」

セドリック曹長とアンドレ二等兵、カルビン上等兵、クリス上等兵が疾風を引っ張って中に入らせようとする。

だが、それを感染者は指をくわえて見ているわけにはいかなかった。百獣の王ライオンが目の前にいる草食動物一頭を見逃すわけがないように、感染者は力の限り疾風の脚に噛み付いた。

「っつんだよ!腐ったゾンビ野郎が!!」チエストリグの胸につけられたコンバットナイフを右足に噛んでいるゾンビの脳天に突き刺す。

ナイフをゾンビの頭から抜いて、つかんでいる腕を切りながら搬入棟に入った。

曹長は急いでドアを閉めて、カンヌキをする。

「はあ……あ……」

「溜め息を漏らすのはいいですけど、何か言うことないですか?」
アンドレ二等兵が笑って、疾風に水筒を渡す。

「ああ、そうだったよ。ありがとう」

疾風は水筒を受け取り、傷口にかけた。

噛まれた右足のスネは、食いちぎられず見事な歯形が出来ていた。

「こりゃあとで縫いそうだ。・・抗ウイルス剤やっておいて正解だ」

「・・・中尉、打ってないと思うのですが・・・?」

え？今なんて言いました。クリスティーナさん？

「私が見た限りでは、一度も自分に打ってませんよ」

(つまりは、俺もゾンビ(感染者)の仲間入りを果たすってことですかい！ええ！)

止血用のパットを貼って包帯をした自分の右足を見て、疾風は解決法がいくつか浮かんだ。

ひとつは、持っている拳銃で自殺。

この方法だと、完璧に物語にある「主人公は死なないの法則」（例外を除く）をぶっ壊してしまう。仮に、クライマックスで命を投げ出して世界を救うとしよう。自殺という形で。某蛇のゲームでも最後の最後で自殺しようとする。これはある意味ハッピーエンド。主人公は死んでしまったが、そのおかげで世界は救われた。めでたしめでたし。だが、ここはクライマックスじゃないし、世界を救ってなんかいない。脇役が噛まれてゾンビ化して仲間に撃たれるという最悪のオチ。

二つ目は、そのまま見なかったことにしてゾンビ化したら仲間を襲う。

ある意味で最悪のオチ。ひとつ目よりひどい結果だ。

三つ目は足をぶった切る。

これは某B級ホラー映画、ゲームのリメイク映画で合ったことである。部下の兵士が噛まれてイタイイタイ！と叫んでいる間に、隊長がマチェットのような刃物で部下の腕をぶった切りゾンビ化を防ぐうとしたのだ。それでゾンビ化を免れたのかと思いきや、その部下は5秒ぐらいでゾンビ化して、応急処置をしていた衛生兵も噛まれてしまったのだ。

たぶん効果はないだろう。クリス上等兵の剣を借りて腕を切断したとしても、若干戦闘能力は低下したただけで、ゾンビ化するだろう。

そんな自分の処遇について目まぐるしく考えている疾風に聞こえないようにしている5人

は会話をしていた。しかし、疾風にはバツチリ聞こえているのだが。クリス上等兵「どうしますか？曹長」

セドリック曹長「うん、こいつはまずいよなあ・・・」

アンドレ二等兵「いつその場で撃ち殺しますか。」

カルビン上等兵「いや、それはまずいと思う」

溝口 「俺はいいと思うけど・・・。」

クリス上等兵「でも、オーストラリアで警察官のアリスさんは噛まれたら必ず亡霊になるって言ってたはずですが、やっぱり殺した方が・・・？」

セドリック曹長「待て待て・・・。クリス上等兵、彼らになる前の症状ってというのはどんな感じなんだい？」

クリス上等兵「えっと、噛まれた患部が壊死していき、ろれつが回らなくなります。そのあとに倦怠感や気分が悪くなって全身が痙攣します。そのあと一回死んで・・・。」

セドリック曹長「亡霊になるといふことが」

クリス上等兵 「はい……」

溝口 「奴らになる所要時間は？」

クリス上等兵 「最低でも1時間、長くて2時間ぐらいです」

5人は俺を見て銃や剣を握りしめている。うん、滅茶苦茶怖い。

疾風はゆっくり立ち、マスターキーショットガンを取り出してショットシエルを入れていく。

最後に初弾をバレルに装填して、脚を引きずりながら4人の所へ行ってアンドレ二等兵の肩を叩いた。

「そんな簡単に奴らにやならないよ。なるときは自分で始末を付けるわ」

疾風はニコツと笑ってフラッシュライトをショットガンに取り付けた。

「要するに、一時間しないうちにここを脱出して抗ウイルス剤を打てば奴らにはならない。そういうことだろ？」

「ええ、しかし・・・」クリス上等兵が戸惑って困っているような表情を見せた。目出し帽を被っているが目を見ると、困っているような目をしている。

「さてと・・・」

チェストリグから無線機を取り出して周波数を確認してコールする。

(こちらHornet1。ドROID兵4個小隊がその搬入棟4階を制圧中だ。3階のところに着陸できるスペースがあるから障害物を吹っ飛ばしてくれ。)

「つまり、爆薬で吹っ飛ばして即席ヘリポートを作れと」

(そうしてくれ。OUT)

無線を切って、疾風は手元にあるバックパックを開いた。そこにはノートPCや携帯食糧などが入っていて、その奥の方にある四角い塊を取り出した。

「よいしょっと、こうしてああしてくっつけてと」

青いビニールの上で何度となくこ練あげられたそれは、白い粘土のように見えた。知識のないやつはゾンビがうごめくところをなをやっているのだと呆れられてしまうだろう。しかし、これは小さい子がやるような粘土遊びではなかった。自衛隊の爆発物処理班や特殊作業員がやる、爆弾を作っているのだ。

映画では、爆薬のパッケージを取り出してビニールに包まれている爆薬に、細い信管を入れてビジネスチェアとパソコンの画面をコードでぐるぐる巻きにしてエレベーターに落とすシーンがあった。だが、そんな簡単に爆発したりはしない。ある程度の手順が必要なのだ。

C4プラスティック爆薬は、中身は白い科学物質でできており劇薬。紙粘土の色合いと土粘土のような固さで信管とある程度練らなければ爆発しなかった。

そのため今、疾風は粘土遊びの要領でC4爆薬を生成している最中であつた。

「なんで最初から作ってこなかったんですか？」

「あのね、君たちの銃弾がもし、俺のバッグに当たったら固まっている分隊全員が死ぬよ。一応念のために持ってきたけど、念のためにと言っただけで簡単に起爆するようなものをバックの中にしまわない。」

必要のないのいつでも起爆できるようにする奴は馬鹿だ。と言いたいけれど、実際戦場を駆け抜けている特殊部隊員が見れば、「作戦中に何やってんの!？」と怒られるであろう。

疾風は、下手な言い訳を作って自分の首を絞めているのであった。500mgの爆薬を練って電波を受信する遠隔信管を爆薬に差し込み、プレストークスイッチと呼ばれるスイッチを押す。

これで準備万端である。

あとは退避して、遮蔽物に身を隠してから起爆するのみだ。

「曹長、廊下に奴らは?」

「さつき仕掛けた爆薬が爆発しました。およそ三分でこちらに到達します。」

感染者の叫び声が聞こえ、一秒ごとにそれが増していた。

「そうか、曹長は北側の廊下を見てくれ。カルビン上等兵は西側の廊下を見張ってくれ」

「了解」

「よし、爆発するぞ。身を隠せ」

疾風は起爆装置のカバーを外して、スイッチをONにしてボタンを押した。

アンテナや空調設備が爆発によって飛んでいき、遮蔽物から顔を出してみると、エヤコンは円を描きながら下にいるといる感染者の頭を潰した。

「うーん、ホールインワン。かな」

誰もゴルフをしていないし、第一知りもしなかったので聞き流している隊員は「ホールインワンってなに？」 「さあ・・・」と会話をしている。

訂正をしてくれない隊員を見ると、なぜ突っ込んでくれないのかと疾風は一人悲しくなったのだった。

ふと、疾風の肩に手が置かれる。その手は溝口の手であった。

「お前じゃ無理だ」

「なぜだ？」 疾風は不機嫌そうに聞く。

「なぜかって？そりゃお前が突っ込みキャラだからだ！」

「余計な御世話だ！」 疾風はストレートパンチを繰り出すが避けら

れてしまう。

「ジョー！そんなパンチじゃだめだ！もっと魂込めるんだ」

「お前はどこのボクシングコーチだ！」

疾風はポーチに付けている、赤い発煙筒に火を付けて中心に置いた。

「こちらPhantom1。発煙筒を焚いた。こちらが見えるか？
OVER」

（こちらHornet1。見えた着陸する。少し離れてくれよ）
へりはゆっくり降下して、屋上に着陸した。

「中尉、早く乗って下さい。搬入口が突破されました。」

曹長がへりの回転で聞こえないため大きな声で言った。

「わかった！全員乗れ！急げ！」

見張りをしていたカルビン上等兵を戻して、疾風はすぐに何人いるか確認してへりへ乗せた。

「おい！なんだあれ！」

ヒューイのミニガンのガンナーをしている兵士は入口を指差した。

そこには、黒い頭巾をかぶって何本もの大きな釘を刺されながらも、大きな斧を引きずっている感染者がいた。

「処刑マジニだ！撃ちまくれ！」

ガンナーはすぐさま、引き金を引いて入口に立つ処刑マジニを八つ裂きにしていく。

「離陸する」

機体は即席ヘリポートから飛び立ち、偵察隊の面々は目を疑うような光景を目にした。

工場の周囲を2、3キロにわたり、感染者の大群が埋め尽くしていたのだ

映画のワンシーンでもこういった光景があった。しかしそれは映画でのこと。高いお金を出して作ったコンピューターグラフィックスのゾンビの大群が生存者が籠城している建物の周囲でうめき声をあげていた。

今回も同じような条件だが、VFXの使用していない生のゾンビ（・・・）だった。

「疾風！これ見てみるよ！」

溝口が肩を叩き、疾風は溝口の方を見た。

カウボーイハットを被り、おまけに渋いサングラスをつけている溝口の姿。

UH-1「ヒューイ」の上でこんな恰好するやつはあの人しかない。

「キルゴア中佐、ハワイの波はどうですか？」

「うん・・・最高だ。波とナパームの香りは実にいい」

そう言っつて、なぜか第一騎兵隊のマグカップのコーヒーをすすり始めた。

「・・・ああ、そうだ。抗ウイルス剤あるかい？」

疾風は、思い出したのか、機長にワクチンがあるか聞いた。しかし・

「疾風、無駄だ」

溝口は言っつて、疾風はなぜだ？と聞いた。

「抗ウイルス剤っつてどうやってできたか知ってるか？」

「いや……」

「あのウイルスはお前には効かない。俺とお前、富田を含めた三人にはね。あの抗ウイルス剤は、ウイルス……いやここは呪いと云った方がいいかもしれない。」

「呪い……?」

疾風は首をかしげた。

「簡単にいえば、人工的に作られたウイルスとでも言うのかな。元々は、脳炎を起こすウイルスを変異させて人間の脳を破壊するといふものなんだ。つまりウイルス兵器ってところだ。だが所詮ウイルス。人間が疑似的に作ったとしても、環境に適応するために変異していまい、人間の神経や脳を破壊してゾンビ化してしまった。最初はアメリカや中国の線かなとは思ってたけど、どうやら魔法でやったらしいんだ」

「魔法?魔法でウイルス兵器が作れてしまうのか?」

「わかんない。魔法と科学……機械は相容れないからね。国連のデータベース探してもヒットしなかったよ。魔法大国アクチュア王国が転移門の向こう側で探るのがいいかもね?ちなみにこんなものを発見した」

溝口は胸ポケットから一枚の航空写真を取り出した。

その写真には、ヒツカムアメリカ空軍基地の滑走路が映っていて、AC130輸送機の近くには無数の古い血痕が残っていた。

しかし血痕の中心には、黒い何かで書かれた円状のものがあった。

「なんだと思う?」

「……魔方陣?」

シルバーコンパスと呼ばれるコンパスにある虫眼鏡で陣をよく見ると、いままでに見たことない文字がいろいろと書かれていた。

「ああ、だがもう一つ厄介なことがある。」

「なんだ?」

「この魔法は3000年前に無くなっていて、死人じゃなきゃ使えない。」

疾風は、あるものが頭をよぎった。

死人にしかできない。

3000年以上も前のもの。

ハワイぐらいの大きさの町を壊滅させるほどのことができる人。

「まさか……あれか?」

「ああ、多分……」

疾風と溝口は黙りこみ、疾風は黙々と航空写真を見ているのだった。

ちよつどそのころ……

州庁舎の屋上の州旗の横には、昔の私立探偵のような服装の男が立っていた。

「娑婆の空気は何回吸ってもいいねえ。生き返るよ……」

男はそう言って手元にあるたばこを口に啣え、指先を鳴らして火をつけ、煙草にともす。

肺に煙を充満させて、一気に噴き出す。

すると、海岸沿いにある一隻のエアクッション揚陸艇とそれを目指す装甲車の一団が見え、男はそれを見た。

「ここはもう、見飽きたし……3000年分のつけ、しっかり払ってもらおうか」

男はそう呟き、屋上30階建てビルから飛び降りた。

普通なら地面に叩きつけられ即死だ。しかし、男は小さい段差を飛び降りたような感覚で着地すると海岸の方へ足を向けて歩いて行った……。

「第34話 地獄からの脱出」（後書き）

今回新規に作ったキャラクター……。

セドリック・ライアン曹長

35歳、男、既婚。

爆破や破壊工作、を習得した元ガリビニア軍曹長。任期満了でアメリカに妻とともに移住。軍に所属していたことから、警備部隊へ……。

最近の悩みは、妻に無視されており離婚の危機。

アンドレ・パーカー二等兵

16歳、男。

家が貧乏なため、警備部隊へ入隊。厳しい訓練を受けつつも、狙撃手の才能があったことから警備部隊の「第一偵察隊」編入する。160cmと小柄で周りから「ちび」、「坊主」と言われている。

カルビン・アルバス上等兵

18歳 男

マルティニア王国アルベルト家に代々奉公している奴隷の家系。アルベルト家と共に亡命して、今では奴隷ではなくなっているが、現在でも付き人としてクリスティーナの護衛をしている。無口。しかし、唯一クリスティーナが心を開ける人物。

クリスティーナ・アルベルト上等兵

17歳 女

マルティニア王国アルベルト家の二女。アルベルト家は代々軍人を輩出してきた家系のためか少々男勝りなところがある。王国では男性差別が激しく、男女平等のアメリカでは馴染めていない。

衛生兵として任務に就いているが剣による接近戦が得意。

イーサン・ボスフェルト二等兵
18歳、男。

アクシユア王国から入植してきた移住二世。アメリカ駐屯地では市街戦が主であったことから室内戦、CQBの戦闘が得意。旧式ではあるがイスラエル製のUZIサブマシンガンを両手に携えている。

チャーリー・バクスター上等兵
17歳 男。

歳の割りには、2mを超える巨漢の男で軽機関銃を片手で撃ち、片手でRPG-7を放つことができたりする。ランボーもビックリなこの男。イエヴァレ帝国の獣人族のハーフでこともあるうに、ゴリマッチョならぬゴリラの血が混ざっている。

クリフトン・アディンセル二等軍曹
19歳 男

ライフル兵。大柄なガリビニア帝国の元海兵。
搬入棟3階を解放し、真つ先に感染者に襲われ死亡。

サイラス・アンスラン兵長
24歳。男

衛生兵、大柄な人物でM240Bを軽々と片手撃ちをする猛者。チャーリーと同じでイエヴァレ帝国から来た純血の獣人族。外見はまさしくライオン。ほとんど肉しか食べないらしい。感染者に襲われ、ほかの仲間を守るために手榴弾で自爆した。

ダニエル・キエチエフ一等兵
21歳 男

工兵。セドリック曹長のいわば弟子。ほとんどのものは修理できる。最近はその彼女を募集中らしく、たびたびアメリカの酒場にて目撃されている。

ジョンソン・アルバーン准尉

34歳 男。既婚、妻、子供2人。

よくテレビであるようなアットホームのパパ。5歳児の息子と0歳児の娘がいるそう。妻は28歳。富田曰く、「クレヨンしんちゃん」に出てくる野原 広そのまんま。足が臭い。

アメリカ警備部隊の「第一偵察隊」の指揮を執っている。

今は、オーストラリア派遣隊の指揮官をしている。

誤字脱字ありましたら、宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0085o/>

Mercenary Angel

2011年5月29日07時00分発行